
ワードオブペイン 00

エクストリーム使い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワードオブペイン 〇〇

【Nコード】

N17050

【作者名】

エクストリーム使い

【あらすじ】

リボンズアルマークらとの闘いを終えた刹那たち、各地で様々な問題を抱えているものの、ヴェーダをとりもどしアロウズも無くなって、平和に向かっていく世界の中、忘れさられた者が集いし武装組織、ペインチェンジャーが、自らの痛みとやすらぎのため、新たな行動を起こす。

新たなオリジナル設定を数多く取り入れていますので、

苦手な方は回避を…

と言いつつも、頑張って細かく考えたオリジナル設定なので、

気になった方は是非見てください。
なるべく早く更新する様に努力します。 (^ ^)
o

始まりの痛み（前書き）

この小説には残酷な内容が含まれます、
苦手な方はご注意ください。

始まりの痛み

流れてゆく水―

そこに数滴の雫が落ちる

少し水がはねる

でも、水は何もなかったように
それを受け入れて流れて行った

流れてゆく人―

そこに俺達が混ざる

水のように少し人が離れた
けど、そのままだった

水のように人は俺達を受け入れてくれなかった

俺達は誰にも混ざれなかった

変わって行く自分が怖くなった

同時に、受け入れてくれなかった者に対する憎しみも生まれ
いつしかそれらの感情を

他人にぶつけるようになった

それでも心は変わらなかった

ならどうすればいいのだろうか

このまま俺達が消えてしまえばいいのだろうか

分からない、分からない。

俺達はどうすればいいのだろうか

静かに目を閉じた……

「なあ、どうすればいいんだ？」

不意に声が響く

「どこだ、ここは……」

見渡す限りの闇、
何も見えない

「なあ、どうすればいいんだ？」

再び先程と同じ声が響く

ここは何処だ、

何をする場所なんだ、

なんて答えればいいんだ、

分からない。

「変わる自分を受け入れればいい」

口が勝手にうごいていた

その声は、自分のものの筈なのに、他人の声のように聞こえた。

何か知っているようで、

なぜかかなしそうな声…

状況がうまく掴めていなかで今度は自分の意思で口を開こうとした

しかし、その瞬間、

「…？」

目の前が輝いた

広がっていく閃光

そのなかで
俺は見た…

希望のような輝きや
未来を見せるような輝きを

そして、

暗い過去を照らし出すような輝きを……

「忘れてはいけない、チカラを
生むには犠牲がいることを、
そして、……………」

そのチカラを持つ者も犠牲になることを。」

薄れゆく意識のなかで
そんな声が聞こえた気がした。

――――

広がっていく閃光、

薄れゆく意識

そして聞こえたかすかな声、

俺は目を開けた、
目線の先には天井がある

俺は起き上がると窓の外を見た

変わらない宇宙

闇、音も無く、風も、水も無い

「夢だったんだな」

俺は咳くと、さっきの事を思い返す

「なあ、どうすればいいんだ」

何かにすぎるような声

「なあ、どうすればいいんだ」

再び響く

「変わる自分を受け入れればいい」

無意識に答えていた

そして、広がる閃光

最後に何か微かな声が聞こえた気がしたが思い出せない…

そんな事を考えていると部屋のアラームが鳴った

俺は重い体をベッドから起こすと、自分の制服に着替え、

特にあても無く部屋から出てブリーフィングルームへ向かった

始まりの痛み（後書き）

ども、このサイトでは、初の連載作品です。

どうか、あたたかい目で見守って下さいm（
）m

行動を起こす痛み（前書き）

この小説には残酷な描写が有ります苦手な方はご注意ください。

行動を起こす痛み

部屋から出た俺は

さっきの事を考えながら、

トレミーの通路を歩いていた。

「変わる自分を受け入れればいい」

何故あんな風に答えたのだろうか、

「おはよう、刹那」

不意に後ろから声をかけられた

「おはよう、フェルト」

振り向きながら返事をする、

すると声をかけてきた本人が此方に向かってきた。

自分と同じデザインで色違いの桃色の制服にそれと同じいろをした髪少女

彼女の名はフェルト、俺と同じソレスタルビーイングのメンバーだ。

俺達の初めての武力介入の時からトレミーにいた一人で、以前

リボンズアルマークらとの最終決戦の前に俺に自らの思いを伝えて

くれ、今は付き合っている

昔の俺からみればこんな事は微塵も想像出来ないだろう、
だが今では自分でも納得できる。

「こんな朝から珍しいな」

隣にならんで歩き出した彼女に声をかける。

「たまたまだよ、それより刹那はこんな朝から何処に行くの？」

「いや、特にこれといった目的はない」

「じゃあ、一緒に朝ご飯食べに行こ！」軽く返事をするらずくに明るい返事がきた。

比較的、大人しい彼女にしては珍しく今日は積極的だな。

そんな事を思いながら彼女とならんでランチルームへ足を運んだのだった。

「刹那、最近気になる話があるんだけど、知ってる？」

ランチルームで朝食をとっていた俺に、目の前で同じように朝食をとっているフェルトが話しかけてきた。

「気になる話？どんな話だ、それは」

ニュースや世界情勢はある程度把握しているが、これといった話はあまりなかった。

「そこまで有名な話じゃないんだけどね、最近コロナや太陽光発電タワーのオービタルリング付近で働いてる人たちが自分たちの乗ってきていたMSを破壊される事件があるの、それできになるのは破壊されたMSに乗っていた人たちがみんな口を揃えて言っているの『白銀のGN粒子をした化け物だ』って、ね

連邦政府は死者も出てないからあんまり重視してないんだけど

刹那はこの事件どう思う？」

「ああ、確かに気になるな…」

白銀のGN粒子？なんなんだそれは、それにMSを破壊するだけで他の事をしないなんて意味が分からない。

目的が分からないな。

「その事件、もう少し詳しく教えてくれないか。少し調べたい事がある。」

「わかったわ、あとで事件の詳細データまとめておくから取りにきてね。」

「ああ助かる、ありがとう。」

俺はそれだけ言うと、彼女より一足先に朝食を片付け自分の部屋に足を向けた。

？

部屋に戻った俺はおいてある情報端末を開く、たしか沙慈が以前これの事をノートパソコンとか言っていた気がするな…

そんな事を思い出している内に起動が済んだようだ、パスワードを入力してヴェーダへの暗号回線を開く。

「太陽光発電タワーにおける謎のMS目撃について」

検索結果に目を通し目的の情報を探す。

画面を下におくっている俺は呟いた、

「思ったよりも詳細情報が少ないな」

世界中の情報が載っていると言ってもおかしく無いヴェーダにこんな事件の詳細データが少ないとは思わなかった。

しばらく画面をおくっていた手を止めた

「白銀のGN粒子をしたMS」

見つけた…

俺はそれを自分の手持ちのメモリーにデータごとコピーすると、
ヴ
エーダとのアクセスを切りフェルトの部屋に向かった。

行動を起こす痛み（後書き）

刹那×フェルトです。
感想待ってます。

不可解な事件（前書き）

この小説には残酷な描写が有ります苦手な方はご注意ください。

不可解な事件

フェルトの部屋に行くため、通路を歩いていた俺は先程のメモリーを携帯にいれ、最初の事件当時の様子について書かれた記事を読んでいた。

「太陽光発電タワーの作業員を襲撃した謎のMSについて。

太陽光発電タワー（アフリカタワー）で作業員のクロア・ベイト氏が作業用のジンクスに乗って宇宙での生活者の為の物資受け取りコンテナの整備をしていたところ、GN粒子散布内専用のセンサーに反応しない謎のMSを肉眼で見つけた。特に怪しいと思わなかったクロア氏はそのまま作業を続けていたが、あまりにも接近された為注意を呼びかけたところ、いきなりGN粒子と思われる白銀の粒子を散布しながら、ビームマシンガンで攻撃された。クロア氏は元軍人であった為抵抗を試みたが、圧倒的な性能差があったようで乗っていたジンクスを大破された。急所を外されていた為、命に別状は無かったが、似たような事件が他の宙域でも同時に起きており、連邦政府は秘密裏に調査を進めている。」

記事を読み終え携帯からメモリーを取り出しケースにしまった。

「謎のMSか、それにGN粒子と思われる白銀の粒子、不可解な行

動、まだ調べる事は山積みだな……」

記事を読んでいる内に俺はフェルトの部屋の前にたどり着いていた。そう言えば、一人で彼女の部屋に来るのは初めてだった。

なぜだか緊張する、

何故だろうか、MSに乗る時とは別の気分だ……

そんな考えを振り切り俺はドアをノックした。

「フェルト、俺だ、事件のデータはまとめてくれたか？」

扉の向こうにいるであろうフェルトに声をかける。

その瞬間、

「ガラガラガラッ、ガシャン??」

「?……」

部屋の中から物凄い音と悲鳴が響いた。

多分、棚にあるモノを全てひっくり返せばこうなるだろう……

「……………」。

暫くの沈黙……

そして、

「せつ、刹那、助けて。」

部屋の中から助けを求める声が微かに聞こえた。

「……………」はあ

俺はため息をつくど、部屋の中に入って行った。
さっきまでの妙な緊張感はもう微塵も残っていなかった。

—————
—————

案の定、本棚を全てひっくり返して本やら何やらに埋まっていたフェルトを救出した俺は今、倒れた本棚をもどし、散乱した本などを片付けている。

「それで、頼んでいたモノは出来たか？」手元にあった本をもどしながら俺は本来の目的を思い出し、彼女に聞いた。

「一応、調べたよ、でもこの事件おかしいくらい情報が少なく、連邦政府の機密情報データベースにもほとんど有力な情報がなかった。まるで、誰かがあとから消したみたい……」

「やはり、そうか」

これは、ただの事件ではなさそうだ……

少なくともただのテロ行為では済まないだろう。

「そうかってことは、刹那も何か調べたの？」

彼女が問いかけてきた。

「ああ、実はな……」

俺は知っている内容を全てフェルトに話した、圧倒的な性能差があること
ヴェーダでさえ、ろくな情報が無い事
そして、白銀の粒子のこと

「……………」

暫くお互い考えたところで
俺が口を開いた。

「とにかく、今分かるのはここまでだ、あとは少し時間をおこう。」
すると、彼女は笑顔で返事をした。

「そうだね、そうしようか。」

2人で再び片付けを再開しようとした時、
艦内のスピーカーからやけに明るい声が響いた、

「緊急ミーティングですう、」

トレミーのメンバーは全員ブリーフィングルームに集合ですう?」

「仕方ない、片付けはあとにしよう」そう彼女に言うと、

彼女は苦笑を浮かべながら頷いて、俺と一緒に部屋を出たのだった。

不可解な事件（後書き）

その3です。

ミレイナ初登場（声だけだけどf^| ^:）
登場させて欲しいOOシリーズのキャラがいたら、
リクエスト下さい、お待ちしてます。

動き出すマイスター（前書き）

この小説には残酷な描写が有ります苦手な方はご注意ください。

動き出すマイスター

集合がかかり俺達はブリーフィングルームへ向かっている。

しかし、緊急ミーティングとは何ヶ月ぶりだろうか、以前の様に闘いが常に起こっているわけでも無いので、ミーティングなんて本当にたまにしかない、

ましてや緊急ミーティングなんてやることが無いどころか、その存在さえさっきまで忘れていたのだった。

「よつつ、お二人さん、仲がよろしいようで」

2人で歩いていると十字路を通り過ぎるところで、やけにノリのいい声が聞こえた。

「何がしたいんだあんたは」

俺は少しきつめな返事を返しながら横を見た。

そこには、俺達と同じようにブリーフィングルームへ向かう2人の男女の姿があった。

「そう、怒りなさんな、そんなんだと隣の彼女に嫌われちまうぞ」

へらへらとしながら返事をする

少し背が高い茶髪の男、彼の名はロックオン・ストラトス、本名はライル・ディランディー、俺と同じガンダムマイスターの一人だ。

「今のはライルがわるいんでしょ、ごめんなさね2人とも」

ロックオンの隣で彼を注意しているの淡い紫色の髪をした女性はアニュー・リターナー、

彼女は以前、一度戦場で死んだと思われていたが、実は彼女は人間ではなく、人間とほとんど同じだが、様々な力をつけられたイノベイドと呼ばれるリボンズアルマークらと同じ存在で、そのおかげで奇跡的に一命をとりとめていたのだった、そして、リボンズアルマークらとの最終決戦のあと治療を受け終えて俺達のもとへ戻って来たのだ。

「ロックオン、アニューさん、おはようございます」
フェルトがにこやかに挨拶をする。

「またつく、彼女がこんなにしっかりしてんのに、お前は挨拶もまともに出来ないのか、
情けねえなあ。」

「あんたのせいだ？」

いまだにへらへらとするロックオンにつっこんだ。
フェルトとアニューはそれを見て笑っている。

「なんか楽しそうだねみんな」
俺たちのやりとりに気づいた新たな男女が軽く笑いながらやって来た。

アレルヤ・ハプティズムとマリー・パーファシーだ、

「おはよう、みんな」

マリーが俺達に挨拶をする。

この2人の内アレルヤの方は、俺やフェルトと同じソレスタルビーイング初の武力介入の時からいるメンバーでまあまあ仲が良い。
マリーの方はもとは敵であったアロウズにいたが、途中でアロウズ

を抜けて俺達のもとへ来たのだった。

2人とも俺やロックオンと同じガンダムマイスターだ。

「何だこりゃ、ブリーフィングルームに着く前にこんなに揃っちま
ったよ。」

ロックオンが笑いながら言った。

まあ、実際こんなに集まったのは本人のせいなのだが、今言つのは
やめておいた。

そんな感じで大半のメンバーが揃ってブリーフィングルームへ向か
っていった。

ブリーフィングルームの自動ドアの前までくると、俺達はそのまま
中に入って行った。

そして……………

全員一斉に固まった、

皆、目を点にして口を開けたままの状態から動かない。

「どうしたんだ、皆。」

先にフリーフィングルームに来ていた残りの一人のガンダムマイスターであるティエリアが声をかけてきた。

「……………」

しかし、誰も反応しない。

それもそのはず、

なんと、その声をかけてきた本人の後ろに彼と瓜二つの謎の人物が

彼の背から顔を覗かせて此方を見ていたのだった。

動き出すマイスター（後書き）

今回は、マイスターの自己紹介の回みたいなお話です。

アニューは個人的に割と好きなキャラなんで生き残らせました（＾
＾）

奪われたコロニー（前書き）

この小説には残酷な描写が有ります苦手な方はご注意ください。

お待たせしました五話目です。

奪われたコロニー

ブリーフィングルームで石像のように固まった六人。

何故固まっているのか分からないティエリアはそんな彼等を見て不思議そうにしている。

「なんで僕を見てかたまってんのさ」

ティエリアの後ろにいた彼そっくりの男が不満を漏らすように声をかけてきた。

「あつ、ああ すまない、いきなりなことだったので、つい」

俺は金縛りから解かれたように返事をかえした。

ティエリアはイノベイドだ、だから双子や兄弟は絶対にいないはず…
なら、なぜこんなに似ているのだろうか…

まさか彼のクローンなのでは…

そんな考えが頭に浮かぶ。

「おおおおお、おい、おっお前、ティエリアだよな。」

完全に動揺しているロックオンがティエリアに問いかけた

「そうだ、寝ぼけたのかロックオン」

テイエリアが呆れながら返事をする。

「そつ、そうか、じゃあそのお隣は……………」
後ろにいた男に声をかけると、男はテイエリアの前に出てきた

「リジエネ・レジエッタ、テイエリアと同じイノベイドだよ。」

「そうか、そういうことか」

俺は一人だけ理解すると小さく呟いた。

「刹那どうゆうことなの？」

隣でそれを聞いていたフェルトが聞いてきた。

「それは、それについては、僕が説明しよう」……

話し始めようとしたら、テイエリアに言葉を遮られた。

そんなことも構わず彼は皆に説明を始めた。

—————
—————

「なるほどねえ、そんでお前さんはテイエリアとそっくりなわけか。」

説明を聞き終えたロックオンが口を開いた。
他のメンバーも納得したように頷いている。

「イノベイドはヴェーダの生体情報端末のようなもので、その身体のもととなる塩素配列パターンが一緒のものもいるわけで、それがたまたまりジエネとテイエリアだったわけだね」

「そういうことだ、別に珍しくも何とも無い」アレルヤのことばに

当たり前だとも言うようにティエリアが返す。

「それで肝心のミーティングの内容は」

アニューが話を遮りティエリアに聞いた。

「そうだったな、よしミーティングを始めようか。」

ティエリアがまわりのメンバーに声を掛けた。

「まずは、皆に聞いておきたいことがある、白銀のGN粒子を放出する正体不明のMSについてのことは知っているだろうか」

「白銀のGN粒子？しらねえな」

「ええ、私も知らないわ」

「僕も聞いたこと無いな」

「そうか、ブリッジにいるメンバーは事前に声を掛けたから皆知っているな」

もちろん、と頷くミレイナたち

「刹那とフェルトは知っているか？」

「ああ、ある程度は個人的にフェルトと調べていたからな」

「なら、刹那たちは大丈夫だな、残りのメンバーには僕があとから情報をまとめたものを送っておく」

「リョーカイ」

ロックオンが面倒そうに返事をした。

「それで、肝心の本題だが、組織の資源コロニーのひとつであるコロニーNo.2012通称「リサイヤ」が何者かに占拠された。」

「占拠だと！」

俺は声をあげた。

「ああ、そうだ。そこで俺達マイスターは正体不明MSのパイロット達と接触をはかることにした、うまく行けば話し合いで終わるかもしれないからな。だが、最悪の場合、戦闘になるだろう。そうなればこちらはかなり不利になる」

不利になる？俺はそれに疑問を感じた。此方には新型のガンダムが

あるのだ、それに対抗するMSがあると云うのだろうか。
そんな俺の疑問は奥にいたスメラギによって晴らされた。

「リサイヤが制圧される時の映像からダブルオークラスのスピードを持っていく機体やセラヴィーを超える火力の機体など計8機のMSが確認されているわ。それに白銀の粒子は通常のGN粒子散布区域でのリーダーでは確認が出来ないの」

「ダブルオークラスのスピードだと」

「1つのドライブでそこまでの性能のMSが、8機なんて」

ロククオンとアレルヤが声をあげた。

「まあ、落ち着け二人とも」

イアンがふたりをなだめる。

「とにかく、あまり戦闘になるのは得策ではないわ、まずは、彼等に接触をはからないと。」
スメラギが皆をまとめる。

「まずは、リサイヤに行きましょう」

「待つて下さいスメラギさん、確かにリサイヤってトリニティの所持していたコロニーで場所の特定が出来ないんじゃないですか？」
アレルヤがスメラギに質問した。

確かにそうだ、リサイヤは当初存在しなかった筈のトリニティが所持していたコロニーでヴェーダを使っても場所の特定が行えず組織の技術が残ったままの厄介なものだったはずだ。

「そのために、僕がきたんじゃないか。」
リジエネが言った。

「僕は元リボンズ側だからヴェーダに残っていない情報も所持していて、たまたまりサイヤの場所に関するデータを持っていたのさ」
なるほど、そういうことか。

俺は納得した。

「そーゆーことだから、こんかいは彼もマイスターとともに出撃してもらおうわ」

スメラギがつけたした。

「それじゃ、ミーティングは終わりよ、各マイスターとイアンはガンダムの調整を、ミレイナとフェルトはりサイヤ周辺の衛星を調べると、この件に関するデータの情報統制をお願い、アニューとラッセは調べた衛星の中で一番隠れられそうな場所にトレミーをむけてちょうだい。皆できるだけ手っ取り早くやってね」

「了解？」

スメラギが指示を出すと全員がそれぞれの持ち場に散って行った。

奪われたコロニー（後書き）

五話目投稿遅れてしまいました。

お待たせしてゴメンなさいm（| |）m

感想待つてまーす（^^）

戦いの力、わかり合いの力（前書き）

この小説には残酷な描写が有ります苦手な方はご注意ください。

戦いの力、わかり合いの力

コンテナに着くとすでに作業が始まっていた。
今回の出撃が初陣となる4機のガンダムたちが並ぶ。

射撃能力の強化に加え新たなライフルビットの取り付けも行われた
ロククオンのガンダムサバーニヤ。

圧倒的な機動力と、さらに火力の増加も施されたアレルヤとマリイ
のガンダムハルト。

今までの機体では全く考えられないような大火力を搭載してなおか
つ機動力もあまり落とさないティエリアのラファエルガンダム。

そして、争いをせずにわかり合うため俺が望んだ機体、ダブルオー
クアンタ…

俺はそれらの機体を眺めていると奥にもう一機見知らぬMSがある
ことに気付いた。

紅い装甲に黒と灰色のパーツを取り付けたような機体、右肩には大
型ビーム砲につながるコード、左肩にはGNフィールド発生装置が
ついている。

「気になるかい、僕の機体」

眺めているとリジエネに横から声をかけられた。

「ああ…」

俺が振り向いて返事をする、彼は説明を始めた

「CBI03トリズア、GNフアングを過去最多の16機搭載して
いて、さらに君たちの方にあったシールドビットの技術も追加し計
22個の武器を同時に遠隔操作できる僕らイノベイドの専用機さ。
通常の間ではこんな数制御出来ないけど、僕らイノベイドならこ
の位簡単に制御できる。GNフィールドの展開は勿論、単機での基
地制圧を想定して作れているから大型ビーム砲はセラヴィーに放っ
てきする火力だよ。かなりの性能だから、ガデッサとかよりロール
アウトが遅れて実戦に出されず放置してあったんだけど、僕が見つ
けて未成品を持ってきてここで完成させてもらったんだ。」

「トリズアか……」

説明を聞きいた俺は再び機体に目をやり呟いた。
戦いのための機体、味方とは言えこれ程の機体を出せば被害は少な
からず出るだろう。

それは、他のガンダムも例外では無い。

争いをせずに戦いを終わらせる。

そのためのクアンタ。

俺が………望んだ機体。

俺は改めて自分たちの持つ力と取るべき道を確認すると、そのまま、クアンタの整備に向った。

――
――

「整備お疲れ様。」

クアンタの整備を終えた俺がコンテナを出ようとする、そこにはドリンクを持ったフェルトが待っていた。

「ありがとう」

それだけ言つと彼女からドリンクを受け取り一気に飲み干した。

「もう仕事は済んだのか？」

俺は目の前にいる彼女に聞く。

「うん、まだデータの改ざん処理が残っていたけどミレイナが後は任せて刹那のところで言われちゃって。」

少し照れながら語るフェルト。

「そうか、気を遣ってもらったな」

俺は彼女にそう言つとそのまま後ろの物陰に向けて声を上げた

「だが、あまり盗み聞きは良く無いぞミレイナ。」

「ミ、ミレイナ？」

彼女が驚いている。

すると、奥の物陰からひよっこり小柄な少女が現れた。

「あらー、ばれちゃいましたか、ミレイナっこれにて撤退ですう」
そう言つとミレイナはそのまま風のように走り去って行った。

「せつ、刹那いつ気づいたの？」

いまだに驚きを隠せないフェルトが此方を向いてきいてきた。

「ドリンクを受け取った時だ。」

全く、これじゃあ仕事終わってないんじゃないか？」

俺は飽きたように言う続けた、

「手伝うから、一緒にブリッジに戻るぞ」

そう言う俺はブリッジに向かい歩き出した。

「えっ、でも刹那、今整備終わったばかりじゃ……………」

彼女が心配そうに聞いて来る。

「構わない、予定より早く終わったしな、早く終わらしてしまった

方がいいだろう」

足を止めていた俺が再び歩き出す。

「ありがと、刹那」

彼女は笑ってそう言う、俺の横にならんで歩き出した。

戦いの力、わかり合いの力（後書き）

新型オリジナルMSトリズア登場？

個人的にかなり思い入れの強い機体です。

その他、こんな機体だしたいって方がおられたら
ぜひリクエストをお願いしますm（ ）（ ）m

迫り来る敵（前書き）

この小説には残酷な描写が有ります苦手な方はご注意ください。

迫り来る敵

フェルトたちの手伝いを終えて彼女とともに俺は今、彼女の部屋でベットに眠る彼女を見守っている。

何故俺が彼女を見守る事となったのだろうか。

――
――

事の発端は、俺が彼女の部屋に向かっている時の事だった。

ブリッジでの作業を終えた時にお礼にケーキを奢りたい、とフェルトがいった。俺は別にそこまでの事をしたわけではなかった。最初は断ったが、フェルトがどうしても何かお礼したいと言ったので、それに甘える事にしたのだった。

そして、ふたりで通路を歩いていた時、今俺が彼女の部屋で彼女を見守る事となった原因であるロックオンとその連れのアニユーが現れた。

「よう、お二人さん、仲良く仕事後のデートかい」

「何を言っているんだ」

茶化すように声をかけてきたロックオンに俺が睨みつけて返す。
俺はまだこの時気づかなかったが、すでにこの時から俺達は彼等の作戦にはまっていたのかもしれない。

「二人ともいつも一緒にいて本当になかがいいのね。」

アニユーが微笑みながら言った。

「べつ、べつに、いついつも一緒にいるわけじゃ……」

「じゃあいつも一緒に、いやってか、おいおい刹那、どうすんだ。」
フェルトが否定するのを遮りロックオンが再び冗談混じりに茶化した。

何がしたいんだろうか……

俺がそんな事を考えている間にもフェルトはあたふたと慌てている。

「そんな、べつにいつも一緒に嫌な訳じゃなくて、その、出来ればずっと一緒にいたいけど、それは出来ないし……」

そんな風にひとりで喋り始めてしまったフェルトを見て二人は必死に笑いをこらえていた。

何か企んでいるな……

俺はそう確信すると周りを見渡した。

十字路の影、個室の入り口……

おかしい、誰も見当たらない。

ロックオンとアニユーは特に何も持っていない。

俺は目線を天井に移すと通気口の中から何か光るものを見つけた。

「またか……」

俺はため息をついてそう呟くと、そこに向けてたまたま整備の時に片付け忘れていた工具を投げつけた。

「へっ?.....」

3人が驚いて投げつけた方向を見る。

ガシャン...

工具は見事通気口の入り口にヒットし、そのまま下に落ちた。

カシャン...

続いて歪んだ通気口の入り口のカバーが落ちる。

そして.....

「ひいあああああああああ」

ドーン???

頼りない声、ものすごい音と共に、一人の少女が落ちてきた。

「またかミレイナ」

俺が飽きたように声をかける。

思い切り打った腰をさすりながら起き上がった彼女はいたずらげばれたのが悔しいのか、顔をしかめて答えた。

「ムウ、またばれてしまいましたか。セイエイさんするとすぎですう。」

「バレバレだ、全く何回やれば気が済むんだ。」

俺は悔しそうにするミレイナに答える。

「お前たちも共犯だな」

俺は横で作り笑いをしながら逃げ出そうとしているロックオンとアニューに声を掛けた。

「なつなに言ってたんだよ、誤解だった。」

「えっ、ええそうよね。」

必死で誤魔化そうとする2人だが、完全に同様している。

「とぼけても無駄だぞ」

俺が二人を睨みつけて言うとミレイナが声を上げた。

「おお、何とか最後までグレイスさんのノロケが取れてました、

ミッションコンプレックスですか？

と、言う訳で、ミレイナはこれにて撤退です。」

それだけ言うと彼女はまたもや風のように走り去って行った。

「じゃあ、そーゆー事だから、じゃな刹那。」

ロククオンとアニニューもそれに続いて走って行ってしまった。

「全く本当に何がしたいんだあいつらは。」

そーいながら俺はフェルトの方を見て声を掛けた。

「フェルト、後でミレイナには消すよういっておくから安心しろ。」

「……………」

反応が無い…………

「フェルト？」

俺はもう一度彼女に声を掛けた。

「さっきの全部録音って……………」

彼女はそれだけ言うと通路で倒れた。

「だっ大丈夫かフェルト？」

俺は彼女を支えると顔を見る。

完全に気絶している。

「はあ……………」

俺は大きなため息をつく、彼女を背負い彼女の部屋に向かった。

—————

—————

そして今に至る。

俺は彼女のベットのそばで携帯を使い白銀のGN粒子をしたMSについての情報を見ていた。

白銀のGN粒子、圧倒的な性能、目的のわからない行動…

そんな事を見ていると、着信音が鳴り響いた。

電話、誰からだ。

他人との馴れ合いをあまり好まない俺はソレスタルビーイングのメンバーという立場もありあまり人に携帯の番号は教えていない。

沙慈・クロスロード

なるほど、彼ならあり得るな。

俺は電話にでた。

「せつ刹那かい、よかつた繋がって。それより大変なんだ。」

「どうしたんだ沙慈」

かなり慌てた様子の彼をなだめる様に俺は言った。

「はっ白銀のMSが、ぼ、僕のいたリング周辺に現れて「白銀のMSだと」「」

俺は声を上げた。

「それで連合と衝突しているんだ。でも敵が圧倒的すぎて、ぼ、僕ら、いま人質状態になっているんだ。このままじゃ多分、連合が全滅する。救援、頼めるかい。」

「分かった、すぐに行く。」

俺は電話を切ると掛けていた制服の上着をとった。

「緊急事態です、マイスターはコンテナに急いでください。」

ちようどのタイミングで放送が入った。

俺はフェルトに置き手紙をすると部屋を飛び出しコンテナへ急いだ。

迫り来る敵（後書き）

さあ、いよいよ初戦闘へ突入して行きます。

期待せず待っていてくださいね m ((m

感想お待ちしています。

衝突する光（前書き）

この小説には残酷な描写が有ります苦手な方はご注意ください。

衝突する光

コンテナについた俺はすぐにクアンタのコクピットに乗り込むと通信を開いた。

「スメラギ、戦闘空域は何処だ、クアンタで向かう。」
俺の中の焦りが次第に強くなる。

「落ち着いて、戦闘空域はここからなら0500でいけるわ、それにしても何で戦闘だとわかったの？」

「沙慈から聞いた。あいつはいま人質状態になっている。とにかく、クアンタで行く。」

「わかったわ、けど皆に言っておく事があるわ。今回の戦闘は予想外のものよ、まだガンダムの力を世界に晒すべきじゃないわ、だから各ガンダムは性能を落として使用する事、分かったわね。」

「了解した」

俺は通信を切るとクアンタを起動させる。

胸の部分の装甲が輝く、

クリアになるモニター

「射出準備完了、タイミングをクアンタに譲渡するですう。」

開け放たれたハッチ

広がる宇宙

「刹那・F・セイエイ、ダブルオークアンタ、出る。」

バーを一気に前に倒す。

身体中にかかるG、慣れたものだ。

すぐに広がる空間、

？

後ろには続いて発進した3機のガンダムとリジエネのトリズア。

トレミーから出た俺は戦闘空域に方向を変えると一気に加速した。

戦闘空域に辿り着くとすでに辺りには多くのMSの残骸があった。

センサーはあてにならない事が分かっているので、肉眼で探すしかない。

俺たちはそれぞれ別れて探すことにした。

沙慈との通信からして戦闘はオービタルリングの近くのはずだが…

俺は周りを見渡す、

「あれは……」

リングの影に赤いGN粒子を見つける、連合のMSの粒子だ。

クアンタをそこへ向けブースターをふかす。

リングが次第に近づく、

そして、リングへたどり着いた俺は、すぐに回り込んだ。

連合のジンクス？と新型のジンクスが白銀の粒子をしたMSを囲っている。

「あの機体が、正体不明のMSか」

その時、一機のジンクス？がその、白銀のMSに突っ込んだ。

「な、なんだ、あれは。」

俺は思わず声を上げた。

何と、一瞬でそのジンクスが切り刻まれた。

周りに浮くGNファングのようなもの、しかし、スピードが桁違い

だ。

「何なんだあの機体は、それにあの速さは一体…」

俺は目の前で起きていることに
驚きを隠せない。

「くっ、全員、かかれえ。」

隊長と思われる機体の合図と共に一斉に攻撃が始まった、しかし、
白銀のMSは何もないようにビームを避け続ける。
一機のジンクスに狙いをつけたのか一気に加速して接近しサーベル
を取り出した。

「くそっ。」

俺はクアンタのブースターを一気にふかし2機の間に入り込んだ。

振り下ろされる白銀のビームサーベル、それをGNソードで受け止
めると、相手に蹴りを入れた。

しかし、それを見事に避けるとすぐに体制を立て直す。

「ガンダム、ソレスタルビーイングか？」

助けたジンクスのパイロットが聞いて来る。

俺は通信を開くと

「此処は任せてコロニーの人質を助ける。」と送った。

それを受けた連合のMSたちは、

すぐに戦闘空域を離れて救出に向かって行った。

白銀のMSが逃がすまいと彼等に迫る。

「させるかっ？」

俺が再び機体の前に回り込んだ。

白銀の機体がサーベルを抜くと、此方に加速して来る。

俺もGNソードを構え、加速した。

「うおおおおお………？」

激突する二つの光。

戦いが………始まった。

衝突する光（後書き）

ついに白銀のMS登場です。

ちよっと強すぎますかね f ^ | ^ ;)

もう一つのトランザム(前書き)

この小説には残酷な描写があります苦手な方はご注意ください。

もう二つのトランザム

クアンタと白銀の機体がリングを後ろに激しく衝突している。

「ぐっ、やる……」

高速で移動をくりかえしながら、戦う二つの機体。

クアンタがビームを放つ、しかしそれを難なくかわす白銀の機体。

すかさずGNソードで斬りかかる。サーベルで受け止める白銀の機体だが、勢いを相殺出来ずにバランスを崩す。

「これでっ？」

GNソードをバランスを崩した機体のコクピット目掛けて振り上げる。

その瞬間、

「なっ？」

上方からクアンタに大量のファンクが迫ってきた。振り上げるソードを止め、一気に後ろに下がる。

「はっ速い。」

方向を変えたファングが物凄いスピードでクアンタに迫る。
ライフルモードにソードを変えるとファングに狙いを定め引き金を
引く。

よし、直撃コースだ。

ビームがファングにあたり爆散して煙が上がる。

「くっ、前が見えない、それならっ？」

俺は集中力を極限まで高める。

瞳が…金色に輝く…

「そこかあっ」

俺はGNソードを煙の中へ突き刺した。

しかし、手応えが無い。

「何だと？」

煙がはれて、次第にはつきりする。

そこには、ギリギリでファングを使いソードを避ける白銀の機体、
そして今度は逆に、ビームサーベルをクアンタに突き刺してくる。

「ぐうっ」

左肩のシールドでそれを防ぐ、しかし長くは持たない。

「仕方がない……トランザムッ？」

赤く輝くクアンタ、一気に出力が上がる。

「うおおおお？」

ファングで防がれたソードを白銀の機体目掛けて押し返す。

クアンタの粒子放出量が上がりソードがファングを切り裂く。

「終わりだあ？」

レバーを一気に押し込んだ。

そして………

「なっ何？」

もう少しで押し切れる所まで来た瞬間、白銀の機体の粒子放出量が

驚異的に上がった。

GNソードが再び押し返され、クアンタが弾きとばされた。

「ぐえっ?」

そして、考えられない速さで此方に向かって来る。

「こっ、これは、トランザム?」

そう、まるでトランザムのように粒子放出量上がり、機体の性能があがっている。

違いは、機体が赤ではなく、銀に輝き放出される粒子がまるで羽の様に広がっていることだった。

「これほどの機体、一体何処で作られたんだ。」

そう言いながら、迫り来る機体を避けるとライフルを撃ち抜く。しかし、全く当たらない。

息を吐く間もなくファングが飛んでくる。俺はそれを防ぐと、向かって来る機体をソードで払いのけた。

すでにこの二機の戦いは通常の戦いの領域を超えている。

「まだやるのか?……」

俺は肩で息をしながら、相手の機体に向けて言った。

当然そんな声が届くわけもなく、再び此方に迫ろうとして来る。

「くそっ」

迫り来る機体、トランザムの限界が迫っている。

俺は覚悟を決めると、レバーを強く握った。

しかし、突然相手は加速を止めると、向きを変えそのまま戦闘空域を離脱して行った。

「何がおきたんだ…」

相手の行動が理解出来ないでいると、突然通信が入る。

「刹那、いったん離脱するぞ。連合の艦隊がこっちに向かっている。」
ロックオンが焦りながら連絡してきた。

「了解、直ちに現空域を離脱する。」

俺はクアンタを反転させると、
トレミーへ向かった。

「何だったんだ、あの機体は、それにトランザムのようなシステム、さらにはあの驚異的な操縦センス…」

謎は深まるばかりだった。

もう一つのトランザム（後書き）

トランザムのようなのが出ちゃいました。

やっぱり強いのはトランザムっていうイメージが離れなかったので。

銀の翼はOガンダムがアニメで最初に出てくる時のような感じですよ。

銀の羽（前書き）

この小説には残酷な描写があります苦手な方はご注意ください。

銀の羽

コンテナにもどった俺はイアンに整備を任せてブリーフィングルームに急いだ。

「刹那」

同じタイミングで戻ったティエリアが声を掛けてきた。

「ティエリア、白銀の機体とは出会ったか。」

まず聞くべき事はそれだった、俺以外のマイスターたちも白銀の機体に出会っているのなら、彼等はリサイヤを占拠したグループとみてまず間違いないだろう。

「ああ、という事は君も出会ったのか。」

「そうだ、性能を抑えていたとはいえ、ほとんどクアンタと同レベルの性能を持っていた。」

「やはりな……他に何か発見は」

「トランザムのようなシステムを持っていた。」

「なっ何だと？、それは本当か」

さすがにトランザムまでは彼も見なかったようだ。

俺はティエリアに戦闘時の状況について話しながら2人でブリーフィングルームへむかった。

――
――

「まさか、話し合いをする前に彼等と戦う事になるとはね、まだ衛星に向かう途中だというのに」

状況を把握したスメラギが深刻な顔で呟く。

「それにしても、トランザムのようなシステムをもっている組織なんて、軍でもないのに技術力が高すぎだよ。」

アレルヤがそれに続けた。

確かにその通りだ、軍隊でもない武装集団がいきなりトランザムのようなものやあんな性能のMSを作れるとは思えない。

結局、俺以外のマイスターやリジエネもそれぞれ白銀の機体に出会っていた。

ロックオンは近接戦闘に特化した機体に、

アレルヤとマリーはハルルトに匹敵する機動性を持つ機体に、

ティエリアはどんな距離でも攻撃をし掛ける事が可能なように武装を大量にもっている機体に、

リジエネは俺と同タイプのファングを使ってくる機体に出会った。

トランザムのようなものを使われたのは俺とロックオンだけだったが、恐らく他の機体にもそれは使えるだろう。

「とにかく、今はリサイヤ周辺の衛星に行く事が最優先だ。今回の報告からしてどう考えても彼等と戦いになれば数の少ない此方が不利だ。話し合いで止めさせるしかない。」

その通りだった。このまま戦えば此方にでる被害はすくなくない。

「ティエリアのいう通りだ、まずはガンダムの整備と補給、それが終わり次第、今向かっている衛星に行こう。」

俺が話をまとめると、皆が頷いた。

――
――

「刹那、ちょっといいかー」

ブリーフィングが終わり、クアンタの整備を手伝っていた俺はモニターの前にいるイアンに呼ばれた。

「どうした、イアン。」

俺はクアンタのコクピットから出ると、イアンの方に向かった。

「刹那、お前さんに頼まれたデータの解析がおわったぞ。」

俺が戦闘からもどった時に解析を頼んでいた白銀の機体との戦闘データのことだった。

「それで、結果は」

モニターまでついた俺はイアンに訪ねた。

「ああ、こいつは、恐らくGNドライブと同じようなモノでうごいてる、それに武装も同じ様なもんだろう、ビームの粒子圧縮率もほ

「ほぼ同じだった。だが、あのシステムはトランザムとは少し違うようだ」

「トランザムとは違う？」

「どんなシステムなんだろうか。」

「詳しいことは実物を見ないと分からんが、この羽のように出ている粒子が機動性とかを上げる役割をしようだ。それからまだ推定だが、あの羽自身も武装になるようだぞ。ほれ、これを見てみる。」

「イアンがモニターの中の羽のように出ている粒子を指さした。」

「俺はモニターを覗く。」

「高速で動く敵、他の角度から迫る大量のファング、そして展開された銀の羽……」

「ん？これは……」

「周りのものが切れているな」

「最初に切り刻まれたジnkスの残骸が銀の羽が当たるたびに、さらに細かくきれれているのだった。」

「そうだ、恐らく粒子の圧縮率がサーベルと同じくらいの高さなんだろうな。」

「銀の羽、トランザムとは別のシステム、」

これ程の機体をもつ組織、
一体彼等は何者なんだろうか。

銀の羽（後書き）

十話目です、何か達成感あります。
でも、なんか、話の進み具合が遅すぎる様な（汗）

トレミーでの休息（前書き）

この小説には残酷な描写があります苦手な方はご注意ください。

ラッセのキャラが壊れてます、見たくない人は回れ右を。

トレミーでの休息

オービタルリングでの白銀の機体との戦闘から、20日が過ぎた。依然、彼等はあるからうごいていない。

俺たちはガンダムの整備と補給を終え、資源コロニーリサイヤ付近の衛星に向かっている。

「ラッセ、衛星まであとどれくらいだ。」
ブリッジでトレミーを動かすラッセに聞く。

「そうだな…、あと3日つとこだろ。全く、こんなに長旅になるとは思わなかったぜ。」

「俺も同感だ。」

あの戦闘の後、整備と補給は予定通り終わった。しかし、リサイヤ周辺の衛星まで行く時になって、連合が動き出してしまいあの事件以来、リング周辺のみならずあらゆる空域で軍の警戒体制をとってしまい、結果的にかなりの遠回りをせざるを得なかったのだ。

「しつつかし、いいのか刹那。」

「何がだ」

操縦をオートに任せたラッセが俺にいつてきた。

「フェルトの事だよ、お前さんここんとこガンダムの強化パーツの調整とかで全然一緒にいてやってないんじゃないのか？あいつ、寂しがつてるぞ。」

確かにそうだった、この所 白銀の機体との戦闘時の事を考えての強化パーツの製造や調整でいそがしく、彼女と一緒にいられる時間が本当に僅かになってしまっていた。いつも大丈夫としか言わなくて、明るくしていたがやはり辛かったのだろう。

俺は少し考えると、ラッセにいった。

「そうだな…ラッセ一つ頼めるか。」

「おう、何でも聞けぞ。」

？ラッセが任せるとでもいう様に返事をした。

「かなりの難題だが、いいのか」

「構わねえよ。困った時は助け合うべきだよ。」

「そうか、ありがとう。じゃあ頼むとしよう。今夜みんなで息抜きにパーティーでもやろう。その事についての許可をスメラギにとつて欲しい。」

「んあ、そんなんでいいのか」

「ああ、ただし、今夜のパーティーでは酒はビン一本までにする。それだけだ。頼んだぞ」

そういった俺はブリッジから出てフェルトの部屋に向かった。

一人ブリッジに残されたラッセ。

まるで、しまったとでも思っているかの様な顔をしている、いや、思っているのだろう。

「さあ、今日はあざだけですめばいいな」

それだけ言つと操縦の交代時間になりブリッジにきたアニーに艦を任せると、覚悟を決めブリッジを出て行ったのだった。

「ラッセには少し悪いことをしたな。」
そんなことを思いながらもブリッジからでた俺はフェルトの部屋にたどり着いた。

「フエ、……」
ドアをノックして彼女を呼ぼうとした所で俺は体を止めた。
以前のことを思い出したのだ。

「さて、どうしたものか」
俺は彼女の部屋の扉の前で考え込んだ。
以前のように柵を倒して片付けなんて御免だ。

「仕方がない……」
俺は携帯を取り出すと彼女に今から部屋に行くことを伝えるメールをした。

これなら、以前のようにはならないだろう。
俺は安心して携帯をしまつとドアをノックしようとした

その時

「ゴツ、ガシャン、ガラガラ、ドシヤ？」

部屋の中から物凄い音が響いた。

本棚に加えデスクの上にあるものも一度に全部ひっくり返したらこんな音が出るだろうか。

俺はゆっくりとドアのロックを解くと部屋に入った。

奥の方に本やら何やらの塊がある。

「はぁ……………」

最近、いつもため息ばかりついているような気がする。
そんな事を思いつつ、塊の中にいる彼女の救出に向かった。

「ついに此処までたどり着いたな。」

ソレスタルビーイングの操舵手こと、男ラッセ・アイオンは一つの扉の前に立っていた。

「長い道のりだったな。」

実際、彼があるいた距離はたいしたことない。だが、精神的にはかなりの疲労だった。

なぜなら、今から常に酒浸りの戦術予報士にこれからパーティーをやりたい、普段なら酒を飲み放題なはずのパーティーだが、今回の酒はビン一本になってしまった。だけど許可をくれ、と言いに行くのだから相当な圧力だ。

しかし、男の中の男であるラッセ・アイオンは約束を破るわけにはいかなかった。

「よしっ、生きて帰るぞ」

覚悟を決めたラッセはそれだけ言って一世一代の大仕事に挑んでいった。

トレミーでの休息（後書き）

ラッセのキャラが壊れてます。

たまにはこんなのも悪くないかと。

まだパーティー残ってるんですけどね。

感想お待ちしてます。

この笑顔があったから（前書き）

まずは、

更新遅れて申し訳ありませんでした。

こんな小説でも楽しみにしていてくれた皆さん、

ごめんなさいm（　　）m

何で言うか、ラッセが可哀想です。

この笑顔があったから

「よしっ、これで最後だな。」

俺は目の前にあった本をしまつと、大きく伸びをした。イノベーターとなり高い身体能力を手に入れたとはいえ、こういう精神的に疲れる作業は苦手だ。

「ごめんね、刹那。私がドジをしたばかりにこんな片付けに手伝わせちゃって。」

奥で化粧品の片付けを終えたフェルトが申し訳なさそうにこちらにきた。

「構わないさ、驚かせてしまったのは俺の方だしな。」

俺はフェルトが片付けの間に入れてくれた机の上のコーヒーを取ると飲みながら答えた。

「そつだ、忘れていた。フェルト、今日はトレミーでパーティーをやることにしたから、あとで一緒にいこう。」

俺はここにきた目的を思い出すと彼女に告げた。どうもここにくと、本当の目的を見失いがちだ。

「ほんとに！いつ始まるのそのパーティー。」

フェルトがとても嬉しそうに訪ねてきた。
なんていうか、こんなフェルトもいいと思った俺だったがそんなことおいて彼女の質問に答えた。

「上手く行けばあと二時間後には始めれるだろうな。」

「上手く行けば？」

「ああ、上手く行けばだ、だがあんしんしろ、中止にはならない。
ただ、上手く行かなかった場合は……」
俺は少し深刻な顔つきになる。

「上手くいかなかった場合は」
彼女が少し心配して聞いてくる。

「ラッセの救護の時間がかかる。」

「へっ？」

フェルトがぼかんとしている。

「まさかラッセ別の任務に出てるの。」
フェルトが聞いてくる。

「いや、そういうわけじゃないんだが……まあ、ある意味ミッシェンとも言えるな。」

俺はそう言つと、ブリッジのことを話した。

「そういうことだったんだ、でもラッセ大丈夫かな。」
説明を聞き終えたフェルトがそんなことをいった。

「まあ大丈夫だろう。仮にダメだったとしても、ラッセの救護とパーティーのあとの泥酔した人物の後片付けをすることになるだけだしな。」

俺は少し笑いながら答えた。

「それは結構大変だよ、いいのそれでも。」
「もちろん良くはないさ。だがラッセが上手くやってくれるだろう。」
「
そんな会話をしていると俺の携帯が鳴った。」

「よ、よう…刹那か。」

今にも消えそうな声でラッセが言ってきた。

「ラッセか、例の件は上手くやってくれたか。」
「ああ、だが残念なことにスメラギさんはすでに酔っている。」
ラッセが必死に声を振り絞りながら答える。

「そうか、まあ仕方がないな、ありがとうラッセ。」
俺はそれだけ言うと、ラッシュが倒れたであろう音を確認して電話を切った。

「どうだった？」

「上手くやってくれたようだ。さあ、ラッセを助けに行こうかフェルト、そしたらそのあとはパーティーだ。」

俺は彼女のを取ると2人で部屋を出て食堂に向かった。

「刹那、」

俺に手を引かれて歩くフェルトが俺を呼んだ。

「今日は、ありがとうね。」

彼女が少し嬉しそうに言う。

「まだ、楽しむのはこれからだ。」

「そっだね、でも、ありがとう。」

彼女はそう言うと、本当に感謝するように微笑んだ。

俺はこの時気づいた。

俺が戦い続けた理由、

こんなに、感情を表に出せるようになった理由、

俺がこの組織にもどって来れた理由、

すべては、彼女のこの笑顔にあったのかもしれない、と。

この笑顔があったから（後書き）

感想お待ちしています。

こんな感じのサブストーリーも挟んで行く予定ですので、
ご希望あればリク下さい。

できる限りご期待に添えるよう頑張ります。

白銀の来訪（前書き）

更新のペースが遅れており申し訳ございません。
十三話です。

白銀の来訪

パーティーが終わり、お約束の泥酔した人物の後片付けをしている俺とフェルト、その後ろには、リンダ、ミレイナ、ティエリアなどの常識人らが、同じように泥酔した人物の後片付けをしている。

「予想はしていたが、ここまでひどくなるとはな。」
俺は目の前に広がる悲惨な光景を見て溜息をつく。

「しょうがないよ、ラッセが交渉をスメラギさん相手にしっかり行えなかったんだから。」
フェルトが仕方がなさそうに答えた。

「全く、こんな状態でこれからのミッションができるのものが」
ティエリアが飽きたように愚痴をもらす。

「本当ですう、もう皆さん何でこんなになるまで続けるんですか」
同感するようにミレイナが続けた。

結局、ラッセの必死の交渉はスメラギの勝手な行動によって無駄となった。

ビールは一本まで、そうしないと後片付けが待っている。

こうなることを恐れて俺は頼んだのに、スメラギはパーティーの前に酒を飲んでよった拳句、大量の酒を隠して持ち込んでいたのだ。た。

俺が気づいたときには、そんな約束があることも知らなかった。俺たちはスメラギの持ち込んだ酒で完全に酔ってしまい、止まらなくなっていた。

「アニニュー、一秒のトランザム…やばくね、かつこ良くね、乱れ打ててね。」

わけのわからないことをロックオンが喋り出した。

「はあ、そうねライル、その通りよ、かつこいいわ。」
アニニューが半ば諦めたように答えた。

「僕は、ああ、人でなしだあ、ハレルヤ、世界の悪夢が見えるようだよ。」

いつもは大人しく常識的なアレルヤも完全に酔っている。

「仕方がないんだろうが流石にこれはまずいな…」

フェルトが酔いつぶれたメンバーに毛布をかけていく。

流石に部屋まで運び込むことはできない。

ん…なんだこれは。

頭の中にかすかな脳量子波が流れ込んできた。

「コンテナに……………おいでよ」

それだけ聞き取ると流れ込んできた脳量子波はそのまま途切れてしまった。

コンテナに來いだと…

俺は周りを見渡した、

この中で脳量子波が使えるのは、俺とティエリア、それにリジエネ、あとは、アレルヤとマリーの五人だけの筈だが、全員ここにいる。

じゃあ、一体誰が…

「フェルト、少し用事が出来た、すぐもどってくるから、皆を頼んだ。」

俺は、そう彼女に言うと、この片付けを彼女たちに任せコンテナに走った。

――

「誰もいないな……」

コンテナに辿り着いた俺は脳量子波で呼びかけてきた者を探している。

「やあ、イノベイター。いや、ここではこう呼んだ方がいいかな、ソラン……」

突然、後方から声が聞こえた。

「誰だ？」

俺は振り向き銃を構える。

そこには、見たことのないパイロットスーツを着た一人の人物が立っていた。

「ひどいな、初対面の人に向かって銃を向けるなんて、って、あれ？よく考えれば、初対面ではないね。」

軽く笑いながらその人物は答える。

「貴様、何者だ？　なぜ俺のことを知っている、それに過去のことまで。」

俺は銃を持つ力を少し強めてその人物を睨みつけた。
顔はヘルメットで分からないが、声からしておそらく男だろう。

「まあまあ、そんなにおこらなくてもいいだろ、僕らは似たもの同士なのだから。」

似たもの同士？どういうことだ…

その人物はそう言うとヘルメットをとった。

そして……

パン???

乾いた銃声が鳴り響いた。

白銀の来訪（後書き）

ついに迫る敵？かな。

そして、乾いた銃声。

刹那の安否は……

感想お待ちしております。

何故知っている(前書き)

今回は少し変わった内容です。

何故知っている

鳴り響いた銃声…

しかし、銃弾は誰にも当たらず奥にあった倉庫の壁に当たった。

同時に俺とヘルメットをとった人物が物陰に隠れる。

突然の銃声のせいで奴の顔が良く見れなかった。

俺は周りを見わたしす、

俺は引き金を引いていない、もちろんヘルメットを持っていた奴も無理だろう。

なら、一体誰が…

「勝手にビトの艦に乗り込むとは、どついつ思考をしている。」

コンテナの階段から声が響いた。

テイエリアか…

「ゴメンゴメン、ははっ、ソランくんは銃を向けてきたただだったのにまさかただの一般人に対して撃ってくる人がいるとは、この艦は危ない人が多いね。」

物陰に隠れたままの人物が楽しそうに答えた。

「貴様？」

俺は奴に対して声をあげた。

情報を見られただけでなく、その名で呼ばれるなど、俺には耐えられなかった。

「この艦のセキュリティをたやすく破り、ヴェーダのLevel 7の情報を知っている一般人がいるものか」

テイエリアが再び銃を構える。

「質問に答えてもらおうか：何故、僕たちの母艦である筈のトレニ
ーにしのび込んでいる」

テイエリアが物陰に隠れた人物にいった。

暫くの沈黙のあと、

「はあ、あ、まあ落ち着いてよ。まずは銃を下ろして欲しいな、そ
れじゃ答えたくても答えられないよ。」

ふざけたように答えてきた。

「君に何かを訴える権利はない、早く言うんだ。」

テイエリアが口調を強める。

「権利がない……………」

奴の声が少し変わった。

「そうか、権利がないのか、そうやって否定するんだ、ああやはり

そうだったんだ、残念だな、君はもうどうなってもいいや、ティエリア・アーデ。」
奴が呟く。

「ソランくんゴメンネ、今日はお別れだよ。」

「なっ、何だと？」

そういうや否や、奴のいる物陰から何かが飛んできた。

スモークだ、

広がってゆく煙、

奴が走り出した

「くそっ、やられた。」

ティエリアが発砲したが、奴はそれを見事によける。
考えられない身体能力だ…

その間にも奴はコンテナの緊急ハッチに近づいていく。

「待て貴様、俺と同じとはどういうことだ？」

俺は脱出ハッチから出ようとする奴に叫んだ。

辺り一面スモークで見えない、その中から脱出ハッチから出ようとする人影が見えた。

「そのまんまの意味さ、僕らは人とは違う、人であってはいけない力を持ったもの、まあ、君は自然にそれを手に入れたけどね。」

それだけ答えると奴は外に出て行ってしまった。

「何なんだお前は、」

俺はそれだけ呟いた。

俺と同じ…

まさかイノベーターなのか？

しかし、やつは俺は自然にそれを手に入れたと言った。

なら奴は何者なんだ。

俺はその場で立ち尽くしていた。

何故知っている(後書き)

謎の人物の顔が出せなかった…

そのうち必ず出しますm) | | (m

忘れ去られし者（前書き）

今回はファーストシリーズに
オリジナルのストーリーがあつた設定で話が進みます。
それを踏まえてお読みください。

忘れ去られし者

コンテナでの出来事から三時間がたった。

今俺たちはブリーフィングルームで謎の侵入者について話しあっている。

「ヴェーダのLevel7の情報を知っている人物ねえ。」

話を聞いて暫く黙っていたロックオンが口を開いた。

「彼は何者なんだろうか…」
「アレルヤがつぶやく。」

「ヴェーダのLevel7の情報を見られただけじゃなく、トレミのセキュリティをまるでなかった様に侵入したことについても気になるな。」
「ラッセが続けるように言う。」

そう、ヴェーダの情報が漏れたことについても異常事態ではあるが、それよりも何故、ヴェーダの中に一切設計データのないプロレマイオス？のセキュリティをくぐり抜けて来られたのだろうか…

「情報がすくなくすぎるな、これでは何もわかっていないのと同じだ。少なくとも謎の人物がどこの人間なのか分かればある程度分かりそうなのだが。」

テイエリアが言った。

確かに、奴がどこの人間なのかわかれば何とかかなりそうだが、それに、ヴェーダの情報が漏洩することなんて考えられない。ならば、ヴェーダの存在を知り、アクセスできる人間か…

待てよ、ヴェーダの中の俺たちのデータは一度なくなった筈だ

なのに何故奴はソランの名を知っている

「まさか？」

俺はその場で声を出した。

「何だよいきなり、何がわかったのか？」

ロックオンが驚きながら聞いてきた。

「ああ、恐らくはな。フェルト、イアンとの通信を開いてくれ」？

俺の予想が正しければおそらく奴は…

俺は横にいたフェルトに言うとな彼女は手元のモニターを操作すると、スクリーンにイアンが映った。

確かあそこにあったのはハルルトだった筈…

「イアン、ハルルトに残っているレーダーの記録にMS反応が無いが見てくれ。時間は大体三時間くらい前のだ。」

「少し時間かかるぞ、一体どうしたんだ」

「色々調べたいことがある」

俺はそう言うと通信を切ってもらい、皆に話し始めた。

「三時間前に奴がコンテナに侵入し俺を見た時奴は、俺とはある意味初対面じゃないと言ったんだ。と言うことは、いつか分からない無いが俺とどこかで一度はあっていると言うことだ。」

そしてそれが考えられる最も有力な場所は戦場の中だ。

それによく考えてくれ、ヴェーダのLevel7の情報の中にある俺たちのデータは一度抹消されている、その後再度データをいれたとき俺は自分の過去の名は入力していない。そう考えると、奴の正体は…」

「僕らの情報がヴェーダに残っている時か、それが漏洩した時に僕らと戦った人物。」

アレルヤがつぶやく。

「そう言うことだ、ヴェーダに異変が起きたのは、漏洩した後のこと、そしてその時に俺たちが戦ったのは。」

「国連軍のジンクス部隊と、トリニティにアレハンドロコーナー、刹那はあのフラッグともか…それから………まっまさか？」
ラッセが声を上げた。

「ああ、奴だ、まだ生きていたんだ、奴は。」

それは、語られることのなかったある一人の人物の話。

その、
忘れたらどう
...者...

忘れ去られし者（後書き）

オリジナルのストーリーがあつたことになってるんで、
若干分かりにくい内容だつたと思います。

オリジナルのストーリーは次の話で明らかになるんでもう暫くお待ちください。

宇宙に散った記憶（前編）（前書き）

ファーストの中に無理にいれた感がありますが、
大目に見てください。

宇宙に散った記憶（前編）

奴は宇宙に散った筈だ…

圧倒的な力を持っていたあの男は…

西暦2037年

突如世界に向けて武力介入を始めた私設武装組織ソレスタルビーイング。

彼らは圧倒的な性能をほこる4機のガンダムで次々と武力介入を行ってきた。

しかし、監視者であるアレハンドロ・コーナーの裏切りによりガンダムという圧倒的な優位性を失うこととなる。

この話はそんな時に起こった事件である。

「刹那、中東のエリアで新型MSに擬似太陽炉搭載された事が原因で大規模な紛争が起きている、今俺たちがうごくのは危険すぎるがこいつを止めないと恐らくは中東のほとんどが壊滅する。行けるか…」

スローネ救出のため地上に降りていた刹那とラッセにロックオンからの通信が届いた。

「中東だと、だが国連軍はうごいてないのか…」

「ああ、おそらくやつらは俺たちを潰すことしか考えてないんだろ。う。」

平和のためにガンダムを駆除すると語り紛争には介入しないと…

「しかし、スローネの方は…」

「大丈夫だ、王劉美が先に手を打ってくれている。暫くは時間を稼げるだろう。」

「了解した。」

俺はそう言って通信を切ると、ラッセに中東に行くように頼み、そのまま送られてきたミッションプランを確認した。

中東エリア0315での武力介入

「エリア0315だと？」

エリア0315、それは…

旧クルジスのことだ。

何故あの国が…

俺はそのまま読み進めた。

エリア0315では、一人の指導者によってほとんどの中東エリアにいる反国連勢力を集められた、その後密輸された大量のMSによりクーデターを開始、現在は中東のほとんどの国連軍基地を制圧しており早急な武力介入が必要である。今回はその指導者を止めることを最優秀事項として介入。よってエリア0315中枢に直接攻撃せよ。

一人の指導者によって中東のほとんどの人間を味方につけると…

一体何物だ…

「刹那、もうすぐエリア0315付近につく、出撃準備をしとけ。」

俺が考え込んでいると、ラッセから通信が入った。

「ああ、分かった。」

俺はそう返事をする、エクシアに乗り込んだ。

おそらくギリギリまでは強襲用コンテナで近づけるだろう…

そこからは一発勝負になるな、

「??？」

突然コンテナが揺れた。

俺は慌てて通信を開く、

「どうした、ラッセ」

「敵に発見された、奴ら潰した国連の基地にあったティエレンの長距離スコープをセットしてやがった」

「やはり、かなり有能な指導者がいるようだな、仕方がない、エクシアで出る、ラッセは援護を頼んだ。」

俺はそのままコンテナから出てGNソードをライフルモードにして一気に敵の中枢に向った。

「思ったよりも敵が多いな…それに、この配置は…」

かなりの数のMSが要塞守備に徹底した完璧な布陣で並べられている。これほどの配置ができる人間などそう多くいる筈がない。

「あまり時間は無い…GNダガーも温存しなければならぬ、それ

なら？」

ティエレンの砲撃をかくぐり俺はそのまま地上に降りた。

「変わらないな」

そう、降りた場所は昔俺が戦ったあの場所、そして、ガンダムに乗っても彼等を助けることのできなかつた場所、

「俺がガンダムだ…あの時のように人を守るガンダムに…」

俺はそう呟くとそのままティエレンの部隊に突撃した。

「うおおおおお？」

宇宙に散った記憶（前編）（後書き）

後半へ続きます

感想お待ちしてます。

宇宙に散った記憶（後編）（前書き）

後編です。

後半の戦いはご想像にお任せします。

宇宙に散った記憶（後編）

突撃するエクシア…

「うおおおおお？」

ぐんぐんとティエレンが近づくと、

目の前まできたティエレンをライフルで撃ち抜くとそのまま両手に
ビームサーベルを持ちそこにいた6機のティエレンを一度に切り刻
む。

すぐに方向を変えて空中に飛ぶ。

ビームサーベルを戻すとライフルで空中から迫るリアルドを落とし
再び高速で下降、並べられた砲台をすべて潰すと廃墟となっている
建物を使い砲撃をよける。

「敵が速すぎます。ティエレンの砲撃が全く当たりません」

敵の中枢で響く声。

「全く、ダメだな、ガンダムを相手にする時の戦い方が分かってない。」

一人の男が答えた。

「あの機体を準備してくれ、見せてあげるよガンダムを相手にする時の戦い方を…」

「くそつたれ、全然中枢に近づけねえぞ。」

エクシアを援護しながら移動するコンテナでラッセが言う。

「ラッセ、GNアームズは使えないのか？」

俺は敵を倒しながら叫ぶ。

「無理だ、宇宙に戻れなくなるぞ。」

「クソッ、このままでは……」

敵の数に押され始めた俺は仕方が無く温存しようとしていた、すべての武装の解除をしようとした。

その時、突然攻撃が止んだ。

「何だ、」

周りを見渡すとすべてのMSが動きを止めている。

「一体これは……」

「何たくらんでやがるんだ」

しかし、相手は一行に動かない。

ジュジュッ……

センサーが鳴り響いた。

「Eセンサーに反応？なつ、何だこの機体は？」

振り向いたエクシアに一機のMSが迫る。

イナクトをベースに改造されたような機体、かなりのスピードだ。

「このッ！」

ライフルを放つが全てよけられた。

「何だこの動きは……」

まるで、ガンダムと同じぐらいの機動力があるような動き、速さはこちらの方が速い筈なのに直撃コースのビームを先を読んでいるかの様にさけられる。

そして、エクシアの目の前までくるとブレードを引き抜き斬りかかってきた。

「させるかあ？」

GNソードで相手に斬りかかる、

「あまいよ、ガンダムのパイロットくん。」

相手がこちらに聞こえるよに言ってきた。

「何だと？」

相手は瞬時に脚の部分を変形させた。

途端にイナクトの重心が低くなる。

ブオン？

GNソードが空を切った

イナクトが変形したままエクシアに突っ込む。

「ぐあああああ…！」

エクシアがイナクトに押されたまま廃墟にぶつかつた。

「刹那？」

ラッセがそちらに向かおうとするが、ティエレンたちに阻まれる。

「クソがあ」

エクシアを見下ろすイナクト。

「ガンダムの性能があってもこの程度か…弱いなガンダムのパイロットくん。」

それだけ言つとブレードを引き抜く。

「これからは、僕がガンダムで世界を変えてあげるよ。」

振り下ろされるサーベル。

「まだだッ！」

俺はブースターを最大まで吹かすと、ぶつかった廃墟を砕いてよけた。

「なんて、推進力だすごいなガンダムは。もうようも済んだことだしいいか。」

相手はそう呟くと武装を捨てた。

「ウオオオオオオ！」

俺はそのままイナクトを突き刺した。

爆散するイナクト…

「リッ、リーダー？」

ティエレンに乗っていた兵士が叫んだ。

それと同時に、砲撃が再開された。

俺はそれを全てよけると強襲用コンテナに戻り戦闘中域を離脱した。

「ラッセ、予定よりもだいぶ時間がすぎている急いでくれ。」

そして、スローネのもとへ急ぐのだった。

――

――

その後、俺はスローネのもとにつくが時はすでに遅く、アリアル・サーシエスによりスローネドライしか救うことはできなかった。？
その時俺は初めて奴によって、足止めをされていたことに気づいたのだった。

それから、イナクトのパイロットとは最後の決戦の戦場で出会い、
生きていることを知ることとなるが、激戦の末、奴は宇宙に散った
筈だったのだ。

そう、圧倒的な力を持った故に…

宇宙に散った記憶（後編）（後書き）

これにて過去の話は終了です。

次回から再び現在に戻ります。

偽りの戦友、真実の共犯者（前書き）

何か刹那が少し違う気がしますけど（性格的に）
どうか触れないでください。

偽りの戦友、真実の共犯者

宇宙に浮かぶ大きな翼を持つMSたち。

「たっ、助けてくれ…」

大破したMSから響く声。

「ハッ、俺たちを否定した虫けらが何言ってるんだ。」

一機のMSが吐き捨てた。

「わっ、悪かった。俺が悪かったよ。あの人が消えて俺はどうかしていたんだ…ゆっ許してくれ」

大破したMSのパイロットは必死に助けを求めた。

「Mr・マリドナ、あなたは我々を見捨てた罪を認めると言っのか…」

横にいたもう一機のMSから声が響く。

「あっ、ああそうだ、認める、認めるよ、だから命だけは…」

そう言いながら、マリドナと呼ばれる男がコクピットから出てくる。

「そうですか、あなたの罪に対する思いは確かに受け取りました…」

静かにいったMSのパイロットはライフルを降ろした。

「ああ、ありがとう、」

マリドナがその機体に近づいた…

その瞬間…

白銀の翼から光が放たれた。

「なっ、やめろおおおお！」

白銀の光とともに消え去ったMSとマリドナ。

そして、パイロットは冷めた視線で何も無くなった場所を見つめつぶやいた

「気持ちは分かった、だが、その罪は消えない」

「刹那、解析終わったぞ。」

フリーフィングルームで待機していた俺たちのもとにイアンからハルトのセンサーのデータが届いた。

「お前さんの予想通り、たしかにMS反応があったよ、しかもその反応データを解析したら、以前、刹那が戦ったあの白銀のMSだった。こいつは当たりだぞ」

スクリーン越しにイアンが俺たちに説明をした。

「やはりな……イアン、ありがとう。あとでまたデータを転送しておいてくれ。」

俺はそれだけというと、通信を切った。

「今ので大体分かったな、今回の敵はおそらく奴だ。そして、奴は白銀のMSたちの中にいる」

あまり嬉しくない真実にティエリアが顔をしかめている。

「話は分かったけど、何でその敵が刹那が言うイナクトのパイロットだとまづいんだ?」

俺たちの過去を直接知らないロックオンが言った。

「奴を知らなければ無理も無いか…だがいいのか刹那。」
「ティエリアが俺に聞いてくる。」

おれは少し考え込んだあと言った。

「構わない、どのみち知るべき事だ。」

それを聞いたティエリアはロックオンに話し出した。

「奴の正体はクジャノ・ミストレネ……刹那が過去に所属していた
テロ組織、KPSAのメンバーの生き残りだ……」

「うっ、嘘だろ？」

ロックオンが声を上げた。

「僕もできるなら認めたく無いが本当だ……」

「なら、何故刹那はコンテナで奴の正体が分からなかった。」

ロックオンが動揺している。

「落ち着いて！ライル。」

隣にいたアニユーがなだめる。

「あの時は、顔を見ていなかったんだ、すまない」
俺は彼に謝った。

「クツ……」

ロツクオンは苦悩の表情を浮かべる。

「家族の仇……とでも言いたいのか。」

そんな彼に対してティエリアが冷めたように言い放った。

「悪いかっ？」

ロツクオンが叫ぶ。

しかし、ティエリアは表情を崩さないまま続けた。

「もし、君が奴を家族の仇だと言うのなら……」もついでにティエリア、
このぐらいにしておけ。「」

俺はティエリアの言葉を遮り皆に言った。

「とにかく、奴が生きていて敵である事には違いない。俺たちが今
できる事は、この先での奴の所属するメンバーと話し合いをする事
だ。こんな所で過去にとらわれている時間は無い」

「刹那の言う通りだよ、今の僕たちに過去は関係ないんだ、僕たちは、今を見るべきなんだよ。」

アレルヤが続けた。

その時、突然ブリーフィングルームの自動ドアが開いた。

全員がそこを見ると、そこには息をあげたフェルトがいた。

「フェルトどうしたん…」「スメラギさん緊急事態です。リサイヤがポイントから移動を始めました。」「」

俺が声をかけようとするフェルトがそれを遮り声を上げた。

「何ですって?」

困惑する一同…

何故組織のコロニーであるリサイヤが動かせるのか。

占拠するだけではそれは不可能なはずだった…しかし、実際に動いたのだ。

「フェルト、目的地は分かったのか。」

「目的地は今調べています……」
フェルトが手元のモニターに手を付けた。

「出ましたっ？アフリカタワーです？」

「アフリカタワーだと？」
ロックオンが声を上げる。

アフリカタワー……
奴は、いや、クジャノは一体何をやる気なんだ。

偽りの戦友、真実の共犯者（後書き）

まさかの刹那の過去に関わる人物の名前が発表

クジャノ・ミストレネ

一応、刹那と同じ年のつもりで書いてく予定ですが、
おかしいでしょうか。

感想お待ちしてます。

忘れてはいけない物

資源コロニー…リサイヤ

ドッグに三機のMSがはいつていく。
広い通路、白に統一された壁

しまっていたシャッターを開け
通路を進んでいく三機、

その先には五機のMSが並んでいる。

「三人ともご苦労様、積年の恨みは晴らせた？」

もどってきた三機のコクピットに明るい声が響いた。

「ええ…晴らせました。ですがMr・クジャノ、あまりこの件に関して
は聞かないでください、気分が悪くなります」

中央のMSのパイロットが答えた。

「ははっ、イイじゃんべつに、僕らは友達だよ……………そう、戦友というね。」

「俺がいつあなたのダチになったんだよ。」

答えたクジャノに対してもう一機のパイロットが悪態をついた。

「イイでしょ、友達で、僕らはテロリストと言う戦友であり、同じように人を憎む仲間なんだから、ね、マリドナ」

「てめえ、その名で呼ぶんじゃないやねえ？その名はすてた。俺はタークス・ヴァンガードだっ！」

ふざけたように言ったクジャノにタークスと呼ばれるパイロットが声を上げた

「よせタークス、今お前が怒ってなんの得になる。」

「止めんなよゼフィアス、こいつは触れちゃいけないものに触れたんだぞ！」

「いい加減にしろ、落ち着くんだ」

隣にいたパイロットは彼をなだめるとモニター越しいるクジャノに向って言った。

「Mr・クジャノ、いくら我々が仲間とは言え、それは利害が一致しているからであって、親密な関係であるからでは無い。それ以上言えばタダでは済まさない。」

「分かったよ、ゼフィアス。僕が悪かつよ。」

クジャノはそれだけ言つと通信を切つた。

「チツ、気にいらねえ」

タークスが呟く。

「そう言つなタークス。Mr・クジャノにはまだ協力してもらつ必要がある。」

「っーか、なんであいつに協力してもらつ必要があるだよ、ヴェーダへのアクセス権は俺たちにだつてあるだろ。」

タークスが愚痴を漏らしていると、さつきまで黙っていたもう一機のパイロットが答えた。

「ヴェーダへのアクセスは簡単にはいかないし……それに、プロレマイオスにいるソレスタルビーイングのメンバーの情報はヴェーダには存在しないよ……だからまだ彼は必要だよ……」

小さめの声で答えたパイロットははつきりとそれだけ言った。

「言われなくても分かってんよ」

二人の会話を黙って聞いていたゼフィアスが口を開く。

「そのぐらいにしておけ、みんなが中で待っている、次の作戦のミーティングもまだ残っているだろう。」

それを聞いた二機は、そのままコンテナにMSを止めて先に行ったゼフィアスについて行ったのだった。

「クジャノ、。あんたは何故……」

トレミーの個室のベッドの上で俺は過去の写真を見ていた俺は顔を上げた。

アフリカタワーに向かっていているリサイヤに合わせ俺たちトレミーも予定を変更する事となり、直接リサイヤに向かい話し合いを求める

事となった。

おそらく、あとに時間もすればリサイヤにたどり着くだろう。

果たして俺はクジャノとあって平常でいられるのだろうか。

俺は再び写真に視線を移す。

写っているのは多くの子供。

全員が体の大きさに似合わないような銃を担いでいる。

神を信じ、その存在を疑わなかった頃の俺、隣にはあのスカーフをくれたあいつもいた。

右端に一人だけ大人が写っている、俺たちを騙し、ここにいる多くの仲間が死ぬ原因を作っただけでなく、トレミーの大切な仲間であったニールの命までを奪った男、アーリアル・サーシェス。

そして、サーシエスの横にいるクジャノ。

皆は神を信じて死んだ、けど、俺は生き残った。神を信じる事をやめたからだろうか。

それとも、ただあの時リボンズのガンダムに助けられたからだけなのだろうか。

俺は変わった、神を信じる事をやめ、目の前の現実を受け入れ、守るための力を手に入れたのだ。

なら、あいつはどうかだろうか。

祖国を守るために命をかけ、生き残ったにもかかわらず、あいつは自らの手で再び祖国に争いをもたらした。

あいつの中にはまだ神がいるのだろうか。

「間もなくミッションが始まります。各マイスターはガンダムにて待機してください。」

スピーカーからアナウンスが流れる。

俺は写真をしまうと、部屋を出てコンテナへ向かった。

忘れたくても忘れられない悪夢のような記憶。
いや、忘れてはいけないのだろう。

これは罪だ、
そして俺はその罪を背負わなければならない。

死んだ者たちのため、

彼らが奪った命のため、

俺が奪った命のため、

そして、

これからを生きるものたちのためにも。

忘れてはいけない物(後書き)

感想お待ちしています。

避けられない再会

「刹那、本当にいいのか。」

クアンタのコクピットで待機していた俺にティエリアから通信が入った。

「ああ、奴が俺の過去を知っている限りこれは俺がやらなければならぬ事だ、その覚悟も出来ている。」

「そうか、だが無理はするな、お前の過去を知る人物ならなおさらだ。」

ティエリアはそう忠告すると通信を切った。

暫くの静寂。

俺は操縦桿を離すと自分の手のひらを見つめる。

無機質なパイロットスーツに包まれた手。
だがこの手で俺は多くの命を奪ってきた。

『あなたの手はみんなを守ってきた手でもあるんだよ。だから、—

人で背負いこまないで』

ふと、彼女ーフェルトが過去にいつてくれた言葉が蘇った。

イノベーターとなり、他人との違いを少しづつ自覚していき、心を閉ざしてしまった時、彼女がくれた言葉。

「ミッション開始まで060秒を切ったです。ガンダムは各機発信してくださいです。」

ミレイナの声がコクピットに響いた。

「了解」

俺はそれだけ返事をする。クアンタを起動させた。

「刹那・F・セイエイ、ダブルオークアンタ、出る。」

レバーを一気にまえに倒し、クアンタが加速する。

宇宙に一筋の光が流れた。

「はい、そうです……ええ、分かっています。そろそろ来る頃です、あとで連絡します。」

リサイヤのコンテナ内の個室で暗闇の中、端末を切ったクジャノ、怪しく輝く瞳は人の物とは思えない輝きをしている。

「ソランくん、いや、ソラン、いよいよ君にあえるのか、楽しみだよ僕は。」

そう呟いたクジャノは部屋を出てMSに向かった。

緑色と赤色の粒子を放出しながら宇宙をかける5機のMS、

「刹那、この辺りだ。僕たちは例のポイントで待機する。もしもの時はそこで落ち合っぞ」

「了解した。」

通信で作戦の確認をしてきたティエリアにそう返事をする、クアンタ以外の4機がそれぞれの方向に散っていく。

俺はそのまま直進して行くと、指定されたポイントに止まった。

辺りは何も無い空間が広がっている。

「...?」

突然何も無いはずの場所から白銀のビームがクアンタに向けて放たれた。

完全に直撃コースである。

「刹那?」

別ポイントで待機していたロックオンが声を上げた。

しかし、それを難なくかわしたクアンタ。

そして、俺はそちらに向けて光通信を行った。

【戦闘の意思は無い、話し合いを望む。】

しばらく繰り返しているうちに何も無い場所から返答がきた。

【了承した。話し合いに応じる】

それと同時に目の前の空間が揺れ少しつつ鉄の壁が現れた。
やがて、その鉄の壁は一つの巨大な建造物の姿となった。
先程ビームが放たれた方向には入り口らしき物と、4機の白銀のM
Sの姿がある。

「迷彩皮膜か。どつりでデータ無しでは発見できないわけだ」

トレミーで待機していたラッセがつぶやく。

「ここからは彼次第ね、頼んだわよ刹那。」

スメラギが少し険しい表情でモニターをみた。

光通信を受けた俺は、クアンタを4機の白銀のMSの方に向けると、ホッと安堵の息を吐いた。

とりあえず、第一段階はクリアできたようだ。

だが、まだ油断はできない。

俺は表情を元に戻すと目の前に迫る4機のMSを見る。

ヘッドパーツが以前同様、マスクで隠されておりどんな系統の機体か分からないが、本体からして恐らくイノベイドたちの機体の系統だろうか。

それぞれが色の違うボディカラーに粒子と同じ白銀色のパーツを取り付けたような機体。

先頭にいるのは恐らくティエリアが以前戦ったどの距離でも攻撃を行える機体だろう。

その横の二機はアレルヤが戦った機動力が高い機体。

そして、一番奥にいるのは…

「やあ、ソランくん、また会えて嬉しいよ。」

クジヤノの機体だ。

避けられない再会（後書き）

次回から少しづつ謎になっていた残りの敵メンバーが公開です。

あ、ネタバレだ（^ ^ ;）

名前は一応決めています、これなんかどう？と言つ意見がありましたら

是非ともリクエスト下さい。

ペインチェンジャー

「やあ、ソランくん、また会えて嬉しいよ。」

コクピットに声が響く。

そして、クジャノの機体がクアンタに近づいてきた。

相変わらず、嫌なくらい明るく馴れ馴れしい奴だ。

だが、この態度とは裏腹に、こいつは絶対に何か企んでいるだろうな。

まあ、今はそれを追求する必要は無い。

「貴様の相手をする時間など無い、俺は彼らと話にきた。」

俺は冷たくクジャノに言い放つと、そのMSを素通りして、奥にいる三機の方へ向かった。

「話し合いを受け入れてくれて感謝する。」

俺は先頭にいる機体に公開通信を入れそう言った。

「構いません、こちらも一度話し合っべきとは思っていましたが。」

声からして男だろうか、丁寧な喋り方だな。

「案内します、此方です。」

俺は言われた通りにコロニーの中に入っていった。

「ひどいな、まあいいが、せつかくのソランの来訪だ、楽しむとしよう。」

それだけ呟いたクジヤノは反転すると、同じくコロニーにもどって行った。

コロニーの内部を進んで行く5機のMS。

「あまり変わった様子は無いな……」

俺は移動しながら周りをみて呟く。

さすがに、組織のコロニーだけあって、内部の設備は一般人からみればかなりのものだが、組織のメンバーである俺にとってはたいしたものでなかった。

「ここで、MSを降りて下さい。我々は一切、手を付けないので」
安心を……」

そう言われた俺は、クアンタの粒子散布を止めて、コクピットから降りた。

降りてその先に行く小さな部屋があった、恐らくは出入り時の空気の調整のためのスペースだろう。

「我々の仲間が来ます、そこでしばらくお待ち下さい。」

一人の男から再び通信が入る。

そして、そのまま4機のMSは奥に進んで行った。

俺はしばらく時間を潰そうかとティエリアに連絡を取った。

「刹那か、どうだ、うまくいきそうか。」

「ああ、特に問題はない、クジャノについても、目立った行動は起こしていないようだ。」

「そうか、また何かあれば連絡してくれ。」

「了解した。」

簡単な状況報告を済ますと、俺は端末の電源を切り右腰についているケースに仕舞った。

「お待たせしました、刹那・F・セイエイさんですね。ご案内しますよ。」

ちょうどいいタイミングで一人の人物が入ってきた。声からして此方は恐らく女性だろうか。

俺は彼女についていき、奥の部屋にはいると、
「ソレスタルビーイングの刹那・F・セイエイだ、よろしく」と、ヘルメットを取り、軽く自己紹介をした。

すると彼女も、

「ミルティア・ヴァンガードです、よろしく。」
と、同じようにヘルメットを取り、挨拶がわりに自己紹介をした。

薄い赤みがかった髪に青の瞳、年齢はアレルヤくらいだろうか。

「話し合いはこの奥にある部屋でよろしいでしょうか？」

再び進み始めた彼女が言ってきた。

「構わない、ありがとう」

此方の都合としてはクアンタよりあまり離れたく無かったので、ちよつと良かった。

奥の部屋にはいると、またしばらく待つように言われ、俺は部屋に取り残された。

「クジャノの動きには注意しないとな……」

俺は改めて今回の最も注意すべき事を確認し直すと、近くにあったベンチに腰をおろし、端末にあるミッションプランの確認をして時間を潰した。

しばらくすると突然、横のドアが開いた

入ってきたのは3人の人物、パイロットスーツをきているところからして、さつき機体に乗っていた人物だろう。

先頭の人物がヘルメットを取る、

「はじめまして、ペインチェンジャー所属の、ゼフィアス・ヴァンガードです、よろしく。」

ペインチェンジャー、一体この組織はなんなのだろうか…

ペインチェンジャー（後書き）

前々から考えていた組織名ですが、
ペインチェンジャー、
どうでしょうか？

感想お待ちしてます。

狙われた連合

ペインチエンジャー？

彼らの組織名であろうが、どう言う意味なのだろうか。

「ソレスタルビーイング所属の、刹那・F・セイエイだ、よろしく。」
そんな疑問を抱きつつ俺は挨拶をした。

みたところこのゼフィアスと言う人物はなかなか礼儀正しい人のようだが…

そういえば、さっきの女性、確かミルティアと言う人物も、名前はヴァンガードだったはずだが兄弟なのだろうか…

ここにすればある程度の事がわかると思っていたが…
逆にわからない事が増えるとは予想外だな。

俺が彼と挨拶を交わし終えたのを見たのか、その後ろにいた二人の人物も同じようにヘルメットを取り自己紹介をして来た。

「ペインチェンジャー所属の、タークス・ヴァンガードだ。」
「同じく、ペインチェンジャー所属のギャレス・ヴァンガードです。
よろしく願いします…」

「ああ、よろしく。」

一人目のタークスと言う人物は少し気が荒らそうで昔出会ったミハエル・トリニティを連想させる様だな。

二人目のギャレスと言う人物は、逆に少し大人しそうで、あまり目立つのは苦手の様だな。

しかし、全員が同じな前なところを見ると、何かわけがありそうだな…

俺は改めて挨拶をして、今回の話し合いの事について話し出した。

だいたいの事を俺が話し終えたとしばらく彼らは黙って考えていた。

「あなたたちの事は概ね分かりました。それで、一つ質問していいでしょうか。」

顔を上げたギャレスが口を開いた。

「何故、以前我々がオービタルリングで連合と戦っていた時にあなたたちは我々と対立したのですか？」

俺はその質問に迷いなく答える。

「俺たちはさっき言った様に戦いを止めようとしている、だから戦いをしていて所に介入をした。それだけだ。」

俺の返答を受けまた、考え込むギャレス。

「そうですか、それで、争いの火種となりかねない今回のアフリカタワー接近とリサイヤの返還を求めると。そう言う事ですね？」

話をまとめる様にゼフィアスが口を開いた。

「そう言う事だ。」

「イイですよ、でも、いくつか条件があります。」

あっさりとゼフィアスが答えた。

意外な返答が帰ってきて内心驚いたが、表情には出さないようにした。

「それで、その条件とはなんだ。」

俺が彼に聞き返す。

彼は少し目を細めると答えた。

「ヴェーダ内に存在しない、E Aレイと言う人物のデータと、これから我々が行うミッションに介入しない事…以上です。」

E Aレイ、確かリジエネが持っていたリボンスの元の人物だったか、何故彼らはそんな情報を求めているんだ。

「そのミッションの内容はなんだ。」

俺は少し強めに言うつとホルダーにあったメモリーケースを机においた。

「簡単にいえば、連合軍の解体、言い換えれば、現連合軍の完全破壊、まあ、戦争と言うべきでしょうかね。」

「何だと？」

俺は思わず声を上げた。

現連合軍と戦争だと。

そんな事をすれば世界の治安は乱れより多くの争いをよぶ。アロウズのような部隊もまた生まれかねない。

「それはできない、それを許せばまた世界は混乱する、お前たちはそれがわかっているのか」

俺は気持ちを落ち着けると彼らに言った。何としてもそれはやめさせなければならぬ。

「そうですか、残念ですが交渉決裂ですね………………。ですが、このまま返すわけにはいきませんね、やがて敵となるならここで叩く方が得策です。」

そう言うや否や、後ろにいたギャレスとタークスが銃をこちらにむけてきた。

「くっ、仕方がない。」

俺は机においたメモリーケースを叩いた。

途端に広がる煙幕。

俺はそれに紛れて入り口を蹴り壊して逃げ出した。

「いつの間にこんな物を…タークス、ギャレス、ここは頼む、私はミルティアとMSデッキに向かう。」？

煙幕が広がる中でゼフィアスが声をかけた。

「分かってんよ！ギャレス追うぞっ」

ゼフィアスの指示を聞いたタークスが叫び部屋を出た、その後ろに続く様にギャレスも走って行く。

俺は通路を駆け抜け、クアンタに向かう。

その後ろには二人の人物、

狙われた連合（後書き）

なかなか急展開になりました。

ちなみにE A レイはちゃんとOOに出ています。

脱出劇 01

通路をを駆け抜ける、

後ろには二人の追っ手が発砲を繰り返しながら迫ってくる。

カァン、

肩の部分のプレートに銃弾が当たった。

幸いそこは丈夫なので怪我は無かったが、鈍い痛みが肩に走る。

「チツ、流石に二人はきついか、」

軽く舌打ちをすると、俺は腰のケースから粘着式の爆弾を取り出した。

「できれば怪我をさせたく無かったが…」

俺はそれを走りながら通路にセットすると、さっきよりも走るスピ

ードを上げた。

ドガアアン！

耳をつんざく様な音と共に、

ちようどいいタイミングで爆弾が爆発する。

振り返ってみると、広がる爆煙の中にうごく物はない。

流石に死にはしない爆発だが、しばらくは動けないだろう。

俺は前を向くと目の前にあつた扉を開け、コンテナに出た。

クアンタに乘ろうと駆け出そうとしたその時、

物陰に潜む人の気配に気づいた。

俺はすぐさま拳銃をそちらに向けてとそちらに向けて喋り出した。

「クジャノ、出て来い。」

間もなくして、物陰から1人のパイロットスーツをきた人物が現れ

た。

「ははっ、ばれちゃったか。まあイヤ、やあ、ソランくん」

それと同時にクジャノが降ろしていた右手を上げる

向けられた拳銃、

お互いが引き金に力を込め…そして…

パン

「!?!?」

乾いた独特の音がコンテナに響いた、

「ぐあっ、なっ、何！」

途端に脚に走る激痛、見ると右脚が銃弾に撃ち抜かれていた。

この激痛、ただの銃弾ではなさそうだ

それより何故先に俺が銃を向けていたのに奴より引き金を引くのが遅れたんだ？

「何をしたか知らないが、そこをどけ？クジャノ」

ふと頭に浮かんだ疑問を退け脚に走る痛み能耐えながら、俺はそこに向けて声を上げる。

「ダメじゃないかソランくん、僕と話もせず帰るところかまた銃口を向けてくるなんて、久し振りに友達と会えたんだから楽しく話そうよ。」

俺の言った事はまるで聞かなかった様に調子に乗った声でどこか相手を見下す様にクジャノが答えた。

ヘルメットで顔が見えなくてももわかる奴の喋り方。

誰にでも馴れ馴れしく接して乱し尽くしてしまう様な嫌な喋り方だ。

「貴様に語る事など無いっ、今すぐ俺の前から消え失せろ！」

俺は彼に再び声を上げる。

「ひどいなあ、せつかくの機会なのに……しょうがないから、足
もう一本の方も撃ち抜こうかな。」

そう言って再び降ろした銃口を俺に向け直す。

俺の脳量子波が必死に戦うなと叫ぶ。
だが、右脚がうまく動かない。

俺は覚悟を決めて銃の引き金に力を込める。

しかし、

「ぐあっ?」

さっき自分のかけてきた通路から銃声が響き、手に持っていた拳銃
を撃ち落とされた。

「あゝあ、本当あぶネエ事してくれんな。ただの人間なら大怪我だ
って……」

「本当に、危なかった……」

煙の中から現れる二人の人物。

タークスとギャレスだった

「貴様たち、何故あの爆発を受けて動ける？」

そこに向けて右手を抑えながら声を上げる

「まあ、色々あって、特別製の身体だからな。」

タークスが答えた。

特別製の身体だと、彼らは一体何者なんだ、

だが、そんな事を考えている余裕は無かった。

三人が俺に向けて銃を向ける

この数ではイノバイターの力でも回避ができない、ましてや今は脚を怪我している。

ここまでか、と諦める気持ちが頭を横切ったその時だった

「刹那！」

コンテナの一部が爆音と共に壊れた。

そして発砲音が煙の中から響き三人の持っていた銃を全て撃ち落した。

「あらら、お客さんは1人じゃ無かったんだね」

クジャノが煙の中に視線を向ける。

巻き上がる煙と共に現れたのは……………

度重なる端末からの発砲音と爆音から刹那の危機を感じ、救出に向かったロックオンだった。

脱出劇01（後書き）

あわわ、なんか素晴らしく超人のオンパレードになってしまいました
た（^- - ^）ノ

引き続き、キャラの名前は募集しますので

気が向いたらどんどんリクエスト下さい。お待ちしております。

脱出劇02

ロックオンに助けられ、クアンタのコクピットに乗り込んだ俺は急いでシステムを起動させると設置してある救急BOXから痛み止めとスプレーを取り出した。

痛み止めを脚に打ち込む。

「。うっ、ぐ…」

激しい痛みが脚に走る。

とてもじゃないが一般人なら脚を撃たれた時点で失神していただろう、そこに針を打ち込むのだから相当な物だ。

「一体、何を打ち込んだんだやつは」

痛み止めが効いてきたのか、少しずつ脚の痛みがうすれて動かしやすくなった。

これならトレミーに戻るまでの間は大丈夫だろう。

「刹那、大丈夫なのか。」

横に機体を停めていたロックオンが通信で聞いてきた。

「ああ、痛み止めのおかげでなんとかなっている、だが、できれば

早く治療を受けた方が良さそうだ。」

「そうか、分かった、そんなら早くここを抜け出すぞ、外でティエリアたちが待っている」

そう言うと、ロックオンはサバーニヤのライフルで入り口を広げると外に出た。

後を追う様にクアンタが外に出る。

外には、ラファエル、ハルト、トリズアの三機がすでに脱出ルートを確認をしていた。

「その様子を見ると、あまりうまくはいかなかった様だな。」

ティエリアが通信をいれてきたので答えた。

「そうだな…それより、早くトレミーに戻ろう。追っ手がくるぞ」

「いや、少し遅かったみたいだな……くるぞっ?」

ロックオンが皆に声をかけると同時に白銀の粒子砲が飛んでくる。

すかさず散開する五機の機体。

その中央を虚しくビームが通り過ぎて行く。

「やはりこれでは当たらないな…」

ビームが外れたのを確認したゼフィアスはそう呟くと肩についていた追加パーツの大型ビーム方を外した。

「ねえ、ゼフィアス、あいつらバラバラに散ったよ。俺はどれ相手にすんの？」

ゼフィアスの機体の横にしていた機体のパイロットが楽しそうに彼に声をかける。

「どうやらまだ子供のようなだ。」

「アーシャン、相手はガンダムだ、今までのようにふざけては勝てないぞ。」

「分かってるよ、それで、相手は？」

「あの機体だ、恐らく相手もフアングを使えるタイプだ。」

「えっ、あのイノベーターの奴？やった！」

「違う、その右の緑の機体の事だ。」

それを聞いたアーシャンと呼ばれる少年は少しつまらなさそうに「リョーカイ」とだけ言って先行していった。

「だいが君の言う事は聞くようになりましたね。アーシャンのやつ。俺の言う事はちっとも聞きませんよ。」

その後ろについていたもう一機の機体から声が掛かった。

「ベルディオ、言っておくがアレでもまだ大人しい方だ、連合とやる時は、もっとひどかった。」

ゼフィアスが苦労を思い出すように語る。

「さて、問題児を1人にはしておけないな、我々も行くのか。」

そう言うと二機はそれぞれのガンダムの元へ向かって行った。

「あの機体、刹那が戦ったとか言ってたファングのタイプか、いや、色が違うな。」

散開したサバーニヤに対して猛スピードで接近する機体を見てロックオンは呟いた。

「ハロ！ライフルビット展開、間違っても相手は殺すなよ。」

「マカサレテ！マカサレテ！」

ハロの声がコクピットに響くとサバーニヤの周りにライフルビットが広がっていく。

「おお、何かすごいな。じゃあこっちも…フアング？」

ライフルビットの展開を見ていたアーシャンは自身も機体の周りにフアングを展開させた。

「殺しはしないが、手加減なしでいくぜ。」

「よーし、いっくぞおー！」

二つの機体がぶつかった。

脱出劇02（後書き）

何か、戦いを楽しませるキャラで

戦いを悪と思って無い〓子供になってしまいました。

リクエストと感想、お待ちしております。

脱出劇03 (前書き)

何で言うか、場面が続くせいで
タイトルが……… (^^;;;

脱出劇03

激しくぶつかる二機、

同時に周りのライフルビットとファンゲもぶつかる。

サバーニヤの蹴りを避けるとそのままサーベルを引き抜き斬りかかる。

サバーニヤの左腕にサーベルがかすり切られる。

「まだだっ！」

それと同時にミサイルが放たれて白銀の機体に向かう。

「くそっ、間に合わない！」

GNフィールドのようなものでほとんど防がれたが、いくつかが相手の機体の左脚に直撃する。

互いに距離を置くがサバーニヤにすぐさまファンゲが降りかかってきた。

「くそつたれ、なんつーファングの数だよ!」

飛び交うファングを撃ちながら相手の機体の猛攻を避けるロックオンが声を上げる。

ケルデイムの時よりかなり追加されたライフルビットであったが、白銀の機体のファングはそれをも凌ぐ数だった。

だが、超精密射撃を行えるロックオンは苦戦しながらも、次第にファングの数を減らしていく。

左右に迫るファングをそれぞれ撃ち抜くと、反転して迫ってくる白銀の機体に蹴りをいれる。

「なかなかやるんだな、あの機体のパイロット、仕方ないやアレ使っちゃお。」

後方に蹴り飛ばされた機体の姿勢を立て直すと、アーシャンは手元の画面をタッチした。

まわりにあったファングが全て元に戻り、機体が、白銀の粒子に包まれる。

そして、背中の子放出箇所から出た大量の子が次第に大きな翼を形作っていく。

「なつ、何だと！」

ファングが消えたのを見たロックオンが白銀の機体を見ると、そこには白銀の羽を持つ機体となったMSがあつた。

「例のトランザムみたいなのって奴か…」

ロックオンはそう呟く同時にライフルビットを八口に回収させ一気に距離をとり、ライフルを構える。

「悪いがこれくらい離れないと危ないんでね、八口、回避は任せたぞ？」

「面白いな、俺とのゲームでこんな風に戦う人始めてだよ。ワクワクしてきたよ。」

ロックオンが逃げ出したかと思つたアーシャンはその意外な行動をみて喜んでいた。

「いつくぞー、ファング！」

彼の声と共に大量のファンクがサバーニヤに向かう。

「狙い撃つぜ！」

サバーニヤのライフルから連続でビームが放たれる。

次々とファンクに直撃するビーム。

次第に向かってくるファンクの数減り、ついに最後のファンクを撃ち落した。

「やっぱりすごいな、よし、それじゃあこれはどうだ？」

さっきよりも数は少ないが動きの速いファンクが再びサバーニヤに向かう。

「コウノウドリユウシカクニン！コウノウドリユウシカクニン！」

迫るファンクを狙い撃とうとしたロックオンは青ハロの声で手を止めた。

「こっちのビームじゃ効きそうにねーな。仕方ねえ、ハロ！トランザムだ？」

ロックオンの声でハロがトランザムを起動させる、サバーニヤが赤く輝いていく。

「あれがトランザムか、かつこイイな。」

トランザムをみたアーシャンはコクピットのなかでその機体の変化に声を漏らしていた。

「ハロ、ライフルビット再展開、殲滅するぞ！」

「リョーカイ、リョーカイ」

二つのハロが答えるとライフルビットから大量のビームが放たれ、飛んでくるファングを撃ち落していく。

「うわっ、トランザムつよっ！」

ファングが次々に破壊されるのを見てアーシャンは焦った。

その間にもサバーニヤは精密射撃で高速で動くファングを撃ち落していく。

「こいつで終わりだ、ハロツ？フルバーストだ。」

そう言うや否や、周りを飛ぶライフルビットがひし形を作った。

ひし形を作り終えたのを見たロックオンが引き金を引く。

放たれるいくつもの極太のビーム、

迫ってくる残りのファンゲが全て光に包まれる。

そしてビームはそのままアーシヤンの機体に向かっていく。

「流石にヤバイかも…、ゼフィアスごめんなさい、約束破るよ。」

迫ってくるビームを前にアーシヤンはそう言うと、パネル操作した。

それと同時に、白銀の粒子が機体の右腕に圧勝されていき、右腕に少し小さめの翼が生まれた。

「いつけえええ？」

そして、アーシャンはそう声を上げながら右腕を迫り来るビームに向けて振り、大量の粒子のカッターを飛ばした。

カッターは迫るビームを全て切り刻んだ。

拡散して消えていくビーム…

それと同時に自身を包み込んでいた白銀の羽も消えていく。

「ビ、ビームが切られた、何をしゃがったんだあいつ…」

それを見ていたロックオンは、コクピットであまりの出来事に驚いていた。

トランザムでのフルバーストを掻き消されたのだ。

粒子残量が減り、赤く輝いていた機体は元の色にもどっていく。

「ちえつ、これ使っちゃったから、もうあんまり遊べないや。つま
んないし、かーえろ。」

一方、白銀の羽が消えてしまったアーシャンはつまらなそうにつぶ
やき、機体の向きを変えてコロニーへ戻って行った。

ロックオンは驚きのあまり、その場を動けないでいた。

「何なんだよ、あいつら……」

ロックオンの声が虚しく宇宙に響いた。

脱出劇03（後書き）

今回はロックオンの戦闘編でした。「何で俺が出てねえんだよ。いや、タークスはだってコンテナじゃん。」

「何でコンテナに俺の機体がねえんだよ！」

…………… スンマソン（； エ ）

さてさて、次は誰の戦闘にしようかな。「いやもう原稿できてるだろ」

感想お待ちしてます。

脱出劇04（前書き）

更新が二日もなしで申し訳ありませんでした。

作者の学力が破滅的なためにテストの間だけ更新をストップして
ました。

これからはまた毎日かきますのでどうかこれからもよろしく願
います。

本当にお待たせしました、

脱出劇04

ロックオンとアーシャンが戦闘中の同時刻、アレルヤとマリーの駆るハルートの他の白銀の機体と戦っていた。

「くっ、マリー、GNミサイルの残量は？」

アレルヤは迫るビームの嵐を避けながら前に座るマリーに聞いた。

「あと、50、このままじゃ弾幕が持たない！」

残量を確認したマリーが答える。

「くそっ、回避が？」

あり得ない速度で次々にビームが降りかかるなか、アレルヤはミサイルと各部に供給される粒子の残量を見る。

ハルートの使用する粒子量に太陽炉の粒子発生量が離され始めていた。

新型ガンダムの弱点の一つとして、その大量に消費する粒子量があげられる。

トランザムのような大量の消費では無いものの、第三世代のガンダムやその他、国連軍のMSの消費する粒子量と比べると、はるかに高い数値を示す。

その分、以前では考えられなかった火力や機動性を手に入れる事が

できたのだが、反面、その消費量に太陽炉の限界が迫ってしまったのだった。

《このまま負ける気か？アレルヤ、俺もませろや？》

ビームがハルトに直撃し、コクピットに衝撃が走った時、アレルヤの脳に声が響いた。

「ハレルヤかい、僕は負ける気なんてないよ！」

《にしては、ずいぶんひでえ戦いだな？》

アレルヤの返答にハレルヤが非難をする。

ハレルヤの意識が以前一時的に途絶えてしまっただけからというもの、アレルヤはでは以前より、脳量子波がうまく使えなくなってしまった。

アレルヤの操縦センスは上がっているものの、実戦ではハレルヤの方が圧倒的な強さを持っていたのだった。

その事を分かっていたアレルヤは、そう言つと目をつむった。

「そうだね、僕の手だけじゃまだまだみたいだから、力を貸してくれ！」

アレルヤの声が変わる。

「おもしれえじゃねえかよ、アレルヤ。いくぜ、ピーリス！」

「分かっている！」

それに驚きもせず、マリーはピーリスの人格を呼び出した。

ハルルトが迫るビームを次々と回避し、白銀の機体に迫る。

「動きが変わった、この反射速度は……」

さっきまで攻め続けていたベルディオは明らかに動きの変わったハルルトを見て手元のパネルを操作した。

「あまり本気は出したく無かったんだが、まあ、良しとしよう。」

白銀の粒子が機体を包み背中に白銀の翼が出てくる。

「ピーリス、あれがくるぞ。」

その変化を見ていたハレルヤが、前に座るピーリスに声をかける。

「さて、シヨアの始まりだ！」

ベルディオはそう言うのとレバーのボタンを押して新たなパネルを目前に出した。

そこに映るのはただの宇宙。

そこに次々とロックされた照準が表示されていく。

10…20…40…100完了、

考えられないスピードで表示が全て終わる。

ただの人間ではこれほどの情報処理はできないだろう。

だが、彼にはそれができた、しかし、それについて今は言及しない。

「ハンドレットスプレー、発射。」

コクピットのベルディオがそう呟きトリガーを弾いた。

放たれる大量のビームと小さなカプセル。

カプセルはビームより早くロックされた場所に着き停止する。

そこに間髪いれずにビームが通りカプセルを砕いた。

「なっ、なんだこいつぁ！」

コクピットのハレルヤが声をあげた。

なんと、ビームが辺りに飛び交い他のビームとぶつかってはまた分裂したビームが周りに飛び交う。

「まずい、ハレルヤ？」

いち早く危険を察知したピースが叫ぶ。

しかし時はすでに遅かった。

飛び交うビームは全てハルルトに向かってくる。360度逃げ場は無かった。

迫るビーム、

「くそっ？間にあわねえ」

白銀の光がハルルトを包み込んだ。

脱出劇04（後書き）

ああ、僕がバカじゃなければこんな事に…

ほんとに待っていてくれた方々すみませんでした。
これからはこんな事にならないよう精進致します。

脱出劇05

白銀の翼がに包まれたハルート

そして続くように爆発が起きた。

「終わったな、やはりこれの敵では無かったか。」

全面開放をして放った一撃、それが命中したのを見たベルディオはそのまま機体をコロニーへ向けた。

あれを食らってはガンダムもひとたまりも無いであろう。

粒子ミサイルの爆発によりビームを拡散させそれが他のビームとぶつかって全方位から大量のビームを当てるものだ。当然高性能コンピュータに加えはるかに人間を凌駕した情報処理能力が必要となるが、彼はそれを見事に達成していた。普通ならできない、だが彼にはできる、いや、正確には彼らならだろう。

彼は完全に勝利を確信した。

だからか、ある一つの異変に気付かなかったのだった。

ハルードや、その他ガンダムタイプには太陽炉が搭載されている。そして太陽路が破壊されれば粒子の放出は止まり、その空域での通信妨害は消えるはずなのだ。

当然、勝利を確信していない状態なら、彼は気付いただろう。

だが、確実な勝利をもたらす筈の技を使った事によりその当然な事は当然ではなくなっていたのだった。

放たれたビーム、

「なっ、何？ばっ、馬鹿なっ？」

あり得ないともいうような声でベルディオは声をあげた。

迫るビーム、これは、

直撃する？

そう感じた、いや、その圧倒的な情報処理能力によりそれを推測した方が正しいが、ベルディオはある力を開放した。

彼の目が怪しく光った。

間に合わないっ！

全方位から大量のビームが迫った瞬間、そう思ったピーリスはとっさに残りのミサイルを全てそのまま宙に出したのだった。

そう、発射ではなく、ただ、出したのだった。

「はっ、やるじゃねえか。」

そして、ほぼ0とも言える時間でピーリスのやろうとしたことを理解したハレルヤはすぐさまトランザムを起動させた。

ビームが直撃して爆散するミサイル、当然ハルートにもあたるはず

だった、しかし、ハルート本体には当たらなかったのだった。

当たったのはGNフィールド、そして爆発の勢いと、トランザムによる加速により、一瞬にして完全なビームの包囲から抜け出したのだった。

「よく考えたぜ、ピーリス。」

突然の賞賛に、前に座るピーリスは驚いていた。

あの、ハレルヤが他人を褒めたのだ、見下す事なく、ただ純粹に…

「ハルートのマニュアルをよく見ていたからだ」

だが、当然そんな動揺を表に出す事なくピーリスはハレルヤに返した。

「まあ、イイか。こっからは俺らの時間だぜこの三流の甘ちゃんか？」

コクピットでハレルヤが叫ぶ。

そして相手に対して完全な直撃コースのビームを放った。

ベルディオの目が怪しく光っている。

そして、迫るビームに対して彼は一瞬にして無数の計算を繰り返していた。

彼らペインチェンジャーには一人一人に特殊な能力があった。

それがどういふ経緯で手に入ったかはまだ語らないとして、とにかくベルディオの様に人を超えた力を持っているのだった。

「これならよければ…」

ベルディオはそう呟くとレバーを倒して、加速し見事に直撃するはずのビームをよけた。

「なっ、あの野郎、何しやがった」

ハレルヤは直撃コースのビームを見事によけられた事に声をあげた。

「なら、これでっ!」

ピーリスがライフルを乱射した。全て直撃コースである。

「これ以上は時間の無駄だな」

お互いが予想を上回る戦いをしているのに気づいたベルディオはこのまま戦闘を続ける事はリスクが大きすぎると考え、スモークを放つとそのまま迫るビームをかすめる様によけコロニーに戻って行った。

「ガンダムか、面白いな。」

去りぎわにそれだけ行つた彼は目を元に戻すと、通信で帰還する事をコロニーのメンバーに伝えた。

「あのパイロットは何者だったんだ。」

ハレルヤと交代したアレルヤはトレミーに戻りながらそ言った。

《いいじゃねえかよ、次会う時は俺らでぶつ潰してやるよ。》

ハレルヤがそれに答える。

「アレルヤ、そろそろトレミーに着くわ、続きは戻ってから話しましょう。」

二人の会話を遮りマリーが言うと、アレルヤは会話を止め、「そうだね」とマリーに笑顔で答え、帰還したのだった。

脱出劇05（後書き）

失礼しました、作者の編集ミスで
半分しか投稿できていませんでした。

感想お待ちしております。

脱出劇06

少し時間は遡り、ハレルヤとベルディオが交戦中の横で、ゼファイアスは単体でクアンタに向かっていた。

通信で聞いたところによると、クジャノが上手くやったので、今なら勝機がある、そう彼から連絡を受けていたクジャノは少し苛立ちを覚えながらも、モニターに映る青い機体を目指している。

何故、今なら勝機がある、そう言われたのだろうか。

自分の力が劣っているからか、

それともやつが強すぎるからなのか、

今のクジャノには理解できない事だった。

「くっ、やはりこのままではきつかったか…」

場所は変わってクアンタのコクピットの中、俺はクジャノに撃たれた足を押さえた。

痛み止めがあるにもかかわらず、なおも動かしにくい右脚。

このまま戦闘に入る事はあまりにも無謀だな。

俺はそう悟っていた、

ただでさえ体に負担がかかってしまう様なクアンタの設計に耐えられてるのは、イノベイ

ターである為なのだが、そのアドバンテージを持ってしても、この傷はかなりの痛手だった。

「大丈夫なのかい？」

共にトレミーに向かっていたりジエネが声をかけてきた。

「大丈夫なわけないな、できれば早く戻りたいとこだな。」

俺は少し冗談混じりに答えた。

「君みたいな人がこの状況で冗談を言うなんて、少し驚いたよ。」

リジエネは苦笑していた。

「だが上手く行きそうに無いな…嫌な来訪の様だ。」

俺はそういうとモニターに映される白銀の機体を睨んだ。

「君は先に行きなよ、僕はあれを相手にしているから。」

それだけ言ったりジエネは反転して相手の機体の方向を見た。

「しかしっ…いや、分かった。頼んだ」

俺は少し躊躇したが、今の現状を理解して仕方なくそのままトレミに向けて加速した。

――――

――――

去っていく閃光。

それを見送ったリジエネは相手に向けて通信を開く。

「少し残念かもしれないけど、僕の相手になってもらうよ。」

相手からは何もかえってこない

しばらくの沈黙のあと、相手は此方にビームサーベルを引き抜いて向けてきた。

「それが開戦の合図として受け取っていいのかな？」

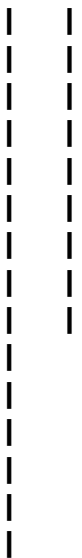
リジエネは少しだけ口元を上げると神経を一気に集中させた。

瞳が金色に輝く。

イノベイド彼もまた、脳量子波が使えるのである。

「手加減なしでいくよ、死んだら君のせいだって事で。」

そう言った彼はすぐさま周囲に全てのファンクとシールドビットを展開した。



白銀の機体に乗っていたゼフィアスはリジエネが展開したファンクとシールドビットの数をを見て驚いていた。

「すごいな、最もファンクが使えるアーシャンでさえ16機が限界なのに、一度に20機以上とは……いや、シールドビットはそれよりも複雑な事を考えるとそれ以上だな。」

だが、

「此方もそれ以上の力がある…」

白銀の機体にワイヤーのような細かい粒子をまとった紐が現われた。

「イグナイトモード…起動。」

その粒子がさらに強くなっていく。

「あれは、何かやばそう…と言うよりもフッキングの無駄遣いさせられそうだな。」

相手の機体の変化を見たりジエネはイノベイドと言う事もあり、冷静に判断ができていた。

「驚いたな、この武装を見て何もしないなどは…」

ゼフィアスもリジエネの反応には少し驚いていた、本来ならこの武装を見たなら牽制にビームなどの攻撃を行ってくるはずだったのだが、彼は攻撃どころか動く事さえしなかったのだ。

「少しは楽しめそうだな。」

コクピットのゼフィアスは不本意ながらもこの戦闘に楽しみを感じ

ていた。

「あんまり疲れるのは嫌なんだけどね。」

お互いの機体がサーベルを構える。

「勝負だ、ソレスタルビーイング。」

「行くよっ。」

激しく二機がぶつかった。

脱出劇06（後書き）

どうも、作者のエクストリーム使いです。

この度はこの作品を読んでいただきありがとうございますm（
ー）

さて、此度は特定のキャラに視点を絞った短編を書こうと思います。
そこで、読者である皆様に以下のキャラから選んでいただき、

もっとも得票数の高かったキャラを短編の主人公としたいと思います。
す。

なお、投票の仕方は感想、又は、コメント欄に各キャラの名前、も
しくは

その横に降った番号を記入してください。

- 1 クジャノ・ミストレネ
- 2 タークス・ヴァンガード
- 3 アーシャン・ヴァンガード
- 4 ゼファイアス・ヴァンガード
- 5 ギャレス・ヴァンガード
- 6 ロックオン・ストラトス

脱出劇07

飛び交う大量のファングが白銀の機体に迫る。

「甘いな、それでは当たらない」

それをゼフィアスは白銀のワイヤーで寄せ付けないでいた。

しかし白銀のワイヤーの直撃を受けているはずのファングには傷一つつかない。

「ふっ、甘いのは何方かな。」

リジエネはそう呟くとシールドビットを一斉に白銀の機体に向けた。

大量のビームが放たれる。

サーベルでファングに斬りかかった白銀の機体はファングを壊す事はできず、その場に止まってしまった。

直撃するビーム。

「ぐっ、やるな…」

激しい衝撃が伝わるコクピットでゼフィアスはトリズアを睨む。

今までのファンクの弱点であったサーベルなどによるビームを出していない部位に対する攻撃を防ぐためトリズアのものには一種のGNフィールドが展開されている様な状態になっている。

このフィールドは通常の機体の武装ではなかなか壊す事のできない強度を誇っており、白銀の機体に対しても十二分の力を発揮しているほどのものである。

故に、ファンクの粒子使用量は多いのだが、トリズアはその欠点を数によって見事にクリアーしていた。

「厄介なものだな、これでは拉致があかない。」

ゼファイアスはコクピットで軽く舌打ちをすると、ビームサーベルをしまい、ビームランチャーに切り替えた。

「あの程度の粒子圧縮率ならこれで弾けるはずだ。」

引き金が引かれ、圧縮率の高いビームが放たれる。

ファンクが二つほど巻き込まれて大破する。

「やるな…、もう使い物にならない。」

即座に壊れたファンクを自爆させ周りのファンクを回収しながら距離を取る。

「なかなか、戦闘慣れしている割には諦めがイイな、それだけ優秀と言っ事が…」

通常ならファンクを相手にして、大型武装の使用はあり得ない事なのだがゼフィアスはその機動性とワイヤーにより、見事にその武装を使用しているのだ。

「このまま続けるのは得策じゃないんだけどなあ……」

リジエネはその距離を保ったまま相手の方を見つめる。
お互い、これいじょうてのうちをみせるわけにはいかない
おそらく自分の手の内を先に見せる事となる先手側がこの戦闘では
圧倒的に不利になるだろう。

リジエネの中に暗示の様に言葉が繰り返される…

動かない、動いたら負けだ、

動かない、動いたら負けだ

動かない、動いたら負けだ

動かない、動いたら負け……

？

そして、

静寂は破られた。

先に動いたのは……

脱出劇07（後書き）

引き続きリクエストお待ちしております。

脱出劇08（前書き）

前回から引き続き、リクエストお待ちしております。
リクエストの締め切り予定は34話までです。

脱出劇08

先に動いたのは…

ゼファイアスだった、

しかし、ほぼ同時にリジエネも動き出している。
タイミングは同じだったと言ってもいいだろう。

引き抜かれたビームライフルから放たれるビーム。

その、放たれるビームをビームサーベルで弾くりジエネ。

お互いの機体が加速していく。

二機の距離はあまり離れていない、一瞬でも気を抜けば命取りになる距離だ。

放たれる続けるビームを全てさばいていく…

その時、急に白銀の機体が減速してトリズアの斜め後ろに回り込んだ。

白銀の機体の腕と脚に隠されていたミサイルポッドが開き、一瞬にして大量のミサイルが投射される。

高速で迫るミサイル…

サーベルではさばききれない数だ…

「このっ、やらせるかあ？」

声を上げながらリジエネは右の操縦桿にある小さなスロットルを最大にする。

トリズアが赤く輝く、

だが、それは一瞬の事で、次の瞬間には右手のみが、今まで以上の輝きを見せる様になっていた。

そしてそのまま全ての粒子が考ビームサーベルへと送られる。

ブオン！

強烈な光と共に、ビームサーベルとは比較にならない大きさの巨大

な剣が生まれ、そのまま全てのミサイルを消し去った。

しかし、剣は止まる事なく白銀の機体に迫っていく。

「?」

とっさに回避をとった白銀の機体だったが、避け切れずに左腕がサベルに消し飛ばされた。

煙をあげながら後ろに下がる白銀の機体…

「ちっ、やはりまだ厄介なものを持っていたか。」

ゼフィアスに表面上の変化は無かった。しかし、内面ではかなり動揺していた。

目の前で三十もあるミサイルを一蹴されたところか、機体にまで損傷を与えられたのだ…

そして、右腕を吹き飛ばした巨大な剣は少しずつ小さくなり数秒立ったあと、完全にきえていった。

チャンスと思ったゼフィアスだったが、何を思ったのか、トリズアに近づくのを止めた。

「ここは無理をすべき場所では無いか…」

それだけ言ったぜファイアスは、逃走用のスモークをまき、未練のかけらも残さずに、機体を反転させてコロニーにもどって行ったのだ。った。

――
――

周りを覆っていたスモークが次第に晴れてきた。

「あゝあ、だいぶ無理しちゃったな。」

白銀の機体が去って行ったのを確認したりジエネは柄だけとなったビームサーベルとそれを握るズタズタになった右手を見ると、そう呟いた。

すでに、このサーベルと右手は使えなくなってしまうている。

フェイクライザーシステム…

機体の各部に貯められているGN粒子をトランザムと同じ様に一気に開放するシステム。

ただ、トランザムと違うのは、その粒子を各部で消費して機動力を上げるのではなく、一つの部位や武装に集めて部分的ではあるが、かなり強力な力を入れるシステムであることだ。

ブレイクピラーでのメメントモリ破壊において使われたダブルオー

のトランザムライザーソードは単機での制圧などに重点を置かれたトリズアにとって、必ず取り入れるべきものだった。

だが、ツインドライブを使用しているダブルオーのみが実現する事ができるトランザムライザーソードをそのままコピーできるはずも無かったのが現状であり、トリズアの設計も他の機体よりはるかに遅れてしまった。

そこで、トランザムの原理を応用して一部のみ膨大な粒子を送り、威力や規模はオリジナルにかなり劣るが擬似的な簡易版トランザムライザーソードを実現させるシステムが考案された。そして、トリズアのようなツインドライブを持たない機体に搭載される様になったものが、この、フェイクライザーシステムである。

しかし、このシステムにはある致命的な欠点があった。

それが今、リジエネがみてため息をついている原因である右手の損傷であった。

通常なら考えられない粒子量を受ける事となるフェイクライザーを使用した部位は、その多すぎる粒子量により自壊してしまうのだ。故に、このシステムはトランザム以上の諸刃の剣であり、こんな場面で使うべきでは無かったのだ。

「はあ、帰ったらまた修理か…気が重いな…」

リジエネはこれからやる事になるであろう事を思い、ため息をついたのだ。

脱出劇08（後書き）

作「フェイクライザーシステムって」

刹「ネーミングセンス無いな…」

作「ひどいつ、これでもかなり迷ったんだよ。アナザートランザムとか、

いろいろ考えたんだよ（泣）」

テイ「それでこれなら重傷だな、万死に値する。」ボカツ！

作「いたっ、ひっ、酷すぎませんか」

テイ「ならもう少しまともなものを考えろ」ボカツ！

作「二度も殴った、親父にもぶたれた事無いのに！」

テイ「つまらないな…」

刹「ああ、つまらない…、このまま消し去ってもイイだろうか？」

作「次からはもっとマトモなネーミングにします。」

テイ「分かればいい、さっ、早く書くんだ。」

作「ひっ、ひいいい。」

実は、作者としては、フェイクライザーシステムってなかなか気に入ってるんですよ。

遺された傷跡（前書き）

引き続きリクエストお待ちしております。

遭された傷跡

トレミーに帰還した俺は今、メディカルルームにいた。

「ぐっ…流石に辛いな、これは。」

脚に撃ち込まれた弾丸を抜いて、その傷を治療してもらっている俺は苦痛に顔を歪める。

メディカルルームに通信をいれて会話をしている、フェルトが心配そうに見つめオロオロしていた。

「大丈夫だフェルト、心配するな。」

俺は少し罪悪感を覚えつつも、そんな彼女に向けて優しく声をかける。

「うっ、うん…」

消えそうな位の弱い声が聞こえた。

あまり長話はできないので、俺は通信を切ると再び苦痛に顔を歪めた。

フェルト、少しは安心したようだな…

だが…

「いいんですか、フェルトさんに本当の事言わなくて？」

治療をしてきているアニユーが少しだけ冷たく言ってきた。

「いや、彼女にはあとから伝える。ただ、今はまだやめた方が良さそうだから…」

俺はひとりごとのように答えた。

フェルトは俺と一緒にあってから、今までとはまた違った弱さと強さを見せるようになった。

強さというのは、俺たちを信じて最後まで自分の現状でできることをやり遂げること。

そして弱さというのは、今の様に他のメンバーが傷付いたり、特に俺に何かあるとかなりメンタル面で弱くなってしまうことだった。

「私たちみたいに、ただ、待つ事しかできない側の人は、本当の事

言ってくれないとすごく不安になるんですよ」

アニューが治療をしながら遠くを見つめるようにつぶやいた。

「待つだけしかできなくて心が苦しくなってしまうんです…」

「ロックオンのことか？」

「ええ、ライルは表では強くても、いつも無理していますよね。」

「まあな、今回も一人でコロニーに乗り込んで俺を助けてくれた。」

「ですよね、ライルにはあとで説教しないといけません。あなたもそれは心に止めておいてくださいね、フェルトさんのためにも…」

思わず口を滑らせてしまった俺の言葉にアニューが反応した。

ロックオンに悪いことをしてしまったな…

「それよりこの弾、いったい何製のものですか？こんなもの、どこの軍も使ってないですよ。」

先ほど抜かれた弾を見ながらアニューが聞いてきた。

トレーの上にはまるで爆ぜたあのような形の金属が置かれていた。

いや、実際に爆ぜたのだ、俺の脚に着弾したと同時に…

「テロ組織KPSA、対人用銃、AL-021タイプ…俺たちが使っていた物だ。」

俺はそう答えるとその塊に目を向けた。

「そんな旧式の物なんですか？これ、対人用なら現在でも使われそうな性能なのに…」

俺の言葉を聞いてアニューはかなり驚いていた、着弾と同時に弾が爆ぜ、相手に普通の銃よりもかなり重い傷を与えるのだ、それは対人用の銃の弾丸としてはかなりの性能だった…。

しかし、

「それはくせが強すぎるんだ、幼い頃に訓練された俺たち以外が扱うには少々問題が多い。」

そうだった、この弾を扱うにはそれ相応の射撃センス、加えて同じ銃でも普通の弾とはまた違った弾のロード、何よりも、その通常の物より遥かにずれやすい弾の軌道を調節できる能力がないと、この弾を当てることなどできない。

そんなものが、過去の俺たちのようなテロ組織以外の軍隊などで使われるはずも無いのだ。

「まあ、それを使えるということは、俺たちの様な道を歩いてきたものだけだ。ある意味、あの時代に遺された傷跡だ。」

俺は少しだけ悲しい過去を思い出し、言葉を続けた。

「このまま俺たちの様な道を歩いてきたもの達が消えてしまっても、この弾を作る技術は消えない。だからせめて、この弾を使う時代が再びくることだけは俺の手で防ぎたいんだ。」

「すこし嫌なことを思い出させてしまいましたね…ごめんなさい。」

それを聞いていたアニューが静かに答えた。

「かまわない、それより、治療は済んだのか？できれば早くフェルトの様子を見に行きたいんだが…」

空気が重くなったので、少しだけ話題を変えて、彼女に話しかける。

「ええ、終わりました。でも、さっきいったことは必ず守って下さいね。」

アニューが作り笑いではあったが笑顔で答えた。

「ああ、了解した。」

俺はそれだけ言って部屋をあとにした。

遭された傷跡（後書き）

作「どうも、エクストリーム使用でございます。本日はご覧くださりありがとうございます。」

リジエ「なんで僕の戦闘が中途半端で刹那の非戦闘の一部分だけがこんなに長いのか」

作「いやそれは、彼が主人公だからであってですね…いや、その、そんなに迫られても困るんですけど…」

リジエ「もういいや、滅びちゃえ。」

作「ぎゃああああ！」ドガンッ！

リジエ「今度からは僕もメインで登場させてもらつよ。」

あの頃の記憶（前書き）

引き続きリクエストお待ちしております。

あの頃の記憶

メデイカルルームを後にして、俺は仕事の残っているフェルトの邪魔をしないために、ブリッジには向かわず、自室に向かっていた。

通路を通り個室の前にたどり着く、IDを使ってロックを解除して無機質なドアを通り部屋の中へ進んでいく。

「俺は…」

そのまま灯りもつけずにベットに寝転んだ。

<君たちが聖戦に参加するには、やらなければならないことがある>

ふと、サーシエスの言葉が頭に浮かぶ。

何故あの男の言葉が…

やはり、過去は背負い続けなければならないんだな…

少しだけ落ち着くと俺は静かにまぶたを閉じた。

<それは…>



2301

クルジス共和国内のとある街、

「やめてっ、ソラン、何故なの、何故お父さんを！ソラン！」

一つの家の中で悲劇は起きていた。

倒れて動かなくなった一人の男性と、それを抱いて泣きながら叫ぶ一人の女性。

そして、その女性に銃口を向ける1人の幼い子供。

その瞳には何もうつっていない。

ただ目の前にあるうるさい何かを殺すために、ただ、神の力になるための支障となる物をなくすために、

その幼い子供は銃を握っていた。

「ソラン！やめてっ、おねがいつ？」

必死で泣き叫ぶ女性、

だが、その幼い子供は顔色一つ変えない。

引き金にはいる力が強まり、カチャリと少しだけ音がした。

「ソくパアン？>」

最後までその名を聞くことなく、引き金が引かれて乾いた音が部屋に響き渡る。

幼い子供はまるで何も無かったことのように体の向きを変えると、そのまま外に歩いていった。

「やめろっ、くパアン？>」

「助けてくパンツ！>」

外を歩いていると近隣の家から様々な声と、それを打ち消す様に銃声が響いている。

そして、同じ様に外に出てくるその幼い子供と同じ位の子供たち。

そして、街の中央にあるテントの元へ集まっていた。
無論、先程の幼い子供も例外ではない。

テントの前にある程度の子供たちが集まると、1人の男が出てきた。

「よくやった、これで君たちは聖戦に参加できる。」

その男は集まってきた子供たちにそう声をかけると、再びテントへもどっていった。

そこから幼い子供達の日々は変わっていった。

積み重ねられる様々な訓練。

銃、短剣などによる対人戦闘。

あらゆる状況に対応する術。

幼い子供達には辛い物であったが、彼らは誰1人として倒れたり放り出したりすることは無かった。

神の力になる、

国を守り抜く、

自分はそのために命を使い切る、

そんな単純だがとても深い意思により彼らは動いていたのだ。

だが、そんななかでも幼い彼らは、少なからずお互いが同じ物を望み、同じ物を目指している物同士、友情と言えるかはわからないが、仲間という意識は出来上がっていた。

「ソラン」

少し明るい声があの子の幼い子供、ソラン、と呼ばれる子呼んだ。

「クジャノ、どうした？」

さっきまで厳しい顔をしていたソランが少しだけ顔を緩めると、後ろから走ってくる少年に返事をした。

あまり話を他人としないソランにとって、声をかけてきたクジャノと呼ばれる子は数少ない信頼をおける仲であった。

「向こうで今度の聖戦の人員が発表されるってさ。」

少し走ってきたのか息が荒れていたクジャノだが、ソランはそれをそこまで気に求めず、その伝えられたことに反応していた。

「人員発表？この時期に？」

少し疑問系になりながらもソランは答える。

「うん、なんでもうちじゃないチームがアイルランドで動いたから、ここでも行動を起こすんだって。僕らの名前はないけど、あの子の名前がのってたよ、あの赤いスカーフしている子、確かソランと仲良かったでしょ、名前何て言ったかなあ？」

クジャノが伝えた真実にソランの顔が青ざめた。

「ごめん、クジャノ、少しここで待ってて。すぐ戻るから。」

「えっ、ソラン？」

クジャノの返事を待たずソランは駆け出していた。

――
――

ソランが辿り着いたのはある廃墟の中。

そこには既に数人の子供達が集まっていた。

ここは聖戦に出る前に立ち寄る様あの男に指示されていた場所。

ソランはあたりを見渡し目当ての人物を探す。

赤いスカーフをつけた少年、

年は少しだけソランよりうえのはずだ…

いたっ

急いで走りよると、それに気づいた向こうが先に声をかけてきた。

「よお、ソラン、お前今回は不参加だろ？何でいるんだ？」

何気ない挨拶とともに声が聞こえた、

「ねえ、何で。」

ソランが泣きそうな声で問いかける。

「何がだよ、どうしたの？ソラン」

少年が困った様に答えた。

「本当に行っちゃうのか？」

「当たり前だろ、俺は神の代わりに務めを果たしに行くんだ。」

少しだけ口調が強くなる。

「死んじゃうよー！」

ソランが声をあげた。

幸い周りには聞こえていない。

「お前、死ぬのが怖いのか？それは神を冒瀆する行為だぞ。」

少年がソランの胸ぐらを掴むと強くいった。

だがそれは一瞬の事で、すぐに手を離すと、少年は笑顔になった。

「神が俺たちにはついてる、必ず勝てるから。そっだ、帰ってこれたらこれやるよ、お前欲しがってただらう？」

そう言つて首に巻いている赤いスカーフを指差すと、最後に一言だけ、

「じゃあな、ソラン。」

それだけ呟いて出ていった。

それから3日がたち、戦いが終わる予定の日、俺は心配になってあの男にきくと、

夜になったら彼らは帰ってくるといった。

俺はクジャノと一日中待った、

神のために戦いにいった彼らが心配でしよつがなかった。

けど、誰一人として約束した廃墟にはもどつて来なかった。

あの頃の記憶（後書き）

作「結局、あの男の子の名前分かん無いんですよね。」

リジエ「なぜだ、なぜ僕は出てないんだ。」

テイ「ふっ、それは君がそうやって愚かなところを見せているからだよ。」

リジエ「テイ、テイエリア？どういう意味だ！」

テイ「さて、なぜかな。」

刹「テイエリア、流用しすぎだ。」

アレ「そうだよ、これ以上はよしたほうが「黙っている」…僕にも喋らせて下さい」

作「まあ、みんな落ち着いて、どう、お菓子でもいる？」

ブチッ

リジエ「ヤッパリ、消えてしまえ！」ドガァン

作「うわあ、ヤバいいいイイやあああああ！」

刹「仕方がないか、後始末は頼んだぞアレルヤ。」

リジエ「ふんっ、じゃあね。」

テイ「せいぜい頑張るんだな、アレルヤ。」

アレ「ああ、世界の悪意が見える様だよ。」

涙の後に

あの日から二日後、

聖戦に出たメンバーが戦った跡地には、たくさんのライフルが地面に突き刺さっていた。

その銃に一輪の花とそれぞれ持ち主の名前が刻まれた。

もう彼らは帰って来ない、

戦いに勝ったはずなのに、

神がついていたはずなのに、

なぜ、

神はどこにいるんだ、この国を守ってくれるはずじゃ無いのだろうか。

「なあ、どうすればいいんだ？」
不意に声が響く

「どこだ、ここは…」

見渡す限りの闇、
何も見えない

「なあ、どうすればいいんだ？」

真っ暗な心の中で、必死に誰かを求めた。

何で君は帰って来ないんだ。

目の前にある銃は何もいつてくれない。

ただ、かかっている赤いスカーフをたなびかせるだけ。

そっとそれを手に取る。

決して柔らかく気持ちいい状態ではないその布には、昔一度だけ触らしてもらった時の温もりはなかった。

頬に何かがつたった。

冷たい、何だろうかこれは。

雨だろうか、降りしきる雨の中に俺はいるのだろうか。

そっだ、これは雨だ、これは雨なんだ。

なのに、

何で自分の頬にしか降らないんだろう。

スカーフを銃から取り、そっと抱きしめ、そのまま力なくすわりこんだ。

俺の心

命の温もりはない、ただそこには、赤いスカーフしかない。

今俺にあるコノチカラはなんだ。

神の代わりにあるこの力はなんだ。

頬を伝う雫は、何時までも止まらずに、ただ、乾いた地面を少しだけしめらせていた。

絶望の闇に俺は沈んでいく。

カミ、

カミツテナンダ、

ココロノナカニイルノカ、

オレハソンナノゾンデナイ、

オレガホシイノハコノキモチナンダ、

ナカマヲオモウキモチ、

コノキモチヲナンテイウカオレニハワカラナイ。

どこまでも沈んでいく…

このままもう浮き上がらなくていいだろうか。

もしかすると、自分を失う事でこの気持ちがなんなのかわかるかもしれない。

答えもないまま沈む、

力がないから失った、

だから手に入れた、エクシアを

力があつたのに失った、

だから手に入れた、ダブルオーを

力があつたから失った、

けどもう何もなかった、

それをあざ笑うかの様にもう1人の俺がそこにいる。

金色の瞳をした、

人ではない力を持つ、

それが俺、

もう失う事は嫌だ、

クジャノ、何故お前は、

ダメだ、、だんだん考えるのが怖くなってきた。

人と接するのが嫌になった。

「それは、誰かを愛する気持ちだよ。」

絶望の闇のなか、声が響いた。

とても暖かい声、何時までもこの声を聞いていたい。

暗闇が晴れていく、

そうか、君は、

その先には…

笑顔の………

君がいた。

「刹那、大丈夫？」

誰かの声がする、

ああ、この声は彼女の……

「刹那？」

再び聞こえた声……

うつすらと目を開けた。

視界の先には薄い桃色の髪をした1人の女性。

「フェルト……何故ここに？」

まだ覚醒しない意識のなかで声を出す。

「連絡しても気づかなかったから……きたの。」

「そうか、すまないな……」

「ううん、かまわないよ、迷惑だったかな？」

「いや、ありがとう……」

俺は目の前にある彼女の方に目をやる。

「フェルト、お前が俺の隣にいてくれて嬉しいよ。」

「えっ」

彼女の顔がみるみる赤くなっていく。

「やだ、いや、そんな…。」

「くくっ、…」

少しずつ言葉が詰まっていく彼女を見て俺はつい笑ってしまった。

「刹那？」

「いや、フェルトが少しおかしく見えてしまったただけだ。」

そう言っていると俺はまた笑だした。

俺は良かったよ、ロックオン、いや、ニール。

彼女が、フェルトがこんな俺の横にいてくれる。こんなにも暖かくて笑い合う事ができる。

今はもうあえないけれど、

見ていてくれ、俺たちの作る未来を…

サイドストーリー<クジャノ編>01彼の名前(前書き)

皆さんにご投票いただいたサイドストーリーの
クジャノ編です。

すこしサーシエスのキャラが違います。まだ昔だったという事で
目を瞑っていただけるとありがたいです。

サイドストーリー<クジャノ編>01 彼の名前

ある部屋で1人、暗闇の中に体を漂わせている青年がいた。

青年は服に隠れた首元のペンダントを開き中を覗く、

そこにあるのは三人の人が写った写真。

右にしているのは自分、左は彼、ソランくん、そして二人の後ろにいるのが…

僕のすべてを変えた男…

アリアル・サーシエス

未来のため滅びゆくは自分

それを託されるのは彼

これは誰も変える事のできない宿命である

彼はもう1人じゃない、未来も僕が思っていたよりは助けなくても
イイかもしれない、

だから、せめて最後にこれだけはやってやりたい、

そのために僕はもどってきたんだ。

後、どれくらいだろうか…

自分に残されたこの、命の灯は…

まだ世界が統一されてない頃、

まだわかり合うための力がない頃、

ある島には、1人の子供がいた。

名前なんてなかった、

でも、確かにそこに子供がいた、

生まれた時から、これは、運命だった。

地図にもものらないような、小さな島、

世界がまだ愚かな戦いを続けているなかで、僕は生まれた。

名前はまだ無かった、この島の風流に習い、二年間はこの世に名無しの子として過ごした。

そして三年目の誕生日、僕の両親が名前を付けようと喜んで僕のいる家に、仕事を追えもどってくる時、あの事件が起きた。

ここは地図にもものらないような小さな島だ、

だから、狂ったテロリストが犯行するにはちょうど良かったらしい。

爆発音、誰かの悲鳴、絶望のなか呻く声、瓦礫が崩れる音、響き渡る銃声、舞い上がる黒煙、立ち上がる炎、

ナニ、コレハ？

僕にはまだ理解できない事ばかりだった。

響く轟音と、炎の中で、僕はひたすら両親を探した。

ベッドを抜け出して部屋を出る、玄関の扉は何故か無かった。代わりにあるのは炎の壁とそこに倒れる二人の人物。

ネエ、ドウシタノコレ、オカアサン、オトウサン、ナンデウゴカナイノ？

倒れている二人に近づき揺すったが反応はなかった。感じるのは響き続ける轟音と焼け焦げた空気の匂い。

次第に煙が回って意識が遠のき、目が霞んで見えなくなった…

ここで一度、僕は死んだ

この島の子としては一度死んだんだ。

僕が倒れそうになったその時、後ろから誰かがきた。

少し背が高く、髭を生やした男の人、肩には刺青が入っていてそこに少し大きな銃を担いでいる。

よお、ガキンチヨ、お前ここんとこの子供か？

オジサンダレ、オカアサントオトウサン、ドウシタノ？

ちっ、たくよお、お得意様だからって来てみりゃもう死んでんじゃねえか……仕方ねえ、このガキンチヨ連れて帰って言い訳でもするか。

一緒に来い、ガキンチヨ。

ウンッ

それがあの男との出会いだった。

あの事件から三日後、僕は島を出てある高層ビルに来ていた。
もちろん、あの男も一緒だ。

イイか、大人しくしてろよ、ここんどこ商売がうまくいってねえんだ。

すごく豪華な部屋の前で忠告を受けるとそのまま奥の部屋へ連れられた。

少し広い感じだけど、どこか落ち着いた雰囲気のある静かな部屋。奥には少し痩せた老人が座っていて、その横には強そうなサンングラスをかけた男の人が立っていた。

「ビアッジ、いや、サーシエスよ…これはどういう事じゃ…」

重みのある声がおくから響く。

「見てのとおりだ、奴さん死んじまいやがったよ…悪かったな。」

それに怯まずにサーシエスと呼ばれたあの男が返した。

「そうか……あの二人がお亡くなりになられた、か……。」

少しさびしそうな声が帰って来た、

老人はそのまま続けた、

「その子供はあの二人のご子息かね……名は何というのだ？」

「名なんざあねえよ、あの島の風流らしくてこいつの名前はあの日決まる予定だったんだ。」

「ならば、その子の名はお前が決める、そして育てろ、あの二人を守れなかった罰じゃ。」

「爺さん、いつてる事わかってんのか、俺はガキなんてしらねえ……どう育つかわかんねえんだぞ……」

「構わない、後はその君が何というかだな。」

突然僕に声がかかってきた。

取り合えずどうすればいいんだろ……サーシエスと一緒にいれば困らなそうだからそうしようっかな。

「オジサンと居る。」

僕がそう言つとその老人はこちらを見て少し微笑んでからサーシエスのほうに向き直った。

「決まりじゃな、まあ、頑張りたまえ。」

「っ、めんどくせえ。」

軽い舌打ちをしながらサーシエスが呟くと僕のほうを見てこう言った。

「ガキンチヨ…そうだな、ちと懐かしい感じになるけどよ………お前の名前は、クジャノ、クジャノ・ミストレネだ。」

ほう、

少しだけ老人が驚く声が聞こえたが僕には関係無かった。

クジャノ・ミストレネ、

これが僕の名前、

一度死んだ僕は、もう一度この世界に生まれた、島の子としてではなく、クジャノ・ミストレネとして…

これが、僕の始まりだった。

サイドストーリー<クジャノ編>01彼の名前(後書き)

いかがでしたか？

サイドストーリーは1人につき三話編成の予定です。

次の投票対象キャラは

タークス

ゼファイアス

アーシャン

ギャレス

ベルディオ

ミルティア

です。

キャラクター図鑑(前書き)

キャラクター図鑑です。

キャラクター図鑑

刹那・F・セイエイ

(イノベーター)

基本設定は本編と同じ。

特別に過去編でクジャノとの出会いと、その彼と戦闘した武力介入のミッション経験がある。

また、本編以上にクルジスでの過去をひきずっており、フェルトに支えられている場面もある。

イノベーターである自分と周りとのギャップを克服して、それなりに明るくメンバーと接している。

フェルト・グレイス

(ノーマル)

基本設定は本編と同じ。

刹那の恋人である。

かなりいい仲なのだが、まだまだなれないのか、些細な事でもすぐに動揺してしまう難点がある。

よくミレイナを中心としたメンバーにいたずらなどをされ、それがあまりにもエスカレートすると、気絶してしまう事もある。

ロックオン・ストラトス

(ノーマル)

基本設定は本編と同じ。

アニューが生存している事により若干性格が穏和になっている。

アニュー・リターナー

(イノベイド)

基本設定は本編と同じ。

本編では死亡してしまったが、今作では、奇跡的に生存しており、仲間であったリジエネに救出されたのちに、彼らを支配下におくりボンスズがいなくなるまでその身を隠して過ごしていた。

大戦後はトレミーのメンバーと再会した。

ただ、リジエネが大戦で死んだと思っていたため、彼がトレミーにきた際には理由は違っていたものの、他のメンバー同様に驚いていた。

アレルヤ（ハレルヤ）・ハプティズム

（超兵）

基本設定は本編と同じ。

ただし、ストーリーの展開上、巡礼の旅の期間はほぼないに等しくなっている。

マリー・パーファシー（ソーマ・ピールス）

（超兵）

基本設定は本編と同じ。

ただし、アレルヤ同様、巡礼の旅の期間はほぼないに等しくなっている。

ティエリア・アーデ

（イノベイド）

基本設定は本編と同じ。

失った自身の体を再生してトレミーに再び参入した。

因みに、刹那が使っていた暗号回線はヴェーダが世界に公になってしまったために、今までの回線が使えなくなってしまったメンバーの為にティエリアが作成したものである。

スメラギ・李・ノリエガ

(ノーマル)

基本設定は本編と同じ。

ビリーとの連絡がいつでも取れる様になっており、音信不通ではなくなっている？

リジエネ・レジエッタ

(イノベイド)

基本設定は本編と同じ。

大戦後に自身の意識をヴェーダに秘密裏にバックアップしており、テイエリアが応援を要請した為、再び肉体を作り出して、トレミーに参入した。

彼の乗るトリズアは、イノベイド専用機であるが、リジエネ自身がロールアウト前のもを自分専用に完成させた為、完全な性能で操縦できるのは彼だけである。

ラッセ・アイオン

(ノーマル)

基本設定は本編と同じ。

今作ではなかなか可哀想な立場の人間である。

ミレイナ・ヴァステイ

(ノーマル)

基本設定は本編と同じ。

刹那とフェルトの仲を観察してはからかっている。
たまにエスカレートしてフェルトを気絶させてしまう事もある。

イアン・ヴァステイ

(ノーマル)

基本設定は本編と同じ。

最新鋭機のガンダムたちを整備する凄腕のメカマン。
その腕に衰えはないのだろうか：

沙慈・クロスロード

(ノーマル)

基本設定は本編と同じ。

ルイスと共に生活しており、太陽光発電タワーの整備士である。
刹那とプライベートで連絡が取れる数少ない人物であり、白銀の機
体に襲われて人質とされた時は、いち早くそれを刹那に伝えた。

ルイス・ハレヴィ

(準イノベーター)

基本設定は本編と同じ。

沙慈と共に暮らしている。

クジャノ・ミストレネ

(?)

今作のオリキャラ。

自分の感情を表に出さず、常に明るく振舞っているがそれは見せか
けで、本性である裏の顔を隠し持っている。

ある計画のためにうごいており、その目的のために現在、ペインチ
エンジンに所属している。

彼の名前である、クジャノ・ミストレネは名付け親であるサーシエ
スの過去に関わる人物の名前の様である。

なお、彼には本当の名前がなく三歳の時に両親を無くしており、そ
のため、その時に出会ったサーシエスにより名前を与えられて、以
後彼に付き添っていた。

サーシエスがクルジスを訪れた際に少年兵として志願していた刹那
と友達になったが、Oガンダムの武力介入の後に刹那がソレスタル
ビーイングに入ってから、音信不通になっていた。

ファーストシーズンの時には二度ほど、刹那の敵として対峙しており、激闘の末に機体もろとも消え去ったはずだったが、奇跡的に生き延びていた。

大戦でサーシエスが怪我を負い、いなくなったあとでも独自で行動していて、その際にゼフィアスの勧誘を受けてペインチェンジャーに参入した。

ゼフィアス・ヴァンガード

(?)

今作のオリキャラ。

ペインチェンジャーに所属しているメンバーの1人。落ち着いた雰囲気と目的のためには手段を選ばない性格は、本編に出てきたヨハンを連想させる。

ペインチェンジャーのリーダー的存在で、クジャノと出会い仲間に勧誘したのも彼である。

名前が他のメンバーと同じなのはある事情からで、直接血が繋がっているわけではない。

アーシヤンの世話をしており、すこし前は苦勞していたが、最近ではやっとという事を聞く様になったとのこと。

ただ、彼自身はアーシヤンを戦場に出す事を快く思っておらず、戦う度に敵を倒す事を覚えてしまうアーシヤンを普通の生活の中に返してやりたいと思っており、他のメンバーも同様である。

タークス・ヴァンガード

(?)

今作のオリキャラ。

ペインチェンジャーに所属しているメンバーの1人。気性が荒く口長も強い言い方であり、本編に出てきたミハエルを連想させる。

気性が荒い割りには仲間思いで優しい一面もあり、他人などにもす

かれる様な性格だが、本人曰く、それは自分の強さを後盾にした
いから近づいているだけらしい。

アーシャンとは良い遊び相手になっており、本当の兄弟の様な仲で
ある。

ベルディオ・ヴァンガード

(?)

今作のオリキャラ。

ペインチェンジャーに所属しているメンバーの1人。

知らない人物に対しても温厚に接してあまり争いごとを避けて通る
タイプの若紳士。

ただ、他人に対してはどれだけの敬意を持っているかで話し方がか
なり変わってしまうという一面もあり、本人も気にしている様子。

アーシャンの世話をする事もある様だが、ゼフィアスの様には行か
ず、あまりいう事を聞いてくれなくて困っている。

ミルティア・ヴァンガード

(?)

今作のオリキャラ。

ペインチェンジャーに所属しているメンバーの1人。

大半のメンバーが初めからゼフィアスとともに組織に所属していた
のとは違い、後から参入する形でゼフィアスからスカウトを受けた
1人。

礼儀正しく温厚でなかなかの美女、他人には常に敬語を使うが、戦
闘時には相手に対して冷たいセリフを吐くなどと、冷徹な一面も見
せる。

ギャレス・ヴァンガード

(?)

今作のオリキャラ。

ペインチェンジャーに所属しているメンバーの1人。

口数が少なく、必要最低限の発言しかしないが、その発言は話の確信をつく様なものが多かったりと、なかなかの洞察力の持ち主である。

基本的にはタークスと共に行動しており、搭乗する機体も彼とのツーマンセルを想定したタイプである。

アーシャンとの中はそれなりに良く、アーシャン曰く、物知りでない思議なお兄ちゃん、である。

アーシャン・ヴァンガード

(?)

今作のオリキャラ。

ペインチェンジャーに所属しているメンバーの1人。

他のメンバーよりも潜在能力が高く、戦闘に出ると大量のファンゲを使い敵を翻弄する。

メンバーの中では最も幼く、まだ10歳前後の少年である。

そのため、他のメンバーからは誰よりも愛されており、同時に大切に思われている。

シルビア・ヴァンガード

(?)

今作のオリキャラ。

明るい性格に加えて、相手の心理を読むことに長けている少女。メンバーの中では一番アーシャンに年齢的には近いが、ゼフィアスにスカウトされるまでは一人で生きてきたことから、かなり人間としてできている。

ただ、まだ幼さがあるのか、基本はミルティアを中心として一緒に行動することを好み、一人になるのが嫌いな様である。

アリアル・サーシエス

(ノーマル)

リボンズ曰く、ある意味人間を超えている。

クジャノ、刹那、の二人の運命を大きく変えた人物。

本編でロックオンに殺されたが、今もなお、クジャノと刹那の心の中に大きな存在として残り続ける。

アレハンドロ・コーナー

(ノーマル)

クジャノと連絡をとっていた男。

現在は日本に隠れている。

ある理由からクジャノを仲間に行っている様である。

また、情報の収集にも優れており、世界、ペインチェンジャー、ソレスタルビーイングと、三つの勢力の様子を詳しく知っている。

クロア・ベイト

(ノーマル)

太陽光発電タワーの整備をしていた元軍人のパイロット。
作業中に白銀の機体に襲われて、機体を壊された。

ゴード・フラストレー

(ノーマル)

サーシエスのかつての雇い主で、よくお互いの事を理解しており、サーシエスが信頼していた数少ない人物である。

現在は隠居の身で、専属のボディガードと共に何処かに住んでいる様である。

唯一、サーシエス、クジャノ、刹那、三人の過去を詳しく知っている。

グラハム・エーカー

(ノーマル)

基本設定は本編と同じ。

連邦政府軍に所属する軍人で、軍で唯一、ツインドライブ搭載型機に乗ることができるエースパイロット。

今作ではソルブレイヴズの隊の前身であり、試作機のブレイヴと、プロトタイプの量産機のみで構成された、リターンフラッグスの一員として活躍する。

あるきっかけで、ラッセとはかなり親しい仲になっている。

ビリー・カタギリ

(ノーマル)

基本設定は本編と同じ。

ブレイヴの開発やトランザムの普及、あらゆる製造技術に精通する様になっている。

スメラギと連絡が取れることにより、本人はうわつき気味で、スメラギの誘惑に負けて軍事機密をしゃべってしまふ。

グラハムのみがそれを知っているが、特に摘発するつもりは無い様だ。

刹那やロックオンからの評価は軟弱でシヨボい男らしい。

サイドストーリー<クジャノ編>02罪の意識

僕がサーシエスと共に世界を回る様になってから三年がすぎた。

僕は彼と共に過ごす様になってから様々な事を教えられた。

暗殺術、護身術、スパイとしての知識、感情を隠す方法など、それらすべては裏の世界で生きる為のもの、僕がこれから子供の身一つでも生きて行ける様にする為のものだった。

すでに僕は何人もの暗殺や、潜入行動などを経験して、サーシエスの有能な部下としてかなり裏社会では有名な人物となっていた。

そんな僕にある出会いが訪れた。

本当に小さな中東の一つの国での事だ。

そこに咲いている花はとても綺麗だった。

別に鮮やかなわけでもなく派手な色をしているわけでもないが、とにかく、その姿、存在そのものが綺麗だった。

そんな花を見ていた僕の近くに1人の少年が近づいてきた。

「そんなとこでなにしてるの、君だれ？」

赤い瞳にくせのある髪の色をした少年。

「僕はクジャノ・ミストレネ、世界を回っているんだ。君の名前は？」

異邦人である容姿をした僕はすこし戸惑いながら答えた。

こういう地方に僕みたいな部外者がいるのはあまり良くないのだ…

「ソラン、ソラン・イブラヒム。」

ソランと答えた少年は輝いた目で僕に迫りながら答えた。

どうやら僕が他の地方出身とは思わなかったようだ。

でも、それよりも僕は彼の目に気持ちが向いた。

どこまでも純粹で美しい目、僕のように裏で生きるものには決してもてないもの。

彼は何か不思議な感じがするな…

これがソランとの初めての出会いだった。

ソランと知り合って三日目の日の事、ある決断をしなければならぬ日 came。

僕らはそれなりに仲が良くなり、今はサーシエスに頼まれた情報収集の為に彼に協力してもらっていた。

勿論、情報収集とは知らせずにだったけれど…

「うーん、いろんなところがあるけどねえ、あっ、一度しか行った事ないけど日本って国はすごく楽しいところだったよ。」

僕はかつて行った事のある国々について話していた。

ソランがこの件に協力してくれるに当たって外国の事を話してくれるよう、求めてきたのだ。

僕は一番本職とは関係の薄かった国を答えていた。

日本、あそこは確かに楽しかった。

僕ぐらいの子の為に様々な遊びがたくさんあって、裏の世界に浸っていた僕もすごく楽しむ事ができた場所だ。

「ニッポン？へえー、楽しそう？」

ソランが楽しそうに声を上げた。

「いつか僕も行ける様になるのかなあ……ねえ、僕も行ける様になると思う？」

こちらをすこし見上げながらいつてくる。

「そつだね…そしたらその時は一緒に行こうよ。」

果たせるはずもない約束を僕は口走ってしまった。

なぜなら、ソランを含むココの土地の人々は…

アザディスタンとの紛争で滅びてしまっただろうから…

僕は決心すると口を開いた。

「ソラン、KPSAって知ってる…」

ソランをそんな目に合わせたくない、勿論ソランにつながる友達たちも、

ならこれしか方法はない。

ソランを含むココの土地の子供達だけでも、すこしでも多く生き残って欲しい。

「KPSA、何？それ…」

ソランが聞き返して来た。

すこしだけ時間をおいて僕は話し始めた。

「国際的な子供達に参加できるある組織の事だよ…僕はそれに参加しているんだけど、ソランも参加しないかなあ、って思ったんだ。」

どう？」

僕は喋り切った、

胸が縄で締め付けられそうになるくらい痛い、

ソランを、その友達たちまでを戦いに巻き込んでしまつかもしれない……

ソランは黙り込んでしたを向いていた。

「いきなり決めなくていいからさ、ほら、友達とかに相談するのもありだと思うよ。」

そんな彼に僕はそれだけ言つと再び胸が締め付けられそうになった。

「……する。」

すこしだけの小さな声でソランが呟いた。

「えっ？何て。」

僕は聞き返す。

「僕もそれに参加する。」

ソランが顔を上げてはつきりと言った。

「僕もそれに参加する、友達もみんな誘ってくるよ、そうだなー、クジャノ、ちょっと僕みんなのところいつてくるねー。」

次々と言葉を重ねて行くソランに僕が驚いているのを無視して彼は広場の方へかけて行ってしまった。

「あつ、ちょ、ソラン？」

僕の声は届かなかった。

――
――

その晩、言った通りに友達を誘ってきたソランは僕の住むテントのところに来ていた。

「なんだ、こりゃあ、話に聞いていたよりも多いじゃねえか」

サーシエスがそれをみてすこしばやいた。

僕もかなり驚いている、

僕の予想ではソランの仲のいい友達七人くらいがくるだけと思ってサーシエスに話していた、

けど、ソランが集めて来たのはこの街の子供全員と言ってもおかしくない人数の子供だった。

「まあイイか、これだけいれば話は早いな……」

サーシエスはそう呟いてテントを出て行った。

「よく集まってくれたね、この国の神の戦士たち。」

サーシエスの集団催眠が始まった。

もう止められない、

僕はここにいる全員を戦いの渦の中に巻き込んだ。

もしここにいる子供達が死んだら、すべては僕の責任だ…

ここから僕は壊れ始めた、

自分でもわかるくらいに、

すべてを否定して崩す事を楽しんだ。

再びこの国で戦いも起こした。

そして僕はどこまでも沈んで行った。

サイドストーリー<クジャノ編>03再び

知ってるかい、

この宇宙に散った一人の兵士のこと

そこであつた本当の戦いのこと

今はもうその兵士はいないけど…

ソラン、最後に一つだけ言わせて欲しい

君よ、世界を切り開け

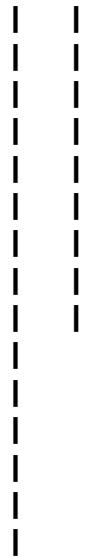
僕と共にいた破壊の世界を忘れて

そう、君の生きる光はこの世界には無いから

僕は一人の道化師、

一人の友を生かすために友を傷つけ、

自分は運命に操られたかのように踊り続けることしかできない…



西暦2306年

それはソレスタルビーイングが動き出すほんの少し前のこと、

ここは日本のある街、
そこにおりた二つの影。

「おい、クジャノ…もう行くぞ。」

何時までもあたりを見回して動かない片方にもう一人が声をかけた。

「うーん、いないなあ…分かりました、サーシエスさん。」

一人は背の高いヒゲを生やした男。
もう一人は男よりすこし背の低い青年。

「たくつ、何が目的で安月給な仕事受けてまでこんな国に来たんだ？」

男が青年に愚痴を漏らす。

クルジスでの出来事の後、ソランと別れた僕は、再びサーシエスと二人で裏の社会を渡り歩いていた。

今回は僕の頼みで、サーシエスに来たあまり利益のない商談を、僕

が無理に譲り受けて日本に来ている。

勿論ある目的があるからなのだけど…

「まあ色々とありましてね、それよりサーシエスさん、すこし商店街に行つて来ててもイイでしょうか。できれば一人で…」

「なに考えてんのか知んねえが、仕事は忘れんなよ。」

すこし冷たい目線になつた青年をみて何かを察したのか、男は声をすこし低くして答えた。

「分かっていますよ。」

それだけ行つた青年は少しだけ早足に人混みの中へ消えて行つた。

ソラン…君があの時僕が教えた話を覚えてくれていたならきつとこの国にいるはず…

青年は人混みの中でそんなことを思いながら進んで行く。

そしてある高層マンションに辿り着いた。

中に入ってロビーの管理人にある部屋の番号を聞く。

ここの管理人はあまり記憶力の良くない人なのでわざわざ変装をする必要もない。

エレベーターに乗り込んで目的の階を押すと、エレベーターは音もなく上昇を始めた。

腰にある拳銃を少しだけ触れて確認し、目的の階についたエレベーターから降りる。

少しだけ深呼吸…

廊下を進んで突き当たりの扉の前に立ち、インターホンを押す。

「はい、どなたですか。」

「シャン・クナイルです。例のものをもらいに来ました。」

スピーカー越しに出た人物に名を名乗る。

勿論、偽名ではあるが…

しばらく待つと部屋のドアが開けられて一人の男が出て来た。

スキンヘッドに赤い虎の刺青をした男、がたいはかなり良く、背はクジャノよりも少し高いくらいだろうか。

「どうもアンガトサン、まあ上がってくれや。」

男がクジャノに声をかけ中にはいるよう促す。

中には少し高級そうな家具が並び落ち着いた雰囲気のある部屋だった。

奥には一人の若い男性。

先程の男とは違い少し細身の体にメガネをかけていて髪はきっちり揃えてある。

「仕事の方はどうだったかね、Mr・シャン、うまくやってくれたのかい？」

「ええ、勿論です、それで例のものは……」

「確かこの地域のマンションに住む人のデータベースだったね。これだよ。」

男が一本のメモリーを渡した。

クジャノがそれを受け取り腰についている小さなケースにしまう。

「ありがとうございます、それではこれで。」

クジャノは振り返ると入り口を目指して歩を進めた。

その時、

クジャノに二つの銃口が向けられた

クジャノの足が止まる

片方は先程の男、もう片方は大男の方、

「これからもここで働いてもらうためにも少し手荒な真似をさせて
いただいたよ、すまないね。」

男がクジャノに言い放つ。

だが、クジャノはそれを気にせずまた歩き出した、

「仕方ない。」

男はそれだけ言って引き金を引いた

カチャリ

しかし銃弾は発射されない

「なっ、何？」

男が驚いてる間にクジャノは二人に向けて引き金を引いていた。

ドサッ

二人の男は見事に眉間の中央を撃ち抜かれて床に倒れた。

「すみませんね、僕はこういう生き物なんですよ。それでは、安らかに眠りくださいねえ。」

それだけ言ったクジャノはドアを開け放ち再び人混みの中へ消えて行った。

手元には情報端末に差し込まれたメモリーに入っていた一人の人物の画像

カマル・マジリフ

名前は違ったがおそらく偽名だろう。

なぜなら彼は、

ソランなのだから、

「ははっ、楽しくなりそうだな、これからは。」

クジャンは嬉しそうに口元を歪めると、そう呟いた、

再び

彼との出会いが僕の運命を動かす。

サイドストーリー<クジャノ編>03再び(後書き)

これで一応クジャノ編は完結です。

クジャノと刹那のファーストシーズンの最終決戦の場面は、本編にて進めて行くよていです。

動き出す齒車

連邦政府軍、軍用特別会議室。

今ここでは、最近になって出現した白銀の機体を所持する謎の武装集団についての会議が開かれていた。

「以上が謎の組織について確認されている情報です。」

一人の士官がスクリーンのスイッチを切り説明を終えたところだった。

先程まで映し出されていたあり得ない映像に言葉も出せないでいる者や冷静になって考えている者、三者三様だ。

圧倒的な性能に反則的な制圧力と謎の情報網、どれも謎のままその脅威だけが彼らの頭を支配していた。

「さて、これからどうしたものか…」

一人の老人がため息混じりにつぶやく。

「国軍の力ではあんなものに対抗はできんよ、それよりもブレイヴ

の方でうまく動けんかね。」

それに反応した中年の男性が答え、金髪の男に話を振った。

この会議に参加する者の中では珍しいまだ若い男だった…

「今だビリー技術顧問からの量産成功の報告はありません。ソルブレイズ隊の編成にはまだ時間がかかるかと思われれます。」

はっきりとした態度で語る金髪の男。

「そうか、ソルブレイズ隊の編成にはまだ時間があるのか……」

質問した男が声を落とす。

現在、旧ユニオンと旧AEU軍事関係者の間で制作されている新型MSブレイヴ、あるパイロットのために専用機として制作された一台のツインドライヴシステムを搭載した高性能の機体を元にドライヴの数を一つに減らし量産が計画されている機体の一つである。

「しかし、試験運転中の自分の機体を含め、プロトタイプ機体だけでの編成なら今すぐにもできます。どうでしょうか。」

金髪の男が言った。

「それはどの位の戦力となるのかね。」

話を聞いていた他の老人が口を挟んだ。

「あくまでプロトタイプの機体だけでの編成ですから、当初の八割弱と言ったところででしょうか。」

「よろしい、すぐに隊を編成して白銀の機体に対抗しうる独立部隊を作りたまえ。」

「はっ？」

金髪の男は敬礼すると会議室を急ぎ足で出て行った。

「彼に任せて大丈夫なのかね。」

「彼なら大丈夫だろう、なんせ彼はガンダムと死闘を繰り広げて来たあの、グラハム・エーカーなのだから。」

許可を出した將軍は答えると言葉を続けた。

「それに今回はあの男だけではなく、ある特別な人物も推薦しておいた。」

「特別な人物……」

少しだけ疑うような視線が投げかけられる。

「不死身の男、パトリック・コーラサワーだよ。」

その名前を聞いた一名の人物は凍りついた……

その男は、かつてイナクトのデモンストレーションでパトリックに支持をしていた人物だった。

そして周りを見渡すと数名苦笑いを浮かべているものもいた。

それらの人々は恐らくパトリックがどんな人物か知っているだろう。

パトリック・コーラサワー、

あの男がまた来るのか。

――

――

会議室を出た男はその足でMSコンテナへ向かっていた。

「カタギリ、私の機体はどうなっている。」

やがて辿り着いたコンテナの淵にある作業路にいた白衣の男に声をかける。

「やあ、グラハム。勿論できてるよ。他の機体はプロトタイプとは

言えもう出撃に向けての整備を始めている。」

ビリーが振り向きながら答えた。

「さすが、話が早くて助かる、友よ。」

グラハムはそれだけ言うとフツと声を漏らして部屋にもどって行った。

場所は変わって別のブロックではソルブレイズのメンバーが話し合っていた。

「隊長の話聞いたか、俺らもプロトタイプで出撃だと。」

一人の黒人の男が横にいた女性に話しかけた。

「ええ、何せ新しく、凄腕のパイロットが配属されてくるこの話もありましたので。」

静かに答える女性。

「酷いですよねえ、僕のもツインドライブがよかったのになあ。」

それを聞きながらぼやく他の男。

「そう言つな、それよりも早く正式発表に合わせられる様に整備手
伝いに行くぞ。」

「へえーい。」

面倒そうな返事と共に全員がコンテナの自分の機体の元へ向かつて
いった。

「役者は揃つたな。」

日本のある高層ビルの最上階にワインを手に一人の男が呟いた。

「クジャノ達と連邦政府軍、そして、ソレスタルビーイング。リボ
ンズはこの世界のゲームを見届けることはできなかったな。果たし
て、器量が小さいのはどちらだったのだろうか。」

口元に怪しく笑みを浮かべて、その男はワインを口に付けた。

「世界は再び砕かれて再生される。今度こそ我らの一族の悲願を…。」

この世界を動かし、人々の求めた世界へ動くための歯車となるもの達は揃った。

そして人類史上最大のゼロサムゲームが始まりの鐘を鳴らした。

世界は謎の勢力のために新たな力を持ち、それをソレスタルビーイングが防ぎ、謎の勢力はその二つを乱す。

そうしてもう一度壊れゆく世界。

イオリアの求めた世界への道を外れ、新たな世界が描かれ様としていた…

動き出す歯車（後書き）

感想お待ちしています。

休暇

ペインチェンジャーとの会談が失敗に終わり、しばらく身を潜めて
いる俺たちトレミーのメンバーは、現在、地球に降り立っていた。

スメラギが独自の情報ルートによって軍関係者のある男から、軍の
最新の情報を手に入れるまでの間、俺たちには休暇が与えられた。

その男というのは一体何者なのだろうか…

やはりあの、ビリー・とか言うひ弱で軟弱そうな男の事なのだろう
か。

あの男はどうも腕はあっても、こつという軍の機密保持をする役には
向いていないと思うが…

何にせよこちらがヴェーダを使っても得れない情報を手に入れる事
ができるのなら問題は無いか…

まあ、それはさておき、俺は今フェルトと共に日本に来ている。

なぜ俺が日本にいるかと言うと、これは話せば長くなるのでやめて
おこう。

兎に角、何だかんだあって休みが取れずに一緒にいる事が少なかっ

た俺とフェルトにとっては、有難い時間だった。

「刹那、あの…」

二人で並んで歩いているとフェルトが突然声をかけてきた。

「どうした…何かあったのか。」

俺はフェルトの方を向いて答える。

「あのさ…あれ。」

少し遠慮気味にフェルトは言つと、商店街の先の方に向けて指を指した。

「何だ。」

指をさした先を見る。

そこには、巨大なモニュメントがそびえ立っていた。

翼を広げた大きな鳥、その周りには飛び散る七色の水の様な彫刻がある。

自由を象徴の様であり優しさなどの感情を見事にあらわした様な見事なモニュメント。

なかなか見てて圧倒されるものだった。

「それで、あれがどうかしたのか？」

俺はフェルトの方に向き直ると声を掛けた。

少しだけ間を開けて彼女が喋り出す。

「あそこによつていいかな……」

「ああ、構わないが。どうしてだ？」

俺は彼女の要求を聞き入れるとそのまま続けて聞いた。

前日まで今日の予定を練りに練っていた彼女にはいきなりの予定変更なんて珍しい。

「そこまでの理由じゃないんだけど、此処、あの決戦の後にそこで戦ってた兵士の一人が作ったものなんだって。確か、デカルト・シヤーマンさんって人だったと思うんだけど……」

デカルト・シヤーマン？

誰なんだろうが、

というより何故か関係の無い人の気がしない……………

気のせいか

「それで、なぜあのモニコメントなんだ？」

俺は彼女に続きを話す様に質問した。

「うん、それでね、その人がある雑誌のコラムで言ってたんだけど、『あれは戦場で自分が見たあるMSを元にして作ったものだ。』って、それって、刹那の事じゃ無いかなって思ってる。」

なるほど、そう言う事が、

俺の機体をモチーフにしたモニコメント、なんだか、無性に気恥ずかしいな。

「なるほどな、それでたまたま見つけたから立ち寄りたいたい…」

「ダメ、かな…」

フェルトが少しかなしそうな目で見つめて来る。

この態度は反則的だな…

まあ別にそんなのがなくても結果は変わらないが…

「いや、構わないさ、それより、行きたいなら今からよって行くか。」

「

俺は優しく彼女に返事をした。

途端にフェルトの顔が満面の笑みに包まれた。

「いいの、ありがとうっ、刹那」

嬉しそうな顔をしながらそういつや否や、どンドン歩いて行くフェルト。

こういふところは昔から変わらないんだな…

そんな事を思いつつ俺も後に続いたのだった。

その頃、スメラギは…

「ビリー、久しぶりね、こうして連絡を取るのはいつぶりかしら？」

機密情報を聞き出すために軟弱男、ビリーに電話を掛けていた。

「やあ、九条くん、元気にしてるかい。」

妙に照れた様子のビリーが画面に出てきた。

「ええ、今日は少し話したい事があってね。」

「そうかい、僕でよければいつでも相談に乗るよ。」

スメラギの軽く甘い言葉にカタギリは見事にハマっていた。

それを見ていたグラハムは、苦笑しつつ呟いた。

「哀れカタギリよ、またもその手にかかるとは…」

しかし、カタギリにその声が届く事はなかった。

休暇（後書き）

感想、リクエスト、共にお待ちしています。

リジェ「このかわいそうな作者のために、キャラクターサイドストーリーの投票の方もできれば宜しくね」

作「おや、久しぶりの登場ですね。リジエネくん。」

リジェ「まあ誰かさんのせいだね（-|-#）」
作「スミマソン……」

それぞれの休暇を…（前書き）

ちよつとした外伝です、

あんまり興味のない方はスルーをお願いします。

それぞれの休暇を…

打たれる滝に身を任せて、一人の男がとある秘境で修行をしていた。

男の名はラッセ・アイオン

ソレスタルビーイングの操舵手である。

なぜ彼がここにいるのかと言うと遡ること数日前、ブリッジでの何気ない会話が発端であった。

「秘密のスポットお？何だそりゃ。」

ペインチェンジャーとの会談が失敗に終わり、休暇が近づいていたいつも通りトレミー。

そんな中、同じ操舵手であるアニユーが突然何やら不思議な秘密ス

ポットについて話したのだ。

「ええ、秘密のスポットです。それがたまたまこの前雑誌を読んでたら、『秘密デートスポット in ジャパン』っていう記事があつて、それで今度の休暇にライルと二人で以降って予定を立てていて。」

少ししてれながら話し始めたアニュー、

なぜここまで優秀な彼女が、ライルの話となると途端に性格が変わるんだろうか。

まあ、それはいいとして。

「んで、何でそんな話を俺に？」

俺が一番疑問に思っていたことを口にした。

「あつ、はい、それですね、実はその記事の中に『俺に打たれる武士道』なんていう記事があつたんですよ。体を鍛える趣味があるラッセさんにどうかなって話をライルとしていて、それで声を掛けて見たんです。」

アニューが少し明るく応えた。

「へえ、面白そうなとこだな、ちよつと詳しい話教えてくれよ。」

当然興味を持った俺は、アニューに詳細情報と所在を聞くと、一足

早い休暇を貰って日本に旅立ったのだ。

そして今に至る、

止むことなく降り注ぎ続ける冷水、

それが容赦なくおれのあたまにふりそそぎ轟音をたてる

俺はこの厳しいトレーニングを心からトレミーのメンバーに体験させてやりたいと思っていた。

ソレスタルビーイングのメンバーは職務上、個人でのトレーニングが推奨されているが、最近になって出現したペインチェンジャーの一件までほとんど目立つ事件が起きることなく、皆そんなこととはとうの昔に忘れていた様である。

というより、どういう流れからかは分からないが、トレミー内でのあまーい空気が体を鍛える事など無縁のものとしてしまっていたのだ。

しかし俺は違った、

日々欠かすことのなかったトレーニングに加えて、甘い空気のため偏った食事をしてきた皆に流されず、食生活の徹底も怠らなかった。

(因みに、イノベーターとなった刹那はトレーニングは必要ないといいつつも、フェルトが少しだけ体重が増えたと嘆いているのを見て運動に付き合ったり、フェルトが料理の特訓の為に大量に作ってしまった数多の食料を処理するために常人ではあり得ない過激な運動をしたり、フェルトが風邪を引いた時の為に栄養に偏りのない食事を日々練習していたり、フェルトが驚いて倒してしまったものや壊してしまったものの修理を一人でやり遂げたりと、理由が異常なまでにおかしいとはいえ、かなりハードな生活を送っていた様だ。)

まあ、そんな例外は除くとして、今のメンバーはトレーニング不足である。

この事態は早急に何とかせねばならない、

そんな訳でたるんでいるメンバーの目をこれで覚まさせてやりたいのだ。

そんなことを考えていると、近くの小屋から一人の金髪の男性が現れた。

「むっ、珍しいな、ここに自分以外のものがくるとは。」

その男はそう言うと、俺の横にある岩に腰をおろして目をつむり、滝に打たれ始めた。

俺は男を見るのをやめて再び意識を集中させた。

暫くして、

俺も隣にいた金髪の男もかなりの時間、滝に打たれ、今は小屋に設置してあったベンチですっかり打ち解けて語り合っていた。

「やっぱり日々の鍛錬は大事だよなあ。」

「うむ、それは同感だ、このような鍛錬こそ己のみを清めて見つめ直す事ができる。」

金髪の男、(グラハム・エーカーと言っらしい)、の言葉に俺も頷く。

何時の間にか夕日も沈み、辺りはすっかり暗くなっていた。

「世界も変わったなあ、」

俺はそんな事を言いながら星空を見上げた。

男たちの時間は続く

衝突の兆し（前書き）

スメラギさんって、こんなキャラでしたっけ（-。- ;

衝突の兆し

休暇が始まってから一週間が過ぎた、

それぞれのメンバーは疲れた羽を十分に伸ばしてトレミーへと帰還していた。

「しかし、長い様で早かったなあ、休暇も。」

「また仕事に戻るのなんて、ああ、つまらない。」

ともにブリーフィングルームへ向かっていたロックオンとリジエネが愚痴を漏らしていた。

「そう言えば、お前さんはどこに行ってたんだ？」

隣で黙って愚痴を聞いていた俺に声がかけられる。

「特に特別な所には行ってない、ほとんど日本に居ただけだ。」

俺は特に詳しく答える気はなかったので、少し短めな返事で答えた。

「ふーん、日本って、確かラッセもいつていたよね？」

特にそれを気にする事なく、リジエネが呟く。

ラッセか…

そう言えば日本に先に行っているとは聞いていたが会う事なかったな。

「ロックオンはどこに行っていたの？」

リジエネが再び口を開く。

それを聞いたロックオンは自慢気に答え出した。

「それがよお、何と俺、アニューと二人で世界の秘密スポット巡りに行ってきちまったぜ。いやー、本当に楽しかったぜ、アメリカ、イタリア、フランス、オーストラリア、あと、ロシアとか。」

そういつてニヤニヤと笑みを浮かべる。

「へえー、凄いね。あとで写真とかあつたら見せてよ。」

リジエネが少し楽しそうにロックオンに頼んでいる。

そんなものヴェーダで見ればいいだろ、と、突っ込みたくなるのを抑えて俺は口を開いた。

「ところで、そんな距離をお前はどんな移動手段で移動したんだ？」

それを聞いたロックオンは再び自慢気に答える。

「よくぞ聞いてくれたな。なんと！今回は、デュナメスで行ってきました。」

なる程、そう言う事か、

確かにトランザムを使えばそんな距離すぐに移動できるだろうな。それに旧式の機体ならいちいち連邦政府にマークされる事も無い…

「それで、スメラギに許可はとっていたのか？」

俺は少し心配になって聞いてみた、

「んなもん取る訳ねえだろ、どうせ地上用の移動手段としておいていただけだし。それにスメラギさんは、良く分からん軟弱者から情報聞き出しに夢中だったしな、まあ、ばれなきゃいいんだよ。」

ロックオンが笑顔で答えた。

まるで中学生の様な考えだな。

と言うか、ばれたらだいたいまずい様な気がするのだが…

その時、

「ふーん、ロックオン、この戦況下でデュナメス持ち出したんだ。しかも遊びの為に…。」

背後から謎のオーラらしきものを帯びた声が響き

ぴしゃり、と空気が凍った。

噂をすれば何とやら、本当だったな…

ロックオンの顔から血の気が失せる。

カタカタと震えながら振り返るロックオン、リジエネも何故か震えている

俺は慣れた事なのでそこまで動揺しなかったが、まあ、これが始めてであるリジエネは怖いだろうな…

まあ、今回の件の張本人であるロックオンにとってこれは、かなりのものだった様だが。

「は、ハハハッ、なななんの事でしょうか。」

「いやねー、それが地上用の格納庫にあるはずのデュナメスがメン

バーの誰かに勝手に持ち出されてるって情報があつてねえ、それで少し気になってネットワークで世界の様子見たら、『赤く光る謎の機体』なんて言う素敵な記事見つけちゃって、ほんとと、情報もみ消すのにどれだけ苦労した事やら……一番怪しい人に聞こうと思つてただけど……手間、省けたわね。」

ガシリ、とロックオンの制服の襟元がつかまれた。

「その、すみません……」

「言い訳はこの先で聞いわ。刹那、ブリーフィングはあなたが指揮しておいて。」

「……………了解した。」

俺がそう答えると同時に、ロックオンはスメラギに引きずられてトレミーの奥の方へ消えて行ってしまったのだった。

「刹那っ、あれ、なんなの……。」

ポカンとしたリジエネが声を出した。

俺は一言だけ答える。

「ガンダムでも超えられない壁だ……………」。

—————
—————

「と、言う事でこのフリーフィングでは連邦政府の出方に、俺たちがどう対処するか決めようと思う。」

フリーフィングルームに集まっているメンバーにスメラギが手に入れた情報を元に現状を伝えた俺は、それぞれ黙って考え込んでいたなか、口を開いた。

「しかし、こりゃあなんだ、新型試作機ブレイヴ、ツインドライヴにトランザム、こんなもんが量産されたらひとたまりも無いぞ。」

連邦政府の新型試作機についての資料を見ていたイアンが声を上げる。

新型試作機、ブレイヴ

パイロットは不明

連邦政府公式機としては初のツインドライヴ搭載型機、以前の資料を見ると、マスラオ、スサノオと呼ばれる機体に搭載がされていた

様だが、どちらも完全なものではなかった様だ。

トランザムは勿論の事、大型ビーム砲や通常の機体を遙かに凌駕する機動性など、隊長機である一機以外にはツインドライヴはつかないとはいえ、量産を目的とする割にはかなりの性能である。

「それもそうだけど、こつちの問題の方がまずいんじゃないかな。」

さっきまで話を聞き続けてばかりだったアレルヤが口を開いた。

「もし、本当にペインチエンジャーに対しての独立部隊ができるなら、それは僕らの時と同じになるんじゃないのかな。」

「確かに、軍備の収縮を図り、融和政策を進める連邦政府から力を持った部隊が独立するのはアロウズの二の舞いになりかねないからな。」

俺はアレルヤの意見に賛成する形で言葉を添える。

再び沈黙が訪れようとしたその次の瞬間、

モニターにいきなり電源が入った。

現れたのはスメラギ、かなり慌てている様だがどうしたのだろうか。

「どうした、スメラギ・李・ノリエ……みんな、大変よ、ペインチエンジャーが動き出したわ。」

「なんだとっ、一体何があったんだ！」

テイエリアが声を上げる。

ペインチェンジャーが動き出した？どうしたのだこんな時に。

「おそらく、刹那が以前彼らから聞いていた作戦、連邦政府との武力衝突を行う気よ！」

「なにっ？武力衝突だとっ。」

他のメンバーも声をあげて驚いている。

「とにかく、全員戦闘配備について。この戦いは何としても止めないと、大変な事になるわ。」

スメラギの声と共に、落ち着きを取り戻したメンバーがすぐに動き始める。

戦うしか無いのか…

しかし何故奴らはここにきて動き出したんだ…

全員が部屋を出た後、俺もブリーフィングルームを出ると、そのままクアンタのもとへかけていったのだった。

衝突の兆し（後書き）

感想お待ちしています、

三人の誓い

宇宙空間を高速で駆る五機のMS、

目指すのはペインチェンジャーに占拠されている資源コロニー、リサイヤ。

「全機、ここからは連邦の監視下にはいる、リジエネ、頼むぞ。」

俺は通信をいれると、先頭にいるリジエネのトリズアに指示をする。

「リョーカイ、行くよ、ステルスフィールド?。」

トリズアから大量の粒子が放出され、互いに通常の通信機器が通じなくなる。

「流石だな、これほどのものとは思わなかった。」

取り戻したの後ろについていたティエリアが呟いた。

ステルスフィールド?、

GNドライブが国連に渡ってから、粒子領域内での通信技術の確立はそれ程時間が掛からなかった。

それと同時に、ガンダム機の優位性の一つであったレーダーに感知されずに、敵の通信手段を潰せるというものは、無くなりつつある。無論、現在でもそこまで完璧なものは開発されていないので、今まで通りガンダムは特にそれに対処する事なく活動を続けていたが、今回は連邦政府の最新鋭の軍事力をペインチェンジャーに当てているのだ。

そこで開発されたのが、トリズアの使うステルスフィールド？である。

もとはトレミー自身に取り付けをする予定だったが、トリズアの様々な武装を付け替える事ができるという特性から、急遽取り付けられた。

その有効範囲内においては、通信やレーダー探知が行えないだけでなく、一定圧縮率以下のビーム兵器の無力化、さらにはGNフィールドの無効化までと、強力な能力を備えており、オリジナルの太陽炉を持つ機体でさえ性能が落ちてしまうという代物である。

「でも、これあんまり長く続かないから早くいった方がいいよ、相手方もこの異変にはいづれ気付くだろっしね。」

確かに、リジエネのいう通りである。

全機がスラスターを一気にふかし、赤い粒子が舞うなかを進んで行った。



「なあ、ギャレス、この作戦本当に俺ら裏方の為に出る意味あるのかあ？」

此方は資源コロニー、リサイヤのMSデッキ。

そこで作戦に向けて待機していたタークスが隣で静かに待機していたギャレスにこれからの作戦がいかにも面倒くさそうに声をかけた。

「知らない、けど、ゼファイアスが言ってた事だから…何か意味があるんだよ…」

本を読んでいたギャレスが顔を上げて答える。

「そうだけどさあ…あ、そうだ！アーシヤンのとこ行って遊んでこようぜ、俺、あいつとまだ格ゲーの決着付けてねえんだよ。」

「はっ……………何言ってるの？」

何馬鹿げた事を言ってるのだろうかと完全に呆れた様な声でギャレスが答えた。

「やっ、だってどうせ俺らの出番無いじゃん、ならアーシヤンと遊

んでた方が楽しいっつーの。」

「あのさ…アーシャン、今回の作戦出撃するんだよ。いつもとは違うんだよ…。」

「なっ、マジか…。」

タークスが驚きの声を上げた、

いや、そんな事も知らないなんて、ホントにこの人こう言う作戦に向いてるのかな…

「まあ、とにかくそう言う事だから…、おとなしく待機してなよ。」

「っ。」

声にもならない様な声でタークスが唇を噛み締めた。

何がしたいだか…

「タークス、ギャレス、今から戦闘可能宙域に入る、機体に入って待機しろ。」

二人が再び黙り始めた所でゼフィアスから通信が入りタークスは少々機体に入っただけだった。

作戦まで後十分と言った所だろうか、

通信を切ったゼフィアスは振り返り後ろにいるメンバーに声を掛けた。

「今回はかなり危険な戦闘になるからな、全員、機体のリミッターは解除して行けよ。」

後ろにいるメンバーは全員頷く。

「ねえ、ゼフィアス、今日はタークスとギャレス来ないの？」

アーシャンが口を開いた。

「ああ、今回は裏方に回ってもらおう。」

優しく語りかけるゼフィアス、

出来ればこの作戦、いや、普通の戦闘にも出たく無いが、今の戦力ではアーシャンを頼るしか無い。

「……………こんな自分に腹が立つな……………」

少しだけゼフィアスが呟いた。

勿論誰にも聞こえていない。

「さあ、出撃だ。シルビア、アーシャン、コロニーの守りは任せたぞ。」

「リョーカイ」

明るいシルビアの声と、戦いに出ることに少し緊張したアーシャンの声が部屋に響き、それぞれが各々の機体に取り込んでいった。

ミルティアとベルディオ、ゼフィアスがその場に残る

「何故なのだろうな。」

ゼフィアスがつぶやく。

「何がですか……。」

ベルディオがそれに反応した。

「アーシャンの事ですよね。」
ミルティアが答える。

「ああ、それに、シルビアもだ、あの二人はまだ幼い、それにきつと罪の意識さえないだろう、そんな二人に戦場に出て戦えと言ってしまうなど……。」

ゼフィアスが悔しそうに俯く。

「しかし、彼らの力に頼るしか無い、か…。わかっていても辛いもんですよねえ。」

「タークスやギャレスも例外では無いですね、彼らもまだ優しさを心に残している。」

「ああ、あの四人を世界に返す為にも俺たちが今戦わなければならぬな。」

「ええ、そうですね。」

「絶対にやり遂げましょう。」

「よしっ、いこうっ。」

三人も機体に乗りに込んでいった。

そんなやりとりを影で聞いていた人物が一人、

「あーあ、なんて美しい愛なんだか…。まあ、僕には関係無いか。」

少しだけ口元に笑みを浮かべると、そのまま彼も自分の機体に乗りに込だ。

「全機、出撃だ。」

白銀の機体が六機、コロニーから飛び出る。

それらは美しい白銀の線を引くと共に果てしない宇宙に駆けて行った。

俺たちは消えない、アーシャン達を必ず世界に返してやるまでは

そして、あの平和な時を取り戻すまでは…

破壊の神

飛び交う大量のMS、

そのほとんどが赤い粒子を放出しながら動いている。

そしてそれに囲まれる様に位置どる数機の白銀のMS。

「くっ、これ程とはな。」

初めから不利とわかっていたペインチェンジャーのメンバーであったが、予想以上の圧倒的な物量を前にかかなりの苦戦をしいられていた。

「このまま押し切るぞっ！」

白銀の機体に猛攻を加えてその場にとどめ続け始めた中、ジンクス部隊の指揮官が指示をする。

近づいてくる数機のジンクス、

が、

「その程度でっ！」

ミルティアの機体から一瞬にして小型ミサイルが放たれる。

「ガッ！」

よける術もなくミサイルが直撃し爆散する機体。

「おのれ、こうなれば徹底的にやるまでだっ！」

ギリギリと歯を噛み締めながら指揮官が声を漏らすと同時に、他のジnkスが一齐に集中砲火を浴びさせる。

333

敵の攻撃をよけながら反撃をするが、思っ様に射撃の体制が取れない。

仕切りに降り注ぐビームの雨が白銀の機体を追い込んで行く。

ドシューウウウ

「ぐあっ…」

コクピットに走る強烈な衝撃、

ビームの一発がベルディオの機体に直撃し、機体の胴体部に煙が上がる。

「ヤバイですね、ゼフィアス…ここはあのシステムを使うべきじゃないんですか。」

次第に打つ手が無くなり追い詰められるなか、ベルディオがタークスに通信をいれる。

落ち着いている様に装っているが、その声には焦りの色が見られた。

「そうだな…ベルディオ、ミルティア、フィールドを展開するんだ。」

「了解。」です。」

ゼフィアスの指示と共に二機の周りに白銀のフィールドが展開される。

「GNフィールドなど所詮その場しのぎに過ぎん…各機、粒子圧縮率を上昇させる。」

白銀の機体がついに追い詰められたと思い込んだ指揮官が他の機体に命令する。

「くそっ、やるな。」

粒子圧縮率が上昇し、フィールド用の粒子残量がかなりのペースで削られて行く。

「くっ、」

相殺が間に合わずにすり抜けてきたビームがミルティアの機体の肩部に当たる。

当然のようにコクピットに強烈な衝撃が走った。

その間にも一人フィールドを張らずにいたゼフィアスは、着々とシステムを準備していた。

目の前のパネルには必要粒子のチャージ量が示されていた。

残り五パーセント、

「まだですかっ、」

その横ではゼフィアスをかばうようにビームを遮るベルディオの機体が各部から煙をあげていた。

「よしっ、OKだ。よもや、このシステムを使う事になるとはな…

…。」

ゼファイアスはそう呟くとちょうど百パーセントが示された手元のパネルを操作する、

途端に彼の機体が白銀の粒子を纏い、巨大な羽が現れた。

「なっ、何だ！あれは。」

何が起きているのか理解できない連邦の兵士が声を上げる。

目の前の機体にいきなり羽が出現し、それがどんどん広がって行くのだ、

混乱するジンクス部隊、

それを待つ事なく白銀の羽は広がり続ける、

「これで…お終いだ。」

そして、巨大な羽が開き切った瞬間、

「馬鹿な？」

連邦兵の叫びと共に、無数の粒子の剣がすべての機体を突き刺した。

それは一種の素晴らしい作品のように見えた、

白銀に輝き赤い塊を貫いていて、それが大量に広がって一つの作品となる、

そして、爆散する大量の機体、

爆発のせいで周りが煙に包まれる、

「ぜ、ゼファイアス…。」

姿が見えない彼を心配そうにベルディオが声を漏らす、

次第に晴れて行く爆煙、

そして、

その中心には、返り血の様に見える赤い粒子がゼフィアスの機体を赤く見せていた。

赤く染まった羽を広げ、闇の中に浮かぶその姿はまるで………破壊の神のようだった、

「ここまでのものだなんて……」

コクピットの画面に映されるその圧倒的な力にミルティアが驚きの声を漏らす。

それも無理はないのかもしれない、数にして約二十五、それ程の数のジnkクスを彼は一瞬にして全滅させたのだ。

「先行部隊はこれで全滅させた事になるな。よし、次に行くぞ」

その場で動かなかった二機に声を掛けて、ゼフィアスは次なるエリアへと向かうのであった。

破壊の神（後書き）

感想&リクエストお待ちしております（^。^）

開戦の鐘

「先行部隊が全滅しただと！そんなバカな事があるものか？」

無機質な壁と味方の艦を映したスクリーンだけに囲まれた司令室に総指揮官の声が響きわたった。

ゼフィアスが先行部隊を全滅させた事によって、司令室にはかなりの動揺が走っていた。

「しかしっ、先行部隊との連絡がつかないどころか機体の反応もありません。」

オペレーターの焦る声が返ってくる。

「あ、あり得ん……………」

あまりの出来事に驚きを隠せない指揮官は、力なく座席に腰を下ろすとその場で頭を抱えてうつむいた。

「数十分の戦闘でこれ程のものだとは。」

絶望に満ちた声で指揮官がつぶやく。

先行部隊は軍の中でもそれなりに腕の立つものや、優秀な者を選抜して作り上げた部隊である。

軍の中では編成予定のソルブレイヴズ隊、現在、最高レベルのパイロットの集まるオリジナルジंकスチームについて三番目の力を持っていると言ってもいいだろう。

それ程の部隊が数十分の内に全滅させられたのだ。

「…ぜ、全MS発進…奴らを…潰せ。」

震える声で指揮官が命令を下す。

だが、その震えは少しずつ別のものに変わっていた。

相手に対する恐怖ではなく、自分の部隊が敵わなかったという激しい劣等感、敗北感、憎悪、それらすべてが怒りとなって彼を動かしている。

「奴らめ…今度はこっちが全滅させてやる……………全機に通達！もう捕獲などと言う甘い考えは捨てる、とにかく奴らを動けなくなるまで徹底的に潰せ！」

怒りに満ちた声がそれぞれの機体に響き渡る。

「了解？」

それと同時にすべての艦から大量のMSが出撃した、

その数およそ三百、

圧倒的な物量を武器に、ペインチェンジャーへの攻撃が始まった。

「まずいな……」

ステルスフィールド？のなかを抜けて、連邦の動きを移動しながら見ていた俺は、あまりにもありすぎる物量差に焦りを感じていた。

いくらこちらの方が圧倒的な火力を持っていたとしてもこの物量差は多すぎだった。

頼みの綱はクアンタムシステム…と言いたいところだが、彼らに果たしてそれが通じるのだろうか。

「刹那…あと1時間ほどで彼らが衝突するようだが。」

考え込んでいた俺にティエリアから通信が入った。

モニターに映る顔は少し険しい。

「ああ、おそらくこのペースでは彼らの衝突は避けられない。武力介入するしか無いようだ。」

俺の中ではすでに戦うと言っ選択肢以外が浮かばなかった。

「そうだな、だが、あの物量差に対抗できるのか。ミッションプランでは150機程度までとして立てていたはずだ…」

ティエリアが痛いところをついてくる。

スメラギの戦術プラン通りにやらない場合に取れる術はほとんどないと言ってもいい。

クアンタムシステムがうまく行く可能性は低い、
トランザムライザーで戦うにしても被害がすぎる。

連邦と結託できればそれがベストだが、間違いなくそれは無い。

ペインチェンジャーと共闘すれば世界を乱してしまう。

此方には不利な状況しか並んでいないな。

「仕方がない、スメラギの戦術プラン通りにやる…。」

それだけ言っと、俺は通信を切り替えて全員に伝えた。

「俺たちはこのままミッションプラン通り、両方の勢力に介入、できる限り被害を抑えつつペインチェンジャーの撤退を図る。連邦が全滅する事は無いと思うが、万が一にでも、そうなった場合、ペインチェンジャーを全力で叩く。」

「おいおい、ずいぶん気合入ってんなあ…。」

「マリー…いいのかい。」

「私は大丈夫よ、アレルヤ。たとえ仲間だったものがいても迷う事は無いわ。」

「イヤだなあ…実践は得意じゃ無いんだよねえ。」

「あまりいい状況じゃ無いな。」

各々戦いのために意識を集中させて行く。

俺は静かに通信をを切ると首元に手を当てた。

パイロットスーツ越しでも分かるペンダントの感触。

休暇の最後に買ったある約束のための大切なもの。

この約束のためにも…

俺は必ず生き残る。

リライター発動

降りそそぐビームの雨、

「くっ、前ので粒子残量が？」

自分達よりも百倍近い数のMSがたった三機の機体をめがけて一斉に攻めてくる。

普通の人間なら怯えて何もできなくなってしまう様な圧力がかかる。

その圧力に飲まれ掛けたのか、
強力なビームがゼフィアスの横を抜けてベルディオの機体に迫っていった、

「まずいつ？」

気づいた時にはすでに間に合うタイミングではない

「させないっ？」

しかし、ベルディオに届くより早くビームは防がれた。

爆発するシールド。

「この粒子圧縮率、当たったらアウトみたいですね。」

ギリギリでベルディオを守ったミルティアが二人に声を掛ける。

「ありがとうございます。」

「すまない、ミルティア、ベルディオ。」

二人は一言ずつ声を交わすと、再び戦いに集中した。

十数機ごとのチームが横向きに列を作つて連続でライフルをはなつてくる。

右、左、上、三方向からの同時攻撃が絶え間なく続く。

撃ち落とそうとライフルを放てば防御専用のシールドを持った機体が前に回っており弾かれる。

そしてまた攻撃が始まる。

「この粒子圧縮率それにこの戦い方は……」

防一戦になり硬直してしまっていた中、ゼフィアスがコクピットである事に気付いた。

迫り来るビームをかいくぐり待機しているシルビアたちや別行動のタークスたちに通信を行える距離まで移動していく。

と、同時にコクピットに二人から通信が入る。

「ゼフィアス、これは…」

ミルティアが息をあげながら声をあげた。

モニターに映るその額には汗が滲んでいる、隣に映るベルディオも同じ様な状態だ。

「ああ、恐らくはあれだ…。」

「まったく、生きな事してくださいませよね…」

ベルディオは余裕をかましている様にしているがやはり焦っている。

「ベルディオ、タークスたちを呼んでくれ、俺はシルビアたちを呼ぶ。」

「わかりましたよ…。」

「クジャノさんは…クジャノさんは呼べないのですか?」

ミルティアが思いついた様に声をあげた。

だが、

「いや、Mr・クジャノは別動隊を抑えてくれている、今呼ぶのは

無理だろう。」

話している間にも絶え間なくビームの雨が降り注ぎ続ける。

まるで、長篠の戦いのようだな。

チャージが必要なライフルを放つては後ろに回り他の機体が撃つ間に再びチャージ、なら、さしずめあの防御専用のシールドを持った機体は馬防柵といったところだろうか。

厄介だな…

軽く舌打ちをしたゼフィアスはシルビアに通信を送ると、再びビームの嵐に飲み込まれていった。

「ねえシルビア、まだかなあ…」

現宙域で待機を命じられていたアーシャンは何時までも解けないこの命令に苛立ちを覚えていた。

戦闘宙域から少し離れた場所には迷彩皮膜を使い隠れたりサイヤがある。

そこに、アーシャンとシルビアは待機していたのだった。

「ちゃんと待機さなさいよ、ミルティアたちが戦ってるんだから。」
声をかけられたシルビアがアーシャンを注意する。

本来なら先行部隊を殲滅したあと一度此方にもどってくるはずだったのゼフィアスたちがもどって来ない。

「何もなければいいんだけど……」

心配そうに俯いたその時、

ジュジュッ……

通信を知らせる電子音がなった。

「これって……ゼフィアスから！」

シルビアは驚きながら顔を上げると急いで通信をいれる。

ただ、入っていたのは音声のみだった。

「シルビア、アーシャン、現宙域での待機を解除。至急戦闘宙域に来てくれ。」

「そんな、苦戦してるっていつの。アーシャン！出撃よ、急いで！」

通信を切ったシルビアは声を上げると共にドライヴを起動させてコロニーから外に出た。

「待つてよシルビア〜。」

遅れるようにアーシャンも頃にから出て来た。

リサイヤはこの定位置で待機…

ここから戦闘宙域までおよそ十分…

「行くわよっ？」

二つの機体が宇宙を駆けた。

一方、タークスたちは…

「おいおい、こいつを使うには早いんじゃないのか？」

「でも…ゼファイアスの命令だし…。」

シルビア達より更に離れたところで、MSの四倍はあろうか、巨大なビーム砲を前に話していた。

大型長距離射撃砲、通称リライター、

一撃でMS約五十機を巻き込める程の威力に加えて、数百kmに及ぶ長い有効射程距離。

今作戦の切り札の一つである。

しかし、強力さの反面、防御面においてはまったく当てにならない、更に膨大な粒子を消費してしまうため、本来なら相手方が約半数になったところで使う予定だったのだが、

「何でこんな早いタイミングで撃つんだよ。ここで撃てば間違いな

く俺ら襲われるぞ！」

「でもやっぱり撃つしか無いよ。ゼフィアス達をたすけないと……」

「あゝもうっ！いいっ、撃つ。」

タークスが意を決したように声を上げた。

どうしよも無いのはわかっていた、自分達よりもアーシャンたちやゼフィアス達を助けなければならない。

なら決める道は一本のみ

ドライブを直接本体の動力部に繋ぐ。

ビーム砲の漆黒のボディの表面に白銀の美しい粒子が舞い始めた。

「リライター、準備開始…フルチャージまであと一分。」

タークスがたんたん準備をこなす横で、ギャレスは射線に入らないよう他の味方に伝えていた。

少しずつ輝きが増す動力部、

発射の準備は整えられた、

「リライター、発射！」

引き金を引く音と共に、白銀の巨大な光が戦場を通り抜けた。

リライター発動（後書き）

いつもご覧いただきありがとうございますm（）（）m
各キャラクターによるサイドストーリーの

投票も継続中ですので、気が向いたら是非ご投票下さい。

また、その他ご指摘や新キャラの名前提案などなど、

随時受け付けておりますので、お気軽にリクエストして下さい。
これからもよろしく願います。

戦場に舞い降りた閃光

放たれた光が通り過ぎて行く、

一瞬、周りは白銀の光により真っ白な世界に変わった。

そして、ゆっくりと光は細くなっていき消えていく。

そこには何も残っていなかった。

あるのはただの空間のみ、

「あつ、あれは…。」

目の前をいきなりとおり過ぎた光に連邦兵は少しも動かずに固まっていた。

あと少しで追い詰めれる筈だった三機がいきなり加速して離れたかと思つた時には遅かった、

自分たちの目の前で五十機近い味方の部隊が消滅したのだ。

各部に被弾し、煙を上げながら射線上を避けた場所にいたゼフィアスが光を見ていた。

「間に合ったようだな……だが、」

呆然としている連邦の部隊に目をやると、我を取り戻した連邦の兵士達から順に再び此方にむけてライフルを放ってきていた。

「おのれえっ！」

「全滅させる。」

「奴らを生かして返すな？」

仲間を一度に殺された怒りと敗北感を連邦の兵士達はゼフィアスたちに集中させる。

「数が減ったとはいえ、やはり不利なものは変わらない。」

「ゼフィアス、シルビアたちの到着まであとの位ですか。」

周りに追い詰められながら、隣にきたミルティアから通信が入る。

「あと五分弱だな、それまで持ちこたえられるか……」

すでにかなりのダメージを負っている機体ではあのシステムの発動は無理だ…

「どうします？Sトランザムで五分耐え切りますか。」

同じ様に敵の砲撃に追い詰められてきたベルディオが口を開いた。

「いや、それを使えば脱出は望めなくなる。」

「別にこの戦いに勝てば脱出は必要ないんじゃないんですか？」

確かに、だがそれはこの戦いに勝てば、の話だ。

「このまま戦いが続けば必ず、彼がやってくるだろう。」

「彼ですか…それは厄介ですね。」

そう、この戦いには必ず彼がくるはずだ…

イノベーター

刹那・F・セイエイが…

場所は変わって、ゼフィアスたちの戦闘宙域から数十キロ先の地点。
――
――
ここでは、援護に向かう筈だったグラハム率いるリターンフラッグ
スとそれを妨げるクジャノが激戦を繰り広げていた。

ブレイヴらの射撃が一斉にクジャノの機体に向かうが、ことごとく
躲かれては此方が反撃を受ける。

拉致があかないと近づけば高速型のファングに牽制されなかなか有
利に戦いを進められない。

「くっ、やるでは無いか。」

此方は性能では多少劣るとはいえ、六機もいる筈なのになかなか倒
す事が出来ないのだ。

いや、むしろ相手に押されつつあった。

ドガァァン…

「ガァツ!。」

味方機の一人にビームが直撃する。

「大丈夫かつ!。」

すかさずサポートに回り敵機から放たれるビームをシールドで防ぐ。

「すみません隊長。大丈夫です、やれます。」

再び攻撃に参加する二機、

「いくらプロトタイプでも、こんな実力じゃあつまらないア。」

味方の戦闘宙域の方に謎の光を見つけ焦るグラハムたちを前に、ク
ジヤノはつまらなそうに呟いた。

頼まれた事はただ一つ、

敵部隊の足止め。

「本当につまんないなあ、あつちはソランくんたちがくるっていうのに……もしかしてこっちから回ってきてくれたりしないかな、」

まるで流れ作業の様に迫るビームを避け続けながら、そんな事をふと思う。

そこに付け入るように飛び込んで来た一機の敵。

「はい、一機目あがり」

まるで予測していたかのようにクジャノがライフルを向ける、

「しまった？」

「よせっ！やめんかあ！」

グラハムが叫ぶが間に合わない、

そしてビームが放たれた

日本ではこんなことわざがある、

噂をすればなんとやら、

バシユウウウ

直撃するかと思われたビームは青い閃光と共に現れた機体により防がれた、

「わお、待ってたよ、ソランくん。」

その言葉に睨みつけるかのように反応したクアンタ、

再び巡り合った二人、

戦いが始まる…

新たな力

「クジャノ……………」

刹那はモニター越しに映る白銀の機体を睨みつけながらつぶやく。

視線の先には白銀の粒子を放出しながら輝く機体。

二機は睨み合ったまま動かない、

「ガッ、ガンダム。」

その時、

突然の事に驚きながらも、刹那に救われた一人の隊員が動かない白銀の機体に向けてライフルを向けた。

「やめろっ!」

グラハムが声を上げるが遅い。

しかし、

ガシアアアア、

引き金を引くよりも早くライフルはクアンタのファングに切り刻まれた。

「なっ……?」

パイロットが驚きの声を上げる。

なんの前触れもなく、一瞬、本当に僅かな時間にライフルが切り刻まれたのだ。

「あっ、あれは少年なのか。」

その様子を見ていたグラムは以前出会った刹那とは全く別のものを彼から感じていた。

「これは俺の闘いだ、邪魔をするな……………」

その様子を見ていた刹那は冷たくつぶやいた。

俺は別にその機体の方に攻撃をしようとは思わなかった。

特に怒りは感じなかった、

クジャノと戦うために手に入れた新たな力、

それは感情を一時的に手放す事。

刹那の瞳は金色に輝いていた、

イノベーターの眼

刹那はファングをシールドに戻すと、GNソード？を白銀の機体に向ける。

一方でソードを向けられたクジヤノは、

「はははっ……………ついに……………ついにこのレベルまで来たんだね、ソランくん。そうだ、その力があれば僕の相手になる、さあ、闘いだ！」

クジヤノがまるで刹那の能力を知っていたかの様に声をあげ、大型ビームサーベルを構える。

お互い動かない二機、

しかし、

「??？」

二機がとっさにその場を離れると同時にその場にビームの雨が降り注いだ。

「僕とソランくんとこの戦いを邪魔するなよ……………」

クアンから視線を外したクジャノは、チームの放たれた方向を睨みつける。

その先にはリターンフラッグスの残りのメンバーがライフルを構えていた。

「そんなに死にたいのかい？じゃあ望み通りに……………」

飽きた様に呟いたクジャノがフアングを彼らに向けた。

「させるものか」

同じ様にフアングを飛ばす刹那。

「かかったね…。」

クジャノが不敵に笑った。

「何？」

刹那が驚く間もなくクジャノは、一瞬にして間合いを詰めてきた。

バジュユユユユ

「ゲッ……………」

振りかざされるサーベルを受け止めつばぜり合いの状態になる二機。

他の期待は全てクジャノのファングに足止めをくらい二機に近づけないどころか、刹那のファングがなければ撃墜されかねない状態で追い詰められていた。

「何故戦う。貴様の目的を答えるクジャノ。」

怒りも何も感じさせない言葉とともに刹那が通信をいれて聞いた。

「……………約束だよ。」

クジャノが消え入りそうな小さい声で呟いた。

「約束だと。」

それを聞いた刹那がその言葉を繰り返す、

「ああ、約束だよ、ある人物との約束を果たすために僕はここに存在するんだ。」

クジャノが言葉を続けた、

「そのためなら僕は誰が死のうと構わない、だから戦う事を選んだ。」

「どういう意味だ。」

「そのままの意味だよ、おしゃべりはここまでだ、あとは戦いで語るでしょう。」

クジャノが通信を切ると共に出力を上げてクアンタを押し切ろうとする。

「くっ、……。」

それに負けまいと、クアンタの方も出力を上げて対抗する。

その時、

「すまないが邪魔させて貰うっ、少年！」

二人の間にグラハムのブレイヴが割り込んだ。

「グラハム・エーカー、君は関係無いな。」

クジャノがライフルを向ける

そして、

ビームが放たれた

覚醒の片鱗

放たれたビームがグラハムに迫る、

「あまいつー！」

変形する事で見事にそれを躲すと、そのままさをライフルを引き抜きクジャノに向けて放ち返す。

「舐めるなよ！」

クジャノがそれをサーベルで一蹴した。

「やはり一筋縄ではいかんな……」
互いに距離をとったグラハムが呟いた。

「グラハム・エーカー、邪魔をするな。」
突然、刹那がグラハムの後ろから通信を入れた。

「この戦いは俺が決着をつけるものだ、貴様は仲間を助けてこい。」

「ふっ、少年か……、すまないがそれは出来ないな、君のためだ」

けに戦場を用意する事など出来んよ。」

グラハムが少しだけ口元に笑顔を浮かべながら刹那に返す、

「何故だ。」

刹那が少し強めに聞き返した。

それに臆することなく答えるグラハム。

「ここは戦場だ、誰もが命をぶつけ合う場所。己が決めたことを誰かが止めることなどあり得ん。」

「……………そうか、ならやつに止めを刺す事は俺がやる、それ以外は共闘してもらおう。それでいいな。」

しばらくの静寂のあと、それを聞いた刹那が口を開いた。

「もちろんそのつもりだ。」

グラハムは当然のようにそう答えると共にクジャノに向かっていった。

それを見て刹那もそのあとに続く。

クジャノの機体に迫る二機のMS、

クジャノはビームを放ちながら距離を取る。
それを高速で左右によけるグラハム、

一瞬止まった砲撃の間にブレイヴがライフルを放つ、

「その程度でっ？」

クジャノが機体を加速させそれを避ける、

ビームをよけた先にはクアンタが待ち構えていた、

「ハアッ！」

振り下ろされるGNソード。

素早い反応でそれもよけると共にライフルを放つ。

が、それを回り込んだブレイヴがふせいだ。

まるで意思疎通をしているかのようなコンビプレー

「これでっ。」

ブレイクが大型ビームを放ち横にそれる、

その後ろから猛スピードでクアンタが迫った、

「チィ？」

追い詰められたクジャノがストランザムを起動させる、
パネルに表示されるストランザムの文字、

白銀の機体が一気に粒子放出量を上げ、白銀の羽が広がる

そして、迫るビームをサーベルで切り裂いた。

続いて迫るクアンタの斬撃は白銀の羽ばたきにより一気に上昇してかわす、

「トランザムかつ！」

斬撃をかわされた刹那が白銀の機体を見上げ声を上げた。

白銀のの羽を持った機体が目の前に立ちはだかる、

「惜しかったねソランくん……。」

その言葉と共に白銀の機体はその羽を広げた、

「くっ……。」

羽が急激に輝きを増す、

ブレイヴとクアンタが慌ててガードの姿勢を取るが間に合わない

白銀の羽の輝きが最大まで輝き一瞬、周りが光に包まれた、

ドガアアアアーン！

「ガアッ！」

「ゲアツ？」

二機に向けて粒子ビームの雨が降り注いだ、

コクピットに激しい衝撃と共に、ビームの直撃を知らせるアラートが鳴り響く

機体の各部が次々とビームによって破壊されていく、

「トツ、トランザム？」

衝撃に苦しみながらも、トランザムを起動させるグラハムと刹那。

二機の機体が赤く輝くと共に周りの粒子ビームを吹き飛ばした。

376

「やるね。でも、僕に勝てるのかい？」

それを見たクジャノがビームの攻撃をやめて再びサーベルを引き抜いた

クアンタが放ったライフルを全て白銀の羽で掻き消す、

「くっ、」

グラハムが突撃するが白銀の羽によりこれも防がれる。

「これではトランザムがもたないっ！」

うまく攻めきれない中でトランザムの粒子残量が残りの半分を切った。

ドガアアアア、

「グアツ！」

一瞬のスキを突かれてビームが直撃する。

同じ様に直撃を受けたブレイヴが吹き飛ばされる。

そこに向けて構えられる白銀の羽による巨大なビーム砲、

このままでは！

その時、

グラハムと刹那の瞳の色が変わった

二機が体制を取り直し、大型ビームをギリギリで避ける

「なんだとっ！」

直撃する筈のビームをよけられたことに驚きクジャノが声を上げた。

「ウオオオオオオ！」

一瞬白銀の羽で前が見えなくなった所に、猛スピードでサーベルを突き刺そうとグラハムが突撃する。

クジャノがそれをサーベルで振り払い受け流し、もう片方のサーベルを構えた、

腹部を貫かれそうになるそうになるブレイヴ、
しかし、その腕をめがけてクアンタのソードが突き出された。

「なっ？このタイミングは？」

なんの合図もなしにクアンタがすぐそばまで迫りその腕にソードを突き出していた、

ガシユウウウウ

サーベルを持った白銀の機体の右腕が貫かれた、

「バカなっ？そんな事が……」

予想外の出来事に驚きを隠せないクジャノ、

その間にも後ろに回り込んだグラハムが片方の肩にサーベルを振り下す、

「くそっ？」

よける間もなく肩が切り落とされ爆発する、

「これで終わりだ！」

刹那が目を見開き、サーベルを引き抜いた。

そして、コクピット目掛けてサーベルが振り切られる

だが、

「調子に乗るなアア！」

クジャノが声を上げると共に、迫り来る二機を白銀の羽で弾き飛ばした、

トランザムの限界時間がきて、白銀の羽が消えた…

「これじゃあ分が悪すぎるな。」

各部を破損しながらも冷静さを取り戻したクジャノはそう言つと、その場を急いで去つていった。

「まてっ！」

クアンタを加速させようとするが動かない、

「トランザムの限界時間か。」

悔しそうにしながらも追う事をやめた刹那はグラハムに通信を入れた、

「大丈夫か…。」

「ああ、しかし、今は。」

グラハムはヘルメットをとり、肩で息をしながら答えた。

「隊長！大丈夫ですかっ？」

しばらくしてクジャノのファンクに足止めを食らっていた隊員たちがもどってきた。

「クジャノ……………」

その様子を傍で見ながら刹那はクジャノが去った方を見つめていた。

「くっ、暗号回線、0940。アレハンドロ・コーナーへ。」

機体が破損しているため機体が安定しない中クジャノはアレハンドロに通信をいれていた

「随分とやられているな、クジャノ。」

通信がつながりアレハンドロが口を開いた。

「ええ、かなりやられましたね。」

声を落ち着けてクジャノが返す

「しかし、それは彼一人にやられたのか？」

「いえ、グラハム・エーカーがその場にいましたので…。」

クジャノが少し苦笑いを浮かべた。

「そうか、他に報告は。」

それを聞いたアレハンドロが目を伏せながらワインを口につけて聞いた。

「少し驚きの事実が発覚しましたよ。」

クジャノがそれに対して意外そうに答える。

アレハンドロが伏せていた目を開け興味深そうにクジャノを見た

「ほづつ、で、その事実というのは？」

「グラハム・エーカー、彼はソランと共にあの力を手に入れつつある可能性があります。」

「そうか、それは面白いな。」

一瞬驚いた様な表情を見せたアレハンドロは不敵に笑うとそう呟いた。

「引き続き彼らと共に行動しつつ、その二人の監視をしてくれ。」

「分かりました。」

クジャノの返事と同時に通信がきれた。

「さあ、ゲームが動き出した。　　？　　？　　？」

「　　？　　？　　？　　？　　？　　？　　もう止まらないな。」

シュツ、ボワアアア

作「ブギアアアアア。」

刹「さあ、俺もフェルトと買い物にでもいくとするか。」

フェル「投票 リクエスト 感想、お待ちしております。」

加速する戦い

「うおっ！このやるお、」

リライターでの援護を終え、ゼフィアスの元へ向かっていたタークスたちは、別機動隊に足止めをされていた。

「ギャレス！なんとかなんねえのか？。」

ゼフィアスたちと戦っている部隊とはまた別の独特な戦い方に追い詰められるなか、タークスが通信をいれて声を上げる。

タークスはかなり焦っていた。

無理もないのかもしれない、先程のリライターの使用で粒子残量が極端に減っているのだ。

「無理だよっ？この数だけならなんとかなるけど、この先にはゼフィアスたちと戦ってる奴らがいるんだよ？」

ギャレスも必死になって攻撃をよけながら応えた。

敵の数は十五機と彼らにとっては決して多すぎるわけではなかった。

しかし、敵はただのジンクスでは無かったのだ。

「速すぎるだろ！こいつら…」

高速で周りを移動し続けるジンクスに向けてタークスがライフルのを放つが、一発もいいあたりがない。

ジンクスD

ガンダムという圧倒的な存在に対して作られたジンクスの派生機。各部についていた武装を極力減らし、代わりにGN粒子を貯めるコンデサーを取り付け機動性のみガンダムに匹敵する性能を手に入れた機体で、現在は限定的ではあるが一部部隊が使用している。その機動性から、集団による攪乱や、敵が少数の場合には圧倒的な優位性を誇ることが出来る。

「くっ、やっかいな……。」

素早く機体を動かしながらギャレスが、粒子チャージ量に目をやった。

タークスには無理と言ってしまったが、この状況が続くようならこれを使わざるを得ない。

高速で移動し続けるジンクスはビームを放ってくるだけでなく、時折、突撃をしかけてくる。

ガアアアアアーン！

「ぐあつ!。」

背後に回り込んでいた一機のジンクスがギャレスの期待を背中から取り押さえた。

「しまった?」

「ギャレスツ?がアツ?」

ギャレスが取り押さえられた所を助けようとしたタークスに他の機体が襲いかかり取り押さえた。

「ちくしょうが?」

「仕方ない、Sトランザム?」

そのまま鹵獲しようとしたジンクスがサーベルを構えたのを見たギャレスは仕方なくトランザムを起動した。

粒子放出量が急激に上がり、白銀の羽があらわれる。

「なっ、なんと?」

そして、背面を抑えていたジンクスが、その羽によって粉々に切り刻まれた。

同時にタークスを取り押さえていた機体も、驚いたスキを突かれて彼にコクピットを撃ち抜かれ爆散する。

「このまま消え去れ…もうお前たちに存在する価値はないんだ……」

ギャレスの冷たい一言と共に羽が無数の粒子の羽根となって敵を囲い込む。

「なんだこれは！やめろっ、助けてくれえ。」

中に囲まれた兵士たちが外に出ようとビームを放つが、羽を破ることは出来ない。

バサアアアア

ギャレスの機体がまるで鳥の羽ばたきのように羽をはためかせた瞬間、囲っていた粒子が急速に縮まり始めた…

「やめろっ、たのむ、やめてくれえええええ………」

完全に羽根の囲いが縮みきつたと同時に、中で必至で叫んでいた声が聞こえなくなった…

白銀の羽が役目を終えたようにきえる。

同じ様に一つになった白銀の羽根も、かすかに粒子を残しながら散っていった。

「相変わらずおっかねえ技だな。」

何もなくなった空間を眺めながらタークスが呟く。

「……………」

ギャレスはそれに応えることなく、ゼフィアスたちがいる戦闘宙域に機体に向け進み出した。

—————
—————

激化する戦場、

降り続けるビームの中を三つの白銀の閃光が駆け抜ける。

「タークスたちはうまくやってくれたようですね。」

肩で息をしながらベルディオが笑った。

コクピットの爆発によってヘルメットが割れて、その額からは血を流している。

「長くは持たない、あとはシルビアたちが間に合うかどうかだな…。」

ゼフィアスが軽く笑って返した。

既にリライターの攻撃を含めて二百機近くを葬り去っているペイン
チェンジャー、

しかし、敵の攻撃の手は緩むことは無かった。

「間に合ったようですよ。」

ミルティアが少し安心したようにモニターに映る二つの機体の画像
を送った。

「それに、彼らも……ソレスタルビーイングも来たみたいですよ。」

反対には五機の機体が見えた。

「なんてタイミングの良い事が…まだ死ねないな。」

高速で迫る二機の機体、

周りの機体がそちらに反応する。

「新手かつ、だが、たかが二機増えたところで変わらん！」

「そっ、ソレスタルビーイングもいるぞっ、どうなっている?。」

突然のことに戸惑いながらも、連邦軍の機体が次々とビームを放ち二つの方向に突撃していく

「ゼファイアたち、大丈夫？」

それらをなんの迷いもなく全てファングで切り裂いたアーシャンの機体が、そのままゼファイアたち三機の元へ舞い降りた。

後を追うようにシルビアの機体も到着する。

反対側でも既にクアンタがすべての機体をねじ伏せていた。

「なんとか大丈夫だったみたいね、よかったあ〜」

シルビアが安堵の声を漏らした：

「たくつ、なんでい、こんなにボロボロになりやがって。」

「よかった、みんな無事だったね。」

安心した声と共に残りの二人も現れた。

「くつ、七機の新型だど！」

「それに、ソレスタルビーイングまで現れるとは。」

連邦の兵士が慌てふためいて声を上げている。

「怯むな、奴らは手負いの身もいるのだ、どのみち我らの物量には勝てん。」

司令官からの通信を皮切りに、再び止まっていた砲撃が開始される。

「ペインチェンジャーか、久しぶりだな。」

白銀の機体が集まった二百mほど先にソレスタルビーイングの五機が並んだ。

「無益な争いはしたくない、引いてくれ。」

刹那が通信を入れる。

「刹那・F・セイエイか、それは出来ないな！」

声と共に、ライフルを放ったゼファイアス。

「仕方ないが、戦うしかないな。」

刹那がそれをよけながらソードを振り下ろす。

「各機、展開して戦え！」

サーベルを抜いて受け止めるゼファイアスが声を上げた。

「OKだ？」

「りょかい！」

「ええ、行きましょう。」

「よし、いづくぞあゝ。」

「分かりましたよ。」

「うん、行くぞっ！」

ゼファイアスの指示に応えるように、ライフルをかまえる七機の白銀の機体。

「愚かな、万死に値する！」

「マリー、行くよ?。」

「ええ、アレルヤ。」

「狙い撃つぜ。」

「嫌だなア…まつ、いつか！」

それに応戦するように戦闘体制にはいる各ガンダム。

戦いは、加速する…

加速する戦い（後書き）

投票、リクエスト、感想お待ちしております①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

最悪の兵器（前書き）

手違いで半分しか入ってませんでした、
すみません m (| |) m

最悪の兵器

戦場を赤く染める連邦軍のジンクス、

しかし、その数は徐々に減りつつあった。

「じゃまだああ！」

「まあ、うっとうしいなあ。」

ペインチェンジャーとソレスタルビーイングの激しい戦いにより、どの機体もうまく攻撃が出来ず、止まっている間に近くにきた両陣の機体にたたき落とされているのである。

困窮する彼らをおいて、次々と機体を巻き込んで落としていくペインチェンジャー、

最低限の被害で抑えつつも、同じように周りの敵を戦闘不能の状態まで追いやるソレスタルビーイング、

両陣営の戦いは止まる事を知らない。

クアンタのソードがゼフィアスの機体に迫る。
それを遮るように連邦の機体が後ろから射撃をしてきた。

「くっ、邪魔をするな。」

すかさずフアングを飛ばして敵を落とす刹那。

今で六機はやっただろうか…

その間にゼフィアスは再び距離をおいていた。

「オイオイ、どーすんだよゼフィアス！このままギリ貧じゃあ全滅すっぞ？」

逃げながら敵を落とし続けていたゼフィアスのもとにタークスが援護する形で近づいてきた。

「オイ、ゼフィアスどーすんだよ！」

被弾しながらもタークスが声を上げた。

「……………仕方ない、ソレスタルビーイングを利用してこの場を脱出する。全員に伝えてくれ」

ゼフィアスが悔しそうに答えた。

この場は引くしかない、こちらのダメージが大きすぎたようだ。

辺りには多くのMSの残骸があった。

「撤退？了解だ。」

タークスからの通信を聞いたベルディオが答える。

「やはりこの数はきつかったな。」

少しだけ名残惜しそうにつぶやくと、そのままためていた粒子を一気に開放して周りの機体を蹴散らした。

連邦、司令艦内部、

「まずいですっ、残りMS総数が六十機を切りました。」

戦況オペレーターが焦りながらも司令官に伝える。

「くっ、おのれえ…。」

ガンツ、とデスクを叩くとそのまま椅子に座る司令官。

「司令、このままでは？」

その間にも次々と数を減らしていくジnkスの反応を見ながら他のものたちも焦っている。

「マグナガを発動させるっ？」

司令官が怒りに任せて怒鳴った。

一瞬にして静まる周りのオペレーターたち…

「司令、本気ですか。」

横に座っていた副司令官が震えながらいった。

「本気だ、奴らをまとめて消すのにはちょうどいいだろう。」

怪しく狂ったように笑いながら司令官が答えた。

マグナガ、

イノベイドの使用していた脳量子波の解析により開発された最強の兵器。

脳量子波を使用するものに対して強力な量子破壊空間を作る事により人体に多大なダメージを与える連邦の切り札である。

「しかし、それでは戦場に出ている兵士たちの中にいるイノベイターとなりうる因子を持つものたちまで巻き込まれる恐れが？」

副司令が中止するように抗議する
周りのクルーもそれに頷いた。

しかし、

「君たちはこのまま負けていいのだな、それは敵前逃亡だ。軍法会議ものだな。」

その抗議を嘲笑うかのように一蹴する司令、

「くっ……。」

副司令は言い返せずに帽子を深くかぶってうつむいた。

「奴らに再び神の鉄槌を見せてやらんとな。」

なおも笑い続けながらつぶやく司令官が発射準備を指示した。

仕方なくスタンバイを始めるクルーたち。

その間にもジnkスの数は減っていく。

「マグナガ、スタンバイ。」

巨大な戦艦の下部に少し小さめの電波発生装置の様な物が現れた。

「射角、目標に合わせました。発射準備完了です」

「さあ、これでお終いだな。」

発射準備が整った事を知らせたオペレーターの合図とともに、司令官の前にスイッチが現れる。

「神の鉄槌を…」

カチツ、

無機質な中にボタンを押し込む音が響いた

同時に一瞬、周りが目を開けられない位輝き、何かが戦場の方へと飛ばされていった

最悪の兵器が解き放たれた

悪夢

戦場に迫る見えない凶器、

マグナガ

「なんだこの反応は？」

一番はじめに気付いたのはティエリアだった。
レーダーに映し出された高速で迫る謎のエネルギー体を見つけてすぐさま分析をする。

「なっ、コレは？まずいつ、刹那！」

エネルギー体の正体がわかったティエリアは驚愕の表情を浮かべながらも刹那に通信を急いで入れる。

が、

「がっ、ザザっ、どうし……ティエ……」。

謎のエネルギー体のせいで通信が繋がらない。

「くそっ、このままでは。」

テイエリアがモニターに目をやる、

残り距離 9000 .

物凄いスピードで迫って来ていた。

「ちい、僕までここで巻き込まれるわけにはいかない。」

刹那たちとの通信を諦めて、安全領域になるべく近い道で刹那たち
のところへトランザムをかけて急いだ。

先に撤退をしていたゼフィアスたちはリサイヤの方に進みつつも少
しずつメンバーと合流していた。

「どうやら先にひいて正解だったな。」

連邦の使用した兵器の解析ができたゼフィアスが安堵の声を漏らし
た、

「そうですね、連邦は人の命をなんだと思ってるんでしょうか……」

ミルティアが沈んだ声で答える。

しかし、その安心も一瞬にして破られた。

他のルートから脱出してきた二機が、こちらに迫ってくる…

「ミルティア大変！アーシャンが！アーシャンが！」

泣き叫ぶような声でシルビアが通信をいれてきた。

「ゼフィアスやべえぞ、アーシャンがまだ脱出してねえんだ？」

事情を先に聞いたタークスが続くように怒鳴る。

「なんだと、そんなばかなっ？」

ゼフィアスが真っ青になりながら答えた…

「嘘でしょ………そんな…。」

「どうすんだっ！今から助けに行くにしてもこの距離じゃあ。」

タークスはそういつつも助けに行こうとしていた。

「落ち着け！まだ脱出できていないとは限らない。」

それを止めるようにゼフィアスが声を上げた。その声は震えている…

「今は我々が生き残らなければならない。アーシャンは必ず助ける

「！」

一方、刹那たちは

迫り来るジnkスを落として、その爆煙によって他の敵からの攻撃を防ぐ。

すでにファングだけで二十機ほど落としている、

「流石に数が多いな、しかし、一体なぜティエリアと連絡が繋がらなかつたんだ。」

ゼフィアスとタークスが急に戦うのをやめて撤退していったのを見た刹那は嫌な予感がしていた。

特に理由があるわけではないが、とにかく何か俺に訴えかけていた、これ以上とどまるな、と……

「一体何が……」

「刹那？」

追い続けながら考えていたクアンタの前にティエリアが現れた。

「ティエリア？どうしたんだ。」

「話はあとだ、他のメンバーは脱出した…トランザムでこの場を脱出するぞ？」

ティエリアが焦りながら声を上げ、トランザムで赤く輝いた機体を反転させ一気に加速していった。

それに続く様にトランザムを起動させて加速するクアンタ、

「一体何があるんだ。」

最大スピードでティエリアの機体についていく刹那が聞いた。

「連邦が対脳量子波使用者用の兵器を使った。」

ティエリアが答えるとともに解析データを送りつける。

「いつ、コレは？」

データを見た刹那が声を上げる。

脳量子波を極限まで見出し激しい頭痛などで戦闘が行えなくなるまでに至るほどの数値を示した兵器。

こんな物に当たれば連邦の兵士たちも危ない、

何とかして助けてやりたいが………

「無理だ、エネルギーが大きすぎる。」

まるで考えている事を読んだ様にティエリアが口を開いた。

「くっ……」

ピュピュッ

コクピットに響いた電子音が高速で迫るエネルギーの反応がさらに近づいて来た事を知らせた。

「何とか間に合ったな。」

射線から外れたのを確認した、ティエリアが安堵の声を漏らす、

刹那もそれに続いて取らんを解こうとしたその時だった、

「あれはっ!」

射線から外れようとしている白銀の機体が一機、残っていたジンクスに囲まれていたのを見つけた。

「ダメだな、この距離じゃ間に合わない。」

テイエリアが呟いた。

しかし、

「刹那っ？」

次の瞬間、刹那はトランザムを解くのをやめ最大出力でそこへ向かっていったのだった。

考える暇はない、

とにかく、なんとしても助ける！

白銀の機体を囲んでいる機体を全てファンゲで斬り刻んで白銀の機体の前に入った。

通信を開く、

「早く脱出しろ！ここにいればやられるぞ！」

刹那が声を上げる、

だが、返ってきたのは

「何をするんだ！」

アーシャンはそんな事も知らずにクアンタに斬りかかる。

「なっ…。」

子供の声、しかもまだ幼い。

ソードで受け止めながらも刹那は声をかけ続ける。

「やめろっ、ここにいれば死ぬぞ！」

だが、アーシャンは全く止まらずにクアンタに攻撃を続けた、

そして、

ピーーーーーーーーーーーーーーーー！

エネルギー体が真後ろまで来たのを知らせる電子音が鳴った。

「させるかああああ！」

刹那はアーシャンをかばいながら、残りの貯蔵粒子を全て出し切りフィールドをつくった。

「くっ、がああああああああああああああああああああああああ
ああー！」

「うわあああああああああああ！」

激しい痛み苦しむ様に叫ぶ二人

フェルト、すまない、俺は……………

刹那とアーシャンはそのまま意識を失った

———

「刹那あ！」

「刹那っ！」

エネルギー体が通り過ぎたあと、動かない二機をめがけてソレスタルビーイングのマイスターが声を上げながら急いだ。

どちらももつごく心配はない。

しかし、

バシユウウウウン

「なんだとっ！」

あと少しのところまで横からの砲撃により刹那たちとの道を断ち切られた。

横を見るとそこには大量のMSと、幾つかの連邦の艦隊が並んでい

た。

「かかったのは二機だけか……。ふふっ、まあ良いだろう」

動かない二機をみた司令官が笑みを浮かべる。

「くそつたれ、どうすんだ。」

刹那たちに近づこうとしても敵の砲撃で全く近づく事ができない。

「テイエリア、聞こえる。一時撤退して。敵の数が多すぎるわ!」

スメラギが遠距離通信をいれて撤退を命じた。

「しかし、それでは刹那が!」

「分かってるわよ! イイから撤退してちょうだい……………」

スメラギが俯きながら指示した。

「仕方ない、戻るぞっ。」

敵からの攻撃をよけながらマイスターは撤退をした。

残された二機の上にジnkクスが迫り、そのまま捉えて艦の中へ運び込んで行った。

悪夢（後書き）

アクションだけ捕まるつもりが刹那まで…
スマソンm（| |）m

投票、リクエスト、感想お待ちしております。

スメラギの一手

「うつ…うつ、うつは…」

うつすらと目を開ける、

次第にはつきりしていく意識
目の前にあるのは白い天井、

ガチャリ

いまだ開こうとしない目をこすろうとしたが何故か両手が動かない
どうなっているんだ…

俺は確か白銀の機体を助けようとして敵の兵器にやられて、それで…

「目覚めたかね？少年。」

いまだうまく頭が働かない中、横から不意に声をかけられた。

この声は…

「グラハム・エーカー……なぜここに……いや、ここは何処だ？」

上半身を起こして部屋の外を見ると、そこには金髪の男性が立っていた。

「やれやれ、まだ意識がはっきりしていないようだな。ここは国軍の独房だ……」

飽きたようにグラハムが答えた。

国軍の独房？

ああ、そうか、

「俺は捕まったんだな。」

手を拘束していた錠をみて呟いた。

なら、あの時の白銀の機体のパイロットは……

「彼も捕まっている、ただ、私の権限では彼も一緒のエリアにさせる事はできなかった。」

意を察したようにグラハムが喋り出した、

「どつという意味だ……」

同じエリア？

「私の親友で私と同じ様に国軍の上部と接触のできる男がいるのだが…その男が特別な頼みごとをある女性から頼まれたらしい」

国軍の男性にある女性から？

まさか……………

「その男の名前はビリー・カタギリという名前か？」

無言で頷くグラハム、

？

「脱走か……………」

「そういう事だ、で、君はどうしたい。」

グラハムが立ち上がるうとする俺を止める様に声をかけた…

「私としては敵とはいえ、あのような幼子をこの軍に置いておくのはどうかと思うのだがね。」

まるで独り言の様に喋り続けるグラハム、

「ペインチェンジャーとやらの登場のせいで、再び軍備増強路線を主張する部隊が出始めている…そんなところに居ても普通の生活は得られまい。」

「もちろん助け出す。」

俺はハッキリと答えた。

俺の様な存在は二度と作り出さない、なんとしても助け出す。

「ならば早いな、二日後の午後にもう一度会いにくる。それまでに体調を整えておきたまえ。」

そう言つてその場を去ろうとするグラハムを刹那が呼び止めた

「あんたはどうする……。」

ピクリと肩を動かしてその場に固まるグラハム

「敵を逃せばその時点で重刑だぞ。」

「おかしな事を聞くな……私は腐った軍に身を置くほど愚かではない……もちろん私の部下も同様だ。」

少しだけ見えた横顔の口もとには笑っていた……

そういうことが……

「それでは、私はあまり時間がないので……ここで失礼させていただきますとしよう。」

そう言うと、グラハムは独房を出ていったのであった。

脱走、果たして成功するのだろうか

――
――
――

「んで、どうすんだスメラギさんよ？」

トレミーのクルーは現在、国軍の警戒宙域を避ける様に進み、組織内最大の資源コロニーに向かっていった。

「刹那を助ける為にもまずは修繕よ。それからフェルト、今掛けるクアンタのセキュリティロックだけど、あれもう外してイイわ。」

無言で頷くフェルト……

その顔にはいつもの様な明るさはない。

「さあ、皆これを見てちょうだい。」

左手にボトルを持ちながらスメラギがモニターに目をやる。

そこには詳細な戦艦待機用資源衛星の地図が示されていた。MSデッキの倉庫の配置から独房の位置、さらには個室の使用者の情報までとありあらゆる情報が書き込まれている。

「すつげえなあんた。」

それをみたロックオンが声を上げる。

「あの、スメラギさん、この情報はどこで……」

アレルヤが少しか質問をした、

余りにも詳しすぎる……

「私専用の極秘ルート、とでも言っておこうかしらね。」

少しか笑いながらスメラギが答えた。

いや、実際は脅しに近いやり方ではあったが……

情報を入手する瞬間をみていた、否、みてしまったかわいそうな被害者であるラッセは密かにそう思っていた。

少しかあの日のことを思い返して見る……

「ねえ、ビリー。その詳細地図なんかある？脱走させるのには必須なんだけど……」

「あることにはあるけど、流石にそれはまずいよ。軍に怪しまれた

らアウトだ。」

「そう言っつて、本当は持つてるんでしょ。」

「いや、その……」

「あら、持っつてないの。それじゃあ、さよなら。作戦の日に会える
とイイわね。地図は…じゃあ他の機関に…」ストップ！五分待つて
くれ、たのむ、すぐに持つてくるから。」………ありがとう。」

画面に写っつていた顔が消えて一時的に通信がきれた。

それを確認したスメラギは、椅子に倒れる様にもたれると、

「案外うまくいったわね。この手はまだ使えそう、っと。」

そう呟いていたのだった。

うん、脅しだな。

自分自身で納得するラッセ

、その間にトレミーは資源コロニーが見えるところまできていた。

そしてスメラギが各員に指示を出していく。

徐々に近づくコロニー、

これが終われば一休みできるだろう。

「次の作戦でここに一時的にきたらコーヒーでもあげるか…」

余りにも可哀想なスメラギにこき使われていた男性に同情し、そんなことを呟いたラッセだった。

スメラギの一手（後書き）

スメラギのキャラが崩壊し掛けてる様な。

リクエスト感想でもなんでもお待ちしてます） ・ ・ ・ （ ）

脱獄作戦（前書き）

作者がテスト前でしたので、勝手ながら休載させていただいております。
ました。

今日からまた再開されますので、皆様どうぞよろしくお願ひします。

脱獄作戦

暗闇に包まれた格納庫の中、数人の人影がせわしくうごいていた。

一人が怪しく光る情報端末を操作して、目の前の巨大な二つの影に目をやった。

ガチャン！

音と共にその影が少しずつ倒れて行く。

「よしっ、OKだ。このまま先に向かいたまえ。」

一人の男が喋り出した、

「この先にはマネキン准将がルートを確保してくれている。そしてそれからここでパトリックと共に指定のポイントに向かってくれ。」

「隊長はどうするんですか？どうせここから出るなら、このまま彼らに来させればいいじゃないですか。」

その指示を聞いた一人の隊員が聞き返した。

「それがそもいかないんだよ。仕方がない、僕もついて行こう。」

二人の会話に割ってはいえるように男がはなしだす。

「そうですねか……」

そう答えて作業にもどったのを見た男は顎に手を当てて考え出した。

あの男の子、本当に言うこと聞いてくれるかな…

確かアーシャンとか言ったような気がするが…

まず、とらわれていると言う状況がわかっていない。

いや、正確にはとらわれると言うこと自体を知らないのだ。故に脱出の話をしてもなんのことか理解ができていない。

だからと言ってあの子のいた組織にそのまま戻すことはできないのだから、脱出したら組織に戻すなんてそんな約束も出来ない。

当分はクジヨウ君のいるソレスタルビーイングに身をおいてもらうことになるのだが、果たして、それを聞いてあの子は素直についてくるのだろうか。

やはり黙ってついてこさせるしかないか…と。

「それでは作戦を開始する、ゆくぞ、カタギリ！」

階段を駆け上がって行く足音と共に男の声が聞こえた。

それに続くようにもう一度階段を駆け上がる音が聞こえ、作戦が始まった。

――
――

カツカツカツカツ

数人の兵に囲まれながら通路を歩く刹那。

―そろそろの筈だが、まだ早いのか？―

作戦開始時にいる筈の通路まであと数mしかないと言つのに、全く動きがない。

その時、

ガシャン！

「何だ？」

金属のいたが外れる音と同時に刹那のすぐ目の前に仮面の男が降り立った。

「きさまっ！何者…フゴア？」

しゃべる間もなく一人の兵士の鳩尾に一発。
そのまま崩れ落ちる兵士。

「なるほど、そう言うことか。」

刹那もようやく状況を理解して、後ろにいた兵士二人を蹴り飛ばす。

全員片付けた二人はそのまま目的地に向けて駆け出した。

「なぜそんな格好をしている。」

走りながら刹那が仮面の男に話し掛ける。

「ふっ、生憎素性をバラすのは控えたいのでな…。」

「この軍に戻ることはないんだろう。」

刹那の切り返しに一瞬言葉が詰まったが、直ぐに言葉を返した。

「今は君を助ける為の正義のブシ仮面だから、とでも言っておこう。」

「

「そうか…。」

少しだけ苦笑いを浮かべた刹那だったが、直ぐにまえを向き直すと目的の部屋のドアを見つけて蹴破った。

そこには

「えへへ、待ってたよグラム兄ちゃん。楽しいことになるんだよね！」

「さすがだね、君の宣告通りの時間だ。」

見張りの兵をなぎ倒してすでに脱出の準備を整えていたアーシャンとカタギリが笑って待っていた。

四人の脱走が始まる。

協力者

連邦軍個別コントロールルーム

「くっ、速く奴らを捕えろ」

指揮官が脱走した刹那達の行方を探そうと必死になっていた

モニターの表示を見ると次々と突破されていくのがわかる

その時

突然モニターの更新が止まった

「何をしている早くしろ」

怒鳴りつけるが声が返ってこない

そして

「せいっー」

目の前にいる兵士がひとり、崩れるように倒れた

「何事だ、ぐばあ」

続いて指揮官も鳩尾に強烈な衝撃を受けて倒れる

ドスンという音とともに椅子から落ちる指揮官

「ふうー、やっぱりこんな仕事向いてないよなー」

二人の男を倒した青年がぼやきながら振り向くと、そこには三人の人が十数人いた兵をすべて倒していた

「そんな風に言っつなよ、カタギリの頼みなんだから」

なだめるように一人が言った

「あっちはうまくやってくれてんのかなあ」

青年が遠くを見るようにつぶやいた

響き渡る警報の音が耳を貫く

隣から聞こえる荒い息が自分と一般人との差を改めて実感させる

次々と降ろされるシャッターを潜り抜け、目の前の閉じた扉をけり破る

突然の侵入にうろたえる兵を殴り倒してその場にあるパネルに端末をあてがう

ピーーーーー、

小さな電子音とともに次々と俺には意味の分からない文字が表示されていく

「しばらく時間がかかるか」

その間も警戒しながら銃を構えたまま扉の方を向く

ピーーーーーッ

掌握完了

電子音が止まるとともに表示された文字に目をやり少しだけふっと息を吐いた

「おい、速すぎだろお前さん」

その時、遅れるように部屋に転がり込んできた茶髪の男が息を切らしながら声をかけてきた

「そうだね、でも君の方こそ少し遅すぎやしないかい」

少しだけ笑いながら答える

「俺はノーマルだ」

勘弁してくれとでもいうように男が肩をすくめた

「さて、僕らからのプレゼントはここまでだよカタギリ。後はうま

くやっつてね」

二人の男は部屋を出るとそのまま通路の先に消えた

ピュム

通路をかけていたグラハムは、突然なつた電子音を聞き端末を取り出した

手早く操作して必要な情報を取り出すと、少しだけ苦笑する

「さすが、今回の指揮官は無能なようだな」

刹那とアーシヤンの脱出のため、通路をかける二人を含むグラハムら四人はモビルスーツ格納庫に向かわずにほかの場所に来ていた。

「しかしグラ・ブシ仮面なぜ格納庫に先に敵が回されると分かったんだ」

隣を走る刹那が口を開く

確か情報統制のせいで端末は使えないはずだったのだが

「なに、ここにいる我が友の盟友が少しばかり協力してハッキングしてくれただけだよ」

「そうか、倉庫まであと少しスピードをあげよう」

得体のしれない協力者に借りを作るのはあまりいい気はしなかったが、今はそんなことを言っている場合ではない。

四人は足を速めて目的の場所へと向かうのだった

もう一人の…

「ねえ、つまんない」

通路をかけて目的地まで急いでいるさなかに、アーシャンがそんなことを言い出していた。

「何がだね、このゲームは楽しみでありふれている気がするのだが？」

兵士としての立場を一時的に捨て、ブシ仮面として存分に暴れることのできるグラハムが不思議そうに訪ねる。

「だって誰もいないじゃん。カタギリさんこのゲーム始める前にいつたのに。敵を倒しまくるゲームだよ、って。」

アーシャンは不服そうに口を尖らせた。

そんな様子を見ていた刹那が少しだけかなしそうにアーシャンを見つめていた。

なぜこんなにも戦いを求めるのだろうか、

いや、戦いなんて思っていないのかもしれないな……

俺はどうすればいいのだろうか、

考えていても仕方ない、と思った刹那は再び前に視線を戻す、

その横ではアーシヤンがブシ仮面を質問責めにしていた。

「大体なんでゲームなのに僕が走らなきゃいけないの。タークスとやったゲームは走らなくてよかったのにい。」

「タークスとは誰のことか知らんが……確かにそうだな。だが敵が出てこないのは仕方がない。時には待つことも必要なだよ。」

ブシ仮面はそれだけ言う前を向いて走ることに集中してしまった。

「ちえっ……。」

アーシヤンが諦めてブシ仮面から視線を外す。

目的地まで残り一ブロック

四人が通路を抜けてもぬけの殻となった最後の待機室を通り抜けようとしたその時、急にブシ仮面が足を止めて他のメンバーを手で遮った。

「どうしたの？」

しかしブシ仮面は何も喋らずにただ黙るようにと口に手を当てた。

刹那とアーシャンが気になってその先をみると、

「なっ……………」

その先には五機のオートマトンと数人の兵が四人ほどの軍人を囲んでいた。

「くそつたれ、何で俺が裏切り者なんだ！」

「どう言う訳か話してもらえませんかねえ。」

「あの一、何か悪いことしたんですか僕ら？」

「もうやめてよっ！私たちが内通者な訳ないでしょ？」

四人が口々に叫んでいるが周りの兵は何も言わずに彼らを捉えようと迫っていった。

「ちっ、流石にこれを見逃す訳には……………」

刹那が腰の銃に手をかけようとしたその時、

「待ちたまえ！」

仮面をとりグラハムとなったブシ仮面が三人をおいて飛び出していた。

「グ、グラハム大佐！」

周りを囲んでいた兵たちが慌てたように敬礼をする。

「君たち、何を勘違いしたかは知らないが彼らは私の部下だぞ。」

グラハムが少しだけ強く兵に言いつけると、しぶしぶ数人の兵はオートマトンを連れて立ち去ろうと部屋の入り口に向かった。

「隙ありっ！」

ジャキン！

振り向いた兵が見るとそこには上半部が綺麗に切り取られたオートマトンが五機、その場に立っていた。

「なっ、何ですか！」

いきなりすることに慌てながら兵がグラハムの方を見ると、そこにはグラハムではなく、得体の知れない仮面をかぶった謎の戦士、ブシ

仮面が立っていた。

「せいっ!」

すかさず正面の兵士に渾身の一撃を食らわすブシ仮面、

「あっ、あが……………」

なす術もなく崩れ落ちた兵士に驚きブシ仮面に向けて銃を構える兵士たち。

「やっ! 敵登場だ?」

「はっ……………」

慌てる兵の隙をついて影から飛び出したアーシャンと刹那が二人の兵をなぎ倒す。

「なっ、脱走兵か?。」

隊長らしきものが刹那の方を見る。

「よそ見とは余裕だな……………」

後ろを振り向いた兵士をブシ仮面が手刀で気絶させ、隊長をそのまま一本背負いで地面に叩きつけた。

一瞬のうちに五機のオートマトンと数人の兵が全滅させられたのを

見て言葉を出せずに驚く四人の軍人。

「大丈夫かね、君たち。」

「はっ、ありがとうございます?」

ブシ仮面が声を掛けたことで我を取り戻した一人が礼を言った。

「なに、礼には及ばんよ……しかし、君たちは何者なんだね。見たところこの支部の制服では無いようだが……」

「えっと、連邦軍第一支部の補充要員として配属された新人兵、ホンジョウ・クリスです。よっ、よろしくお願いします……」

一人が敬礼をしながら自己紹介をした。

「同じく、連邦軍第一支部補充要員サガライ・コウです、よろしくお願いします。」

隣にいた礼儀ただしそうな青年が続くように挨拶をする。

「同じく、連邦軍第一支部補充要員トリカミ・ソウ。」

もう一人、少し柄の悪そうな人物が名を名乗った。

そして最後に、

「同じく、連邦軍第一支部補充要員、クジャノ・ミトです。よろしくお願いします!」

「そうか、名前を聞くとところ最初の三人の出身は……」

ブシ仮面が何か考える様に声を出した。

「僕ら三人は日本出身です。」

それを察した様にホンジョウが答える。

しかし、そんな会話も聞かずに刹那は驚愕の表情を浮かべていた。

「クジャノ……だと……。」

そんなはずはない、クジャノに兄弟がいるなんて聞いたこと無い、確かサーシエスの話では孤児のはずだ…

「あの、なんかありますか？」

クジャノが心配そうにこちらを見てきた。

「いや、特に何も無い。」

どうする、クジャノの本人のことを聞くか、いや、それとも……

「すまないが我々は先を急ぐのでな、自己紹介はまたいつかさせていただくでしょうか。」

ブシ仮面が彼らにそう言っていると走り出そうとしたが、その時、

「あの、私たちも連れていってもらえないでしょうか……。」

ホンジヨウが考えられない様なことを言い出した。

「あつ、いや、別にダメならいいんですけど……。」

「理由を聞いてもいいだろうか……。」

ブシ仮面がそういって、話しくそつにしながらもホンジヨウが話し始めた……

「実は……。」

待たせたな…

「実は……………」

ブシ仮面ら一行に助けられた四人の新人の一人が、少しうつむきながら話し始めた。

「つい十五分ほどまえのことなんですけど、ちょうどアナタたちが脱走し始めた頃よりちよつと後に端末がすべてスリープしたんです。調べ物があった私は仕方なく同僚の彼らを呼んで、中央管理室で緊急用のパスをもらったんですけど…。」

「それで手柄を焦ったこの愚か者どもに敵の密偵ではないかと疑われた訳か……………、理不尽な話だな。」

ブシ仮面が続けた言葉にうんうんと首を縦に振る一同。

「しかし、それなら早く誤解を解けばいいんじゃないのか？」

少しだけ考えるそぶりを見せた刹那が口を開いた。

「それが困ったことに、オートマトンの設定に捕獲対象としてマークされてしまったみたいでして……………」

ホンジョウの横にいた一人が困った様に答える。

「おそらくこの兵達が身の保身のために俺たちの証言を捻じ曲げて通しちまうからな。」

吐き捨てる様に倒れている兵を睨みつけた。

「仕方がないな、ついてきたまえ。」

ブシ仮面がため息をつきながらもきっぱり言いつつ、彼らに簡単な脱獄作戦の情報を送った。

「それじゃ、行こうか。」

カタギリの声と共に全員が一斉に走り出す。

静かになった部屋には動かないオートマトンと、うわごとで何かをつぶやいている数人の兵だけが残っていた。

「到着だ、急いであれに乗り込みたまえ」

目的地にたどり着いたブシ仮面が周りのメンバーに向けて声をあげた。

目の前には少し小さめの小型艦、全員パイロットスーツすでに着替えていた。

「早く乗りたまえ、じきにここにも敵が来る。」
？

必死に走ってきたことによりかなり息をあげている五人をブシ仮面が急かす。

「ねえ、今度は何のアトラクション？楽しいの？」

「さあな、とにかく早く乗った方が良さそうだな。」

全く疲れを見せないアクションと刹那がそんなことをいいながら中に入り込んだ。

外にはすでに護衛の為に二つの艦が待機していてくれた。

「全員乗ったな、よしっ！出してくれ。」

ブシ仮面から何時の間にかグラハムにもどっていたグラハムが操舵手に声をかける。

「隊長、敵がきやがりましたぜ？」

小型艦が外に出るとともに小惑星の影から数機のMSが姿を表した。

「くっ、とにかく脱出を最優先に考えてくれ！相手はなるべく殺すな。」

グラハムが指示を出しながら自らもヘルメットをかぶりMSコンテナに向かおうとするが…

「グラハム、今は君は出ない方がイイかもしれない…あのマーク、軍議会直属のものだ。」

カタギリが苦い顔をしながら声を掛けた。

「仕方ない、ここは任せるとする。」

グラハムが再び席に座ると、小型艦は一気に加速して目的の場所まで急ぐのだった。

「スメラギさん、間もなく合流地点に到達します。」

場所は代わってここはソレスタルビーイングの移動母艦、トレミーのブリッジ。

ここでは刹那たちの脱獄をサポートして、彼らの身柄を確保するためにも着々と作戦が進められていた。

「いい、皆医務室の準備は忘れないでね。それから、成り行きでまた人が増えるかもしれないからその分の確保もできる様に。」

スメラギが次々と指示を出して行く。

「こっちは終わりました、あとはステルスフィールド？を使えばこちらの準備は終わりです。」

フェルトが画面に表示される様々なファイルに目を通しながらスメラギに言った。

「開始まであと0030秒ですう〜。」

ミレイナがモニターに映るタイマーを見ながら全員に時間を伝える。

「リジエネ、ステルスフィールド？の準備はいいわね。」

スメラギが最後の確認をする。

「大丈夫、粒子チャージ率108%いつでもいけるよ。」

「ミッション、スタート！」

スメラギの声と共に広範囲に赤いGN粒子が散布されて行く。

「目標発見、予定通りのタイミングですう。」

ミレイナがいち早く脱出してきた小型船を見つけ、周りに知らせた。

モニターに映される赤い粒子を放ちながら進む一気の小型艇。

周りには二つほど連邦軍の小型艦が護衛の様にそれを挟んでいた。

「敵影発見！距離3000！」

フェルトがその後ろを追跡する五機のジnkスの存在を知らせる。

「お任せだ、狙い撃つぜえ。」

それを聞いたロックオンが待ってましたとばかりに声を上げた。

バシユウウウウ

ピンク色のビームが五本、綺麗な直線を絵がいて放たれる。

「百発百中だな」

見事に命中した五本の直線が赤い光の爆発と共に消えたのを見て口ツクオンが少しだけ笑みをこぼした。

「小型艦の収容完了したです！」

ミレイナの言葉より早くフェルトが席を立って駆け出していた。

「えっ？ちよっと、グ、グレイスさん？」

ミレイナが止めるのも聞かずにブリッジを飛び出していったフェルトを見て、残りのメンバーが少しだけ表情を緩める。

「さあ、もうひと頑張りね。」

「刹那……………」

最愛の人物の名前をこぼしながら必死に通路をかけるフェルト。

いつもなら歩いていてもそれほど時間がかかっていない様に思える距離が、今は果てしなく長く感じる。

移動用のエレベーターを使って格納庫へと向かう。

扉が空く音と共に駆け出してまっすぐな通路を進む。
その先に光が見える、おそらく格納庫の照明だろう。
その先には彼が待っている。

フェルトはその足を更に早めて先へと急いだ

そして、

「刹那？」

小型艦から出てきたばかりの刹那に飛びついた。

バランスを崩すことなくそれを受け止めた刹那が優しく微笑みながら彼女を見た。

その目には少しだけ涙が滲んでいる、

「待たせたな、フェルト。」

約束は…

「このモニュメントを作ったデカルトって人はね、刹那のことを、平和の使者だ、って言ったんだって。」

二人の人影が美しいモニュメントのまえで並んで立っていた。

「平和の使者……か、俺には似合わない言葉だな。」

少しだけ苦笑を浮かべながら優しい瞳でフェルトを見つめる刹那。

「そんな事ないよ。刹那がいたからこのモニュメントがあるんだよ。だからやっぱり、刹那は平和の使者なんだよ……」

フェルトが小さく笑いながら答えた。

「寒くなってきたね……」

「そうだな、もう戻るか……」

そう言って刹那がフェルトの方を見ると、まだもう少しだけ、とフェルトが答える。

「ねえ、刹那。一つだけお願い聞いてくれる……」

寒そうにつないだてを少し強く握ったフェルトが囁いた。

「ああ、かまわない。お前が望む事ならできる限りの事をするわ…
……」

刹那が微笑みながらその手を包む様に握り返す。

「一つだけ約束をして欲しいの……」

「約束？お前を一人にしない約束ならもう、」

少し意外な返事に驚き聞き返した刹那。

「うん、約束…だめ…かな」

少しだけうつむいて答えるフェルトのほおに手をやり視線を合わせた刹那が答えた。

「構わないさ、それがフェルトの望みならな」

「約束は……」

絶対にあなたも一人にならないで

――
――

「刹那？」

刹那の元に飛び込んだフェルトはそのまま彼の胸に顔をうずめて泣いていた。

「フェルト、大丈夫か……。」

「それは……わたしが……言うセリフだよ……刹那……。」

言葉をつまらせながらも少しだけ笑顔でフェルトが答える。

そんな様子を小型艇の出入り口からおりかかったところで見せつけられた四人は

「おいおい、マジかよあれ…すげえなおい…。」

「あ…えっと、なんか空気になってませんか？私たち…。」

「これは、感動の再開とか言っちゃつですかね。」

「うーん、いい絵になるネエ。」

などと、口々に囁いていた。

そして、アーシャンは

「あれ、これはいった、うわあ！」

同じ様にその様子を見て近づこうとしたアーシャンの口を抑えてカタギリが小型艇の影に引きずり込んだ

「しーっ？ダメだよ今は。」

カタギリが口のまえに手を当てたまま囁いた。

「もがぁぁーぶうううー！」

それをほごうと必死になるアーシャン。

「良かった……ほんとに良かった！」

泣きくじやるフェルトの頭を撫でながら刹那が囁いた。

「約束しただろう、お前を一人にしない、そして、俺も一人にならないと……俺は必ずお前のそばにいる。」

そのままフェルトの頭を撫でながらも彼女から視線を外すと、そのまま周りの仲間に声を掛けた。

「みんな、ありがとう。詳しい話はあとです、とりあえず休んでくれ。」

刹那はそれだけ言うと再びフェルトに視線を戻して彼女と共に自らの部屋に向かって行ったのだった。

「うむ、いい光景だな、少年よ……。」

一人全く動かずにその様子をそばで見届けていたグラハムが何かに納得した様に頷いた。

一方、アーシャンといえば、

「もがあああ、なんでこんな事したの？全然面白くないじゃん！」

ようやく開放されたアーシャンがカタギリの頭を叩きながら喚きだしていた。

「いたつ、いたいから！ちょっと、あの場の空気はどんなのかわかるでしょ？」

殴られながらも必死に言い返すカタギリ。

もともとあまり強く無い上にアーシャンは普通の大人を倒せるほどの身体能力の持ち主だ、

「あー、もう楽しくないっ！」

抵抗する術の無いカタギリを容赦なく叩き続けるアーシャンがその手を止めて声を上げた。

「早く帰ってタークスたちとゲームやりたいよぉ〜！」

「やれやれ、先の思いやられる事だな。」

再びグラハムがつぶやくと、コンテナの入り口から数人のクルーが現れた。

「みつともないわね、ヒリー。」

先頭にいたスメラギが殴られ続けて少し服が汚れているカタギリを見て言う。

「ご協力感謝します。ソレスタルビーイング戦術予報士のスメラギです。」

そういったスメラギは一同を連れてブリーフィングルームに向かったのだった。

とある過去

これは、少し昔の話

まだニールが生きていた頃の、何気ないある人物たちの会話の話

「例えばリボンズ、世界を急変させるにはどうすべきだと思います。」

二人の男が薄暗い部屋の中で向かい合って座っていた。

二人の間には一つのテーブルとその上にあるチェス板。

「世界を…ですか。難しい質問ですね。……………あなた
がいつも言ってる事になりますか……………圧倒的な力を容赦なく世界
にぶつけられるのでは。」

リボンズと呼ばれた薄緑の髪をした青年が少し考えるそぶりを見せた後、盤上のコマを動かしながら答えた。

カチリ、

静かな部屋にコマを動かした事を知らせる様に、コマをおく音が聞こえる。

「まあ、半分正解だな。」

それに返す様にコマを動かすもう一人の男。

「半分はあっているんですか。」

「そうだな……だが、それもあくまでも力による一時的な線路の歪みを指す事にしかすぎんよ。」

男はそう言うと、片手に持ったワイングラスに口を付けて少しだけ中のワインを口に含んだ。

「そうなのですか……いつも貴方が仰られている事のはずなのですが………違いましたか？」

少しだけ驚いた様なそぶりを見せたりボンズが再び自分のコマを動

かす…

一瞬の静寂の後、

「いや、確かに私が常に言っている事ではあるが、私の求める答えではないな……………」

男はワイングラスを机の隅におき部屋の奥にかかった壁画に視線をやると、そのまま一人喋り出した。

「私は常に現在よりも先の世界を見る為の答えを求めているのでね。では、その為には何が必要か……………、それは……………？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？　？」

「圧倒的な力を操作できる支配力と影響力だ。」

怪しい笑みを口元に浮かべながら男は再び盤上に視線を落とす。

「力はGNドライブ、影響力は国連大使としての実績……………支配力はヴェーダ。私に足りないのはこのうち二つ。だが、それは君の存在によって解決される……………」

「

「僕の、いや、イノベイドという存在が鍵なのであれば他の監視用のイノベイドを利用してもよかったです……………」

軽い冗談の様にリボンスが言葉を遮った。

「ふふっ、そうだな……だが、わたしには君が私の運命を変えるエソジェルに見えて仕方が無いのだよ……まあ、あまり現実的な話ではないが、そう言うわけだと思っておいてくれたまえ。」

そついう言葉と共に最後のコマを動かした、

「チェックメイト……私の勝ちだな。」

男は席を立ち上がるとそのまま外を見つめた。

視線の先には月、

雲一つ無い夜空にひときわ目立って輝く美しい月が一瞬、緑に輝いた様に見えた。

「今宵が彼らにとっての分かれ道……果たして、彼らはどちらに転ぶのだろうか。」

彼はまだ知らない、そして、リボンスもまだ知らなかった。

お互いの仕掛けた罫の真実に

――
――

「なるほどね、疑いをかけられた拳句、新人だから味方してくれる人もいない…か。可哀想な話だけど仕方がないわね。」

場所は変わってプトレマイオス内、ブリーフィングルームでスメラギらトレミーのメンバー一行と、共に脱走して来たホンジョウらはこれからの事について話し合っていた。

参加しているメンバーはフェルトを除くブリッジのメンバーにイアンとリンダ。

「できればしばらくここで匿っていたいただきたいのですが……。」

サガライがスメラギに頼みこむ。

「うーん、困ったわね。しばらくトレーニーに居てもらうのは構わないんだけど…いろいろ見られたらまずい設備があったりしちゃうのよ。」

スメラギが困った様に肩を竦めた。

「ならいつその事こいつらも組織に入ってもらうってのはどうだ？
なかなかセンスあるみたいだしよ。」

それを見兼ねたラッセが提案した。

「そうね、でもそれなら先に聞く事があるわ。貴方たち、家族はいる？」

「いえ、私にはいません。もともと孤児院出身なんで。」

「右に同じだ、俺にも家族はいない。」

「僕もいませんね。」

「えっと、僕もいないんですけど。」

四人が答えにくそうに返した。

「分かったわ、仕方が無いわね、あなたたちにもソレスタルビーイングのメンバーとして働いてもらう事にします。」

スメラギが話をまとめると、それに同意する様に他のメンバーも首を縦に降った。

「よろしくお願いします。」

ホンジョウがスメラギに手を差し伸べる。

「ええ、よろしく。」

新たな仲間が増えた。

その頃、アーシャンは、

「ねえねえ、そろそろ刹那兄ちゃんところ行ってもイイかな。」

目を輝かせながらカタギリとグラハムに迫っていた。

「あー、その、なんて言うかあれだよ、ねっ、今は空気にダメっ
ていうか。その、なっ、なんか言っちゃってくれないかいグラハム。」

「

困った様にグラハムに救済を求めるカタギリだが、

「アーシャンよ、その気持ちしかと受け取った。共に少年の部屋まで以降ではないか！」

完全にアーシャンに乗ってしまった。

「よーし！レッツゴー？」

そういいながら、ボロボロのカタギリを引きずってグラハムとアーシャンは通路を進んで行くのだった。

許される時間

「フェルト………すまなかつたな」

自らの膝の上に頭を乗せてスヤスヤと寝息を立てるフェルトの神を優しく撫でながら刹那が呟いた。

ここは刹那の部屋、

先ほどの帰還からすでに三時間近く経ったであろうか。

フェルトは彼の部屋に着くなりあまりの疲労の為か、そのまま寝てしまったのだった。

確かに、いろいろな事が唐突に起こりすぎた。

まずは、自分が確保されてしまった事。

そして、新たな仲間が増えた事。

ペインチェンジャーの一員である兵がまだ子供だった事。

そして、クジャノ・ミトとクジャノの関係があるのか無いのかという疑問。

まだ、やるべき事は多いな。

柔らかなフェルトの髪を撫でながら右手に持った端末の画面に目をやる。

映るのは日本でとった二人の写真、

俺の、全てをかける者が、映っている。

そして今、自分の目の前にもその人がいる。

そう、この時間を俺はいつまでも続ける。

たとえ、自分が人でなくなっても。

「うにゃ……………刹那……………、もう一人じゃないよね。」

髪を撫でられたのがくすぐったかったのか、少しだけ顔を背けるとフェルトは小さく寝言を呟いた。

「ああ、俺もお前ももう一人じゃない。大丈夫だ。」

その言葉を聞いた刹那は優しく彼女に語りかける。

しかし、あまりに幸せそうに寝ている彼女を起こすわけにもいかず、かれこれ二時間近くベッドの上にいる刹那も、ここの所のドタバタでかなり疲労が溜まっていた。

「少し眠るとするか……」

そういつて刹那は彼女の寝顔にそっとキスをする、そのまま眠りへと落ちていった。

今は許される、二人だけの夢の中へと……

「早くしてよお！遅すぎるよ〜。」

その頃、刹那の部屋に突撃しようと張り切っていたアーシャンは、ブトレマイオスの通路を走っていた。

「待ちたまえアーシャン、焦ってもいい事はないぞ。」

その後ろ、十m程度離れた場所からグラハムが追いかける。

「早くしないと、刹那兄ちゃんの部屋に入れなくなるかもしれないんだよお！はやくはやく。」

遅れるグラハムの説得を耳にもせず、アーシャンは全速力で通路を走り続けた。

その時、

「ごんっ？」

「ぶぎやっ？」

「どわっ？」

町と曲がり角を出てきた人影にアーシャンは止まれる事なく突っ込んでしまった。

鈍い音と共に崩れ落ちる人影。

「ってーなおい！……て、お前は……」。

鳩尾に直撃を食らったロックオンが声を上げると、アーシャンは不思議そうな顔で彼を見つめた。

「緑のなのに緑じゃない、あーあ、つまんない。」

「はっ?」

アーシャンはまるでロックオンに飽きたかのように吐き捨てると、そのまま刹那の部屋へと駆け出していつてしまった。

「ちよっ、お前待ちやがれ!」

駆け出したアーシャンの方に声を上げるがそこにはすでにアーシャンの姿はない。

「たくっ、あいつなんなんだよ。」

「すまない、ここは通させてもらおう?」

「なっ、あガッ?」

そして後ろからきたグラハムは道をふさいでる様にも見えるロックオンを後ろからなぎ倒し、そのままアーシャンを追う様に消えて行った。

許される時間（後書き）

更新遅れて申し訳ないです、

三日分一気に出したいと思えますf^_^ | ^_^ ;)

新しく始まる日々へ

「世話係？なんだそれは……………」。

刹那らの脱走から二週間の時がすぎ、新たなメンバーも含めて各々が新しい生活に慣れ始めた頃、定例事項であるブリーフィングでそんな議題が上がってきた。

現在、ブリーフィングルームにいるのは各マイスターに加えてブリッジのメンバー、さらにはグラハムにカタギリを加えた新しい面子となっていた。

しかし、どういふわけか彼らの顔や腕には絆創膏やら湿布やらを貼っており、普通の状態ではなかった。

「ええ、そうよ。ヴァンガード君の相手をする係りの事。」

この議題を持ち出した張本人であるスメラギが自信ありげに答える。

「いや、しかし、なぜいきなりそんな事を……………」。

いきなりの議題に若干戸惑う刹那だが、それとは逆に、周りのメン

バーはこの議題は当然の事かのように受け入れていた。

「なぜって、決まっているでしょ。あの子はものを知らなすぎるところか、脳量子波の使い方も戦闘の時以外での使い方が分かってないらしいのよ。これを放置するわけにはいかないでしょ。」

スメラギが笑顔で答えるが、その笑みには暖かさの端くれもなかった。

あるのはただひとつ、

激しい怒りの感情のみだった。

一体、彼女の身に何があったのだろうか。

「そうよね、皆？」

スメラギの言葉に同意する様に頷く一同。

こここの所、久しぶりの休養をもらいフェルトとずっと二人だけの世界に入り浸っていた刹那は知らなかったが、この二週間ほどの間にアーシヤンの手によってどれほどの被害が出たのかは言うまでもない。

それを語るのはまた別の機会として、とにかく、早急な対処が必要な状況には変わりなかったのだった。

「そこで……私に名案があるんだけど……。」

スメラギが怖いくらいの笑みを浮かべながら刹那とフェルトの方を見て言った。

「あなたたち二人にお願いできないかしら？」

「はっ……………」

「えっ……………」

突然のスメラギの言葉に硬直する刹那とフェルト。

「いやね、これからの事を考えればこんな経験も必要かな？なんて思ってたところなのよ。ちょうどイイしよろしく頼むわ。」

硬直する二人をおいて、スメラギが次々と話を進めて行く。

「それじゃあ特にこれ以外に話す事はないわね。じゃあ、刹那、フ

エルト。よろしくね！」

「まっ、待て。なぜ俺たちなんだ？」

刹那が少し慌てながら周りのメンバーに声をかけるが、誰も聞こうとはしなかった、否、誰も聞けるはずがなかった。

スメラギの発する謎のオーラによって周りのメンバーは全て平伏されていたのだ。

「刹那……。」

フェルトが少しおどおどしながら刹那に声を掛けた。

「フェルト、少し待ってる、今すぐこんなの取り消して「私、やってもイイよ。」」

今にも行動に出そうな刹那を引き止めながら、フェルトがそういった。

「フェ、フェルト？本気か？」

驚いた様に聞き返す刹那。

「うん、私とじゃ、いや？それなら諦めるけど……」

フェルトがしおらしくうつむいてしまった。

ヤバイ！これは

何かを感じ取った刹那がすかさずフェルトに目を合わせて微笑みながら答えた。

「構わないさ、フェルトの頼みならな。」

そんな甘いムードを見ていたスメラギは、怪しく笑っていたのだっ
た。

新たな日々が幕を開ける

一方その頃、一人遊び疲れたアーシャンは、気持ち良さそうに格納庫のコンテナの近くで昼寝をしていた。

そんな彼が見る夢は…

あの日の、事だった。

誰かが僕を呼んだのかもしれない、

ただ、わけのわからない装置を取り付けられて、大きな機械の中にいるだけの日々。

意識は、ある。

体は、動かない。

何も変わらない、いつからだろうか、こんな風になったのは。

いや、はじめからこうだったのかもしれない。

ここでの思い出なんてない、勿論、過去の記憶なんてものも存在しない。

あ、ちょっと意味が違うかな。

記憶が無いんじゃないかと、毎日が全く同じなんだ。

毎日の様に同じ様な疑問を抱き、それを問い続ける日々、体が動くわけでもなく、目の前に映る景色が変わる事も無い。

そんなある日、

新しい世界が僕を呼んだ

突然いつもの景色が赤くなって、大きな音が鳴り響いてきた。

「なっ？何をする、やめろおお？」

誰かの声と共に乾いた音になる。

そして、

「新しい世界に出たいか？今まで我々を受け入れなかった奴らと闘いたいか？」

優しそうな男の人が僕に向けててを差し伸べた。

不思議だ、今なら体が動く気がする。

少しだけ明かりが眩しく感じて、不思議と相手の顔と差し出される手しか見えなくなった。

自分の体に力を込める…

動ける、僕は変われる

僕は……

「新しい世界が見たい？」

手が、届いたんだ。

僕の日々はこれからだよ、

待っててね、新しい世界！

裏切り

「おいゼフィアス……どうすんだよ。」

微妙に薄暗い部屋の中に一人の青年の声が聞こえた。

「……………」

声をかけられたゼフィアスの方の返事はない。

「おい！聞いてんのかよ？アーシャンが捕まってるんだぞ？」

しびれを切らしたかのように落ち着いていた青年の声が激しいものへと変わった。

響き渡る声が何度も重なるように部屋に反響する。

しかし、一行にゼフィアスはうごく気配を見せずに、その場で目をつむって黙りこくっていた。

「おい！ゼファイア……「はい、ストップストップ。」」

「あーあ、そんなに怒鳴っちゃって……兄弟喧嘩もほどほどにしないとかないとねえ……そんなんじゃアーシャン君助けられないよお。」

そんな中、場違いな声が彼の言葉を遮った。

相手を挑発するような本質をつかみ取れない声。

「てめえは……黙ってる？」

その声を聞いて、ただでさえ気が短い青年はその声の主へ殴りかかった。

が……

「ふっ……。」

ガシッ！

その行動までもをもあざ笑うかのように声の主は自分に迫る拳を掴

みそのまま引き寄せた、

そして…

ガシャン！

「ガアッ……………」。

青年の背中が地面に叩きつけられ、金属の床がきしんだ音が響いた。

倒れた青年の喉元に手をかけ、クジャノはバカにしたように囁いた。

「バカだよねえ、どんなに頑張っても僕には勝てないのに……………もう少し大人になろうよ。」

「くっ……………そ……………が……………」

人の力ではあり得ないほどの勢いで叩きつけられた青年は睨みつけるように目を細めたが、そのまま意識を失ってしまった。

ガチャリ、

その後ろで銃を構える音が聞こえた。

「その手をどけてもらおうか、Mr・クジャノ……………」。

ゆっくりと振り向いたクジャノの眼前には、顔色一つ変えずに銃を構えるゼフィアスが立っていた。

「へえ、これはどういっつもりかな？まさか、僕を裏切るつもりかい。」

それに臆することなく喋るクジャノ。

「ええ、少し我々の目的が変わったのでね。貴方の存在価値はもう無い。」

冷静に話を進める二人だが、その間には計り知れないほどの思考が張り巡らされていた。

そして…

「ここまでだね！サヨナラだ。」

クジャノが一瞬にしてその場を離れた。

「くっ！まてっ。」

すぐさまうごいた方向に銃を向け発砲するゼフィアスだが、その素早い動きに翻弄され、全く狙いが定まらない。

「ははっ…そんなんじゃ当たらないよ。」

ゼフィアスから遠ざかるように移動するクジャノがかれの方向に向けて声をあげた。

自分が直前に移動した場所には数発ずつ弾丸が撃ち込まれている。

今はよけられているとは言え、恐ろしいほどの正確さである。

だが、彼には全てのものがまるで止まっているかのように見えていた。

眼の前に放たれる数発の銃弾の回転、そこに刻まれた刻印、自らが走りながら踏んだ小さなプラスチックの破片まで、ありとあらゆるものが見えたのだ。

「やっぱり、これを使うと自分が人じゃないってわかるな……。」「
よけ続けるなかで、そんなことをクジャノは呟いていた。

もう時期増援もきちやうだろうし、早めに決めようか。

そう考えたクジャノはすぐさま、腰のホルダーから時限式の爆弾を取り出すと、そのままかれの方向へ投げつけた。

カラン

乾いた音のあとに豪快な爆発音が鳴り響く。

爆煙のなかをクジャノはまるで相手の位置がわかるように進んで行

き、ゼフィアスの目前まで迫った。

「このっ！」

それに気付いたゼフィアスがクジャノに対して蹴りをいれる。

しかし、それは全く当たらずに空を切った。

「いくら君たちが人並外れた力を持っていても、僕には勝てない…
覚えておいてね。」

その言葉とともに蹴りをかわしたクジャノが携帯ナイフをゼフィアスの喉元に突き出す。

「グツ……。」

目前で刃を止めるクジャノ。

燃え上がる部屋のなかで、二人の青年の影が浮かぶ。

「まあ、今は生かしてあげるよ。でも、もう共闘することはないね……………」

段々と喋りながら端末を操作すると、その直後、部屋に轟音が響き渡った。

「今度あったら敵だと思ってくれていいよ。」

響き渡る轟音のなかで、確かにそうクジャノは言った。

そしてそのままゼフィアスの鳩尾に強烈な一撃を叩き込むと、部屋を走り去って行ったのだった。

その後のタークスは…

薄暗い部屋のなかで、今だに痛む腰の傷をさすりながら部屋の明かりをつけた。

目の前には一台のコンピューター、

俺はそいつの電源をつけると、そのまま一番したにある個人用のファイルを開いた。

数回のパスワード入力を経て、画面に大量の文字が並ぶ。

「連邦コロニーからの脱走事件について……なかなか、情報が集まらないな。」

クジャノの脱走から、数日の時がすぎた。

あれ以来、連邦の動きもつかめないまま、ただ、アーシヤンの所在を探すことに必死になっていた俺だが、今日をもって、アーシヤンの搜索は一時中断となった。

え、なぜそんなにすんなりといえるのかって？

そんな分けないだろ。

これでもかなり反対したんだ。

でも、アーシャンが向こうの軍の施設を脱走してからゼフィアスは俺たちの意見をほとんど聞いてくれなくなっちゃまってさ。

なんていうかその、

心を閉ざしちゃった、ってやつかな。

まあ、そんなんだから俺もゼフィアスに逆らうのはやめて、こうして毎晩個人的に調べてるわけよ。

カタカタカタカタカタカタ、

カチツ、

男を簡単に引つ掛ける方法
by 戦術予報士

「これじゃねえ。」

カタカタカタカタカタカタ、

カチツ、

武士道とは何か！

その真実に迫る。by ブシ仮面

「こんなんでもない。」

カタカタカタカタカタカタ

カチツ、

筋トレ日記。

by 空気の操舵手

「わけわかんねえ。」

カタカタカタカタカタ、

ガン！

「あー！もうなんにも出てこねえ？」

調べても調べてもわけの分からない日記やらブログばかり出てきやがって肝心なのが一個も出てこない。

俺はとうとう苛立ってコンピュータの電源を落とすと、そのままベツトに突っ伏した。

疲れた……

この所、一睡もしていないような気がする。

今だに違和感の残る腰に手を当てて少しだけ顔をしかめる。

「あのやろお、まだいてえじゃねえか。」

数日前に思いつきり床に叩きつけられて以来、まったく腰のだるさが取れずにいる

のちにミルティアに見てもらったところ、

一般人なら腰が折れてそのままご臨終だったわね。

だそうだ。

アーシャンは見つからない、

クジャノにはボコボコにやられた拳句、逃げられた。

ソレスタルビーイングの奴らの所在データも皆無に等しい。

「あーあ、つまんねえ……。」

そう呟いたタークスはそのまま眠気に身を任せ、夢のなかへ落ちて行くのだった。

PNC・008ファントム(前書き)

更新遅れて申し訳ないです^^;

今時はやりでもなんでもない胃腸風にかかってしまいました(| ;

体調管理に手を回せなくなるとはこれいかに…

作者は受験シーズンなので、少しこれからペース落ちるかもです。

でも、暫くは寝ている間に書きダメした分があるので大丈夫かと思われます。

これからもよろしく願います。

「おい、起きろ。」

刹那はベッドの横に並べた簡易ソファ―に寝る少年に声をかけた。

返事は……

ない。

すでにフェルトは起きているようだった。

なぜこんなことになっているのか。

それは少し前の話を読んでくれ。

まあ、そんなことでこの少年、アーシャンの世話を二人ですること

になったおれとフェルトだが、昨日はアーシャンをおとなしく寝かせる為に二人とも大変な目にあつたものだ。

今ならあの時のスメラギの気持ちもわかる気がするな……………

「おい…………朝だぞ。」

少しだけ体を揺すがまったくそれがうごく気配はなかった。

まるでとても住み心地のいい雲の中で寝ているかのような素晴らしい寝顔だ。

しかし、今の俺にとってそれは障害でしかなかった。

さて、どうしたものか、と…………

寝癖のついた頭を軽くかきながら刹那は自らのベッドの傍にある端末を取り出した。

俺は起きたアーションをおいて、そのまま朝の支度を始めたのだ
た。

――
――

「頼まれていたものがわかった？本当なのか。」

朝、アーションとフェルトとともに朝食を食べに食堂へ足を運んだ
俺に、同じく、朝食を食べていたイアンからそんな話をきいた。

「ああ、本当だ。お前さんの言った通りに、ちゃんと基礎回路から
粒子の調査結果までまとめといたぞ。ほれっ！」

俺の言葉を聞いたイアンが鼻を高くしてメモリーを俺の方に渡した。

「いやー、ほんとに苦労したんだぞ……。」

そのまま語り始めたイアンを放っておいて、俺は渡されたメモリー
をすぐさま端末に差し込んだ。

ピリリリリ。

電子音とともに次々とデータが解凍され読み込まれて行く。

100%読み込み完了。

その文字を確認すると同時に、横にいたフェルトにもそのメモリーを渡した。

こくん、と頷いた彼女は俺と同じようにメモリーを端末に読み込ませ始めた。

その間にも俺は開いたデータを読み進めて行く。

白銀の機体、及び謎の白銀の粒子について。

今回の件で入手されたペインチェンジャーの使うMSは、基本スペックから見ても第一世代、つまり、Oガンダムからソレスタルビーイングとは別の発展をさせた機体であることがわかった。

あくまで推測ではあるが、おそらくはイオリア計画の中で秘密裏に作られていた別の組織からの漏洩と見て良さそうだ。

主な武装のシステムは基本的に同じだが、現状で作れる最小のGNファンングよりもさらに小型化されているファンングがあることや、逆に基本的な武装であるはずのGNフィールドの展開の仕方がまった

く違ったもので、こちらよりもかなり効率の悪い内容であることから、それなりに違いがあるようである。

この機体のみの話だが、アーシヤンに頼んで内部に組み込まれたデータを閲覧したところ、機体番号PNC-008フロントムであることがわかった。

008というところから、彼らの保持する残りの機体は、これより前に作られた機体であるようだ。

「なるほどな、イオリアの計画からそれたもの……」

半分ほどを読み終えた刹那が顎に手を当てて考え出す。

基本スペックは俺たちの機体と同種別系統の機体。

PNC-008フロントムか…

それに俺たちを上回る武装も一部もっていること…

「まあ、まだ推測の段階だがな。それよりも、その先の内容見てみる。きつと驚くぞお。」

それを聞いたイアンが嬉しそうに先を読むことを進めた。

考える姿勢を解いた刹那が画面をしたにスクロールして、残りの分に目を通し始める。

暫くの沈黙のあと

「これは本当なのか……イアン。」

刹那が急にいつになく真剣な様子でイアンをまっすぐ見た。

「ああ、本当だ。彼らの使うGNドライブは……」。

核兵器を使ったものだ、

もう一度わかり合つて……

「核兵器……なぜそんな物が。」

刹那が少しだけ怒りを込めた言葉で呟いた。

白銀のGNドライブについて。

白銀のGNドライブから放出される粒子は、ソレスタルビーイングで使用しているGNドライブから放出される物と基本的には同じであることがわかった。

しかし、木星で作られたGNドライブとは違い、このドライブにはTDプランケットが使用されておらず、擬似GNドライブのように他の部位で間接的にエネルギーを供給しているシステムで、それに核兵器を使用することで、半永久的な活動を可能にしているようである。

そもそも核兵器を使うことが極限まで抑えられているこの世界情勢の中、現在の技術力ではこのMSサイズの中に核を組み込むことは不可能に近いが、フアングの時同様、恐らくはその点だけに関して組織の技術力を上回っているのだろう。

粒子が白銀に輝いていることについては、現在も調査中ではあるが、

なぜ白銀なのかは暫く分からないだろう。

「イアン、このことをスメラギには報告したのか？」

端末の全文をよみ、顔をあげた刹那が目の前に座るイアンに声をかけた。

「ああ、もちろんだ。すでにヴェーダでも調査してもらったが、やはりこの情報に関するデータは一切乗っていなかったな。」

イアンは少しだけ顔をしかめながら手元にあるボトルを手にとると、それを一気に飲み干した。

「まあ、使われてるもんは使われてるということだ。注意するのは彼らと戦うときにドライヴを傷つけずに倒すかということだな。」

そのまま立ち上がると、トレーを元に戻したあと、一言、あとでメモリー返しといってくれ、とだけ言って部屋を出て行ったのだった。

核兵器…

あれは人が使っているいい物じゃないんだ……

「刹那……、その。」

隣で同じく全文をよみ終えたフェルトが声をかけてきた、

「ああ、これで、この子を相手方に返すのが難しくなったな。」

フェルトの考えていたことを見透かしたかのように刹那は答えると、横で夢中になってライスのかたまりを頬張っていたアーシヤンの方を見る。

「ん？刹那兄ちゃんもたべる？オニギリっていうんだよこれ。」

それに気づいたアーシヤンがまださらに残っていた二つほどのかたまりを指差しながら喋りかけてきた。

「……………こうしていればただの子供なのにな……………」

少しだけかなしそうに呟いた刹那は、自分のトレーを手にと

「あまりあの男のことを真に受けすぎてはダメだ…いろいろな意味でな…。」

それだけアーシャんに忠告をしてランチルームを出て行ってしまったのだった。

「刹那兄ちゃん、どうしたのかなあ。」

不思議そうな顔をしながらも、アーシャンは新しいオニギリを手にとって頬張り始めた。

「刹那……………」

その一部始終を見ていたフェルトは心配そうに扉の方を見つめたまま固まっていた。

アーシャンの一件以来、再び少し周りに冷たくなってしまった気がする。

なぜなのだろう、

刹那がアーシャンを過去の自分と重ねてしまうから。

それとも、

核兵器という恐ろしい武器が再び使われるから？

それとも……………

考えるだけで胸が苦しくなってきたら？

私は刹那の力になれていない……………

彼の重荷になってしまっただけ……………

違う……………

そんなことはない……………絶対に。

じゃあなんでこんなに苦しいのだろうか。

自分の胸元にあるペンダントに力がこもる。

あのときの約束は……………

「フェルト姉ちゃんだいじょうぶ？」

「えっ？」

突然かけられた声にびっくりして、変な声をだしてしまった。

慌てて横をみると、そこには心配そうに私を見つめるアーシャンがいた。

「う、うん。だいじょうぶだよ。ねっ……」

無理に張り切って声を出そうとするがうまくいかない。

「刹那兄ちゃんと喧嘩でもしたの？そしたらちゃんと謝らなきゃダメだよ。」

そんな私の気持ち察したのか、アーシャンは少しだけ悲しそうな顔をしながらも、私を励ましてくれた。

「うっん、喧嘩じゃないけどね……でもね……。」

書けられた言葉を否定しようとしたところで声が止まった。

そうか、謝らなくちゃいけないんだ、

私はまだ刹那のことを全て知ってるわけじゃないんだ。

他の人より少しだけ多く知ってるだけ……

まだ知らないことの方が多いんだ……

なのに私は知った気になって、刹那が帰ってきてからも彼に甘えてばかりだった。

あのおときから刹那は辛かったはずなのに……

「そうだね、謝らなくちゃいけないね。」

私はそう言って席を立ち上がると、柔らかいアーシャンの髪を撫でながら……ありがとう、とだけいうと、そのまま刹那を追ってランチルームからでたのだった。

刹那とちゃんと話したい、

今度こそ、ほんとに約束を果たす為に。

絶対に、一人にならないで。

クジヤノ・ミト(前書き)

新年あけましておめでとございます

クジャノ・ミト

『お前の信じる道はもうない！アリアル・サーシエスはもういないんだ！』

漆黒の空の中、二機のモビルスーツが戦っていた。

方や緑の粒子を放ちながら、方や赤い粒子を放ちながらぶつかり合う。

『君の見つけた未来は存在しないさ。だから……………ここでサヨナラだよ！』

片方の機体、ジnkスがライフルを捨てビームサーベルでエクシアに斬りかかった。

すかさずGNソードで受け止めるエクシア。

鏝迫り合いのままクジャノが声をあげた。

『僕の見つけた未来こそが、僕を満たすことのできる唯一の道！君たちの存在は必要ない。』

言葉とともにジンクスの出力が上がり、エクシアをそのまま小惑星に叩きつけた。

『があッ………、くっ、そんなことが、あるものかあああ！』

叩きつけられたエクシアがシールドを投げ捨て、ビームサーベルを引き抜く。

『無駄だよ。君では勝てない』

それに気付いたクジャノが右足でサーベルを蹴り飛ばした。

『君は覚えていないのかい。僕らがクルジスで模擬戦をやった時、君は何回やっても僕には勝てなかった。』

喋りながらサーベルを少しずつコクピットに押し込んで行く。

『クソッ！まだだ。』

エクシアの出力を上げようとするが、小惑星にぶつかっているせいでうまく働かない。

『いまでも同じさ、GNドライブと言つ圧倒的な優位性をなくした君に、僕を超えることはできないんだよ!』

サーベルがすぐ目の前にまで迫り、激しい火花が散っている。

『俺は……』

まだ死ねない……

俺は託されたんだ……

俺たちの、未来を……

『サヨナラだ! ソランッ』

『俺は!』

ガンダムで……

『世界を……変えるんだああああ!』

赤く輝いたエクシア、

そして…

『これは！』

蒼い羽を羽ばたかせながら、ジnkスを貫いた。

バチバチッと、漏電しながら貫かれたジnkスから通信が入った。

画面に映るクジャノ。

顔を俯かせていてよく見えないが、口元だけ少し映っていた。

その口元は…

『なぜ笑っている！答える！』

画面に向けて刹那が声を上げた。

ゆっくりとその顔が上がる、

『ふふふふふふ、ははははははははははっ！これが、これが、君の下した決断。そうなんだね！ふふふふ、そうさ、後悔するといいい自らの決断を！』

負け犬の遠吠えには聞こえなかった…

ただ、その時は気づけなかったんだ…

俺が、クジャノを殺すと言つ決断をしたその間違いに

「おい、ホンジヨウ。」

コンテナでMSの整備を手伝っていたトリカミは、休憩時間の合間、サガライとともにブリッジで手伝っているホンジョウに会いにきていた。

「ふえ？何ですか。」

こちらもたまたま休憩だったようで、ブリッジから少しでた廊下を一人歩いていた。

「調子はどうですか？」

サガライがホンジョウに聞いた。

「うーん、どうかなあ。」

少しだけ顎に手をあて考える
ホンジョウ。

「なんて言つかその、知らないことが多すぎてショックかな。」

「知らないこと？何だそりゃ。」

トリカミが飽きたように聞き返した。

「うん、知らないこと…。」

そんなことも気にせずきっぱりと言うホンジョウ。

「まあ、イイでしょう。ところでホンジョウ、あなたは確か脱走時に連邦のパスワード解除用のメモリー持っていませんでした。」

「あ！忘れてたあ、」

サガライの質問を聞き、思い出したように手をポンツと打ったホンジョウは、ポケットから端末を取り出して、そこにはめてあったメモリーを外した。

「これだよね？」

外したメモリーを手のひらに乗せて差し出してくるホンジョウ。

「ええ、それだと思います。」

差し出されたメモリーを受け取ってサガライは自分の端末に差し込んだ。

「でもなんでいきなりそんなのが必要になったの。」

ホンジョウが首を傾げる。

「イアンのおっさんがグラハムさんたちリターンフラッグスの機体を整備するのにパスワードが解読できなくて困ってんだと。」

トリカミがやれやれとでも言うように答えた。

「ふーん…まあイヤ。二人とも、仕事頑張ってね！」

休憩が残り少ないのに気付いたホンジョウは、手を降りながらブリッジへと走り去って行ったのだった。

「さて、俺たちも戻るすつか。」

「そうですね、と、そういえばクジャノはどこに行っただんですかね。」

先ほどまでは一緒に廊下を歩いていたはずなのに…

不思議そうに周りを見るトリカミとサガライ。

「まあいいんじゃないの、行こうぜ、コウ。」

二人はその場を後にしてコンテナへと向かうのだった。

—————

宇宙の闇が見える展望台のような部屋。

そこに目的の人物は待っていた。

「どつ言つつもりだ……。」

奥で一人宇宙を待つ目でたっている青年に話しかける。

「クジャノ・ミストレネ、アリアル・サーシエス。」

「？」

突然かけられた声におどろく刹那。

「ご存知ですよね。」

「ああ、お前がなぜその名を知っているのかは聞かないでおこう。」

言葉とともに刹那は人を超えた速さで青年に接近した。

「わわっ！」

慌ててそれをよける青年。

「やはりな、詳しい話を聞こうか。」

それを見て確認した刹那は瞳を黄金に輝かせたまま真っすぐ青年を見据えた。

「イノベイドだな、クジャノ・ミト」

振り向いた青年は少しだけ笑みを浮かべながら顔を上げた。

「その通りですよ、刹那・F・セイエイ、いや、ソラン・イブラヒム。」

交渉

「最初あった時、追い詰められていたお前がわすがだがイノベイドとしての力を使おうとしていたのを見てティエリアに調べてもらったが……。」

刹那がベンチに腰掛けたクジャノに対して喋り始めた。

「それは無理ですよ。」

その言葉を遮るようにクジャノが喋り出す。

「僕はヴェーダに存在しないイノベイド。ある人物の個人的な要望によって生み出されたイノベイドです。」

そっぴいながらクジャノはポケットから一つのメモリーを取り出した。

市販で流用されているようなものとは全く違い、変わった形のメモリー。

「これをどうしろと……。」

受け取った刹那が彼の顔を見ながら聞いた。

「まあ適当にはめ込めるのにはめてください。その中に僕を作った人からのメッセージが入っているそうなので。」

クジャノはそれだけ言うとそこを立ち去ろうと部屋の入り口に向けて歩き出した。

「まって……………」

それを止めるように声をかけた刹那。

「なぜお前の名前はやつと、同じな前なんだ。」

一瞬流れる沈黙、

刹那はクジャノの方を見据えながら体を向き直す。

その間も黙り続けているクジャノ、その背中からは何も感じ取ることはできない。

そして、

「一つ教えて上げましょうか……。」

クジャノはこちらに振り向きなおすと喋り出した。

「クジャノ・ミストレネと言う名前は実は彼の本当の名前じゃないんですよ。」

「何だと!」

衝撃の事実には驚き声を上げる刹那。

その間にもクジャノはたんと喋り続ける。

「理由は教えませんが、クジャノ・ミストレネに本当の名前はな
いんです。だからある人物が自分の親しかった人物を思い、彼にク
ジャノ・ミストレネと言う名前をつけた。」

話し続けるクジャノを前に刹那は言葉を失っていた。

「これで教えれることは終わりです、後は自分で調べて自分で考え
てください。」

驚いている刹那を見ながらクジャノは部屋の出口に向けて体の向き
を変え、一言だけいった。

「僕は紛らわしいの嫌いなので、今度からクジャノじゃなくてミト

って呼んでくださいね。」

暗い部屋の中、

刹那は一人、普段は開けることのない棚を漁っていた。

「これだな…。」

目的のものを見つけたのか、それを片手でつかむとそのまま中から取り出した。

取り出されたのは少し古めの機械。

以前、といっても、もうかなり前の話なのだが、クルジスで撮った写真が入った旧式メモリーを読み込む為、各地を放浪していた時期に個人的に取り寄せたものだった。

まさかもう使うまいとしまったままにしておいたのだが、

「こんな形で使うとはな…。」

ミトから貰ったメモリーを機械に差し込むと、見事にはまった。

機械を起動させると画面が明るくなり、一人の老人が映し出された。

誰だ……

髪の毛は少なくなり、残っている髪も大方白色になっている。
椅子に深く腰をかけているせいも少し小さく見えるが、かなり威厳
のありそうな老人だった、

「どうやら、うまく届いたみたいじゃな。」

画面に映る老人が突然喋り始めた。

「始めまして、わしはゴード、ゴード・フラストレーじゃ。まあ、
このビデオを見ていると言うことは上手くミトが運んでくれたよう
じゃの。」

さて、わしはある理由からお前さんとミストレネ、それにサーシェ
スについての過去を知っている、

まあ、今のお前さんが何に困っているのかまでは知らぬが、おそら
く、ミストレネのことであろう。

あやつには困ったものよ、あそこまで問題を引き起こすとはな。

さて突然だが、わしはサーシエスとある約束をしている、

その約束を果たす為にはいまのミストレネの行動を見逃すわけには
いかないのじゃよ。

そこでだ、わしの知っておる限りの情報をお前さんに伝えたいと思
う。

ただし、代わりにお前さんに一つ約束を取り付けたい。

内容は簡単

ミストレネの踏み外した道を正すこと。

それだけじゃ、

もし、この契約に乗ると言つのなら、ミトにワシの居場所を聞いて
ここまでできてくれ。

もし乗らないのなら、このメモリーを破棄してミトにそれを伝えて
くれ。

どちらを選ぶかはお前さん次第じゃ。

それから、

もしお前さんに来る気があるのならそのときは、フェルトと言っ少女も連れて来るようにしてくれ。

彼女に関わる大切な人物から伝言を預かっているのです。

それでは、いい返事を期待しておるぞ。」

ブツン

老人の言葉を最後に画面は暗くなり、あたりは静寂に包まれた。

刹那は無言のまま立ち上がると、機械からメモリーを外し、部屋をでてミトの元へと向かった。

アリアル・サーシエスの過去、

クジャノの過去

そしてフェルトに残された伝言

いろいろと聞くことがありそうだな。

目的の人物を探す為にコンテナあたりからと思っていた矢先、

正面に一人の人物が現れた。

俺はそれに対応するように銃を構えた。

相手はピタリと動きを止めてこちらを見ている。

「あー、廊下でそう言うことやられると本当困るんですけど。」

「いつからそこにいた。」

相手の話を聞くことなく質問する刹那。

目の前に立ち尽くす青年、ミトはそのまま、やれやれとでもやるかのように肩をすくめると

「僕はゴードに頼まれたからここにきているんです。返事を聞く為にここで待たせて貰っただけですよ。」

そういつてため息をついたのだった。

銃を構えるのを解くと、刹那はその銃を腰にしまって言った。

「そうか、なら話は早い。

その話………

「。じ。」。

交渉（後書き）

現在、これを執筆しながら同時進行で様々なキャラを登場させる
クロスオーバーてきなものを書いているのですが…

登場させるキャラはどんなのがいいでしょうか（ー；）

まあ、ただてさえ最近ペース遅いのになんなん書いてんのかよっ！
なんて言われたら何も言うことないんですけど、
出来ればご意見いただけると助かりますby作者

因みに、予定ではFA赤い約束、OO、SEED DESTINY
含む

CLANNAD、D・C、エストポリス、あたりです。

始まりの二人

クアンタではなく、エクシアのコクピットのなか、俺は横で寝息を静かにたてているフェルトの顔を横目で見ながら手元にある端末に目をやった。

すでに地球では明け方ごろだろうか。

脱走の一件もかなり監視の目が厳しくなっている状況のため、エクシアを地上に送る荷物扱いとして地上に届けてもらうこととなった。

とは言え俺はその脱走をした張本人、

のこのこ表の世界に立てるわけもなく、結局エクシアのコクピットの中でともに搬送されることとなってしまったのだった。

俺がそうなると分かったらフェルトはもう止まらなかった。

一人で行くなどと言う選択肢はすでになく、結局俺とともにコクピットに入って地上に降りることとなり、いまに至る。

「地上では基本的に俺の個人的なダチがサポートしてくれるさ。」
などと、ロックオンに言われていたが、果たして当てになるのやら。
もう暫くはかかりそうだな。

俺は横のケースにいれてある携帯食料を取り出して、ひとかけら口に含んだ。

たいして美味しくもない、

味っ気がない、

乾燥しすぎている気がする、

そんなことを思いつつももう一口それを口に入れて、地上につくの待つのだった。

見渡す限りの闇、

「んっ……ここは……どこだ……」

俺は確か……

なんだ？

どこからか声が響く……

「ああ、彼が生き残ること、それが君の望んだ道。僕はそれに従うまでの存在にすぎないよ……」

「その割には、ここまで計画を崩してくれたな。」

何だこの会話は
それにこの声

「流石にあの計画を鵜呑みにできるほど僕は機械的な存在ではないよ……。」

「まあ、そうだな。ともかく、情報体としてここに残り続けることができたわけだ、後は彼の行く末を見守るとしよう。」

片方がそう言うと共に周りが少しずつ明るくなってきた

「刹那・F・セイエイ、良かった、この世界に君を残す事ができて」

この声は、そうだ、リボンス・アルマーク！

「全てが間違っていたわけじゃなかった」

誰と話しているんだ？

「そうだな、彼は本当の意味で私の望んだ世界への架け橋となってくれた。」

目の前に光が広がった、

「君はイノベーター、認められたのなら君はその力を使い、わかり合う義務がある…迷う事はないんじゃないのかな。」

「……。」

目が覚める、

どろぢらねてしまったようだな。

時間は……

到着まで後一時間弱と言ったところか…

隣にはまだスヤスヤと寝息を立てるフェルト。

ねむっていたとは言っても、数時間程度だったな。

そろそろ起こさないとまずいか。

「フェルト……時間だぞ……」

反応は……

無い。

アーシヤンの時と同じだな。

しかし、あの時のように起こすのはかなり気が引けるな。

何かいい方法はないだろうか。

しかたない、これはかなり個人的には控えたいのだが…

俺はフェルトの耳元である言葉を囁いた…

その後、エクシアの中で一騒動あったのは言うまでも無い。

とある島の豪邸にて

「そうか、彼がこちらに向かっているのか。ああ、分かっている、
ご苦労じゃったなミト。」

一人の老人が端末を通して会話をしていた。

中は周りが雨のせいかわず薄暗くなっているが、豪華な絨毯が敷き詰められ、高価な装飾品が並ぶ広めの書斎。

端末越しに映るのは現在ソレスタルビーイングのメンバーとして活動している自らの仲間。

「いえいえ、問題ないですよゴード。それよりも気をつけてくださいよ、ミストレネはあなたを消したくでしょうが無いですから。」

ミトは心配そうにゴードに返した。

「大丈夫じゃよ、少なくともわしはソランに知っていることを全て話すまで生きておればいいのだからな。」

ゴードがそれを見て少しだけ冗談混じりに答える。

「それではな、後も頼んだぞ。」

「ええ、了解しました。」

軽く別れの挨拶を交わすと、ゴードは端末の電源を切り目の前にある紙に特に理由もなく2人の人物の名前を書いた。

イオリア・シュヘンベルグ

クジャノ・コーナー

世界と言う、この大いなる物語を自ら書くために尽くした二人。

この二人の物語は、もうすぐ終わるのだろうか…

語られし序曲

夕闇の中、

一つの青い影が海の上をかけていた。

一定のスピードで海にさざなみを立てながら進むそれは、まるで鳥のようだった。

進むその先には孤島の絶壁がそびえ立っている。

「ふむ、エクシアで来るとは……これも運命かの。」

自らの書斎の窓からこちらに迫る機体を見つけたゴードはじびやいた。

あの日見た時と変わらない姿。

彼の頭の中には、色あせることの無い数々の記憶が蘇る。

初めてあの機体を見たのはいつだったのだろうか、

それにしても……

「結局、わしだけになってしまったよ。イオリア、クジヤノ。」

ゴードは懐かしそうにつぶやくと、窓を閉めて椅子に深く腰掛けるのだった。

コンコン、

ちょうどいいタイミングでドアをノックする音が聞こえてくる。

「とおね。」

ゴードの返事を聞いたドアの外の人物は、ゆっくりとドアを開けて部屋の入り口に立った。

「ゴード様、刹那・F・セイエイと、フェルト・グレイスが来賓されました。」

要件は自分の予想していた通りのもの。

「ここに連れて来てくれ。」

「かしこまりました。」

男は礼儀正しそうに軽く頭を下げると、そのままドアの外へとでて

行った。

さて、何からはなしたのか。

――

――

「ふうっ、……。」

コクピットから降りた私は、すっかり縮こまってしまった体を伸ばす。

エクシアのコクピットはクアンタのものよりも更に狭くてたいへんだった。

545

いや、別にひつついているのが嫌なわけではなかったのだけど……

それにしてもあまりにも窮屈だったのだ。

ある程度体を伸ばし終わったので、改めて周りを見回してみた。

無人のはずの島の奥にそびえ立豪邸。

その横には、

研究所のような建物が一つ。

何でお金がありそうなのにこんな辺鄙なところに住んでいるんだろ
う。

珍しそうに周りを見る私を見て刹那は、

「あまり離れるなよ、ここからは何かがあるかわからないからな。」

そう私に声をかけてエクシアのドライブにロックをかけて外にでて
来た。

「お待ちしておりましたよ、刹那様、フェルト様。」

後ろからの声に驚いて慌てて振り返ると、そこにはスーツをきた青
年が立っていた。

服装が少し変わっているせいなのか、見た目より大人っぽく見える
が、顔を見るとまだ高校生くらいの年だろうか。

「出迎え感謝する。刹那・F・セイエイだ。」

刹那が私の後ろからでてきて、その青年と握手を交わした。

「ウィンダ・アークレーです。主人の元へ案内します。」

コンコン、

本日二度目のノックが部屋に響いた。

「ゴード様、お二人をお連れしました。」

「通してくれ。」

扉のおくから少しだけ話し声が聞こえた後、二人の男女が部屋の中へ入ってきた。

「ふむ、直接会うのは、初めてかな……刹那君、いや、ソラン。」

その言葉に驚くのはフェルト。

こちらに背中を向けながら喋り始めたと思いきや、それは彼の過去の名前だったのだ。

「前置きはいい、早くその情報を教えてくれればそれでいい。」

刹那は特にその言葉に驚くこともなく老人に言葉を返す。

沈黙が流れる。

耳を濟ませずとも微かに有名な洋楽が流れていることがわかるくらいに……

老人はこちらに振り向くとそのまま膝の上においていた両手を机に乗せて組み合らし、その上に顎を乗せながら喋り出した。

「あれはもう三百年近く昔のことだ。」

喋り始めた老人は、まるで自分の思い出を語るように目を細めている

「とある三人の話じゃ……。」

まだ太陽光エレベーターの完成が遠い先の話のような頃、

とある無人島に立てられた別荘に三人の男がいた。

別にこの頃の時代背景からすれば多少の金さえあれば無人島に別荘をたてることくらいかんたんだった。

とくに、この三人に関しては、

「だから言っただろう、それぞれの掲げる理想が違ったからと言ってそれを強制するのに武力を用いても何も変わらないと。」

一人の若い男は隣にすわるおとこにあきれたように答えた。

「だが、そう簡単に変えることのできない世界を急速に変えるには圧倒的な抑止力を用いる必要性は高いと思うが。」

反論された男が負けじと返した。

片方は黒髪の少し痩せた感じの男性。

もう片方は茶髪に割としっかりとした紳士的な男性。

そして残る一人は軽く太めだがいかにも学者のような風貌の、若い男性。

三人は部屋に用意された小さなテーブルの上に並べた紅茶を片手にある議題について互いの意見を出し合っていた。

「まあ、それはさておき、聞いてくれ二人とも。」

黒髪の男は話を打ち切り本題に入ろうと二人に声をかけた。

「先日ついにあの兵器の開発のための条件が全て判明した…。」

ほお、とでも思ったように軽く口を開ける二人の男性。

男はそのまま喋り続けた。

「そこでだ、二人には一つここで選択をしてもらおう。」

男はそういいながらポケットから三つのメモリーを取り出した。

それぞれ、緑、白銀、紺の三色のメモリー。

「私が実用化レベルまでの道筋を立てることができたのは三種類、この中の一つを私が選びあの計画を始めようと思う。」

そう言っって緑色のメモリーを男は手にとった。

残ったのは赤と白銀の二つのメモリー。

「この二つを君たちで保管して欲しい。」

「なに？」

「本当かい。」

二人は彼の言動が信じられないとでも言うかのように聞き返した。

しかし、

「本当だ…もしも私の計画が失敗した時のためにも、君たちに持つていて欲しい。ただ、無理には言わない、もし嫌なら私が別の場

所に保管する。」

キツパリと男は言い切った。

その心情を察したのか、二人は無言で頷きそれぞれ目の前にあったメモリーを手に取りポケットにしまった。

「ありがとう。その中身は私の計画の障害にならなあまり好きに使ってくれていい。ただ、あまり公にはしないように。」

こうして三人には始まりの兵器、三つのGNドライブの基礎理論を分けたメモリーを手にしたのだった。

そして、彼らのとったそれぞれの道により、新たな歴史が始まった。

三文芝居

三人の男がそれぞれの道に進み始めてから十数年の時がすぎた。

世界は太陽光エレベーターの開発で、盛り上がりを見せるなか、反対派が紛争を繰り返し続ける日々を繰り返す。

そんな中、彼らは自分たちの目指す世界のためにある組織を結成していた。

一つは私設武装組織、

もう一つはその後方支援団体

しかし、それを作り上げる間に彼らはかなりとしをとってしまっていた。

すでに若い頃のようにあちこちを周り続けることができる体ではなくなり、一番若かった男さえ四十にさしかかろうとしている。

「やはり、老いには勝てんなあ。」

久々にあの無人島で集まった三人は、別荘の中でそれぞれの仕事をしながら話し合っていた。

「いやはや、全くだ。もう体のあちこちにガタがきてしまっている。」

最初のつぶやきに便乗するように隣にいた男がぼやいた。

人なのだから老いが来るのは当然のこと。

しかし、それにしても彼らの計画の長さにとって、彼らの老いは早すぎた。

まだ世界は太陽光エレベーターの完成さえしていない。

このままの調子では計画の基盤を作るところか計画を全面的にバツクアップさせる次の組織を作ることさえ難しい。

「全く、人とはこんなに弱いものなのか……。」

そんなことをつぶやき始めた二人に対して、もくもくと自分の仕事に打ち込んでいた一人が声をかけた。

「コールドスリープとやらがあるみたいだが、それは使わないのか。」

二人はその声を聞いて喋るのをやめた。

確かに悪い手では無い、

どの道このまま老いればそのゴールドスリープという手さえ取れなくなるのだから。

だが……

「今我々が抜けてしまうとまずいのでは無いか……」

片方の男がその男に返した、

そうなのだ、

ただでさえ人が少ないこの状況では、一人に任せ切りにしてしまうというのはなかなか危険な賭けである。

仮に残った一人が計画をしくじればそのまま二人は永遠に眠り続けることになるだろう。

「心配はいらぬ、最悪の自体でも目覚めるようにセットするわ。」

「……………少し話をやめてもらっていいだろうか。」

これまでの話を黙って聞いていた刹那は、話に区切りがついたところでゴードに声をかけた。

ゴードは少し考えた様子をみせ、目をつむり答えた。

「構わんよ…。」

その言葉を聞いた刹那は、少しだけ体の向きをなおすとゴードの方に歩み寄った。

少しずつゴードの座る椅子に近づいて行く。

その間もゴードは何もせず、ただ刹那の方に目を向ける。

そしてあと二歩のところまで行ったところで刹那は足を止めた。

「……………」

黙ったまま刹那の顔を見つめ続けるゴード。

「三文芝居はもう終わりにしてくれ……。」

パン！

銃声が響いた。

「刹那？」

突然、刹那は銃をはなつた。

それに気づいたフェルトが慌てて駆け寄ろうとする。

が…

「ウソ……血が……。」

撃たれたゴードを見たフェルトはあまりの衝撃に足を止めた。

血が流れていない…

いや、それどころか体に傷一つついていないのだ…

驚いているフェルトを気にしつつも刹那はそのままゴードが座っている椅子と机をまとめて蹴り飛ばした。

ガシヤアアアン！

派手な音とともに吹き飛ぶ机。

机があつた場所には外装が壊れてさらけ出された少し小さめの機械が残っていた。

「刹那…これは。」

後ろからフェルトが近づいて来る。

「伏せろっ！」

刹那は突然声を上げるとそのままフェルトを押し倒した。

そしてその動作の後を追うように外から機銃掃射が降り注いだ。

飛散するガラスや砕ける壁。

「走れ！」

刹那の声とともにフェルトは起き上がると部屋の扉に向けて走り出した。

「エクシアのところまで行く！」

二人は腰に隠してあった銃を構えながら廊下に飛び出た。

左右に開けた廊下には既に正体不明の十数人の兵が待ち伏せをしていた。

「チツ！この人数はキツイな」

そうつぶやいた直後に彼らが銃を構えた。

銃を撃たれる前に再び部屋の中に隠れる二人。

「刹那……」

今だに状況がつかめていないフェルトが刹那に声をかけた。

「やられたな、クジャノに先を越された。」

刹那が苦虫を噛み潰したように答える。

「先を越された？」

先程ゴードの機械を壊してから僅か数十秒間の間の出来事、

その間に刹那は何が起きたのかを完璧に把握し、出した結論はこう、

クジャノ・ミストレネが先にゴードに接触してしまった。

刹那は少し呼吸を落ち着けると、今だによく分かっていないフェルトに声をかけた。

「とにかく今は逃げることを考える。俺が道を開く、エクシアまでの経路は一人でもいけるな。」

刹那の言葉に頷くフェルト。

それを見た刹那は手で飛び出すタイミングをカウントし始めた。

3

2

最後の指が降りるとともに刹那が廊下に飛び出した。

一斉に放たれる弾丸。

目をつむり少しだけ体に力を込める、

一瞬時が止まったようになり、瞳を黄金に輝かせた刹那は銃を構えた。

スローモーションのようにせまる弾を一つ一つ確認しながら避けて行く。

人では決してやる事のできない神の領域の技。

全ての弾丸を避けた刹那は構えた銃から数発放った。

弾は流れる様に直進して行き両方の兵たちが構える近くにあったそ

それぞれの水道管に直撃する。

「なっ！がああああ。」

溢れ出す水により銃火器が使えなくなってパニックに陥った塀たちに向けて刹那は格闘をしかける。

「いっあっ！」

「あがっ！」

「いっふおっ！」

全てなぎ倒して反対側の兵も同様に全て一撃で沈めて行く。

一通り片付けた刹那が手でサインをすると、部屋から出たフェルトはエクシアに向けて走り出した。

何度目の脱走なんだろうな…

そんな事を考えながら刹那はそのフェルトの後ろを追う様に駆け出

したのだった。

新たな変化

最初はほんの少しだけだった…

地球にフェルトと訪れた際にはいきなり飛んできたボールに人並外れた速さで反応して取る事ができる程度だった。

だが、

グラハムと共にクジャノと戦った時あたりからだろうか、

突然世界が変わった気がした、

飛んで来るものに早く反応するのではなく、飛んで来るもの、動いている物自体がスローモーションの様に見える様になったのだ。

無論力を使わなければこんな事は起きないのだが、

とにかく、イノベーターを全て知ったわけでは無い事を思い知らされた。

「ぐあっ！」

目の前で崩れ落ちる兵士を横目に刹那は走り続けていた。

イノベーターの力を使えば使うほど体に不可がかかるのは分かっているが、さすがの刹那もここまで敵が多いとは思わなかった。

既に倒した兵は四十人近くに登る。

超人的なこの力を持ってすれば相手から攻撃を受ける事はあるが、いのだが、

「くっ！間に合うか？」

刹那が一瞬にして前方に迫っていた数人の兵をなぎ倒した。

「まだなのか、フェルト……。」

こちらに注意を惹きつけるためにも余分に派手な戦いをしなければならなかった。

フェルトがエクシアに向かってから既に五分、そろそろついている

時間なのだが。

ピピピピ！

そう考えていた矢先、待ちに待った彼女からの連絡を知らせる電子音がなった。

近くにあった柱の裏に隠れて右ポケットから端末を取り出す。

ーポイントに到着、救援にデュナメスが到着ー

メッセージをひらくと、短くそう書かれていた。

デュナメス？

まだトレミーにも知らせていないのに、なぜ休暇中（勝手に刹那たちと同じタイミングでアニューと共に休暇をとって地球におりてきていた）のはずのロックオンがここにきているのだろうか、

いや、今は問うまい、

ー了解ー

簡単に返信をするとそのまま小型爆弾のタイマーを起動した。

ピッピッピッピッ、

定間隔で電子音が刻まれる。

「時間稼ぎはもう終わりだ…」

その音を聞きながら刹那はそう呟いた。

相手の兵が迫る中、脚に力を込める。

「??？」

刹那に対して銃を構えていた兵は誰一人として気づかなかった。

突然刹那が柱の影から飛び出したと思ったそばから消えた、

その程度にしか認識されなかったであろう。

「遅いな…。」

慌てて周りを見渡す兵たちのはるか後方に刹那は着地していた。

どの兵にも気づかれる事なくその場を走り去る。

グガアアアアン

既にはるか後ろとなった場所から爆発音と共に少しだけ暖かい風が吹いた、

このペースならエクシアまであと数分で着くだろうか、

そんな事を考え始めたその時、

「久しぶり！ソラン君。」

この場に合わないテンションの声と共に強烈な蹴りが目の前に迫った。

「クジャノかつ！」

目の前に映る脚の軌道を予測しながら、それを難なく避けて反撃に移る刹那。

こいつに遠慮はいらない、

そう考えるや否や、避けた脚を腕でつかんで強烈な一撃を叩き込む。

が、

「ハイ、残念。」

クジャノもまた人を超えた速さで振り切ったはずの足をそのまま元に戻して避けた。

何時の間にか彼の瞳も黄金に輝いていた。

「やはり貴様もイノベーターだったか！」

刹那が声を上げると同時に、お互いに後ろに飛び距離を取る。

周りは燃え移って広がった炎に囲まれており逃げ場がなくなっていた。

対峙する黄金の瞳を持つ二人の人物。

「ゴード・フラストレーはどこだ！」

刹那がクジャノに向けて声をあげる。

燃え盛る炎の音が聞こえるほどの静寂が一瞬広がった。

「ほんの少しだけ隠れてもらってるよ、君に聞かれたらまずい事も結構あるからね。」

それに破るかの様に答えるクジャノ。

銃に手をかけたまま刹那が少し後ずさった。

ここで戦うのは得策では無い…

「まあいいや、ここで白黒つけるよりもMSで戦った方が良さそうだな…。」

それに気付いたクジャノがそんな事を言い出した。

一瞬驚きを見せた刹那のすきを逃さずにクジャノがその場の地を蹴った。

「てことで、じゃあね〜」

数発ほど発砲したが一発も当たらない事なくクジャノはそのふざけた声

と共に奥へと消えて行ってしまった。

「先を急ぐしかないな……。」

悔しそうにそちらを見つめる刹那だったが、直ぐに冷静さを取り戻すと目的の場所であるエクシアのところへ向かってかけ出したのだ。



「お勤めご苦労さん、ったく、人は仲良く休暇中だったっていうのによお。」

エクシアの元にたどり着いた刹那はそんな愚痴と共に迎えられた。

「すまないなロックオン。それよりフェルト、エクシアは大丈夫だな……」

刹那はそれを軽く受け流すとフェルトの方に歩いて行く。

「うん、何とか無事みたい。」

そうか、と軽く答えたと刹那はフェルトを連れてエクシアに乗り込んだ。

「アニューがもうすぐ救援でキュリオスできてくれるはずだ、それまではとにかく逃げるぞ。」

同じくデュナメスに乗り込んだロックオンが通信をいれてきた。

粒子残量は残り85%、

脱出の分を考えても十分余裕がある量だ……

「行くぞ、フェルト。」

シートの方の部分に捕まっているフェルトに声をかけると、コクンと一度頷いた。

「刹那・F・セイエイ、エクシア、出る！」

戦場の惚気は

二機のガンダムが孤島から飛び立った。

青い機体と緑の機体、

それを追う様にMSが孤島から飛び出てきた。

連邦のグレーのジンクスが六機、他にはイナクトが五機に地上をみれば孤島からこちらに長距離砲を向けているティエレンがいくつも見える。

「ロックオン、地上は任せた。」

刹那は通信を入れると、後ろにいるフェルトに声を掛けた。

「暫く揺れる、しっかり捕まっておけ。」

その言葉と同時にエクシアが一気に加速する、

全身にかかるG、

パイロットスーツを身につけていない分フェルトにはかなりの力が

かかっていた。

高速で迫って来るイナクトの背後に回り込みGNショートソードを突き刺す。

まずは一機…

背後から味方に当たるのが分かっているながらもライフルを連射するジnkusに、ライフルモードに切り替え後ろに回ったGNソードで斬りかかる。

こちらに放たれたライフルのうち数発がイナクトに直撃して爆散した。

「味方を見方と思っていないな…。」

そのまま残骸が海に落ちて行くのを横目で見ながらエクシアは残りのイナクトに向けてライフルを撃ち、撃墜する。

「このままでは！」

「スモークを使え、このままでは勝てん！」

一瞬にして三機を葬られた敵は慌てて対GNドライヴ兵器用のスモークを大量に発射してきた。

爆煙があたり一面を覆ってなにも見えなくなり、互いに攻撃が止ま

る。

「流石にこれでは見えないな……」

そう呟いた刹那の瞳が黄金に輝き、エクシアが急に加速した。

今までとは見える世界が変わり純粹に欲しい情報だけが流れ込んで来る。

煙の先にはジンクスが二機反対の方向を向いているのが分かった。

こちらにはまだ気づいていない。

「そこだああ！」

こちらの接近に気付いてライフルを構えたジンクスだったが時既に遅し、両手に持ったビームサーベルに切り刻まれた。

すかさず反転して斜め上に向けて加速する。

その先には三機のジンクス、

先程より早く気づかれたため向こうにライフルを放たせる時間を与えてしまった。

が、

「その程度の砲撃が当たるものか！」

周りがスローモーションの様に流れだしビームの描く軌道が見える様になる。

それを難なく躲して行くエクシア、

放たれたビームはエクシアにかする事もなくそのまま海の中へと消えて行った。

「ばっ、馬鹿な！」

直撃するはずのビームが外れて驚いている三機をまとめて切り刻む。

爆発と共にエクシアは煙の中から抜け出した。

明るくなって開けた視界の先には残りのジンクスがライフルを向けて待ち構えている。

「落ちろ！」

一斉にして放たれたビームの雨がエクシアに降り注ぐ。

このままだと直撃するのは七発

横に避けても当たるな…

ならば、

一瞬にして次の行動を決めた刹那がエクシアの加速を止めビームサ
ーベルを投げつけた。

すかさずそれに向けてライフルモードにしたGNソードからビーム
が放たれる。

バシユウウウウウ

飛び散るビームが迫り来る全ての攻撃をジnkスの持っていたライ
フルごと消し飛ばした。

「もらった!」

その隙を逃さずに距離を詰め全ての機体を斬り倒し、そのスピード
を緩めずにエクシアが海面に向けて加速する。

「あそこか、この距離なら。」

海中に隠れた相手の艦を見つけた刹那はライフルを放った。

ビームが直撃して轟沈する敵艦。

遠くをみれば既に地上部隊を殲滅し終えたデュナメスが孤島の端に降りていた。

「あちらも終わったな、大丈夫かフェルト？」

「大丈夫だよ…ゴメンね、」

声を掛けてきた刹那に対してフェルトは急に謝り出した。

「どうしたんだ？」

理由がわからずに不思議がる刹那にフェルトが答える。

「だって、私がいたから刹那いつもよりも大変だったと思うから…」

それを聞いた刹那が目を丸くして暫く固まる。

ああ、そういう事が、

刹那はフェルトが謝っている理由が分かると思わず微笑してしまっ
た。

彼女は俺の負担になってしまっと思っっているのか……

「大丈夫だ、確かにフェルトの事は考えていたが、俺はそんな風に

は思っていないさ…。」

「本当に？」

フェルトが心配そうに聞き返す。

それに対して刹那は堂々と言い切った。

「ああ。それに、フェルトがいたからいつもよりも落ち着いて戦えたかもな。」

ボン！

刹那の言葉を聞いたフェルトが一瞬にして湯気を立てて固まってしまった。

「フェルト？」

刹那が声をかけるが返事が無い、

何やら呟いている様だが……

少し言い過ぎたのかもな…

そんな事を考えていると何時の間にか通信が入っている事に気付いた。

「刹那だ「ハアーーーー…。」？」

慌てて回線をひらくと盛大なため息で迎えられた。

「惚気は別の場所でやるか回線閉じたままやってくれ…聞いている方はかなり辛いぞ。」

ロックオンが飽きた様に言ってきた。

それを聞いた刹那は自分の手元のスイッチを見た。

回線オープン…

まずいな…

これがフェルトにしれたら…

ガタン？

そんな事を思った矢先に斜め後ろから派手な音が響く。

遅かったか…

「なっ…なっ…なっ…なっ…。」

画面の向こうのロックオンは再び盛大なため息を着くと通信を切った。

その後、帰還するまでの間刹那が必死になってフェルトを慰めたのは言つまでもない。

おまけ、

「アニユー、キュリオスに乗った感想は？」

帰還したロックオンとアニユーは太陽光エレベーターで空に上がっていた。

勿論、刹那とフェルトは行の様に荷物として上がっているはず…

「まあまあね、でもやっぱりデユナメスの方が良かったわ。」

アニユーが満足そうな顔をしながらこたえた。

「そりゃありがたい、さて、録音しておいたこのテープはどうしようかね。」

ロックオンが嬉しそうに手元にあるメモリーを弄ぶ。

「スメラギさんに渡してデュナメスをデートに使った事許してもらったらどうかしら？」

「そりゃいいな、よし、そうするとしますか。」

ロックオンとアニューは少しだけ刹那たちをかわいそうと思いつながらもたのしく過ごすのであった。

第3のドライブ

「そうか、やはり先を越されてしまったか……。」

トレミーに帰還した刹那は、フェルトと共にブリーフィングルームで他のメンバーに状況を報告していた。

「でもどうすんだ？これ以上やつに組織に関わる情報を知られたらヤバイぞ。」

ラッセがそういいながらパネルを操作した。

大型モニターに映し出されたのは自分たちの知る現状ではヴェーダに記録されていないソレスタルビーイングに関するデータ。

トランザムに関しての情報は既に知られているだろう。

ツインドライヴシステム、今は情報が漏れたという報告は無い。

セラフィムのトライアルフィールドも恐らくは大丈夫である。

オリジナルの太陽炉に関して言えば、情報としては既に漏れているが作る事はできない。

トランザムバーストも同様。

「これだけ見ると、我々の保持してる情報少なすぎだな……。」「

テイエリアがデータを見ながらため息をついた。

現状での自分たちの保持する最大の戦力はクアンタのクアンタムフ
イールドとフアングによる高速の空間移動のシステム。

「だが、ゴードの所に行ったのは無駄足ではなかったな。」「

イアンが少しだけ嬉しそうに手に持ったメモリーを見せた。

刹那がゴード邸脱出の際に見つけた、本物のゴードからの手紙とこ
のメモリー。

以前と同じく旧式のメモリー、
だが、こちらは更に古いものだった。

調べて見た所、約二世紀近く昔のもの。

「解読はすんだのかい?」「

リジェネがテイエリアの横で腕を組みながらいった、

ヴェーダが関わる事とあって、いつもよりも五倍ぐらい真剣な眼差
しである…

「ああ、勿論だ。データからすごい事が分かったぞ。」「

イアンはもう一つ、新しいタイプのメモリーを取り出して手元のパネルのスロットルにはめて暗証番号を打ち込んだ。

大型モニターに次々と情報が表示される。

「こっ！これは…。」

「おいおいマジかよ……こりゃ無いぜ。」

刹那とロックオンがあまりの衝撃の内容に驚いて声を漏らした。

他のメンバーも同様に驚きの声を漏らしている。

表示されたのはソレスタルビーイング発足に関する詳細データやそれに関連した人物の名簿、

そして最も驚くべきものは…

「三種類GNDドライブ……。」

フェルトがそれを見ながら呟いた。

そう、

ソレスタルビーイングの活動を可能にする最大の兵器、

GNDドライブに関する超詳細データだった、

しかも、そのうち使われている一種を除けば新たに二種類のGNDドライブの事までのせられている。

「こいつらは、データによると片方がペインチェンジャーの使っている白銀のGNDドライブ、そしてもう一つはワシらの使っているオリジナルの太陽炉、そして最後の一つは……。」

イアンが一度言葉を切ってパネルを操作した。

三つ表示されていた中のうち、一つのデータが拡大されて更に詳細データが表示される。

画面には暗い青色をした粒子を放つ太陽炉がうつさされていた。

他のドライブとは全く異なる異様な輝きを放つ太陽炉。

その漆黒の青は全てを飲み込むかのような色だった。

モニターを見る全ての人の思考が一瞬止まる。

「全く新しいタイプの太陽炉の設計図だ。」

イアンはパネル操作を行いながら説明を続けた。

「こいつは高重力下で作られるワシらの太陽炉や核エネルギーで粒子を生成するペインチェンジャーの太陽炉と違って、作る事は多少の時間があれば容易だ。」

モニターに造成のための設計図が表示される。

特に特別なエネルギー源がいるわけでも無い。

「だが、こいつを実際に使うとなると話は別だ…こいつを使うには他のタイプのGNドライブと同調させる必要がある。」

イアンが数回何かを打ち込むと、モニターにはソレスタルビーイングの所持する太陽炉のデータに加えてクアンタとエクシアのデータが表示された。

「現状で同調しているクアンタの太陽炉のうち、片方が恐らくこのタイプと同調させる事ができる。ただ、クアンタはワシらのオリジナルの機体だ、エクシアの様にイオリアの予想した機体では無いがゆえにこのシステムを制御するためのシステムが無い。」

「となると、トランザムの様にエクシアに隠されている可能性のある新たなシステムを見つけるしか無いという事か。」

イアンの説明に刹那が口を挟んだ。

「ああ、そついう事だ…。」

「心当たりがある人物がいる…すこ席を外す。」

イアンの言葉を聞く事なく刹那がブリーフィングルームを飛び出した。

残されたメンバーは引きとめようとしたフェルトを止めて、新たに加わった情報を元にイアンの説明を聞いたのだった。

「ゴードやん。」

青年は繋がらない端末を片手にベッドに寝そべっていた。

あれ程警戒していたにもかかわらず主人であるゴードは拉致されてしまった。

伝えなかった情報の一部は届ける事に成功した様だが、

その時、

「クジャノ・ミト、居るか、刹那だ…。」

部屋をノックする音とともによく知る男の声が聞こえた。

どうやら新たなシステムに気付いた様だ……

「すみません、気分がすぐれないんでドア越しでお願いします。」

そつイイながらミトはベッドから起き上がりドアの前に座った。

「聞かれる事は分かっています、ついでなんで主人が話そうとしていた全てを教えましょう。ソレスタルビーイングの……。」

ミトは一度言葉を切り首に掛けているネックレスを手にとった。

美しく輝く宝石、

ーゴードさん、皆さん……

ーどうやら僕の使命はまだ終わりそうにありませんよ…

「約束破ります、すみません…」

意を決した様に言葉を続けた、

「全てを…。」

第3のドライブ（後書き）

感想お待ちしてます m ((m

つながる真実

脳量子波で頭に響く声、

既に知って居るかもしれませんが、ソレスタルビーイングを作り始めたのはイオリアの他に二人います。

ああ、ゴードからの手紙に記されていた、

そうです、そしてその二人とは何を隠そうゴードさん自身とコーナ
ー家の人間でした、

ゴード自身だと？

ええ、そうです、

ゴードさんとイオリア、それにコーナー家のその男は三人とも別の
時期にコールドスリープに入り戦争のなくなった世界に再び目を覚
まそうとしていたんです。

だが、イオリアは……

アレハンドロ・コーナーに殺されました、しかし、まだ彼は生き残

っています。

なに！

それに、少し話は外れますが、リボンスも生き残って居るでしょうね。

な、そんな事が……

紛れもない事実です、

それに貴方なら感じたんじゃないんですか、強力な脳量子波によって彼らの意識を……

まさかあの時の……

心当たりがあるみたいですね、イノベーターはやはり特別です……

もしそうなら、イオリアは今どこかで活動しているのか？

残念、ハズレ。

イオリアは緊急時の事を考えて自らとある孤島に簡易版ヴェーダとも呼べる装置を作っていました。そこに彼は入ったのです。同様にオリジナルタイプのイノベイドであるリボンスもそうしたと思われる。

そうか……だが、ならなぜ姿を現さない……

必要が無いからでは無いでしょうか、

必要がない？

ええ、彼が今現れて肉体を作るなんていう必要性は極めて低いですから、

なぜそんな事が言える…

後にわかる事です、まあその話はおいておきましょう。

わかった…

それで、エクシアに隠された新たなシステムの事だが…

焦らないで下さい、それも後に説明するんで、取り合えず今は大人しくこの話を聞いて下さいよ…

「私が眠りにつくのは最後にしよう、

「そうか、それならわしは先に眠らせてもらおうとするかの…

一人の老人が病室でできる様な服を見にまといながら縦長のカプセルに入っていく。

隣には既にドアの閉じたカプセルが一つ…

「最後にもう一度だけいっておくが、これが成功する確率はわからないから…

それを見届けるもう一人の男が最後の忠告をした。

「分かっておる、なら先に最後かもしれぬお別れをいっておくか？

少しおかしそうに老人が答える

「冗談はよせ………コーナーは先に眠りについた。早く貴方が寝てくれないと仕事には入れんだろ。

男の一言を最後に老人はそのままカプセルのなかのボタンを押した。

それと同時にカプセルのドアが閉まり、中は白い煙で充満していく。

「すまん、一人にしてしまって……」

「？」

老人が最後の一言を述べまぶたを閉じた……

しばらくの沈黙……

残されたのはただ一人の男、

「最後の最後に謝られてしまったな……」

男は身をひるがえすと薄暗い部屋をあとにした。

数世紀後……

「……………お……………トー！」

誰かが自分を呼んでいる。

わしは…

意識が覚醒してきた所で重いまぶたを開けた。

ここは…

なぜカプセルのフタが空いているのだ？

「ゴード、おい、目が覚めたのか？」

目の前に一人の老人の顔が見えた。

こやつは確か、コーナーか…

どうやら記憶ははっきりとしておるの…

「おい…ゴード。」

「ええい、五月蠅い。すこし静かにせんか。」

わしはそうイイながら腰のあたりにあつたベルトを外した。

「おお、生きていたか…。」

先程から自分を呼び続けていた老人が安堵の息を漏らす。

カプセルからゆっくりと出て周りを見渡すと、そこは眠った当時のままの姿をしていた。

現在の日付を確認する。

おお、見事に数百年ちかくねむっておったようだ。

「誰がワシらを起こした？予定よりかなり早い目覚めの様だが…」

わしは隣にいるコーナーに声を掛けた。

「それがの、どうやらとんでもない偶然でワシらの目覚めのためのパスワードを解読してしまった奴らがおって、そいで目覚めてしまった様だ…。」

コーナーがゆっくりと歩いて近くにあったテーブルから手紙を取り出し、片方をワシに渡してきた。

「イオリアはどうやらあの場所で眠りについたようだ…顔を合わせるのは少し先になりそうだな。」

「そうか……で、これは何じゃ？」

渡されたのは二枚の封筒、

片方の封を切るとそこには見た事も無いカードが入っていた。

「ワシらが目覚めた時のための市民用IDだそうだが、全く、イオリアのやつは無駄な所で気を利かせてきたな。」

わしはコーナーの愚痴を聞きながらIDを取り出した。

名前、ゴード・フラストレー、
巨大金融会社社長……

「は……。」

フラストレー、何だその名前は！

隣では先にこれに目を通していたのか、コーナーが必死で笑をこらえていた。

まさかとは思いが……

もう一つの封を切ると出てきたのは一枚の手紙、

謝まってくれてどうもありがとうございます。

なので私からのささやかなプレゼント、巨大金融会社社長、金融、
フラストレーション……

ぐしゃー！

わしは怒りのあまり手紙を握りつぶしてしまった
よくもやってくれたな若造め

が、

起こっていてもし方が無いので話を戻す事にする。

「それで、結局、ワシらを起こしたのは誰なんじゃ？」

「それが……………」

答えにくそうにコーナーが言い始めたその時、

ガチャン！

「おっ！生きてやがったかおっさん。」

「あげああげああげあ！死んでたと思ったぜ。」

二人の少年が扉を開けて入り込んできた、

片方は茶髪で肩にタトゥーをいれた少年、

もう片方はおかしな笑かたをする少年、

「な…何者だあの二人は…。」

わけのわからない歓迎をされながらコーナーの方を見ると、頭を抱えて机に突っ伏していた。

「天才の大バカものと戦争狂いの愚か者だそうだ。」

二人の名は

アリアル・サーシエス

フォン・スパーク

おまけ、

「所でおやつさん、エクシアに搭載されている可能性のあるシステムって何ていうんだ？」

ブリーフィングルームで説明を受けていたラッセが端末に読み込んだデータを見ながら言った。

ほかのメンバーも気になっていたようでそちらに耳を傾ける。

「うーん、わからん。」

盛大にこける音とともにラッセが声をあげた。

「わかんないのかよ!。」

「仕方ないだろ、これは情報から勝手にシステムとして成り立たせたもんだからな。」

それを聞いたロックオンが飽きたように肩を竦めて呟いた。

「こんなテキストなので成り立つのか心配だな。」

「ライル!」

それを聞いたアニユーが慌てて止めようとするが遅かった。

「そいつは聞き捨てならんな、ロックオン…デュナメスをデートに乗り回したもんがよくいうな！」

イアンが負け時と言いつ返した。

それでも一流のメカマン、自分のプライドはそれなりにあるのだろ
う。

「そいつあ残念、既にそれには話を通してあるからな。」

バカにしたような態度でロックオンがさらに言い返す。

一触即発の空気が流れる中、不意にいついた声が響いた。

「やるなら外でやりなさい……。」

ガシッ！

周りの空気が一瞬で凍りつき、頭を掴まれた、イアンとロックオンが震えながらそちらを向いた。

「ね、喧嘩別に悪くないわよね、でもチヨおおと五月蠅いから外
でやってきてもらおうかしら……。」

にっこりと微笑みながら二人を見るスメラギ。

「そ、そ、そ、外つて、ろろろ廊下の事だよな？」

「そりゃそうだ！ししし死んでしまっからな？」

ロックオンとイアンはガチガチと震えながら必死に抜け出そうともがく。

が、

「えっ！外つてそりゃあトレミーの外の事でしょ。こんなうるさくて邪魔な八エがいたんじゃ話にならないわ……。」「

三十分後、トレミーの廊下からはかつて最高のメカマン【事象】と呼ばれた男と、トレミーのイケメン【自称】と呼ばれた男の残骸が発見されたそうさ。

謎…1 (前書き)

短いです (^ ^ ; ; ;
スマソ

二人の少年は長い眠りから覚めたばかりの老人を連れてとあるある場所にきていた。

「よし、到着だぜ爺さんども。」

二人の前を歩いていたサーシエスが振り向いて目の前にある扉を指さす。

岩に囲まれたようになってい場所ニコケを簡単にかぶせた様な木製の扉があった。

「こん中いればまあなんとかなるだろうな」

相変わらずおかしな笑かたをするフォンが目の前にあるとびらを蹴り破る。

ばきい！

木の折れる独特の音とともに扉は吹き飛んだ。

ピン！

同時に何かかぎれた様な音がなり、ボウガンの矢がフォンに迫る。

「おい！」

それに気付いたゴードが声を上げた。

「あげあ！」

しかし、そんな言葉は全く耳に入れずに、それを難なくよけて部屋に入っていくフォン。

それに続く様に部屋にはいる三人。

「な、何だここは……。」

「どこぞやの軍の野戦基地か……。」

二人の老人、とは言ってもまだ五十過ぎだが…はやつとの事でたり着いた場所を見て固まった。

薄暗い部屋の中に広がるのは大量の電子機器、しかも恐らくこんな

少年たちが持てる様なものではなさそうな大型のものばかりが並んでいる。

「君たち、これは一体……。」

コーナーが驚いて目を丸くしたまま二人に問い掛けた。

しかし、その質問を無視してサーシエスとフォンは目の前に広がる電子機器のすぐ横にある椅子に座りキーボードに何かを打ち込み始めた。

カタカタカタカタカタ……

黙々と二人が作業を続ける中、ゴードとコーナーは顔を合わせる。

「一体こやつらは何をやっている……。」

「さあな、と言うよりも他にいろいろ気になる事があるのだが……」

コーナーはそっぴいながらすぐ自分の足元の横にあった電子機器を見つめた。

よくみれば、イオリアの手紙に書いてあった現在の三大国家の一つAEUと呼ばれる国のマークが貼ってある。

「おい、爺さん。そいつにさわんなよ、まだ使えるかもしれないや

「つだからな。」

突然サーシエスが口を開きそれを触ろうとしていたコーナーを抑制した。

「す、すまん。しかし、これを一体何処で…。」

慌てて手を引っ込めて謝罪するコーナー！

「あげあ、触りてえなら触ればいいんじゃないのか、まあ、そいつは普通に触ると警告音なって中のデータ吹き飛ぶ様になってるけどな。」

そのやりとりを聞いていたフォンが目の前のモニターを見ながら言った。

その言葉を聞いてさらに目を丸くして驚くコーナー、
ゴードは既に、こいつらは異常だな、とでも自分で無理やり納得した様で黙っている。

「まあ、その辺でいいだろ。暫く時間掛かるからちよいと止まってくれよな。」

サーシエスのその言葉を最後にコーナーとゴードはしかたなく静かに部屋の隅で待つ事にした。

カタカタカタカタカタカタ、

無機質な音が部屋に響き続ける……

カタカタカタカタカタカタ

カタカタカタカタカタカタ

カタカタカタカタカタカタ…

「よし、終わりやがったぜ。」

暫く待った後、サーシエスが両腕を大きくあげ伸びをすると、そのままゴードたちの方を向いて喋り始めた。

「じゃあ教えてやるよ、俺たちが何でこんな所でこんなものを持っているのかをよ…。」

異変（前書き）

テスト週間【ついに義務教育最後】が明日終了いたしますよゝゝ
^o^)/

更新が遅れてしまい申し訳ないと思いつつも内心は
ヒヤアアホオオオイ、あげああげああげああげあなんて感じだっ
たりしますm(| |)m

異変

「戦争孤児って言えば想像つくだろ…俺らはいわゆるそれだ。」

いまだ紛争が続く世界の中で、戦争孤児というものは非常に大きな国際問題となっていた。

宗教や文化の違いから引き取り手が見つからずに奴隷と同じ様な扱いを受けてその日その日を凌ぐ者、

紛争の絶えない地域では彼等が戦場に捨て駒として出される事もある…

そんな世界の中でこの二人は数多くの人を殺し、数多くものを壊し、また盗み続ける事によって生き続けていた。

「それで俺たちはあらゆるテロリストや宗教団体とかからスパイ、暗殺、密輸、護衛の依頼を受けに行って生きるための金を貯めた。」

フォンがキーボードをしまつて喋り出す。

「誰の為でもなく自分の為だけに人を殺し続けた。」

サーシエスが二人の前を通り過ぎて部屋の隅にある小さな溝に手をかけた。

ガコン

何かが外れる音とともに、その部分のコンクリートが壁から剥がれ落ちた。

「んで、これがその貯めた金だ……。」

「これは……。」

ゴードはそれを見て思わず声を漏らした。

いくらこの子供達が凄いとはいえ、今日の前にある光景を見て驚かすにはいられなかったのだ……

積み上げられたのは大量の金塊、

ざっと見ただけでも数億は下らないだろう……

「紙幣や硬貨なんざあ今時使い物にならねえ、いくつも国が滅びてる中で安定した金を入れるにはこういうもんしか無いからな……」

……。」

サーシエスが驚く二人を見ながら話続けた。

「で、こっからが本題だ。」

「雇え、という事だろう。？　？　我々が目覚めた時には既に現在での我々の立場を把握していたということだな……」

サーシエスが言葉を発した瞬間にコーナーが口を挟んだ。

「瞬目を丸くしたサーシエスだったが、すぐにもとに戻る。」

「そういう事だ、金はこんだけある。どうだ爺さんども……」

後ろではフォンが背もたれに身を預けながらこちらに耳を傾けている。

「そつだな……どうするか……ゴード。」

「彼等の能力は高い、何なら組織にでも入ってもらえばよかるう。」

「そつだな……では話はまとまった……私たちは君たち二人を雇う事にしよう。」

交渉が成立した……

雇い主となる二人が手を差し伸べる。

「クジャノ・コーナーだ、よろしく。」

「ゴード・フラストレード。」

「アリアル・サーシエス。よろしく頼むぜ爺さんども」

「フォン・スパーク、あげあ、勝手にくたばんなよ。」

――――

――――

「取り合えずこれでアリアル・サーシエスや組織の始まりに関する話は終わりです…」

脳量子波での話が終わり、疲れた様にドアの近くにミトが腰を下ろした。

「流石にこれでの長話はきついですね…疲れはあまり感じないはずなんだけどもあ。」

脳量子波では無く、実際の声がドア越しに聞こえてきた。

「今更になって聞くのもなんだが…この話、信じていいんだな。」

それを聞いた刹那も脳量子波で会話をするのをやめてドア越しに声をかける。

意味の無い質問だとはわかっている、
こんな事を聞いた所で真実は覆らない。

ただ、それ以上に認めたく無かった。

アリアル・サーシエスという存在が自分の見つけたい場所に関わっていた事が…

そして、クジャノ・ミストレネの真実があまりにも想像を絶するものだった事が……

「今更現実逃避ですか？選ばれた存在が情けない……………」。

？

選ばれた存在

その言葉がぐさりと胸に刺さった。

今はまだ人がたどり着く事のできない領域に足を踏み入れて変革を遂げた自分。

対話の力を手に入れて、人と人のわかり合う事のできる世界かを作る存在。

「僕は語れる事を全て語りました、この現実からあなたが逃げるといふなら今すぐクアンタから、いや、ツインドライヴを託された希望から降りるべきだ。」

追い討ちをかけるようにミトがつづけた。

そうだった、

今は目の前の現実を受け入れるしか無い、

俺が立ち止まれば全てが止まってしまふ。

「すまない、悪かった。」

「構いません、では本題のエクシアについてですが……。」

その時！

周りの景色が歪む。

「！なっ……………んだ……。」

グラグラと地面が揺れて空土地が逆さになるような感覚が体を走り、同時に世界が突然収縮して行くような吐き気に見舞われた。

全力で倒れる事を避けようとするが体に力が入らない。

「なっ、なんだ…これは…」

頭に激しい痛みが走り全身は締め付けられるように痺れ出した。

ダメだ、力が……………

薄れ行く意識の中、刹那の瞳には通路の照明が映った。

ドシャン

「？刹那・F・セイエイ？」

「いい加減しつこいんだよっ！」

白銀の機体が迫るジンクスを撃ち落とす。

爆発とともに赤粒子を飛ばしながら宇宙に散るジンクス。

もう何度同じ光景を見てきただろうか、数える事もできない

現在リサイヤから数百キロほど離れた宙域。

ペインチェンジャーのメンバーの一人であるタークスと同じくメンバーの一人であるベルディオは連邦軍の奇襲部隊と戦闘をしていた。

「あー、ちくしょうが！ 畏ならわざわざ行くんじゃ無かったぜ……。」

タークスは悔しそうにレバーをに硬く握りしめた。

ペインチェンジャー協力したい、との通信が入ったのは二日前。協力者の少ないペインチェンジャーはもちろんそれを受け入れようとしたのだが……

「あのクソじじいめ、まんまと嵌めてくれやがったな！」

結局それは嘘で連邦からの多大な資金を受けての待ち伏せだったのだ。

そして今に至る。

「キリが無いですね、ストランザム使いますでしょうか？」

複数体のジンクスを相手にしながらベルディオが通信を開く。

既にこちらが逃げ出す算段は整っている、ならばGN粒子量で遠慮する事は無いだろう。

爆発して消えて行く敵を横目にベルディオは苦戦するタークスの近くに向かう。

もともと接近戦がメインのタークスの機体ではこの数相手に戦うのはかなりリスクが高いのだ。

「ちっ、しょうがねえ。頼む。」

タークスは舌打ちをしながらも今の現状を冷静に判断した。

その返事とともにベルディオの機体から巨大な翼が現れる。

「な！これが報告にあった武装だと言っのか？」

「デカすぎる……」

ジンクスに乗る連邦の兵士が驚き、翼から離れようと後退して行く。

「……………これを近くで見られたからには死んでもらう。」

ベルディオがモニターに表示されるターゲットに一つ一つ脳量子波による演算処理でロックオンしていく。

その間にも後退しながらビームの集中砲火を浴びさせようとするジンクス部隊だが、それは全て白銀の粒子に阻まれてしまう。

翼から白銀の剣が少しずつ姿を表して行く。

「全機！防御体制を取れー！」

ジンクスがベルディオの機体から離れながらランスを構える

「全て貫け！」

それよりも早く白銀の剣が全てのジンクスを貫いた。

なおも攻撃しようとしてレバーを動かす連邦の兵たちだったが、貫かれた機体が徐々に光をなくして動かなくなっていく。

「終わりだ。」

ベルディオの言葉と共に全ての剣が爆散して、ジンクスを一機残らず葬り去った。

ベルディオはそれを見届けると、パネルを数回操作してストランザムを解除する。

ストランザムが切れ、白銀の翼は消え去り放熱が始まった。

その間に動けないベルディオの機体のそばにタークスが近づいてくる。

「お疲れだな。てか、あんたのその戦闘中の喋り方直んねえのか。」

「うるさいですね、感謝の気持ちを込めて少し黙っててください。」

ベルディオは自分の数少ない弱点を突かれて不機嫌になる。

戦闘中、正確には敵対勢力との遭遇中には喋り方がいつもよりも乱暴なものになってしまう事…

数少ないなかで一番気にしていることなのであるのだが……

「まったく……。」「

ベルディオは放熱が続いていることを知らせるパネルを見てため息をついた。

ベルディオの機体であるPNC-002トリージュラは多数対一を得意とする中距離戦に特化した機体である。

射撃では強力なビームマシンガンや内蔵型拡散ビーム砲など様々な武装を装備しており、また、格闘では他の機体よりリーチの長いビームサーベルや近距離専用のミサイルを実装しており、かなり完成度の高い機体である。

特にストランザムによる白銀の翼からの一斉攻撃は時間がかかるものの非常に強力で、単体で三小隊全ての敵を相手にすることができるとのほどのものだ。

他にもベルディオのみが持つ高度な情報処理能力により使う事でできる全方位攻撃が可能なハンドレットスプレー。

この様に実に多彩な武器を持つトリージュラだが、反面、粒子を大量使用する際に発生する熱量に対して放熱が追いつかなくなってしまうと言つ欠点がある。

そのため、自身の中で最も強力な兵器であるストランザムでの一斉攻撃後や連続して大量に武装を使用すると現在の様に放熱の間動けなくなってしまうのだった。

「任務が終わつたのにこのざまじゃあダメダメだな……。」

飽きた様に呟くタクスの言葉を流してベルディオはリサイヤに帰る為のシステムチェックを始めるのだった。

PNC・002トリジュール(後書き)

更新おくれですみませんm() () m
うーむ、説明文長すぎますかねえ？

倒れた原因は…

「……………」

目を覚ますとそこはメディカルルームの中であった。

そう言えば倒れたのか、俺は…

起き上がるうとするが体を起こす事ができない。

身体には妙なだるさと疲労感が溜まっている。

起き上がるうと右手をうごかそうとすると、何かに掴まれたまま動かせなかった。

グイッ

うごかそうと引っ張るが逆に引っ張り返されてしまう。

ベッドの横を見ると、そこには刹那の右手を握ったままスヤスヤと寝息を立てるフェルトと、その横でベンチに持たれながら同じ様に寝ているアーシヤンの姿があった。

「……………ん？せ、刹那目が覚めたの！」

刹那の動きに気付いたフェルトが目を覚まし、驚いて声をあげなが

ら刹那に飛び付く。

受け止めようとすると刹那だが身体にうまく力が入らないまま後ろに倒れてしまった。

「フェルト…すまないな。」

泣きくじやるフェルトに優しく声をかけながらも刹那は奥でむすつとしていたアーシヤンに気付き肩を竦めた。

どうやら結構倒れたままでいた様だな…

「刹那兄ちゃん、クジヤノにいちゃんに打たれた傷完治してないのに無理に機体動かして倒れるなんて、遊べなくてつまんなかったよお〜」

不満を全開にしながら拗ねるアーシヤンは相変わらず刹那から離れないフェルトを見て何かを思い出したかの様に手を打った。

「そうえば、グラハムさんが言ってたけど…それって惚気とか言うやつなの？」

ボシユツ！

その言葉を聞いたフェルトは、刹那のすぐ真ん前で音を立ててオーバーヒートする。

まったく…

仕方なさそうに重たい身体を動かして、ベッドから身体を出した刹那は、暫く2人の相手をする事になるのだった。

――
――

「しかし、イノベーターもこう言う時は不便なものですな。」

二人の相手をしたあと、メディカルルームから出た刹那はアニニューらの元へ訪れていた。

この場にいるのはアニニューと刹那を除いて、
テイエリア、リジエネ、ミト、ホンジョウの四人、
イノベイドであるテイエリアとリジエネはたまたま居合わせた
だけであり、ミトは刹那が倒れ他原因を調べる為に手伝いに、
ホンジョウも同じ理由である。

アニニューが手元の資料に目を通しながらため息をついた。

刹那の倒れた原因、

それはクジャノに撃たれた際の怪我が元だった。

一般人と比べて身体能力が遙かに上がっているイノベーターは、当然の事ながら一般人では想像もつかない様な事を成し遂げてしまう。しかし、今回はそれが非常に厄介な方に働いてしまったのだ。

撃たれた傷の酷さからみれば、刹那はかなり長い間休まなければな

らなかった、だが、イノベーターの人知を超えた力ゆえか刹那の身体は傷を負ったままでも動ける様になってしまい、傷が治らないままいつものように生活を送れる様になっていたのだ。

それでも太腿を撃ち抜かれた為に、休養を取らずに動き続けた刹那は疲労がたまり続け、ついに倒れてしまったと言う事だった。

「全く、なんで君はそんなに無茶したがるのかねえ。」

リジエネが小馬鹿にした様に専用の方の方に近づいて来る。

「だが、バックアップがあるとも知らずに銃一本でリボンズに挑んだ君もだがな。」

テイエリアにいたい所を突かれたリジエネはテイエリアを睨みつける。

「まあまあお二人さん、劣等タイプ同士で揉め事を起こすのは無様ですよ。」

その2人を思いっきり馬鹿にした態度でミトが2人をなだめた。

2人が揃ってミトを睨みつける。

今にも飛び掛りそうな雰囲気だ…

テイエリアたちよりもリボンズに近いタイプのミトは、二人よりも完全に能力が上なのはわかっているのだが、人一倍短気な2人にはそれがわかっていても納得できていなかったのだが…

「仕方がない、アニュー、スメラギを呼んでくれ…」

刹那が面倒ごとを早く片付ける為に最終兵器の名前をあげた…

ピクリと動きが止まる2人

アニューが少しだけ飽きれながらスメラギに通信を開こうとする。

「「させるかああああ！」」

シュタアアアン？

それを止める為に2人が完璧なコンビプレーで通信機器のスイッチを切り、アニューのもっていたマイクを取り上げた。

そのプレーは以前のグラハムと刹那のコンビに匹敵する勢いである。

あまりの完成度に驚く一同をおいてリジエネとティエリアは胸を撫で下ろした。

「あまりふざけた真似をしないでくれ……あんな化け物…いや、なんでも無い。と、とにかく、捕まったら無残に殺されてしまう。」

ティエリアがひたいに汗を浮かべながら他のメンバーに声を掛ける。

同じ様にリジエネもぼやいていた。

「あんな年齢詐称の怪物、僕はごめんだね。」

すまなかった、と刹那が軽く呆れながらも謝ると2人は廊下の方へと出て行ったのだった。

「さて、それじゃあ原因も分かったし、刹那・F・セイエイには大人しくしておいてもらいましょう。」

ミトが腰掛けていた椅子から身体を起こして話をまとめる。

アニニューとホンジヨウも同意する様に頷いた。

仕方がないとは思いつつも、迷惑をかける事にたいして嫌な気持ちになっている刹那もそれに同意して部屋を出たのだった。

刹那の回復まで

残り2ヶ月

おまけ

部屋を後にしたりジエネとティエリアは、通路を歩きながら先ほどの事について話し合っていた。

「しかし、危ない所だったねえ。」

「全くだな…と、噂をすればなんとやらだ。」

ティエリアは正面から迫るスメラギの姿を見つけてリジエネに声を掛ける。

先ほどのまでの会話が特にはれているわけでも無いので、2人は黙って通り過ぎようとした。

しかし、

「化け物、それに年齢詐称？まあ、言うだけ言ってくれたものねえ……………」

すれ違いざまに全てが凍りつく様な絶対零度の声が耳に響く。

「ナ…ナンノコトデシヨウカ？」

「サア、ソレヨリティエリアイソガナイトアレニオクレルヨ、ハヤクイコウ！」

2人は全力で駆け出した。

イノベイドである2人なら、一応女性であるスメラギに追いつかれる事は無いだろう…

が、

「まちなさい…少し話しましょうか」

人のスピードを遙かに凌駕した速さでスメラギが二人の前に回り込んだ。

「ツツシンデジタイサセテイタダキマス！」

それに驚きながらも避ける様を通り過ぎて逃げ続ける二人、

その後ろから再びスメラギが迫る。

「なんで知ってるんだ？」

「僕に聞くな？」

「聞こえたからに決まってるでしょ？ブリッジで寝てたら不快な声が聞こえたもんだからわざわざ来たのよ……。」

二人の疑問にスメラギが当たり前の様に答える…

必至で走り続ける2人

これは…もつ…人じゃ…無い

こうなったら…

「くそっ！仕方がない！」

リジエネが逃走を諦めて振り向くと銃を構えた。

「な、何をやる気だ！」

その行動に驚くティエリアだが、生き残る為に必死なりジエネの顔を見て覚悟を決めた。

「足を撃ち抜いても止めるしか無いな……。」

狙いをつけて2人は銃を発砲した。

だが、

それは全て当たる事なくスメラギの残像を貫く、

「いい加減にしないで……。」

スメラギは残像を残しながらその場からさらに加速した。

「あ、あれなに！そんなのありなのかい？」

「ウ、ウアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

一撃でリジエネが沈む、

後に残ったのはリジエネだったはずの物体のみ…

「あなたもこんなと同じものなのよね？ ティエリア。」

スメラギが狂気に満ちた笑みを見せる

「ち、ち、違う！ 僕は、人間だあああああ。」

数発の発砲音の後、

「うあああああああああああああ！」

ティエリアの悲痛な叫びがこだました。

数十分後…

「ああ、やっと行ける、あなたの元へ…………… ロックオン。」

「あれこそがイオリア計画の最終目的である先駆者…………… そうだ
ろう？ ティエリア・アーデ……………」

2人は廊下に横たわりながら嘆いていたのだった。

リサイヤに帰還したタークスは、ゼフィアスに報告を終えて、あてもなくぶらぶらと通路を歩いていた。

なんだかんだで協力してくれる味方は皆無、

食料とかは特に気にする必要も無いのだが、外に出るたびに偵察に見つかって戦闘を繰り返しては機体が持たない。

既にベルディオの機体であるトリージュラのハンドレットスプレーはミサイルがきれて使い物にならなくなってしまった。

加えてアーシャンはいまだ行方がつかめず、個人で行っている調査も全く進展が無い。

カツカツと音を立てながら通路を歩いて行く。

サイドには特に何かがあるわけでもなく、ただ同じ様な無機質な壁が続くだけ。

普段使っているペインチェンジャーの端末も特に面白い機能があるわけでも無い。

「あゝ畜生、なんか苛立つ。」

ゴミ箱かなんかがあったら蹴り飛ばしてやりたいぐらいの勢いだ。

「ん？あれは……。」

タークスはたまたま通路のはしに設置されていたモニターを見た。

特に何かが表示されるわけでもない、ただ、なぜかこのような真っ暗なモニターを見ていると昔の事を思い出すのだった……

「あ〜かったりい……。」

さんさんと照りつける日差しの中、少年はだるそうに建物の屋上の日陰で休んでいた。

ここはとある国の有名な中学……

研究施設育ちのタークスは、学校や世間と言うものをよく知らない。

故に周りからはいろいろな面で浮いてしまっているのだ……

例えば今なんかがそうだろう、

本来なら今は授業中である。しかし、人並外れて頭がいいタークスにとつて、授業は本当にめんどくさいものでしか無い。だから彼は授業をサボって屋上にきているのだが…

「またタークスは……サボってるよ。」

空を見上げるタークスの視界に、現在最も会いたく無かった人物ワーストIの少年が現れた。

「……………」

取り合えず喋り始めると鬱陶しいので無視しておく事にする…

ジーーーー

暑苦しいこの気温の中、

まわりつく様な視線がタークスに刺さる

まあ、とにかくスルーで行く事にするんだ、揺らぐな俺！

ジーーーー、

視線なんかで暑くなるはずも無いのになぜか異様に暑く感じる

というか、まわりつく様なこの視線はなんだ…

日陰の部分であるはずのコンクリートがなぜか少しずつ暑くなって行っている様な気がする…

？照りつける太陽は更に地球の温度をあげ続ける、

全く、太陽光発電システムには感謝してるけど、ここまで暑くなる
とやっぱし鬱陶しいな…

ジーーーーー

「ああ、もう鬱陶しい？いい加減にしやがれギャレス……。」

ついに我慢できなくなり、声をあげて少年に怒鳴りつけた。

ビクッ！と一瞬ひるむギャレス。

これなら押し続けりゃあ勝てるな、

だが、

「なんで…無視したの？」

はあ？

なんでって、こっちが聞き返してえよ。

お前なんで俺にまわりつくんだよっ！てな。

とそんな事を思いつつもかった俺は、適当に答えた。

「めんどくせえ……。」

それを聞いたギャレスが残念そうに俯いて呟く、

「せっかく焼きそばパン買ってきたのに…持ったいない。」

俺はその言葉に反応してすぐさまギャレスの右手に持っている袋を光の速さで奪い取った。

「まったく、本当現金だね…。」

そんな2人を屋上の入り口から見ていた少女が声を掛けた。

「うっせえ、これがあれば生きてるのがすっげえ実感できんだよ！」

タークスが笑顔になりながら悪態を付いた。

だが、その声に棘は無い。

何気ない日常、

学園がタークスにとって、最も居心地のいい場所だった…

サイドストーリー タークス編 01彼の居場所（後書き）

日本じゃなくても焼きそばパンって売ってるのかなあ（・・・）
感想、リクエスト、なんでもお待ちしてます（*^^*）

サイドストーリー タークス編 02 幸せを感じる瞬間

他より優れてるからなんだ…

弱いやつらを守る為のかつこいい力ではなく、
ただ金と悪知恵だけを働かせて権力を振りかざす患者を護る為だけ
の力…

そんなもの望んだんじゃない

いや、

そもそも力さえ望んじゃいない

俺が欲しいのは……

「……………クス、タークス！」

「んあ？誰だ…。」

間抜けな声とともに放課後の素晴らしい熟睡タイムから起こされた
俺は顔をあげ前を向いた。

そこにはいつまでも俺が起きなくて、困った様に机の前に立つギヤレスの姿が映る。

時刻は4時20分…

どうやら一時間近くねむって居たらしい、

「まだねみい……。」

俺は再び眠りの園へ向おうと顔をふせた。

「タークス……あのさ、今日なんの日か覚えてる？」

ギヤレスが顔をふせた俺に呆れながら声を掛けてくる、

「まったく、眠れないじゃねえかよ……」

今日は何の日だと、

今日は別に太陽光発電システム完成記念日でもねえし、ましてや誕生日でもねえ

他に考えれるのは……

特にねえ

「知らね、グツナイ……。」

考えても何も浮かばないので寝る事にする、

あゝあ、考える分だけねりやあよかった、などと思いながら素晴らしい夢の世界へたび立つと

「ちよ…寝たらまずいよ…タークス…」

したところに、再びギャレスのおどおどとした声がかかる…

「いい加減寝かせてくれ、こっちは昨日ので疲れてんだよ。」

少しだけ強く言っつてギャレスの方を睨みつけてみるがまったく言っつていいほど効果は無い。

まあ、当然といえば当然か…毎日同じに使ってんだしな。

「今日は…バスケット部の助っ人で試合に出るんだよ…タークス、自分から言っつておいて…それは…ダメでしょ。」

あゝ、最悪だ…

ギャレスの一言で俺はとんでもなく嫌な気分になってしまった…

何時もながら本当に嫌な気分になる。

ある特殊な理由から身体能力の高い俺やギャレスは、普通の人とは比べ物にならないほど様々な事が全て高水準でできる。

いや、できてしまうのだ…

性格が内気なギャレスならなんとかその辺が影の薄さでカバー出来るが、俺はこの性格だ、当然カバーできる訳が無い。

因みに、面倒くさいのであまり話したくは無いが、俺たちと同じ境遇の人間がもう一人この学校にはいる

生徒会長兼俺たちの監視役の人間、

この上なくめんどくさい性格に加えてあの究極のお節介体質、

俺の安息を常に壊し続ける張本人の…

「タークス！あなたまた助っ人の話忘れたの？今すぐ来なさい。」

ものすごい音とともに教室の入り口が開いた

どうやら、噂をすれば何とやらとか言うどっかの国の言葉は本当のようだな…

現れたのは金髪に青の瞳の少女…

シーナ・リーシア

――
――
――

「あゝかったりい。」

辺りがすっかり暗くなり、皆さんおなじみの天体観測をする為に外に出る人々の流れに逆らいながら、俺たち三人は帰路についていた。バスケの試合は、とにかく疲れた。

身体的な疲労では無い、精神的な疲労だ…

正直自分の周りにいる人間で今隣にいる2人を除けば俺にあらゆる事で敵うやつなんていないだろう。

当然今日の試合も勝ったに決まってる…

俺がいれば勝てる、

俺を頼ってくる奴らはたいていそう言うやつばっかだ。

そして当然勝てばあいつらは喜んで俺に感謝して喜ぶ。

だが、あいつらが喜んでる対象は普通の勝利をした時とは全く違う。

必ず勝つ為に絶対勝てる手段を取りたい願望がかなったことに対して……すなわち、俺を助っ人に取りする事ができたこと対して喜んでるのだ。

ただ俺を使える道具としてしか見ていない。

勿論、そんな奴隷のように扱われる訳でもなくみんな俺に対して嫌がらせをしてくる訳でもない。

むしろかなり優遇されて居ると言ってもいい……

俺が何かを言えばよっぽどのことじゃ無い限り、あたかもあなたの意見について行きますとでも言うように揃って賛成する。

でも、それは俺だからじゃ無い……

この世界の中でたまたま俺のものとなったこの力を後盾としたいだけだ……

きつと、俺の力だけがフワフワと俺を離れたら俺はきつと誰にも相手にされなくなるだろう……

あいつらの目に映るのは俺の中に住み着いてる力だけなのだから。

他人ではなく力にお世辞を言って機嫌を取ろうとする、滑稽な話だ

そんな事を考えていると、何時の間にか寮の前まで来ていた。

「じゃ、私は今日は施設に用があるから、夜は早く寝なさいよ。」
シーナが俺たちの方を向きながら俺が持っていた…正確には持たされてきた、鞆を奪い取って笑顔で言う。

俺たちは全寮制の学校だから生徒は全員寮で暮らす事になっている。そして俺たち三人はある事情から、育ての親であり、研究者でもある博士の元に定期的に通うことになっているのだ。

「じゃな、お前も早く帰ってこいよ。」

暗闇の中向き合って笑顔を見せるシーナを見ながら俺がそう言うとき、シーナは驚いた様に口に手を当てて驚いていた。

何か驚く事でもしたのか…俺…

「心配してくれてるの?」

「な!んな訳ねえだろおが?」

この女はまったく根拠もなしに訳のわからない事を…

本当ペース乱される…

けど、

「ありがとう…。」

この笑顔には勝てないな…

俺たちはそのあと少しだけシーナにからかわれながら、主に俺が、闇に消えて行くシーナを見ながら寮に入って行くのだった。

その晩、

俺の全てを変える出来事が起きるとも知らずに…

サイドストーリー タークス編 03 誓いー思いの証(前書き)

二話にまとめようとしたらこんな結末に…

時代は戻って現在、

漆黒の空に輝く美しい星、

久々に地球に降りた俺は端末を弄りながら外を眺めていた。

ここは都会とはかけ離れていて小さな里山だ…

買い物とかは不便な分、静かで空気も澄んでいて自然が溢れている。

俺たちの通っていた学校はかなり新しく綺麗な類で、この街では唯一の最新鋭の建物と言っていいだろう…

他は団地やら個人の和風の家やらばかりで本当に二十一世紀あたりと変わらない風景ばかりだ…

人類が宇宙に本格的に進出する様になって以来、夜空に映る星の事なんて忘れていたのかも知れない、

そんな事を思いながら人通りの少ない夜道を目的地である街の中央

に位置する場所に向けて歩を進めた。

あの頃とまったく変わる様子の無いこの街…

だがあの事件の事を人々は覚えていたのだろうか…

俺は少しだけ近くにあったベンチに腰をかけて休む事にした…

――
――

寮に戻って部屋で休んでいた俺たち二人は、何の意味もなくぼーつと眠くなるのを待っていた。

いや、正確には俺だけがぼーつとしているのであって、ギャレスは面倒くさい宿題とやらをやっている。

すでに帰宅してから三時間程度立っているだろうか…

「シーナの奴遅えな……。」「

俺は何時もなら帰寮後直ぐにでも部屋に来ているいろんな話を話してくるシーナがまだ来ていない事に少しだけ違和感を感じていた。

すでに時刻は夜中の0時すぎである…

「…タークスやっぱり…心配なんだね…。」

パソコンの前で宿題をやっているギャレスがおかしそうにクスクスと笑った。

「んな訳ねえって…ただ、あいつに絡んでフルボッコにされる哀れな痴漢やろうが出ない様になって思ってるだけだ。」

苦し紛れではあったが、どうやら納得した様にギャレスはパソコンに再び向かってカタカタと作業音を鳴らし始める。

俺は起こした体を再び倒してベッドに身を預けた…

カチツカチツカチツ…

それにしても遅い……

時計の秒針が刻む音を聞きながら俺は端末を開く…

新着メール無し

まったく、余計な心配かけやがって…これで何もなかったらあいつに昼飯三日分くらい奢ってもらおう事にするか…

その時…

ゴンゴン！

部屋の扉を荒々しく叩く音が響いた…

「やれやれ、やっと来やがったか……。」「

そんな事をつぶやきながら俺は部屋の扉を開けた…

だが、

そこに居たのは俺が待つて居た人物ではなく…

「タークス！大変だ…近くにあるあの研究所で事故がおきたって？」

何だと！

この近くにある研究所…

俺たちが通っている研究所のはずだ…なら今はシーナが

「おい！シーナは！シーナはどうしたんだ…。」

俺は目の前にいる奴の襟首をつかんで怒鳴った

考えたく無い物ばかりが頭にどンドン浮かんでくる

「ぐえっ…か、会長は重傷で病院に運ばれたよ！…かなり危ない状態だっ…。」

ガタン！

部屋の奥の方で椅子の倒れる音がした

見るとそこには目を見開いて立ち尽くすギャレスの姿がある

シーナが重傷…

「くそが！おい、病院ってどこだ…。」

俺はさらに強くそいつの襟首を閉めて問い詰めた。

くそっ、嫌なイメージが頭から離れねえ

「ダメだよ！今は近隣の人たちも巻き込まれたせいで事態の収集が
ついてないんだ…僕ら学生は外出禁止になってるんだよ？」

そいつは必死で俺の腕をほどこうとしながら訴えてた。

「そんなことはどうでもいい！病院の場所を教えろ？」

「しっ…週老猿病院だよ！」

そいつが言ったのと同時に俺はそいつを離して部屋の中へ駆け戻る、

「た、タークス…。」

震える様に出すギャレスを横目に俺は部屋の中で使っている上履きを手にもつと、コートを羽織って部屋の窓を開け放った。

どうせ下の階は教師やら何やらが居て通れない…

それなら

「ちょっと、タークス？」

俺がやるうとしていている事に気づいたギャレスが慌てて抑制しようと声をあげたが、それはすでに遅く、俺は寮の窓から別館の屋根に向かって飛び降りていた。

「うおおおおおおお？」

屋根に着地すると同時に受け身を取ってそのまま正門の方まで屋根伝いに走り出す。

門の先にある道路に着地して辺りを見渡すと、近所にいる人々が表に出て騒がしくなっていた。

道にはあちこちに警官やら何やらがいて道をふさいで交通規制をしているようだ。

その300m位奥には爆発でも起きたかの様にごうごうと炎を上げる建物がいくつも見える

「ちくしょう、迷惑ばっか掛けやがって！」

俺はやりきれない怒りと不安を声にして吐き出すと、病院に向けて走り出した。

ここから全力で走れば二分程度でつけるはずだ…

人々がこちらに向かって歩いてくるのに逆らって必至で走る…

途中で誰かにぶつかって罵声を浴びせられても無視して通り過ぎて、週老猿病院に向けて全力で走り続けた。

「ついた！……シーナ……。」

荒い息を整える事もなく目の前にある病院に向かって行く

自動ドアをくぐって待合室にはいると、すでに多くの人々が椅子に横になったりして怪我の手当を受けていた。

ひどい有様だ、腕に真っ赤な包帯を巻きながら俯く人や、やけどで言葉もしゃべれないくらいによわっている人など地獄絵図のようである…

急いでカウンターに出向いて一人の女性に急患で運ばれた少女について聞く…

「はい、それなら第五手術室です…ただ、現在かなり危険な…。」

「どうも、それでは失礼します！」

俺は軽い礼の言葉を述べると、その人の抑制も聞かずに第五手術室に向けて駆け出した。

人の行き交う廊下を通って一番奥の扉へ

「シーナ！」

思いっきり叫びながらドアの前に行くと、手術中のランプが点灯している前に、二人、大学生ぐらいの男性が立っていた。

「すみません、シーナは今…」

俺は2人の男性に声をかけると、2人は振り向いた。

「君は…。」

男が驚いた様にこちらに声を掛けてくる…

「俺は…タクスです！今部屋ん中にいるシーナの友達の。」

それを聞いた2人が顔を見合わせるや否や、いきなり頭を下げて来た。

「すまない、君の友達を守りきれなかった…。」

片方の男が謝罪の言葉を述べる…

「あのシーナは…。」

俺はいきなりの事に驚きながらもシーナの事を聞こうと質問した。

2人が何者かはわからないが、今の俺にはシーナの安否のみが問題なのだ…

「落ち着いてくれ、一命はとりとめた…。」

男が俺を抑える様に肩に手をやり答える…

一命はとりとめた…

「よかった……。」

俺はその言葉を聞くと、力なくその場に崩れ落ちた…

大丈夫かと声を掛けて来た二人の男性の声を聞きながらも、シーナが生きていると言う事実がわかった事で、俺の中の緊張の糸がきれたようだった。

――
――

「すみません。」

何とか落ち着いた俺は、片方の男性からコーヒーを受け取ると、それを持ちながら椅子に腰をおろした。

シーナが無事なのはわかったが、俺の中ではかなりいろいろな思いが流れている…

なぜ事故が起きたのか…

どうして俺はあの時直ぐに異変に気づいて電話なりなんなりで連絡をとろうとしなかったのか…

なぜあいつのそばにいて守ってやる事ができなかったのか…

後悔ばかりが頭に浮かんでくる…

手術中のランプはいまだついたままだ。

「あの……。」

俺が少しだけ小さな声でコーヒーを渡してくれた方の男性に声を掛ける…

男はそれを聞いて見ていた端末をしまつて俺の方を見た

俺よりも背が高く髪も長い…

その後何を話したかはあまり覚えていない…

自分から声を掛けたくせに、本当はそんな事よりシーナの事の方が心配だったのだろう…

何を俺は話したのだろう…

「何かな……。」

「シーナの知り合いの人なんですか？」

「違うよ…ただ、ある意味で…は…同類かな。」

「まさ…あな…達は、俺たちと同じ……。」

「俺たちと同じ？と言う事は彼女だけでな…き…もなのかい？」

「ええ、…と…一人同じ境遇…奴が…ます…。」

「そうか…すまない…私たちが…早…気付い…い…ば…。」

「あな…名前…ですか…。」

「ゼフィアス…こっちが…ベルディオ…。」

目が覚めた…

どうやらねむってしまった様だ…

時計を見ると、時刻は既に予定より二十分ほど過ぎていた…

「仕方が無いか…。」

俺は鉛の様に重たい腰をあげて再び街の中央に向かって歩いて行く。

時刻は九時三十五分

その先に見えるのは病院…

自動ドアをくぐって待合室にはいり、面会の許可を得る…

階段を登って一番手前にある部屋の前に立つと、一応身だしなみを整えておく…

一呼吸おいて部屋をノックした…

「どござ……。」

中から静かな声が聞こえてくるのを聞いた俺は、ドアの取っ手にてをかけて部屋に入った。

「あら？珍しい事もあるのね。」

部屋の奥にあるベッドには、一人の金髪の女性がこちらを見て軽く驚いていた。

「うるえな……たまにはいいだろ……。」

俺は軽く照れながら、手に持っていた袋を彼女に渡す。

中に入っているのは少しばかりのお菓子とドライヤーなどの生活用品…

彼女はそれを見ると飽きた様ため息をついた…

「あのねえ、もうちょっと女の子のための物とか持ってこれないのかなあ…。」

「ああ？しょうがねえだろ。そんなんしか俺は思いつかねえんだから。」

俺が言い返したのを軽く聞き流しながら彼女は優しく微笑んだ…

あれからもう何年立つだろうか…

あのと、ゼフィアスとベルディオの話聞いて、シーナを巻き込んだ事故の原因を作った俺たちの博士ら数人を追う為に俺はペインチエンジャーにギャレスとともに入った。

そしてあの事件以来、シーナは怪我によるリハビリのためにここに入院し続けているのだ。

「体はもう大丈夫なのか？」

俺はベッドの横にある椅子に腰掛ける。

彼女は星空の見える窓の外を見ながら答えた。

「ええ、かなり良くなってきたわ。あと数ヶ月すれば退院出来るだろうって。」

「そうか…。」

俺は同じ様に窓の外を見ながら言葉を返す…

あの日からおれの生活は変わった…

けど、やっぱりこいつを思う気持ちは変わんないな…

おれはそれをもう一度心の中で確認したあと席を立った。

「んじゃ、お前の元気そうな顔も見れたし…帰るとするか。」

出口に向かって歩き出す…

「もう行っちゃうの……。」

「また来る……今度はギャレスもつれてな。」

俺は一度だけ振り向いて笑顔を見せると、そのまま彼女の頬に一度だけ口付けをして再び出口に向かった。

「不意打ちね……絶対に、すぐ帰ってきなさいよ……。」

彼女は赤くなった顔を伏せながら部屋をでて行く俺の背中に声をかける…

「ああ、絶対にな……。」

最後の一言が聞こえたかはわからない、だが、きっと聞こえてたんだと思う…

俺は星空の下を通りながら帰りを急いだ…

ゼフィアスに許可を得た一時的な休暇は明日までだ…

もう少しだけここに居たかったが、もうすぐにも出発しないと間に合わない。

直ぐにまた、俺には戦いの毎日が待っているだろう…

いつ命を落とすかもわからない…

ギャレスと一緒に帰ってくる事もできないかもしれない…

それでも…

ここにはシーナがいる……俺の帰るべき場所があるから…

電車を待ちながら俺は遙か遠くなった病院の方に向けて静かにつぶやいた…

「行ってきます……………シーナ……………」

サイドストーリー タークス編 03 誓いー思いの証(後書き)

自分の中で初のガンダムの登場人物のなかで オリキャラですが
学生時代編を書いて見ました。
どうでしょうか？

感想いただけると助かりますm()m

暗躍と覚悟

大雨のなか、一人の青年が壁にもたれて座っていた。

冷たい雨が次々と地面に降り注ぎ、時折近くを通り過ぎる車のライ
トで近くが明るくなる。

「……………」

静かに立ち上がった青年は、傘もささないで表に出て歩き始める…

騒がしい音やネオンの光が踊り、道から外れた物達は雨と言つ事を
忘れて盛り上がっていた…

世界の事なんて考えずにただ目の前の事を楽しむ愚者達……

彼らはふざけた様な柄のシャツをきていたり、戦った事も無いのに
付け傷のようなものをしていたりする…

馬鹿らしくて仕方がない、戦争と隣り合わせの生活を知らないなん
て言葉があるが、まさにこいつらに言っただけでやりたくなる…

「君は雨に濡れるのが趣味なのか……。」

青年の後ろから不意に男の声が響いた。

それに驚く事なく青年は答える……

「……なら待たせないでください……あなたなら特別な理由があったとしても遅れる事なんてないでしょう。」

青年は振り向く事なく右手をポケットに入れて小さなメモリーを取り出した。

白銀のケースのそれは、雨に濡れながらも、ネオンの光に反射して美しく輝いている……

少しだけ後ろを見ると、派手な色のスーツをきた茶髪の男は二人のボディーガードを連れてきていた。

右目の上には戦いで付けたような傷跡がある。

この様な世界で政治に関わっていく人間が戦場に出た事があるのはかなり珍しいことだ……

「雨に濡れるのは嫌なのでね……本来ならあそこの有名なレストランでの待ち合わせがよかったのだが……。」

男は仕方がなさそうに肩をすくめると、ふと、奥にいる愚者達を見つけた。

青年も合わせるようにそちらに視線をむけながら答える。

「冗談はやめていただきたい……………あんな人のいる所はごめんです。
Mr・アレハンドロ。」

アレハンドロ・コーナーはニヤリと口元に笑みを浮かべながら手に持っていた小型のケースを開けた

中に入っていたのは青年の持っていた物と同じようなメモリー…

「ありがとうございます……………」

それを見た青年は振り向いてそれを受け取る…

少しだけ互いに歩み寄って手を差し出す。

が…

「少しばかりゲームをしないか……………」

その手を止めてアレハンドロは青年に変わった事を提案した…

その内容は…

君たちの生身での力を見せてくれ…とのことだった。

あまり、この男に直接関わるのは好ましく無いのだが…

「なに、少々ゴミが散らかっている様なのでね……。」

そう言いつつアレハンドロはメモリーを弄びながら奥にいる愚者達を睨みつけていた。

どうやら、彼の目指す世界にあのような愚者達はいらぬようだな

……

仕方が無いか…

「分かりました。」

青年はそれだけ言うと、メモリーを再びポケットにしまい込み、愚者達の方へと歩いていく。

「殺しても構わない……後処理は私が責任を持つ。」

後ろからそんな声が聞こえた気がする…だが、いまの自分には関係なかった…

目的の為に敵を打つ

それがたとえ一方的な虐殺であつたとしても…

ある程度近づいた所から奴らを見る…

距離は10m

向こうはこちらに気付いたらしく、バカにしたような態度でその中の数人の愚者がこちらに向かってきた。

「おい、なんだおめえは！」

「まさか新入りになりてエのか。」

二人の愚者が鉄パイプを片手に目の前に立ちただかる

おかしくて笑いそうだ…

いや、実際に笑っているのだろう

何が新入りだ…いつの時代の話やら…

鉄パイプ？

そんなおもちゃにもならないような物で何が出来る

青年の態度にしびれを切らしたのか、片方の患者が肩をつかんできた

「なんかムカつくな、このカスが？……」

その瞬間、その患者の腕はあらゆる方向に曲がった…

悲痛な叫びとともに腕を抑えて倒れる患者の腹を思いっきり蹴り飛ばし、数メートル先の壁にぶつける…

いままで内臓が数カ所と肋が数本あったらどう

その間に鉄パイプを振り下ろしてきた患者の太腿に蹴りを入れて立てなくしておく

恐らくこいつは一生怪我を追ったままの生活だな…

その異変に気づいた他の患者達も続々とこちらに来た…

バカだな…本当にバカだ

迫ってくる患者を先頭から順に潰していく…

腰を砕き、首の骨を折り、両肩を粉碎する…

後ろから迫る患者には構わず手刀で致命傷をおわせた…

本当に時間の無駄としか言いようが無いな。

そして、

まるで流れ作業のように愚者を倒していき、ついに最後の一人となった…

「この、なにもんだおめえは！」

必至で逃げようとしながら愚者は他の愚者につまずいて転び、そのまま腰を抜かしている…

「くるなあ、くるなあ、…。」

かくかくと震えながら愚者はある物を見つけた…

そこに倒れているのは愚者達の中のリーダー格らしき人物、そしてその腰の部分には警官を殺して奪い取った拳銃がある…

「ふはは、いひっ！いひゃはははははははははははははははははははははははははははははは。」「

るのに…

そして、ベルディオとミルティアは考えられないくらいの辛さや罪を背負いながら生きているのに…

目の前にいるこいつは…

「死ねええええええ。」

拳銃の発砲音と共に、辺りに鮮血が飛びつた。

そして、雨によって流れていくそれは美しい川のようにだった

流れたのは愚者のもの、

なぜこんな奴と自分たちは同じ血が流れているのだろうか…

本気で蹴り込んだ愚者の横腹には穴が空き、どくどくと血が流れ続けています…

どしゃ

愚者はその場に俯くように倒れた

聞こえるのは雨の音のみ…

これが俺の………

軌道エレベーターに乗りながら、青年は窓に映る地球を眺めながら先ほどの出来事を思い出していた。

クジャノの脱走や戦力の低下、そしてあの男はなにをかんがえているのか……

わからない事は多い、

だが、それ相応の収穫はあった。

手に入れたメモリーには新たな依頼と補給の為の情報

そして、最も欲しかったアーシャンの所在が入っていた……

「まさか、ソレスタルビーイングにいるとはな…。」

呟きながらあのイノベーターの事を思い出した。

自分達がこんな風になった原因である、ある計画の完成型。

そして、自分達はイオリアの目指していたものとは違う道でそれを完遂しようとした愚者の完成型。

なのに両者には圧倒的な違いが有る、

あのイノベーターを憎む事はおかしい事だ…

だが、それでも彼に対して自分達は少なからず憎しみや劣等感を持っているのも事実…

アーシャンはまだそんな事を知らない

きっと、それはシルビアも同じだろう、タークスもギャレスも全てを知ったわけでは無い…

だから、そんな下らない気持ちを知ってしまう前に……

自分が手を打つ。

一人で決着をつける。

この忌々しい愚者達との関係にも、アレハンドロの計画にも…

そして、自分自身とも

だが、まだその時ではない、

いまはまだ少しだけ時間がある…

せめてその間だけは許して欲しい、

喜びや悲しみを感じる事を…

暗躍と覚悟（後書き）

久々のコーナー大使の登場です。少しだけですが…

感想お待ちしております。

アレルヤの走り書き(前書き)

アレルヤの影が薄かったので…

結局改善出来ませんでした…

アレルヤの走り書き

刹那が倒れてから4日ほどの時が経った、

刹那は相変わらず無理をしたがるが、その度にフェルトが戦略兵器並の視線を向けるので全く整備などを手伝う事もなく回復へと順調に向かっている

テイエリアとリジエネについては、なにが起きたのか知らないがガクガクと肩を震わせながら2人揃って部屋から出てこようとしなくて広がつているようだ…

ロックオンは珍しく人出が足りない事もあって船内の様々な整備やらなにやらを率先して手伝っていた。

こちらも噂だが、スメラギさんとの交渉の未決定されたノルマをクリア出来れば、三日ほどデュナメスを使用してのアニューとのデートを許可してくれるという条件が原因だそうだ。

アーシヤンは相変わらず暴走しており、最近では刹那がフェルトといるにも耐えられない空気にいるせいか、連邦から抜けて来たハム仮面だか、ブシ仮面だか分からない人物と武士道ならぬ頑駄無道と

やらの教えを受けているらしい…

ビリーとか言う軟弱者のヘタレはスメラギさんに近付いては誘惑に負けて、持ち出して来た連邦の極秘データを話していた。正直もう救い用の無い有様だ…

そんな事を語る僕、アレルヤですが、こここの所とても元気が出ません。

理由は分かりきっている。

最近十話くらいの間にかく出番が無いからです。

孤島からの脱走の協力の際にはキュリオスをアニューに取られて出番ごと奪われるし、他では名前すら出ない。

更にだいたい前の見せ場であったはずの戦闘時には力不足のせいでハレルヤに役を奪われてしまった。

次こそはと思っても毎度の事ながら刹那とフェルトの空気に押されてなにもできない。

かと言ってあの雰囲気は僕がマリーと作り出すのは不可能と云っていい。

よく考えれば連邦から抜けて来た他のメンバーのホンジョウ達の方が影が濃いような気がする。

そんな気持ちを引きずりながらも、最近わかった情報であるペイン

チェンジャーと、ソレスタルビーイングの始まりについてまとめてみようと思う。

――

――

ソレスタルビーイングの始まり、

刹那達の所属する組織であるソレスタルビーイングは、当初知らされていた情報ではイオリアによって創設された私設武装組織とされていた。

しかし、実際には真実は別であり、同じ志を持っていた他の二人の人物、アレハンドロ・コーナーのいたコーナー家の元を作り上げたクジャノ・コーナーと刹那の過去に大きく関わる人物であるアリアル・サーシエスの雇い人でもあったゴード・フラストレー、がイオリアとともにこの組織を立ち上げたのだった。

そのご、イオリアを除く二人はコールドスリープにつきそれを追うようにイオリアもヴェーダ内部でコールドスリープについたのだが、アレハンドロ・コーナーの裏切りによりイオリアは肉体を滅ぼされてしまい、現在は何処かにデータとして生存しているようであるが、いまだ確定情報ではない。

三つのGNドライブ

ソレスタルビーイングの武力介入を実現している最大の要因と言えるのがこのGNドライブである。

アレハンドロ・コーナーの裏切りで擬似ドライブを連邦が使うようになってしまったが、それでも半永久的な活動をする事のできるオリジナルのドライブは強力なものであった。

しかし、実はGNドライブはイオリアによって3タイプの設計がされており、そのうちの一つはペインチェンジャーに、一つはソレスタルビーイングに、もう一つはゴードに渡っていた。

ペインチェンジャーの持つ白銀のGNドライブは基本性能はソレスタルビーイングのドライブと同じだが、核をコアとして使う事により、爆発的かつ半永久的な粒子製造を可能にしており、非常に強力なものである。

その反面、機体にかなり負荷がかかることや、ドライブが安定しないなどデメリットもそれなりにあるようだ。

そして、ゴードが持っていた最後のGNドライブのデータ。

これは製造するのは簡単だが、使用するには他のタイプのGNドライブと同調させる必要がある。更にそれにはイオリアが開発当初に組み込んだ専用の制御システムが必要で、それがなければ全く機能する事が無いらしい。

ペインチェンジャー

今回の一連の事件の始まりを起こした組織で、少数な分イオリアの設計したドライブの一つである白銀のGNドライブを有する強力な機体を保持している。

基本的に謎な部分が多いが、メンバー全員が人を軽く超える能力を有していて、さらにはある有名で強力な人物をバックにつけているようである。

主なメンバーは

リーダーである

ゼファイアス・ヴァンガード
補佐的な役割の

ベルディオ・ヴァンガード

同じく補佐的な役割の

ミルティア・ヴァンガード

高校生程度の年齢とされる

タクス・ヴァンガード

ギャレス・ヴァンガード

中学生程度の年齢とされる

シルビア・ヴァンガード

そして、彼らの中では最も高い能力を持つ十歳前後の少年、
アーシャン・ヴァンガード

その他の、刹那の過去に大きく関わる人物であるクジャノ・ミスト
レネが所属していたが、離脱した為、現在は敵同士の模様。

彼らの持つ機体は七機、

ただし、アーシャンは現在トレミーに機体と共にいるので、現在彼
らが使えるのは六機。

それぞれの機体が各自の特性を生かす様にかなり改造されており、
同一系統なのだが、全く違うタイプの機体となっている。

元をたどると、Oガンダムからソレスタルビーイングとは別の形で
派生して来た機体である。

なお、本格的な行動を開始する前には、性能テストとしてカスタム
されていないPNC-007ネームゼロが使われていた。

基本武装としては、戦闘スタイルによって使わない事もあるが、全ての機体にGNフアングが装備されており、また、トランザムと同じ様なシステムであるSトランザムを使用する事ができる。

Sトランザムは全ての機体が、使用時に高濃度粒子で出来たビーム兵器に似た白銀の大きな翼を現わす事がわかっている。

この翼には機動性を驚異的に引き上げたり、防御や攻撃の為の武装としての使用が可能であり、メンバーはそれぞれ自分にあつた強力な技を持っている。

また、全ての機体が白銀の翼を展開する事で敵を追い詰め白銀の剣で止めを刺すという技を使う事ができる。

PNC-001

通称、ドウローレン

ゼファイアスの専用機で、あらゆる距離での戦闘が行えるタイプ。

大型ビームランチャーや小型ビームマシンガンなど、射撃分野においての性能は飛び抜けている。

近接戦闘では六機のソードフアングと、粒子を纏わせる事により驚異的な切れ味を持つワイヤーによる先頭が基本である。

その他、リーダーであるゼファイアスが乗る事から通信機器の強化や場合によってはある程度の範囲内にいる味方機を自動操縦に切り替える事が出来るシステムを積んでいる。

Sトランザム使用時には、広範囲にわたる白銀の翼での攻撃や、イグナイトモードと呼ばれる状態になり、ワイヤーに超高濃度粒子を大量に流し続ける事によって周りの敵を一気に殲滅したりする方法で敵を圧倒する。

PNC-002

通称、トリージュラ

ベルディオの専用機で、多数対一を得意とする中距離戦に特化したタイプ。

射撃では強力なビームマシンガンや内蔵型拡散ビーム砲など様々な武装を装備しており、また、格闘では他の機体よりリーチの長いビームサーベルや近距離専用のミサイルを実装しており、かなり完成度の高い機体である。

ストランザムでは、白銀の翼からの一斉攻撃が時間がかかるもののもつとも強力である。

ベルディオの演算処理能力がある為同時にロックオンできる数が他のメンバーより圧倒的に多く、単体で三小隊全ての敵を相手にすることができるとほどのものである。

他にもベルディオのみが持つ高度な情報処理能力により使う事のできる全方位攻撃が可能なハンドレットスプレー。

しかし、欠点として、粒子を大量使用する際に発生する熱量に対して放熱が追いつかなくなってしまう問題がある。

そのため、自身の中で最も強力な兵器であるストランザムでの一斉攻撃後や連続して大量に武装を使用すると放熱の間動けなくなってしまうので、サポート機が必須である。

PNC-003

通称、デクティアラー

ミルティアの専用機であり、圧倒的な防御力を誇る機体である。

外見はほとんどゼフィアスの機体から武装を減らしたものと変わらないが、機体のあらゆる部位に小型のGNフィールド展開装置や装甲の上に常に他の機体より高い圧縮率粒子を纏わせる事が可能である。

ミルティアの超正確な射撃能力を生かすための武装が多く、小回りには聞きにくい射程の長いライフルがメインとなる。ファングやビームサーベルは滅多に使う事が無い。

ストランザム使用時には、ビーム兵器の反射を行う事ができる様になり、一定許容量内のビームなら95%と高い割合を保ったまま返す事ができる。

団体戦では防戦になりやすい反面、一対一や小数との戦闘ではかなりの戦果を上げる機体。

PNC-004

通称、エルランス

タークスの専用機であり、近接戦闘特化のタイプである。

凄まじく爆発的なスピードを一瞬だけであるができる。その力は近接戦闘では脅威であり、まだ、ロングビームサーベルやショートカッターサーベルなど、様々なビームサーベルを持っている。

その数は実に十二本、ビームの出力によって攻撃範囲も自由に変える事ができる為、近接戦闘はパイロットの独壇場である。

Sトランザム使用時には更に高速戦闘を行う事が出来たり、各部のサーベルを全て開放して相手を翻弄する。一対一では最高レベルの機体である。

他にはタークスが圧倒的な視野の範囲と、同時に目に映るもの全てにピントが合うと言う力を持つ為、センサーの類はほとんど背後の部位についており、死角が他の機体より圧倒的に少ないのも強み。

PNC-005

通称、ヴェグナガン

ギャレスの専用機であり、タークスとは対をなす射撃特化のタイプ。メイン武装は全て射程が他の機体のものの三倍近くあり、威力も高く、粒子使用率もその分高い。タークスの機体であるエルランスとコンビを組む事で最大限の力が発揮される様になっている。単機でも十分に殲滅などが行える点から様々な任務にサポートとして参加する事が多い。

Sトランザム使用時にはエルランスと同じ様にこちらは持っている射撃系統の武器を全て開放して相手を圧倒する。

他にも全てのビームを収束させて放つ高濃度粒子長距離射撃は、敵部隊を壊滅に追いやるほどのものである。

また、ギャレスは既存の武装同士を組み合わせる事でより多くの攻め方をする事ができる為、全ての武装に専用のマルチジョイントがついている。

PNC-006

通称、プロキシア

シルビアの専用機であり、機体そのものに武装を内蔵してある可変タイプ。

変形する時はテールユニットである大型のフライブースターにより粒子を使う事なく移動する事もできるため、他の機体の高速移動時に使用されることが多い。

唯一の可変機である為、他の機体に常備されている武装は全て内蔵式になっており、ビームサーベルなども腕に直接取り付けてある。

上記の理由から、他の機体よりもやや簡素な作りの様に見えるが、耐久力や武装の火力は他の機体にも引けを取らない。

ストランザム使用時にはビームの威力が驚異的に上がり、内蔵されたライフルから一撃で相手を沈める一撃離脱の戦闘をする。

機体の外側に武装が少ないため、後付けのユニットの数が他の機体より多く、作戦によって様々なユニットの換装を行う事で地形などに左右されることなく性能を発揮する事ができる。

PNC-007

通称、ネームゼロ

組織の機体に実装予定の装備のテスト機として開発されたカスタムされていないプロトタイプのPNCシリーズ。

物語のはじめの方ではクジヤノが乗っており、その後脱走の際に彼によってペインチェンジャーから盗み出されてしまう。

開発番号は007であるが、組織の中ではじめに製造された機体である。(アーシャンの加入は当初予想されていなかったため、その

時の最後のNo.である007となった)

基本的には誰でも操縦が可能であるが、データ収集が目的の機体であるため、一般兵などには少々扱いの難しいシステムを組み込んでいた。

現在はクジャノが個人的にシステムを改造しており、当初より更に扱いが難しくなった分、性能は格段に上昇している。

PNC-008

通称、ファントム

アーシャンの専用機であり、圧倒的な数のGNファンングを装備する中距離特化型のタイプ。

PNCシリーズでは最後に製造され、各問題点などを改善したプログラムの使用など他の機体とは一線を画す機体である。

アーシャン自身の高い能力からGNファンングをヴェーダなどのサポート無しで最大十六機まで自由に操る事ができる。

ファントムのみファンングの形状が他の機体に常備されているものと違い、速さと耐久性をワンランク上げたものになっている。

その他の武装はなるべく中距離戦に持ち込む為に射程やリーチが設定しており、システムもパイロットの高い操作技術を生かすものとなっている。

ストランザム使用時には、ファンングのスピードやチャージの時間が驚異的に上がる。

そしてこの機体最大の特徴は白銀の翼を機体の各部に集中させる事により可能になるビームブレイドである。

出力を抑えた状態でもサバーニヤのフルバーストを一瞬にして掻き消すほどの威力であり、シミレーションの結果、超広範囲にわたる敵の一掃や防御の硬い敵艦を難なく消し飛ばす威力であるとされている。

PNC長距離型兵器

通称、リライター

ペインチェンジャーの使用する大型長距離兵器。

ドライヴと直接連結する事によって高濃度粒子を大量に貯め、それを一度に開放する事で戦況を一気に変える事のできるほどの大型ビームを発射する。

基本的には使い切りで、回収が難しい場合は自爆させる事が多い。

アレルヤの走り書き（後書き）

アレルヤって、なんか影薄くなりがちですね） - ;（

まちまちだった機体たちの詳細でしたが、

如何でしたか？

感想いただけると助かります（^-^）

オペレーションTRYジェネシス

連邦軍高軌道ステーション司令部

此処では、数ヶ月前の戦闘を境に活動を停止していた、私設武装組織やテロ排斥を唱え、それを強引に、武力を用いて押し進めようとする者達が集まっていた。

円形のテーブルに集まった各軍部でのこの計画に賛同する指揮官らは八人。

どの顔も有名な者達が多く、また、その気になれば国軍にも戦争をしかける事のできるほどの独立した権限を持つものばかり…
軍を自分のための金の木としか思わないような者達だ…

「集まったようだな……。」

一番奥の席に座って深く偉そうに腰をかけている老人が喋り始めた。他のものは皆目を瞑りながら、同じような格好でそれに耳を傾けている。

薄暗い部屋の中では、ブルーの弱い電灯が唯一の光源で、彼らの実に高そうな指輪や腕時計を怪しく輝かせていた…

「此処に集まってもらった理由は他でもなく……例の武装組織ソレスタルビーイングと、新たに出現した謎のテロ組織の排除のためだ……」

大型モニターに戦闘を行うクアンタやファントムの姿が映されている。

そこで言葉を区切った老人は机に置かれたワインを飲み、再び喋り始めた。

「前回の合同軍による鹵獲作戦は失敗に終わってしまった。……………」

……そこで、我々は次の計画に移行する事となった……」

その一言に全員の視線が急に真剣なものに変わる。

己の持つ野心を隠して協調している彼らが共同で作り上げた極秘計画、

オペレーションTRYジェネシス

独自に軍事行動をする事のできる個人の部隊や配下に置いている軍を用いた私設武装組織及びにテロ組織排斥のために計画された強行軍事行動計画であり、この計画の存在は、連邦も知らない。

本来ならあと十年は先に見送られるはずだったこの計画の始まりを急速に早めたのは、過激な行動を行い、尚且つ強力な力を持つペインチェンジャーの存在である。

リボンスによる大戦のあと、融和政策を積極的に進めている地球連邦政府にとって、此処に集まっている権力者達は非常に障害となる存在であり表面上での友好関係は保っているものの、内部では一触即発のような状態であったのだ。

そんな不安定な状況の中でのペインチェンジャーの出現によりパワーバランスは激変、二度と無い機会をチャンスと見たこの八人は連邦国軍から大量の援助を受けることに成功し、計画を進めたのだった。

「しかし……グラハムの国軍離脱は痛手であったな。」

ヨーロッパの権力者達にとってはアメリカのエースがいなくなった事はラッキーと言えた。

だが、仮にグラハムらがソレスタルビーイングに協力しているとなると話は別である。

「我々の戦力を持ってすれば倒せん事もなかるう。さっさと総力を上げて潰せば良いのだ……」

ロシア軍を殆ど動かす事のできるこの人物にとって物量戦は有利なようだ……

「だが、テロ組織とソレスタルビーイングが共闘する事となれば話は変わるのではないのか…。」

「そんな事あるわけがない…。」

二時間後…

各々自分の意見を通そうと譲らず、会議は殆ど意見のまとまらないまま最後の議題となってしまうた。

「では、最後の議題だ…オペレーションTRYジェネシスの第二段階への移行に当たって、新たな仲間が増える事となった。」

テーブルを囲って座るもの達がざわめく、

彼らに匹敵するほどの権力者など滅多にいない、

なら誰が…

「入りたまえ。」

老人の声と共にカツカツと廊下から誰かの足音が聞こえ、暗闇の中から一人の男が現れた。

茶色の長い髪に、権力者などには珍しく顔に傷跡のある男…

「コーナー家党首、元国連大使の…アレハンドロ・コーナーです…」。

「

アレハンドロは一礼したあと、新たに用意されていた椅子に腰を下ろすと、静かに両腕を肘掛に乗せた。

そして、疑うような視線が他のメンバーから彼に向けられる。

最初に部屋に招き入れた老人を除いて、他のメンバーはアレハンドロにあまりいい印象を持っていない。

権力者達はライバルが増える事を歓迎しないのだ…

「さて、それでは宣言といくか…」。

老人は立ち上がって部屋のもっとも明るくなっているモニターの前に歩いて行った。

全員の視線がそちらに集まる。

「これより、我々は私設武装組織及びにテロ組織の壊滅を目的とした軍事行動、オペレーションTRYジェネシスの第二段階への移行を、此処に宣言する！」

戦闘配備

オペレーション TRY ジェネシス

その第二段階への移行に伴い、既に独立軍は行動を開始していた。

連邦はこの動きをキャッチしたものの、権力者達に撤退勧告をする事ができず、正規軍を一部協力させる形での監視のみとなっている。

「司令部より伝達……………本作戦の最優先事項は、謎のテロ組織の壊滅、並びにソレスタルビーイングの排斥にある。その他は、敵対行動を示したもののみ排除に当たれ。繰り返す……………」

作戦宙域に集結する各独立軍に指令が走り、いよいよ敵対勢力がいるとされるコロニーへの到着を待つばかりである。

「殲滅対象は敵対勢力全てである、か…」

アンドレイはこの馬鹿げた作戦に飽きれ、ため息をついた。

本来ならあの時ソレスタルビーイングのメンバーの脱出に協力するはずであったのに、緊急の招集で機を逃し、結局は自分が正しいと思った者たちと戦わなければならなくなった…

つくづく、自分のタイミングの悪さを呪ってやりたくなる…

「父さん…母さん…俺は、正しい道を進めるのでしょうか…」

同時に全機に代表名簿が送られた。

事前に目は通してあるのだが、形式的な形でもやるべきと上層部で決まったのだ。

まったく、金と権威にしか目が無い腐った上層部は無駄な事ばかりをする…

掃討部隊総指揮官

ロシア軍、リユーナ・ゲイル

作戦本部総指揮官

旧AEU総括、ヴァーユ・スーフィー

第一波戦闘部隊隊長

ハイエル・ファン

第二波戦闘部隊隊長

ヒューペリー・ローオン

別機動部隊隊長

スプレンド・サン

第三波戦闘部隊隊長

ローン・ブライアン

特殊戦闘部隊隊長

スカー・ストロフ

独立部隊総括

アレハンドロ・コーナー

大量のジnkクス部隊に加えて、アヘッドや新型機であるブレイヴまでを投入したこの作戦は、連邦、独立国軍、ペインチエンジャー、ソレスタルビーイングの四大勢力の激突となり、後に「セカンドブレイク」と呼ばれる大戦へと発展するのだが、今のアンドレイにはそんな事はわからなかった…

コロニー基地、リサイヤMS格納庫

「おい、アーシャンの居場所が分かったのになんで出撃しねえんだよ？」

機体の横で整備を続けるタークスが、同じく隣で機体の整備を黙々と続けるギャレスに声を掛けた。

二時間ばかり前に地球から帰って来たばかりのタークスは、いきなり出撃準備をしておけなどと理由も無しにゼフィアスに言われたため、オペレーションTRYジェネシスの移行による進軍について聞かされていなかったのだが……

「……ねえ、タークス。ニュース見てないの？」

ギャレスは飽きたようにため息をつきながらタークスの方をちらりと見る。

実はこの作戦はかなり大掛かりなもので、既に世間へと公表されていたのだった。

当然これについて放送しない番組は無い。
全番組がこれについての緊急編成にされ、今や世界中の注目の的となっているのだ。

公共機関を利用して宇宙に上がって来たタークスなら一度くらいは聞いているはず、と他のメンバーは思っていたのだが……

「なんだそれ……。」

やはりタークスに常識は通用しなかったようである。

ギャレスは、仕方ないか、とでもつぶやく様に再び大きなため息を

着くと、目の前でやっていた作業を止め、こんな事もあるのかとあらかじめ用意しておいたタークス専用丸わかり世界情勢ガイドver.3を投げた。

メモリーは重力の小さい格納庫の中をまっすぐ飛び、タークスの手に収まる。

メモリーにわざわざタークス専用とまで描いてあった…

タークスが受け取ったのを確認すると、そのまま自分の仕事を再開する。

早速タークスはそれを端末に差し込み、ギャレスが事前にまとめていたデータを読み取って行く。

「はあ？」

読み取りを行いながら記事を読んでいたタークスが突然声を上げた。

ギャレスはおそらくあの情報を読んだのだろう、と特に気にする事もなく作業を続ける。

それは、全世界に発表された軍事作戦についての声明文であった…

作戦まで…あと三時間。

戦闘配備（後書き）

戦闘配備で出して欲しいキャラを募集します＼（＾o＾）／
応募していただける方は、感想orコメントにも同じ欄を作るので
そちらにお願いします。

締め切りは戦闘本編の始まる予定の土曜日までですo(^ ^)o
よろしくお願ひしますm(_ _)m

戦闘配備2 (前書き)

今回はグラハムです。

若干短いですが (^| ^ ;)

戦闘配備2

戦闘を行うために必要な条件…

それは、MSでもなく作戦でも無い…

必要なのは己の信念である。

目の前に漂う日本刀を静かに見つめ、静かに目を閉じる。

視覚的ににも見えなくなった事により、その先に見えてくる様になるもの…

己の武士道は、間違っていた…

それをあの少年、刹那・F・セイエイに気づかされた。

修羅の道を歩むと決め、復讐に取り付かれたあの時…

その時持っていた己の信念の全てをぶつけ、敗れた事によって見つけた新たな境地。

そしてそこへ行くための道…

思考を止め、心を無にする…

目を閉じたまま目の前にあるはずの刀に手をかけ、その鞘を抜いた。

その方なの感觸を感じながら、目の前に用意しておいた藁のイメージを鮮明に脳裏に映し出す。

呼吸を止める……

聞こえるのは心臓の鼓動のみ…

「頑駄無！」

掛け声とともにグラハムは藁を見事に叩き切った。

藁は床に落ちる事なくふわふわと宙を漂っている。

「完成したな……カタギリ、今のデータは取れたのか？」

湧き出る汗をぬぐいながら、目を開けたグラハムは、ガラス越しにこの部屋での彼のデータをとっていたカタギリに声を掛ける、

「ああ、勿論だとも。」

ピリーは笑顔で答えた。

「しかし、さすがグラハム。日本の剣技を機体に取り込みたいからと言って此処まで完成させた型を用意してくるなんて。」

ピリーはグラハムのすごさを感じながら、目の前で行われた動作を次々とデータ化して行く。

あとはシステムとして成り立たせて機体のシステムに組み込めば完成である。

その間に、グラハムがタオルを片手に部屋の中からでて来た。

どうやらあの一振りでかなり体力を消耗するらしいのだが、

「カタギリ、出撃まで時間が無い。例のあの武装も今すぐ用意してくれ……………」

そんな事を考えていると、グラハムからとんでもない注文が飛んできた。

例の武装…………

と言う事は即ち…………

「そう、最強の戦闘兵器として名を馳せたあの究極の武装。」

日本刀をな！」

グラハムはそう言つと、そのまま笑ながら部屋をでて行ってしまった。

どうやらもう装備される事前提らしい…、

新たにブレイヴに装備する予定の、GNジャパニーズブレイド。

日本刀と言つ。

グラハムが考案した対ガンダムの為の最強の武装らしいのだが、いまいち納得出来ない。

GNフィールドを破る為に使うのかと思えば、そんな事はないというのだ…

なら何故、あのような極めて効率の悪い兵器などを装備しようとするのだらうか…

結局ビリーは理由がわかる事もなくその場をあとにするのだった。

×月 日

私はある事に違和感を感じていた…

最近どうも日本刀での剣術をやっている時に、人並外れたような力が湧いたり、振りかざしている剣筋がまったくぶれる事なく見えるのである。

そして最もおかしいと思うのは…

目の前にある刀を抜くと同時に、私の瞳が黄金に輝いた。

刀の刃にはそれが綺麗に写っている…

そう、いきなり瞳の色があり得ないものに変化するのだ。

どうもこの変化は、以前の戦いでクジャノ・ミストレネとやらに、刹那とともに挑んだ時くらいから始まったようなのだが…

これを起こす方法は簡単だった、

ただ集中して日本刀を握ればいい…

その為にブレイヴにも日本刀を実装してもらったのだ。

果たして、この力はなんなのだろうか…

これが新たに道を開く鍵となって欲しいものだ…

さて、今日はこの位にして明日の晩から始まる戦闘に備えて床に就くとするか…

おっと、

此処で一句

武士道の

託せし光は

頑駄無道…

うむ。なかなか良い出来だな…

戦闘配備2 (後書き)

感想、リクエストお待ちしておりますm | | m

開戦、セカンドブレイク

迫り来る軍……

長距離望遠カメラ越しに映るその様子をみていたペインチェンジャーのメンバー一同は、その圧倒的な数を見ながらも、それぞれがこなすべきことをゆっくりと考えていた。

敵がいくら多くても、一機の戦闘力はたかがしれている。ならば大事なのはどれだけチームプレイで敵の数を削るかである。

リライターも初めから温存する気も無い、どのみち今使い切らなければ次は撃てないのだ。

現存する全ての武装を機体につけ、五機あった全てのリライターをリサイヤの外部に設置する。既にエネルギーはチャージが完了している。

ゼフィアスが静かに口を開いた。

「220秒後、作戦を開始する……。」

いつも以上に気迫のこもったゼフィアスの声に、一瞬全てのメンバーが身震いしてしまう。

誰も寄せ付けられない様な拒絶と、強い覚悟を秘めた様な声。その言葉の意味を知る者は誰一人いない。

「ギャレス……、俺らの目的って何なんだ……。」

戦闘が開始されるまでもうすぐと言うところで、タークスがギャレスのみに通信をいれていた。

ペインチェンジャーの存在する意味、そして自分が此処に居て為すべきこと、そんなことを考え出すとキリが無い。

復讐を果たす…

少なくともタークスとギャレスがこの組織に入った理由はそれだった。だが、それはあくまでも個人の目的でしかなく組織の、ペインチェンジャーの目的では無い。

だからこそ問いたかった、

自分と最も近い境遇であり、最も信頼出来る友と呼べる存在に…

ギャレスがゆつくりと答える…

「僕らは、本当の意味で人として存在する為に戦ってるんじゃないかな……。」

珍しく話の間に沈黙を入れることなく答えたギャレスの返答は、自分の此処まで歩んできた全てを振り返り導き出した様な言い方だっ

た。

本当の意味で人として存在する、

自分達は他人より力をもって生まれた、それはそれは本当に圧倒的な力だった。

時には他人から頼られ、時には他人から恨み妬まれた。

そしていつも俺たちを特別視して、彼らの思う人の定義から俺たちを外して考えていた。

研究施設にいた奴らもそうだ、誰一人として俺たちを人として見ようとはしなかった。

俺たちはただの研究材料にすぎず、使い勝手の良いコマでしかない。

だから俺たちは動いた、

そうか、考えれば単純なことだったのかもしれない…

俺たちは二度とこんなことを繰り返したく無いんだ…

「ありがとな、ギャレス。」

「答えになったかわかんないけどね…。」

ギャレスが少しだけ笑顔で答える。

俺たちの存在する意味、それは二度と俺たちの歩んだ道を歩ませないこと…

それが俺の中の答え…

なぜか体が軽くなった気がした、いや、軽くなったんだろう。何か突っかかっていたものが取れたから…

「作戦、開始だ！」

ゼフィアスの声と共に全ての機体がりサイヤから白銀の光を放ちながら飛び出していく。

後に、セカンドブレイクと呼ばれることとなる大戦、その幕が今落とされたのだった。

同時刻、

ソレスタルビーイング母艦、プトレマイオスEEI

こちらでも既に武力介入の為の出撃準備が整っていた。敵対する強力な二つの勢力両方に介入するこの作戦は、ソレスタルビーイングにとっても始めてのことである。

三大国家の時とは違い、相手の力は自分達に匹敵するのだ。おそらく数の最も少ないこちらは苦戦をしいられることになるだろう。

ミトが現在解析を行っている、エクシアに隠されているはずのデータは作業が難航を極めており、最初の間、刹那は出撃することが不可能である。

更にペインチェンジャーとアーシャンの接触を避ける為にアーシャンを何とか抑えておく必要があるのだ。ただでさえ人が少ないこの状況、うまく行けばいいのだが…

テイエリアは思考を止めると、そのまま目を開いた。その人味は黄金に輝いており、赤い色のデータに包まれたこの場所では特に目立っている。

誰にも気づかれることなく戦闘前に集中する為、ヴェーダの中に意識を飛ばしてきていたのだが結局集中する事はできなかった。

出撃まであと一時間と言ったところだろうか。

そろそろ意識を戻すでしょう。

ロックオン、

あなたが変わった世界はまだ終わってません。

だからこそ、必ず変えて見せます。

ミレイナたちの為にも……

虚空の彼方に

飛び交う赤と白銀の光、

リサイヤ周辺では激戦が繰り広げられており、ペインチェンジャーは出せる全ての力を出して敵をなぎ払い続けている。

「こんの、くたばりやがれ！」

タークスが近くにいた機体を斬り倒して、同時に四方にいた敵全てをファンングで撃墜した。

しかし、その穴を埋めるかのように次の機体が現れて攻撃を再開する。圧倒的物量を最大限に生かした全く休みの無い波状攻撃であった。

特に射撃戦闘を苦手とするタークスは、機体が釘付けにされ無い為にも常に動き続けているのを動かし続けなければならず、ほかの仲間より更に劣勢になっている。

「くっ、上か！」

敵の攻撃を知らせる電子音がひっきりなしになり続けているなか、敵の隊長らしき機体を遥上方に見つけたタークスが一気にスラストを蒸す。

対団体戦での最も有効な手は敵の隊長を潰す事、セオリー通りに動く事はタークスには似合わなかったが、最善の手を尽くすべき時には仕方がない。

「?…。面白いではないか！」

敵影を見つけた連邦の隊長は、ほかのMSを援護に回らせて自らビームサーベルを引き抜いた。

散開して行く数十機のジンクス部隊の先に、一機の紺色のジンクスが現れる。

他の機体よりもブースターや装甲のつくりが違う所から、おそらく専用機だろう。

「落ちろ、この化け物め！」

一瞬にして間合いを詰めてサーベルを振りかざすジンクスの動きに合わせて、最小限の動きで敵をよける。

下がりながらビームを撃って敵を止めようとするが、全てよけられる。どうやらかなりのベテランのようだ。

右前から迫るジンクスをライフルで牽制しながらも、タークスのエルランスは腰にマウントしてあるロングビームサーベルを引き抜いて構える。

ぶつかり合うサーベルがものすごい光をおこし二つの機体がぶつかり合う。互角に見える戦いを繰り広げながらも、出力で勝るエルランスが少しずつジnkクスを押ししていた。

ロングビームサーベルの攻撃範囲を生かしてジnkクスの装甲をかすめるような攻撃を繰り返すタークス。対するジnkクスは全く攻撃が届かず、防戦一方となり始めていた。

守ってばかりでは負ける、

そう判断したのか、いきなりジnkクスは攻撃方法を変えてきた。サーベルを逆手に持ち、今度は蹴りなどの体術を織り交ぜた戦法。

ロングサーベルを使う時に生まれるわずかな隙について蹴りなどを加える事により、優勢を保っていたタークスが少しずつ押し返され始めた。

正面から、素早いサーベルによる突きが繰り返されたのをロングサーベルで捌いてその左腕にエルランスはショートサーベルを突き刺した。

「ぐ、やられたか…。」

爆散する左腕を肩から切り離れたジnkクスは敵がいるであろう方向に向かって蹴りをいれた。

ドガアアン！

しかしそれは当たる事なく、逆にサーベルによって足は切り裂かれていた。

だが、間髪いれずにジnkスは次の攻撃を繰り出す。

今度は横から、敵をなぎ倒すような蹴りと共にサーベルが迫ってきた。

「やらせるかよー！」

すばやく姿勢を倒してそれを避けると、そのまま一気に六機のファングを射出して敵の周りに展開する。

こいつで終わりだ！

攻撃をしたばかりの機体ではこのファングの包囲網をよける事は不可能………

「ぬ？」

一斉に全てのファングがビームを帯びながらジnkスに迫る。

しかし、それを見切っていた敵のジンクスはすかさずタークスの機体に蹴りを入れた。

「な？なに、ぐあああああああ！」

防御する間もなく思いつ切り蹴りを入れられたタークスの機体は、後方に吹き飛び、同時にファングでの攻撃が止まり、全て機体の元へともどって行く。

「やはり対ファングでの戦闘をした事が無いようだな！」

そっぴいながら、姿勢を崩したままのタークスの機体に急速に接近するジンクス。

今起きたのは、蹴りによって一瞬、脳量子波によるファングの遠隔操作が乱れる事を見越した緊急回避術。
かつて初期ジンクスに乗ってファングを使うガンダムと戦った事のある彼だからこそできた芸当だった。

「……………」

吹き飛ばされたまま動かないタークスの機体にジンクスが迫る。

各部が損傷しているが、問題なく動く事ができたジンクスは、そのまましまっていたサーベル再び引き抜いてそれを振り上げた。

しかし、エルランスはピクリとも動かない…

「終わりだな、覚悟！」

そして、サーベルが振り下ろされた。

虚空の彼方に（後書き）

これから暫く私立入試があるので、
若干ペース落ちますm(| |)m
二月十一日以降は戻りますので、
それまでの間、ご迷惑おかけします。

トリアルネクストシステム

振り下ろされたサーベル。

だが、それは当たることなく空を切っていた。

周りに残っていたのは先程までエルランスがつけていた背部パーツのみ…

「何だと！」

驚きのあまり声を上げた敵隊長の機体のはるか上方には、先程までうごいていなかったはずのエルランス…

一瞬にして数百mの距離を移動していたのだ…

「つくよお…、こいつはまだ使う気なかったのにな…。」

エルランスのバックにある装備が何時の間にか姿を表しており、大型のブースターとなっていた。

「仕方ねえ、一瞬で潰してやるよ！」

タークスは声を上げると共にレバーを一気に前に倒す。

一瞬爆発的に粒子が飛散する。
そして次の瞬間には景色が変わっており、先程いた場所から敵を通り越して反対側までできていた。

ドガアアアアーン！

その後間もなく四機のジンクスが爆散した。

「あ、あああ！」

驚いている敵をおいて、エルランスは既に新たにビームクローを開放して次の攻撃に移ろうとしていた。

「全機、奴を叩けえ！」

隊長の指示と共に他の機体も攻撃を始める。しかし、それは全て外れて、残像を撃ち抜くだけ……

「見せてやる……エルランスの力をなあ！」

ミルティアの乗るデイクテアラの狙撃によって相手からの長距離攻撃がなくなっているものの、ペインチェンジャーはその圧倒的な物量さを前に予想以上の苦戦をしいられている。

そんな中一機の黒い機体が、遠く離れた地点から戦場へと向かってきた。

前身在黒を基調とした装甲に加え、バックには二つの剣を合わせたような大型の実体剣がマウントされている。

腰の部分にはスローネツヴァイのようなファングの射出用の装備の上に小型のシールドが二枚。更に両腕の部分にはGNフィールドを展開する為のものがついていた。

「……………やっぱりこの辺警戒強いみたいですね。」

電子音の音が鳴り響くコクピットのなか、この機体のパイロットは右膝のちょうど前に位置するモニターに映る人物と話していた。

映っているのは茶髪の男、アレハンドロ・コーナー。

「やはりな、まあいいだろう。」

アレハンドロが左手に持ったウィングラスを見つめながら答える。どうやら戦闘中だと言うのに重力室でくつろいでいるようだ。

「ペインチェンジャーはよくやってくれている。君はそちらの警戒に当たっているMSの相当を頼もう……勿論、派手にやって構わない……………」

その言葉を聞くと同時に、パイロットは一度頷くとそのまま通信を切り、ヘルメットをゆっくりと外した。

現れたのは…

「あは、ソランくんは暫くこないし、ここで遊ぶとしようか!」

クジャノ・ミストレネであった。

ヘルメットをパイロットシートの後ろに止めてそのまま右手のすぐ横にある小さなカプセルケースを取り出す。

鎮痛剤…

そうラベルに書かれてあるケースから二、三粒取り出したクジャノはそれを全て口に含み飲み込んだ。

暫くの沈黙のあと、クジャノが顔を上げた。

その瞳は黄金に輝いていて、その視線の先には一個小隊の警戒部隊が映っている。

「どこの機体だ！ここから先は戦闘空域だ！」

警告の為に通信をいれてきた機体のを無視して漆黒の機体は突き進んでいく。

その前に進路をふさぐように三機のジンクスが現れた。

「最終警告だ！これ以上の進出をすれば攻撃する。」

それと同時にライフルを構える三機、しかし…

「僕を否定しないで欲しいなあ……………」。

クジャノの眩きと共に漆黒の機体が背面にあつた巨大な実体剣に手をかける。

それに反応して慌てて引き金に手をかけるが…

「な、何が！」

三機は構えた状態のまま機体がダウンしてしまっていた。

予備電源やあらゆるシステムが動かなくなり、漆黒の機体が目の前で大剣を引き抜くのをただ見ることしかできない。

そしてついにモニター系統も全て動かなくなった。

「あは、あはは……………あははははははははははははははは！」

クジャノはその様子を見ながら狂ったように笑っていた。目の前に

は何もわからずに止まっている機体、そして、それを理解できずに
必至にあがく兵士。
そしてそれらの運命を全て支配する自分…

「最高だよ……これこそが……トリアルネクストシステム
……。」

動かなくなつた機体を大剣が切り裂いた…

変わり続ける理由

「落ちろ……。」

タクスの戦闘区域とは数キロ離れた地点、此処ではゼフィアスの駆るドウローレンとベルディオの駆るトリージュラ、そしてシルビアの駆るプロキシアがリサイヤ防衛の為に、迫り来る大量部隊と激戦を繰り広げていた。

「流石に此処まで数があると辛いですかねえ。」

次々と武装を変えて敵を殲滅していくベルディオが呟いた。

右を見ればそこには敵方の長距離攻撃用兵器、あれを撃たれたらまずい…

守りの為の大型シールドを構えたジンクスが八機。どうやらこの数なら何とかかなりそうである…

こちらに向けて飛んできた大型ビームを避けてそのまま周りの機体を次々と撃ち抜きながら目標に迫っていく。

敵がトリージュラが迫っていることに焦り、発射体制に移り始めた。

「そつはさせない！」

さらに加速して敵の攻撃をかいくぐり、トリージュラが背面に備えてあるミサイルポッドを展開してそちらに向けて放った。

爆散して消えて行く敵に構うことなくベルディオは背面に装備したビームランチャーを構える。

後付けであり、使い切り武装とはいえ一番威力のある武装での攻撃…

煙の中から姿を表した物体に向けて照準を合わせ、ベルディオは引き金を引いた。

一瞬機体が反動で揺れ、直ぐに目の前で大爆発が起きた。

「ベルディオ、そつちは終わったようだな…。」

通信がつながり、背面にいるゼフィアスから声がかかる。その周りにはワイヤーによって切り刻まれた無数の敵の残骸。相変わらず恐ろしい強さである。

「ええ、ですが恐らくこれは第一波。次はもっとすごいと思いますよ……。」

使い物にならなくなってしまったビームランチャーを外しながらトリージュラが静かに反転した。

まだギャレスたちの方は戦闘が続いているのだろう、時折敵の爆散する光が輝いている。

助けに行くことはできない、メンバーを誰も死なせない為にはそれ

それがそれぞれの場所で戦うしかない。

「やっぱりダメか……、彼が乗らないとこの機体は何も教えてくれない。」

ミトは何をやっても同じ画面しか表示し続けられないパネルをみてため息をつく。

既に他のメンバーが出撃したトレミーの格納庫では、クジヤノ・ミトによってエクシアに隠されているはずの新たなドライヴを使ったツインドライヴシステムのデータ解析が行われていた。

しかし、作業は全く進んでおらず、ミトはゴードにかつて見せてもらったことのある、ガンダムやソレスタルビーイングに関する機械のあらゆる解析法を載せたマニュアルを思い浮かべながら肩を落としました。

「ガンダムによって決められた人物による対話が必要……か。」

できればそんなことはしたくない、ガンダムとの対話なんて普通不可能なのだ。それなのに戦闘前に刹那にイノベーターの力を使わせて疲れさせるわけにはいかない。

だが、これ以上解析しても何も進まないのも事実である。

さてどうしたものか…

「俺が行かなければならないのだろう。」

いきなりコクピットの入り口から声がかかり、ミトは慌てて顔をあげた。

瞳が黄金に輝いている男。

そこには、パイロットスーツを着た刹那の姿があった。どうやら思考を読み取られてしまったらしい。

「あなたはどこまで変わり続けるんですか？」

昔、まだ彼がこの組織に入ったばかりの頃に一度だけ彼のデータを見たことがある。

なんの取り柄も無いただ優秀な兵、それが今や世界で最も先をゆく存在になるとは…

「力が必要なら、俺はいつまでも変わり続ける。俺を、刹那・F・セイエイと認めてくれるものがある限りな。」

刹那はそう言ってコクピットのパネルに静かに触れた。

小さな電子音とともに今までとは全く違うものがパネルに表示される。

エクシアの全体図が写った後に、ソレスタルビーイングのシンボルマークが表示されて様々な文字が次々と出ては消えて行く。

「どうなっても責任は取りません……ただ、彼女のことを思うなら何事もなく帰ってきた方がいいですよ。」

「ああ、わかっているさ。」

その言葉を最後に、刹那がゆっくりと瞳を閉じた。

同じ名を持つもの…（前書き）

お待たせしました、

私立入試が終わったので再び再開したいと思います（＾）
この四日分の遅れを頑張って取り戻して行きたいです！

同じ名を持つもの…

拡散していく身体、

少しずつ自分の意識が何かに入り込んでいくのがわかる。
これは……

そうか、俺はエクシアのデータの中にいるのか…

身体が再び構築されていくような感覚とともに、次第にはつきりと
してきた意識を働かせて目を開けた。

広がっていたのは様々な映像が流れ続けるヴェーダのターミナルの
中のような場所。

「……は……」

ゆっくりと周りを見渡す、だが、自分以外にはただ映像が流れ続け
るだけでなにもなかった。

一体、此処は…

「やあ、よく来てくれたね。イノベーター……。」

突然かかった声に驚き、とっさに腰にある銃を抜いてそちらに振り返った。

そこにいたのは…

――
――
――

「くう！この程度でやられるものか？」

その頃、戦場についたティエリアたちは敵の奇襲部隊と鉢合わせしてしまい、予想外の苦戦をしいられていた。

敵の数は決して多いわけでは無い。ただ、この奇襲部隊は運悪く軍屈指の実力者を集めたブレイヴを導入した集団だったのである。

「くそつたれ、好い加減当たれってんだ！」

サバーニヤが何度も高速でターンを繰り返す敵に向けてライフルを連射するが、それはかすることもなく虚空へと消えていく。

ピュピュ！

右下に迫る敵を知らせる警告音を聞いて咄嗟にガードしたが、衝撃

を消し去ることはできずにコクピットに激しい揺れが伝わった。

すぐにそちらに向けてライフルを放つが、やはり当たることなく虚空へと消えていく。

相手はこちらの機体に匹敵するスピードを持つとはいえ量産機。パワーなら絶対に押し勝つことができるのだが…

「マリー！右だ？」

「ええ、わかっているわ！」

アレルヤの声と同時にハルトのソードビットがサーベルを振りかざして来たブレイヴの目の前で交錯する。

だが、それはかすることもなくブレイヴがいた場所をすり抜けた。

見ればブレイヴは斬りかかった途中でサーベルをしまっており、既にライフルに武装を持ち替えている。

「またか、やはり彼らは……。」

「どつやら近接戦闘をやる気は無いようね。」

そう、戦闘が始まってから敵は一度もまともにサーベルでつばぜり

合いになっていないのである。

あのレベルの機体なら近接戦闘を仕掛けて動きを止めてくるということもしてくるはずなのに、その気配は全く無い。

「仕方ねえ、此処は俺に任せろ！」

いつまでも硬直した状態の戦況を見兼ねたロックオンがそう言ってトランザムを使用しようとしたその時、

「はは、見つけた！」

飽きたような声とともに周りにいた二機のブレイヴが爆発した。

「な、なんだあ！」

爆散した片方は敵の隊長機だったらしく、一気に敵の陣営が乱れる。

他の機体が驚いているなか、二機を倒したであろう閃光が敵の真っ只中へ舞い降り、そのまま全ての機体を撃ち抜いた。

ドガガガガン！

ブレイヴが一機も残らず消え去る……

爆発の光を浴びながら、突然のことで動けないでいるセラフィムらの方を向いた。

「貴様は、何者だ！」

ティエリアが通信を開いて声を上げる。

しかしその機体からの返事はなく、代わりにいきなり大型のビームライフルを向けられた。

「なに？」

反応が遅れたティエリアのセラフィムに向けて収束したビームが迫る。

完全に直撃弾、弾速も通常より圧倒的に速い。

「させない！」

ビシューウウウ

直撃と思われたビームがシールドビットによって防がれた。

もちろんそれを飛ばしたのはリジエネ。

「ここはティエリアと僕に任せて君たちは作戦エリアに早く行きな

よ、もう時間がないだろう。」

その言葉とともにサバーニヤとハルードが向きを変えて戦闘の光が広がる方へと向かって行った。

それを逃がすまいとした敵のまえにセラフィムが立ち塞がり、ライフルで牽制する。

難なくよけた敵は、一旦二機と距離を取るってライフルを下ろした。

硬直する二機の機体……

「いやー、本当弱いね。君たちそれでイノベイド？」

先にうごいたのは敵だった。

攻撃の意思を全く見せることなく公開の無線で話しかけて来た。

その声の主は、

「クジャノ・ミストレネか！」

「大当たり。さて、イノベイドのお二人さん、君たちにいいことを教えてあげるよ。」

「いいことだと?」

「ああ、とってもいいことだ!」

その言葉とともにクジャノの機体が二機に指を指してワイヤーを飛ばした。

二本のワイヤーがそれぞれの先端部分が割れて三つになり、2人の機体に絡まる。

「しまった!」

ティエリアが気づいた時には既に遅かった。

かつて数度受けたことがある対ガンダムのための兵器、

「ぐ、ぐあああああ!」

「うわあああああ!」

電撃による身体への直接攻撃、

その間にもクジャノはゆったりと喋り続けていた。

「いやいや、なんて弱いんだか。」

サーベルを構えてゆつくりとラファエルのコクピットに向ける。

電撃によってまったくくごく事のできないラファエルとトリズア…

その時、

「へえ、これが新型ですか！」

サーベルを構えたクジャノの機体を横切る様に、一筋の光が走った。

「？、何ですか。」

クジャノがサーベルを元に戻してそちらに銃を向ける。

そこには、

「始めまして、クジャノ？ミトです……」

ミトの乗る蒼いOガンダムの姿があった。

戦慄

「始めまして、クジャノ？ミトです……。」

対峙する二機の機体、

そして、同じ名を持つ二人の青年

「クジャノ？ああ、ゴードが作っていたあの天才の模造品か……。」

クジャノが思い出したかの様にわざとらしくいった。

「あの人の名を口に出さないでください……名無しが。」

その言葉に多少の怒りを覚えたのか、ミトが両手に握ったレバーに力がこもる。

この男が、

自分と同じ名を持つこの男が自分の恩人であるゴードをさらい、危険な目に合わせた。

いや、今もあっているのかもしれない……

「まあまあ、そう怒んなくてもいいじゃないか。勝負はこれで決めるんだろっ?」

再び挑発する様に答えるクジャノは、機体の背中についている大型サーベルを引き抜き二つに分けた。

それを見たミトはチラリと少し離れた地点にいる二機に目をやる。

最初の一手でこれだけ距離を稼げたのはありがたい…

ラファエルとトリズアは既に電撃による攻撃から開放されたが、反動でしばらくは動けそうにもなかった。

「模造品が人に勝てるわけない、か…。」

そう小さくつぶやいたミトはビームサーベルの出力を最大まであげて相手と同じように二本構える。

「それでも、僕はあなたを殺す!」

先に動いたのはOガンダムR、

一瞬にして間合いを詰めて片方のサーベルで横から斬りかかる。

クジャノはそれを受け止めた勢いを利用して片方の剣を突き出した。

ガアアアアア！

その剣先がOガンダムの肩をかすり、金属のこすれる音がコクピット内に響く。

そして、その剣は合間なく頭部を狙って横に振り抜かれた。

「！」

ミトはそれを一瞬にして逆手に持ち替えたサーベルを背中側から回して防ぐ。

互いのサーベルがぶつかり合い火花を上げながら、彼等は脳量子波によって話し続けていた。

（気に入らないア、君が僕と同じ名を持つなんて……。）

（あなたには関係無い…これは…僕の名です。）

クジャノがもう片方の剣を振り上げたところにミトがサーベルをコクピットに向けて突き出す。

（へえ、模造品に権利なんてあるんだ？初対面の僕からすれば驚きだなア…）

？

クジャノは機体を急速に下降させて頭部すれすれのところでよけ、一度相手のサーベルに思いつ切り叩きつけて距離をおいた。

(初対面？何言ってるんですか、人の中に何度も入りこもうとしていたくせに……。)

(…あちゃ、ばれてたんだ。まあ、計画に影響はないからいいか…)

(計画………、残念ですが、それは絶対に成功しません。)

(まさか君、あれを見たのか？)

(…はい………あなたは先駆者にはなれない。)

バチイイイ!

その言葉を受けたクジャノは、鏝迫り合いになった状態から、オランダムを蹴り上げた。

その足にはビームブレード…

速攻の反撃に驚く事なくミトはそれをシールドで弾いて再びサーベルで斬りかかる。

だが、それは当たる事なく空を切った。

(…………死ね)

憎しみの籠った言葉とともに、体制を崩したOガンダムにクジャノは剣を振り下ろす。

「くっ！しまった…」

すかさず反転してシールドを全面に出すミトだったが、守りきれずにクジャノの剣はそのシールドを二つに切り裂いた。

シールドが弾け飛んで剣が左腕に当たる…

「ぐうう……………」

ミトは咄嗟に外付けの外装をパージして何とか距離を取ったが、Oガンダムの左腕は肩から先が完全に使い物にならなくなっていた。

そして、

「サヨナラだ…。」

周りに一瞬、何かが広がる。

それがOガンダムに届くと、Oガンダムは急に力を失った様にパワーダウンした。

「な、何？」

モニターが真っ暗になり、コクピット内は暗闇に包まれた。唯一緊急用のLEDが光っているだけのコクピット…

「くっ、一体何が！」

「…知りすぎた…僕を起こらせてしまった…」。

ブツブツとつぶやくクジヤノを前にして、ミトはただコクピット内で操縦桿をひたすら動かしていた。

ガチャ、ガチャ

だが、ただ虚しく操縦桿がロックされている音になるだけで機体は全く反応しない…

「……………こ、こんなことが。」

○ガンダムに、狂気の剣が届いた。

可能性の選択

「やあ、よく来てくれたね。イノベーター」

振り向いた先にいたのは、自分より少し年上に見える男。

「誰だ…、貴様は…。」

銃を向けたまま刹那はゆっくりと問いかけた。

「ひどいね、私を見て分からないのかい？」

やれやれとでもいう様に、男は肩をすくめると、突然顔をあげた…

その瞳は黄金に輝いている…

「なぜ貴様がその力を使える…」

刹那は、男がイノベーターの力を使っていることに表情一つ変える事なく引き金に力を込めた。

目の前にいるのは全く知らない男、しかし、何故か違和感がある…

どこかで一度あった事がある気が…

そのとき、突然脳内に直接声が響いた。

(銃を下ろしてくれ……。)

脳量子波による会話…

この感じは…

(クジャノ？ミト…)

刹那は構えた銃を下ろした。

目の前にいる男から感じるのは確かにクジャノ？ミトのもの…

外見は年の違いからなのか少し違うが、この脳量子波のパターンは確かにクジャノ？ミトである。

(まあ、当たりだな…：私はクジャノ？ミトのオリジナル。クジャノ？コーナー…：遺伝子パターンの提供者だ)

男はそう言いながら周りに浮かぶデータの中から何かを引き出す様に手を動かした。

その動作とともに二人の間に遺伝子パターンについて記された二つのデータが現れる。

それは恐らくこの男の物とクジャノ？ミトの物…

それらのデータは全て一致している…

(なるほどな…だが、なぜエクシアのデータの中に…)

刹那が言葉を言い切る前に、周りがデータばかりではなく懐かしいあの殺風景なクルジスの景色に変わった。

戦火によって廃墟となった建物が並び、古びて使い物にならなくなった銃が至る所に突き立てられている。

戦いが終わってから変わる事の無いあの景色…

(?これは…)

(今はなき同郷のものと話したかったんだ)

(……………そうか…)

懐かしそうに語るコーナーを前に、刹那は不思議な気分を味わっていた。

周りに広がるのは今はなき自分の故郷。

そして目の前にいるのは今まで会う事のなかったクルジスの同胞…

(あまりゆっくりしている時間は無い。本題に移ろう)

コーナーがそう言って静かに両腕で何かを覆う様な仕草をすると、そこに小さな箱状の物体が現れた。

五センチ四方のそれは七色に輝いており、見ていると何かにとりつかれる様な感じがするものだった。

（君が求めているあのシステムには、この世界そのものを変える力がある）

それを聞いた刹那は先程までの気持ちを切り替え何時もの様に引き締まった真剣な表情に変わる。

そして、二人の間に様々な時代の戦いの映像が大量に表示された。その中には、かつての自分の姿や全く自分の知らない戦いまで様々な物が写っている…

（世界は力を持ちすぎている。そして、それをリセットすることはできない。）

コーナーは静かに二人の間に浮かんだ大量の映像を眺めながら呟いた。

（ああ、分かっている。だから俺は闘う…人類が再び過ちを犯すことの無いために……）

（だが、これはそれができてしまう……）

コーナーの言葉に、一瞬動揺を見せた刹那…

そんな力があつたのなら、何故イオリアは武力介入などという手をとったのだろうか…

そんな思いが頭をよぎった…

(質問しよう、なぜ君はここに来た?)

(守るための力を得るためだ…)

(そうか、では質問を変えよう…)

コーナーがその箱を空に手放すと、その箱は粉々に砕け散り中から更に小さな球体が姿を現し、刹那の目の前にゆっくりと移動して止まった。

(もし死んだ人を救えるとしたら、君は過去に戻るかな?)

過去…

自分が犯した過ち、奪った命…

守るために消えた命…

誰にも見届けられる事の無い魂たち…

ロックオン…

リヒティ…

クリス…

モレノ…

そしてクルジスの戦いで命を落とした仲間…

今は亡き者たちの姿が目の前に次々と浮かんでくる…

俺が今過去を取れば彼等を助ける事ができるのかもしれない…

(これには時を超越してしまう力さえある……それも自由にね)

今日の前にあるのは一種の可能性…

過去に犯した過ち全てを正す事ができるのかもしれない…

(さあ、選ぶんだ。イノベーターよ!)

俺が、選ぶのは…

もう一人の先駆者

何の音もしない静かな宇宙…

その中を一機のガンダムが駆け抜ける…

目指すのはティエリアたちの反応が消えたとされる地点…

そこにいるのは恐らく、クジャノ？ミストレネ。

一時的に連絡ができていた時の話を聞く限りでは、どうやら敵はトリアルフィールドらしき物も使ってくるらしい…

そして勿論それを使う機体もまったく見たことの無いタイプの新型。粒子貯蔵タンクでどこまで戦えるか分からないが、新たなツインドライヴの調整が終わるまで待つている事は出来ない。

「やるしか無い……。」

刹那は先程までの事を思い出す…

クジャノ？コーナー、

同郷、クルジスの仲間…

そしてソレスタルビーイングの創設者の一人…

正しい先駆者を見定めるために自らをデータ化してエクシアの中で眠り、待ち続けていた

――さあ、どれを選ぶ？イノベーター…

あの時の質問が鮮明に思い出される…

幾つもの可能性の中から俺が選んだ世界、そこで犯した過ちをやり直したとしたら。

――俺は…

――俺は間違えたくない…

それは今の俺を否定する事になる、フェルトに何度も救われ仲間を支えられて来た全てをなかつた事にする。

そんな事できるわけ無い…

――過去は変えない…だから、これからの未来を守る力が欲しい…

そう答えた瞬間、正解だ…と声が聞こえたのと同時に俺は現実世界へと戻っていた。

周りをみると既にミトの姿は見当たらず、代わりにハロがメッセ―ジを持って現れ…

そして、今に至る…

イアンにクアンタとドライブを預けている以上、仲間を助けに出るには粒子貯蔵タンクを使うしかない。

以前よりはかなり性能が上がリ、通常のドライブとはほとんど変わらない性能を出すことができるとは言えその時間は決して長く無い…

刹那は戦闘が長期戦にならないよう案じながら、目標地点へと向かうのだった。

「…………ぐっ…………。」

薄暗く煙の充満するコクピットのなか、ミトはまぶたをあげた。

僕は確かミストレネに負けて…

それで…

少しずつ意識がはっきりしてくる。

「？、そうだ、彼はどこに……っ！」

慌てて機体の操縦桿に手を伸ばそうとしたミトの身体に激痛が走った。

どうやら先程の一撃で生きていたのは奇跡だったようだ…

なぜ生きているのだろうか、彼の性格から考えれば確実に殺すはずなのに。

その答えはすぐにわかった。

「あれは……。」

僅かに空いたコクピットの隙間から外を見ると、少し離れた所で二機のMSが激しい戦闘を繰り広げていた。

片方の機体は無論自分を破ったクジャノ？ミストレネの機体。

そして、もう片方は…

「GNジャパニーズブレイド改め、GNソード」!

まるで日本という国で使われていたとされる鎧をイメージしたようなカラーリングのブレイヴ。

そして、そのブレイヴは日本刀と呼ばれる物に似た実体剣を両手に持ち、クジャノの機体と戦っていた。

「ちっ、よもやこんなタイミングでくるなんて……本当あなた人なんですか?」

クジャノが目の前で剣を振りかざすブレイヴを迎撃する。

しかし、ブレイヴはクジャノの正確な射撃にかすることもなく急速に接近してはGNソードJでクジャノの機体を追い詰めて行た。

精密射撃をここまで完璧によけることなど、迎撃している側のクジャノでさえできる自信は無かった…

さらに、シールドや余分な装備が一切ない分ブレイヴのスピードは圧倒的にクジャノの機体よりも速く、どんなに距離を取ろうとしても追いつかれてしまう。

「集中できていないな！」

クジャノの迎撃が緩んだ瞬間、ブレイヴが一瞬にしてその懐まで間合いを詰めた、

居合いの体制に入ったブレイヴの剣が輝く…

クジャノは咄嗟に左手でトリガーを引き、膝に仕込んだ迎撃ミサイルを放った。

居合いの体制に入っていて、まったく対応することが出来ない状態のブレイヴに一発のミサイルが迫る。

「甘い！」

しかし、それは当たることなくブレイヴのもう片方の剣によって両断された。

ミサイルはそのままブレイヴを通り越して爆散し煙が広がるなか、ブレイヴが剣を振り抜く。

金属を切る時の抵抗感が操縦桿越しにもわかるくらい伝わって来た。

迫り来るそれを見ながら、クジヤノは考える…

以前戦った時よりも遙かに磨かれた動き。

どうやら、彼もまた先駆者となる存在のようだ……

本来ならソランと戦う時まで温存するつもりだったけど。

仕方がない、

本気で行くっ…

その瞬間、クジヤノの世界が変わった…

閃光が飛び散り全ての情報が流れるように脳に直接響いてくる。

「何だと？」

突然のことにグラハムは声をあげた。

振り抜いた剣の先には、確かに切ったはずのクジャノの機体が、ビームブレードで剣を受け止めていたのだった……

しかし、動揺している暇はなく、反撃を食らう前にすぐさまブレイヴはその機体から距離をとった。

武士として洗礼されたグラハムの感が危険を感じたのである……

そして、予想通り。

その数秒後にその場所はプラズマフィールドによって消し飛ばされていた。

一定の距離を置いて二機が対峙する……

「いいよ、実にいい……。」

突然クジャノが通信を開いて喋り始めた。

「……このガンダムアルヴィアスと僕が先駆者を超越する為の生贄となってもらおうよ……。」

ゆっくりとした動きでアルヴィアスが大型実体剣を構える。

僅かに先程より粒子の放出量が上がって、うっすらと翼が生えたようになったその機体は、まさに死神のようであった…

「道は誰にも阻ません…」

それに対応する様にグラハムもブレイヴの腰の部分にマウントしていた先程の二本より少し大型のGNソード」を取り出す…

そして、

二機が、激突した…

もう一人の先駆者（後書き）

なんて言うかグラハムの口調ってこんな感じだったっけ？

どなたかご指摘あればよろしくお願いいたしますm（）（）m

誰かに頼るなんてことを昔は考えたこともなかった…

ただ自分が利用するだけ、

だから敵は誰であろうと、どんな人であろうと消した。
たとえそれが自分の仲間だったとしても…

――
――

数年前…

イギリスのとある市街地。

そこは、年中薄霧が立ち込めるといふ珍しい場所であり、観光客や様々な人々が行き交い賑わう反面、多くの有名な裏社会の大物が揃って隠れ家を作りたがる場所でもあった。

「レイの物は持っているナ」

僅かになまりのある言葉、そしてその声は何の変哲もない壁から響いていた。

「モチロン。」

その声に反応して、自信気に一人の中年男性が、壁に向かって返事をする。

そして、その返事を聞いた壁のなかの主はゆっくりと隠し窓を開け、小さめのポストンバッグを差し出した。

それを受け取った中年男が代わりに一通の手紙を渡す。

「ヨシ、ご苦労だったな。」

「こちららも仕事なんでネ。」

二人は軽く言葉を交わすと、そのまま何事もなかったかの様に壁の中の主は部屋に、中年男は裏路地を抜けていった。

そんな二人の一部始終を監視する女性が一人…

「取引を確認、証拠の回収も完了しました。」

女性は静かに端末越しに今の事を報告していた。

服装は黒を基調とした目立たない格好で、肩には小さなカバンをか

けている。

「了解しました、帰投します。」

そういつた女性は、風のような速さでその場をあとにした。

此処ではこの様に、諜報部がマフィアのボスや裏社会の人間達が互いに連絡を取り合う事が日常茶飯事である。

特に、ゴードの様に表でも顔のしれた者ならばこんな事を必要とする必要は皆無なのだが、此処にいるのは皆裏でのみ顔のしれた者達ばかり。

表での味方や後盾が少ない分、うまく世間や政府、警察の目をかいくぐり連絡を取り合って、その組織の力や自らの権力を上げなければならぬのだ。

そして、この街はいつしか警察や政府が彼らの巧みな作戦により証拠をつかめず、全く手出しのする事ができない場所となっていた。

しかし、近年になってこの街にある変化が起きた。

警察や政府宛に組織などの犯罪の決定的証拠写真や犯罪記録、そしてそこに所属する者の名簿などが匿名で届く様になったのだ。

これにより此処最近の犯罪組織の数は激減、政府はこの情報の提供者を探したが、一度だけきた返事には今後も匿名での活動をするのみ書いてあり、今では街中の隠れた英雄ともてはやされていた。

――
――

「戻りました……。」

先程の女性は、小さな研究所の中のある一室にきていた。

中には様々な精密機器がおりてあり、その先にはいまだによく分からない大型の旧式スクリーン……

「お疲れだな、ミルティア。」

そしてその前には先程端末越しに会話をしていた男がいた。

白衣に身を包んだ怪しげな男は、髪をボサボサのままほかっており、いかにもあやしげな研究者と言った風貌だ。

「いえ、問題はないです。それよりもなぜこんな旧式のスクリーンを使い続けるのか聞きたいですね。」

ミルティアは男の近くまで歩いて行き、目の前いっぱい広がるスクリーンを見上げた。

そこに映し出されているのは今まで自分が調べてきた様々な犯罪についてのデータだった。

「いやいや、しかし犯罪記録の調査とはいい物だ。互いに私の情報を知らせて潰し合わせ、金だけもらって両方に消えてもらう。」

男はあやしげに笑いながら手元のキーボードを叩き続けている。最後に「お前のテストにもなるしな。」と付け加えて。

ここはある人物によって建てられた私設研究所。

そして自分が育てられてきた場所でもある。

様々なテストや実験に参加して人を超える力を入れ、今ではこの男の元で最終段階のテストのために、犯罪記録の調査を行っている。

この施設の人々がいうには大事な成功作を危険な仕事に出すのは勿体無いとかで議論されたそうだが、別に知った事ではなかった。

別にいつ死んでもいいし生きたいとも全く思わない。

彼らの作品として存在する事にも特に不満はなかった。

ただ、

自分が成功作として作られるために費やされた同胞の命の分くらい

は生きようと思っではいる。

以前一度だけ見た失敗作の姿。

自分という存在が確立した時点でもうあんな者は生まれぬと言われたので納得したが、本当にあの姿は酷かった。

外見は人とは変わらない、

しかしその瞳は自分と同じ様に黄金に輝き続けてはいるものの、全く生気が感じられ無かった。

喋る事も何かに反応する事もなくただ衰弱して行くその姿。

できればあんなものはもう見たくない…

嫌な事を思い出してしまった。

それに先程から脳量子波が乱れてばかりだ。

そう思った彼女は、軽く男に挨拶をして、その場を離れ自分の部屋に戻るのだった。

彼女はこの後、隠れて続くこの実験の実態を知る事となる。

しかし、今の彼女にそんな事は分からなかった…

サイドストーリー<ミルティア編>02 愚者の研究

ザザ……ザッ……ザ……

脳の中に直接雑音が響く。

昨日から感じる様になったこの雑音は確実に昨日よりも強くなって
いた。

ザ……ザザザザ……同胞……よ……

「っ！これは……。」

ミルティアは突然聞こえた声に驚き、声を上げた。

一瞬、本当に一瞬だけだが、確かに聞こえた。

「同胞よ？一体何が……。」

脳量子波を使う事のできるもの同士は、言葉なしに会話をする事が
できるという事はデータを見た時に知った。

だが、今までそんな事は必要無かったのだ。

此処にいる脳量子波の使い手は自分一人、故にそんなものを使う事
はあり得ないのだから……

ならなぜ声が聞こえる……

ザザザ……答えて……くれ……そこに……いる……の……だろう……

「くっ…さつきよりも強く？」

ミルティアは余りにも突然のことに右手で側頭部を強く抑え、机に片腕をついた。

脳に直接言葉が流れ込んでくるなど、今まで経験したことなど無い。頭痛がすることは無いが、何かが頭に引っかかる…

その時、

『ミルティア、今すぐ研究室に来るんだ。』

部屋のスピーカーからあの男の声が響いた。

それと同時に、その声と雑音も消え去る。

「き、消えた。」

さつきまでのことが嘘の様なくらい見事にそれは消え去った。

ミルティアは机にしている手をそのまま右に動かし、スピーカーのマイクをオンにする。

「分かりました、今行きます。」

ミルティアはそう返事をして立ち上がると、少し乱れてしまった服装を直し、部屋をあとにした。

「やはりダメですね。そちらはどうでしたか……。」

研究所から少し離れた市街地の人混みの中、レストランのテーブルに四人の男が座っていた。

二人の青年と中学生くらいの歳の少年が二人。

他人からみれば少し変な組み合わせだろうが、彼らは気にも止めなかった。

「いや、ダメだな。どうやら会話を受け入れることさえまともにしてくれない……。強制的に送りつけれる言葉にも限界がある。」

一人の青年の質問に、もう一人の青年が答えた。

「そうですか……ではお二人は？」

青年は丁寧な口調で残る二人にも同じ質問をした。

「あー、全然無理だ。場所の特定が限界だな。」

片方の少し柄の悪い少年が、頼んでいたコーラを飲みながら先に答える。

「僕も…同じ様な感じです……。」

それに続く様にもう一人の大人しそうな少年も答えた。

彼らの行っていたのは脳量子波による会話…

リークした情報によれば、この街に自分たちと同じものが居るらしい。

そして此処にくる途中の列車の中で、その情報が確かなものだとわかるあることが起きたのだ。

タークスとギャレスの二人が出どころの分からない位の小さい脳量子波を捉えた。

まだ脳量子波の扱いになれないタークスとギャレスは、常に気を付けないければ脳量子波を使い続けてしまいう。今回はそれが思わぬ好都合となったのだが、いずれは直さねばなくなるだろう…

話は戻り、

そうして見つけた脳量子波を扱う者をベルディオと共に正確な位置を脳量子波で見つけ、今はその人物へ脳量子波による会話を試みたのだが……

「どうやらこの施設では一人だけだった様ですね。」

「まあそうなるな。我々の様に二人も脳量子波が扱える者が居たケ

「スは珍しいのかもしれない……。」

ベルディオがつぶやいた言葉に乗る様にゼフィアスも呟いた。

恐らく今回の相手は脳量子波による会話をした事が全く無いのだろ
う……

会話が成立しない以上、向こうから脱走をさせる事は無理だろう。

しかも、一瞬だけ繋がった時の様子からして、あれはかなり手こず
りそうである。

「仕方がないな……今夜、作戦を実行する。」

そう言ってゼフィアスは静かにコーヒーをすすった。

「な、何だと？……そうか、それでミルティアのデータに乱れが……」

カタカタとキーボードを叩く音が響く研究室。
髪がボサボサでも全く気にする事のないあやしげな男は、この施設を作った者から送られてきた情報に目を通しながら、驚きの声をあげていた。

前日から気になっていたミルティアの昨日分のデータ…

明らかに脳量子波に少なくない乱れが生じており、先駆者の存在があると思っただ彼は、施設の本部の方へと連絡をとっていたのだ。

そして、驚くべき事がわかった…

「第八支部で実験施設の暴発とは……それについて最近あつたばかりの第二支部での脱走。もしこの四人が集まっているのなら今回の乱れも納得がいくな。」

男は頭をガリガリと掻きながらキーボードの横にあるボタンを押して、部屋で待機しているはずのミルティアを呼んだ。

もしこの予想が当たっているのなら、これは危険ではあるが貴重なサンプルが手に入るはず…

万が一にも彼女が彼等について行く事はあり得ない。

ならば戦わせても別に差し障りはないだろう。

既に複製のために必要なかなりのデータが取れているのだから。

情報の中に記載されている人物は全部で四人。

ゼファイアス、

ベルディオ、

タークス、

ギャレス、

上の二人は恐らくミルティアと同世代のテストを受けているタイプだろう。下の二人は年齢から考えるにその二世代あと…

予想以上にしっかりと揃った素晴らしいデータ観察対象だ。

これでデータを確実に取る事ができたのなら、本部で持ち上がっているあの計画にも参加する事ができるかもしれない。

そうすればまたさらに進んだ実験ができる。

「ひ、ひひひひひひ。」

男は怪しく笑うと、もうすぐくるはずであろうミルティアに渡すためのメモリーを手に、ゆっくりと椅子に腰かけた。

サイドストーリー<ミルティア編>03霧の街で…（前書き）

短いです…

最近やっぱり受験勉強しくて更新遅れ気味です

すいませんm（ー）ー（ー）m

頑張る様にはしていますが、なかなか一日一本は難しいですね（；）

感想やリクエスト、それから作者へのエールなど、何でもお待ちしています。

サイドストーリー<ミルティア編>03霧の街で…

「侵入者の駆除及び捕獲……。予想人数、四人…」

必要最低限の事のみが記録されたメモリーの内容をみながら、ミルティアはちいさく呟いた。

こんな情報量での作戦など、彼女にとっては初めてだった。

侵入者の戦闘能力、外見や武装、さらには性別などのあらゆるデータが不足している。

こちらに渡されたものは対人特化型の消音ライフルやカーボンワイヤー、これらは今までよりも充実はしているものの、市街地せんとなりかねないこの作戦。

せめて移動用の車の一つ位欲しいものだ…

まあ、恐らくは事を大きくしたく無いのだろう。

此処でやっている事ははっきり言って世間で許される様なことではない。それに外に出る市民が多くなればその分この作戦中の銃撃戦に巻き込みかねないのだ。

部屋の隅におかれた時計を見上げる……

時刻は夜中の十一時を回ったところ。作戦開始まではあと二十分ほどあるので、それまでは何をしようか。

配備されたライフルの弾などを再度点検してみるが、それも一分も立たずとして終わってしまった。

こういう時、何をすればいいのか分からない。

ミッションやら何やらあれば、その間はそれに集中していれば良いのだが、いつもこの様な時になると時間を持て余してしまう。

「仕方がない……。」

ゆっくりと立ち上がって、部屋のほぼ真東に位置する小さな窓から外を眺めた。

霧に覆い隠されて視界が悪くなり、モヤモヤとした灯りがところどころに見えるだけの変わらない風景……

しばらくの間、その場で立ち尽くす……

何故かそれが綺麗に思えたのだ、

いつもと変わらないはずなのに、

何故かいつもと違う気がした、

何故なのかは分からない、だが、悪いものじゃ無かった…

あの時間こえた言葉が頭に浮かんだ。

『同胞よ…』

同胞、一体なんなのだろうか…

自分と同じ存在はいるはずが無い。何故なら自分が最後だと言われたから…

自分が滅びない限り次の世代は生まれないと聞いたから…

だから今自分は生きている…

けれどもし、

もしも、自分と同じ存在を生み出すための悪行が続けられていたとしたら、

自分は自我を保っている事ができるのだろうか…

まだ答えは分からない…

気が付けば、作戦開始の五分前となっている…

しばらく景色を見続けていたミルティアだったが、直ぐにそこから視界を外すと、作戦の準備を整えて部屋からでて行くのだった…

――
――

霧の中をただ一人かけるミルティア、

そしてその向こうには四人の人影が見えた。

背の高い二人と小さい二人。

近くに来てわかった、彼等が自分に異常をもたらした存在だ、

そちらに向けてライフルを構える。

発砲音が、霧の街に響いた…

誰かに頼る事…

そんな事をすれば自分と同じ存在が出るのだ…

だから誰にも頼らない…

利用できるものは利用して使い切る…

たとえそれが人であろうと構わない…

生への執着心は、今もまだあまりないと言っていい…

けれど、今も自分が活動を続けている事で、自分の求めている事が成し遂げられるなら、

まだ自分は生きなければならぬ

世界の闇側の感情の中だけで生きてきた自分が持った唯一の願望…

それが大切なのは分からない…

その晩…

彼女は侵入者とされていた四人の人物と対峙した事で、この施設の者達に騙されていたことを知る…

そして新たな生きる意味を見つけた彼女が銃を取り戦うのは、数年後での戦場となるのだった…

集いし先駆者…

激突する二機の閃光、

片方は武士、そしてもう片方は死神。

先駆者として目覚めた者達の闘いは、着実に新たな次元へと進み始めていた…

「くっ、隙がないな。いい動きだ！」

次々に全方向から発射されるファンクからのビームをよけながら、グラハムはGNソードJをクジャノの駆るアルヴィアスに向けて振りかざす…

金属を掠る音とともにアルヴィアスの頭部の装甲の塗装部分が軽く剥がれ落ちた。

「全然効かないな？僕はその上を求めているんだけど？」

だが、それにひるむ事なくアルヴィアスの腰にマウントされたライフルを取り出してブレイヴのコクピットに向けて連射するクジャノ。その表情には狂気に満ちていた。

全て避け切ったグラハムだったが、上手く反撃に出ることができず一度距離を置く。

しかし、

「甘い？」

距離を取ろうとしたブレイヴに向けて、クジャノはアルヴィアスのビームサーベルを投げ飛ばした。

「くっ、この攻め方は！」

何とか二本の刀でそれをはたき落とすブレイヴ…

グラハムは、ビームサーベルの投げ方から此処までの追い詰め方を見て、ある姿とそれを重ねていた。

この戦い方は……

かつての刹那？F？セイエイと同じだ…

剣や近接戦闘の武器で敵の逃げ場を次々となくし、更には離れて距離を取ろうとする相手にサーベルを投げつける。

今日の前のパイロットがやっているのはまさにそれだった。

いや、それよりも更に磨きがかかってより洗礼された動きとなっている。

「直撃させる……。」「

アルヴィアスのライフルから、拡散ビームが放たれた…

この距離に逃げ場は無い。

ブレイヴは迫り来るビームをGNソードで薙ぎ払う。

しかし、余りにも多いビームを捌き切れず、数発がブレイヴの各部

に直撃する…

そして一瞬ブレイヴのバランスが崩れかけたところへ、クジヤノは躊躇なく大型ソードで薙ぎ払った…

バチイイイ！

しかし、マウントしたままのプラズマブレードで受け止めるグラハムのブレイヴ。

「…やっぱり覚醒してるね。」

通常のパイロットならこの速さに追いつく事は出ない。
しかし、先駆者である彼等（グラハム本人は気づいていないが）なら、この攻撃にも追いつく事ができる…

並み外れた力を持つ者たち…

プラズマブレードで受け止めながら、その勢いをそのまま利用して機体を反転させるブレイヴ。

その左腕には内臓式の日本というクナイらしき物が構えられていた。

「チツ、実体剣ばかり鬱陶しいな！」

それをクジャノはアルヴィアスの両手首から射出したワイヤーで止めた。

互いに次の一手が無くなり、二機が硬直する…

（グラハム？エーカー）

突然、グラハムの脳に声が響いた。

（何だこれは……、あの時と同じ……。いや、それよりもはっきりとしている…）

グラハムは以前刹那と戦った時のことを思い出した。

あの時は確かに理解できない様な現象が起きた…

だが、あの時はもっと別の物だったはずだ。今の様なコクピットの中ではなく、また別の場所に飛ばされていた様な感覚だった…

なら一体これは…

（脳量子波による会話だよ…イノベーターに許された力さ…）

「な？」

いきなり自分の考えている事に対する答えを言われ、グラムは思わず声を漏らした。

確かに聞こえた、自分の考えている事の答えが…

（だ、誰なんだ君は？）

今まで経験もした事の無い奇妙な感覚に襲われながらも、グラムは声の主に言い返す。

（今君の目の前にいるよ。）

（何だと？）

（驚く事じゃないと思うよ、君だって感じていただろう。僕の異常な力をね……）

そう言っただけでグラムは静かに目を閉じた。

意識を集中させる…

（確かめさせてもらおうよ……君の始まりを……）

（何をやる気だ……）

その変化を感じ取ったグラハムが、クジャノに問いかけた。

しかし、返事は無い…

クジャノは静かに目を閉じたまま、微動だにしなかった。

互いの機体が動く事なく時間だけが流れて行く…

そして次の瞬間、

「ぐっ、はなれるお?。」

まるで驚いて引き離すかの様にアルヴィアスがブレイヴを蹴り飛ばした。

「なっ、不意打ちとは卑怯な。」

突然のことに反応できずに蹴りをまともに受けるブレイヴ…

それと同時に衝撃で左側のスラスターが止まる…

「しまった！」

しかし、アルヴィアスは全く追撃することなく無防備にその場にとどまっている。

不可解ではあったが、グラハムはそれを逃さずぐさまスラストの修正を始めた…

「はあ…はあ…はあ…、くそつ、一体なんなんだ彼は。」

一方、決定的なチャンスを逃したクジヤノは、コクピットの中で荒い息をあげながらグラハムのブレイヴを睨み付けていた。

その額には汗が滲んでいる。

彼が先程やったのは、脳量子波を通じて相手の中を覗く事…

相手が考えている事を読み取る事の応用である。

本人さえ気付かなければ刹那の様によっぱど能力の高い脳量子波の使い手や、ミトの様に警戒して脳量子波を制限していない限り殆ど成功するはずだ…

しかし、

「…………危険すぎる…これは僕のミスだ…。」

クジャノは恐るかの様に眩きながらブレイヴに向けてライフルを向けた。

上手くいかなかったのだ…

中を覗いた瞬間にそこにいる事ができなくなり、無理やり押し返された…

こんな事は普通あり得ない…

スラスターを必死で調整するグラハムに向けたライフルの銃口に、
少しずつ粒子がたまる。

クジャノがトリガーに指をかけ、照準を合わせる。

（させるか！）

声が、響いた…

「ウツ……。」

一瞬クジャノの視界が揺らぎ、トリガーから指を離した…

「この感じは……。」

アルヴィアスがライフルをブレイヴの方から反対へと変える。

そこにいたのは…

「ソラン！」

ダブルオーライザーを駆る、刹那だった…

集いし先駆者…（後書き）

ブシ仮面、特別にすぎですかねえ（ - ; ）

彼の目的（前書き）

更新お待たせしました！

途中、若干文章が変ですが、流してくれるとありがたいですm（

）m

彼の目的

「クジャノ？ミストレネ…。」

刹那はGNソード？を構えて、剣先をクジャノのアルヴィアスに向けた。

それに答える様にクジャノも大型ソードを構える。

「俺は貴様を許さない……。」

ダブルオーライザーが一瞬にしてアルヴィアスのいた場所を切り裂いた…

「遅い。」

それを掠める様にして避けたアルヴィアスの脚部からビームサーベルが飛び出た…

即座に反転し、ソードでサーベルを受け止めながらダブルオーライザーはミサイルを飛ばした。

至近距離でのこれなら、多少は当たるだろう…

「ビームシールド展開。」

アルヴィアスの両腕のシールドが、ビームによって包まれる。

ズガガガガガガガ！

ミサイルの炸裂音と共に、あたりは煙が広がった。

間髪いれずにその中をダブルオーライザーがアルヴィアスに向けて突っ込んで行く。

イノベーターの力があるため、爆発の中でも相手の位置がわかるのである。

しかし、対するアルヴィアスもそれを待ち構えるかの様に大型ソードをそちらに向けていた。

「やはり無傷だったか…。」

刹那は目の前でソードを構えるアルヴィアスの動きを予測し、攻撃と攻撃の合間を縫う様にアルヴィアスの目前に迫った。

クジャノがその動きに合わせる様にソードを振り下ろす…

ダブルオーライザーの両肩を狙ったそれは、刹那によって流れる様に受け流された。

「攻撃が通らないのなら……。」

刹那は手元のパネルを操作して、粒子供給量を大幅にあげた。

そして、ダブルオーライザーが腰のGNソード？を左手に持ち、クジャノに向けて投げつける。

「そんなものが当たるわけ無いよ。」

アルヴィアスは両腕のシールドを展開して体の前に構えた。

ビームシールドによってアルヴィアスは絶対防御体制にはいる…

しかし、クジャノがそうした瞬間、刹那は相手の目の前にまで迫っていたGNソード？をライフルで撃ち落とした。

投げつけた方のソードに極限まで粒子を貯めていたため、ソードは

通常よりも激しい爆発を起こす。

刹那はビームを放つのと同時にその場から離れた。

今戦うのは得策では無い、撃退だけを最優先とする…

「……やるね…」

刹那のやろうとしたことに気付いたクジャノだったが、すでによける術はなく、爆発と共にかなり後ろまで吹き飛ばされた。

「どうやら何とかなったな…。」

暫く経ち、刹那はクジャノが反撃にこないのを確認すると、残り僅かとなった粒子残量を見た。

どうやらティエリア達を救出する分しか残っていない様だ。

かろうじて撃退できた事に、軽い安堵感を感じながら、刹那は少し離れた地点にいるティエリアたちの救出へと向かうのだった。

――
――

「結構飛ばされたなあ。」

あたりの景色を見ながら、クジャノは衝撃で軽くぶつけた頭部に手を当てながら呟いた。

どうやら数キロほど飛ばされた様である。

クジャノは、吹き飛ばされながらコクピットの中で即興で作った緊急用プログラムを立ち上げた。

「無理は禁物かな……。トライアルも使い切っちゃったし、一度戻るとしようか……。」

それによってアルヴィアスの機体から大型のシルエットを作り出していた肩を初めとした外装が外れる。

「グラムム？エーカー……厄介なものが増えたなあ。」

そう言いながら、クジヤノはその場をあとにし、先程の事を思い出した。

~~~~~

意識を少しずつ相手の中に潜り込ませて行く…

見たいのは彼の先駆者としての素質…そしてそれがいつ覚醒したのか…

完全な覚醒を遂げたのは恐らくダブルオーライザーの量子空間で戦った時だろう。

様々な記憶や情報がちや混ぜになった中を通り抜け、自分が最も欲しい情報の元へと向かう…

「見つけた……。」

過去という時間かに囚われ、色あせている数多の情報の中に、一つだけ全く変わらない物があった。



間違いない、これが今の彼に残る何かだ。

それに触れてさらに深いところまで侵入して行く…

出口の様なところに光が広がっていた。複雑な構造となっている  
脳量子波の使い手と比べると、思いのほか割と簡単だった。

「これで二つ目の鍵は手に入る

……。」

鍵、

彼の目的を達成するのに必ず必要となるであろう力、そしてそれを  
全て受ける事のできる先駆者としての素質。

アレハンドロと組んだのも、リボンズ？アルマークの否、E Aレイ  
の遺伝子データを手に入れるためにすぎない…

時空の軸を超えてある世界を垣間見たあの日からもう何年経つだろ  
うか…

先駆者？イノベーター？

ニュータイプ、

種を持つ者、

あらゆる世界に存在する様々な特別な者たち…  
そしてそれら全てを終わらせる事を続ける謎の機体。

その悪夢の連鎖を断ち切るためにどれだけ多くの事をして来たのだ  
ろう…

「全て僕で終わらせる…。」

クジャノはそう呟きながら目の前にある光へと進んで行った…

光を抜けると、そこはMS格納庫だった。

目の前に立つのは一機の黒光りするユニオンジャックカスタムフラ  
ッグ。

その足元には一人の金髪の男が立っている…

「誰だね君は…。」

その男は振り返る事なく声をかけて来た。

「クジャノ？ミストレネ…あなたに危害を加えるつもりは無い。」

そう言いながらクジャノは男の方へと近づいて行く。

恐らくはあのフラッグに鍵となる物がある。そのためにはまずその対象に触れなければならない…

ゆっくりと男の横を通り過ぎ、目の前にそびえ立つ漆黒の機体を見上げた。

旧世代機の筈なのに、細身のシルエットに圧倒的な存在感を誇る機体。その足に手をかざそうと片腕をそちらへ伸ばす…

「触れるのか？やめておいた方がいい…それは厄介な物だ。」

突然、後ろで黙ってこちらの様子を伺っていた男が声をかけて来た。

「それは私の中にある影の誇りだ…君には重すぎる。」

その言葉を受けたクジャノは、手を止めて後ろを振り返った。

振り向いた視線の先には金髪の男、この情報の中での主となっているグラハム？エーカー…

しかし、以前データで見た時の写真の顔とは違い、顔に傷跡はなかった。

「僕は大丈夫です……気にしないで下さい。少し見てすぐに帰りますから。」

クジャノはそう言ってフラッグの方に向き直ると、再びそれに手をかざした。

一瞬にして目の前に様々な景色が広がる。

「これは……一体何が…」

「ウツ…ウアアアア！」

それと同時に、クジャノは吐き気にも似た異常な気分に見襲われた…

次々と言葉が頭に入ってくる…

?あとは…頼んだ…?

?フン、上官殺しが偉そうに…?

?隊長……フラッグを…?

?グラハム、ダリルが……落とされた…?

?ホーマーが自害?そんな…?

悲しみや憎しみ、怒りが混ぜられたそれらが一度に頭の中に入ってくる。

「まずい……意識を戻さない」と。

そして、逃げる様にして出る事になってしまったのだった…

~~~~~

「よし、修復完了?」

修復が終わった事を告げるアラームの音を聞いたクジヤノは、持たれてシートから上体を起こし、静かに呟いた。

「グラハム? エーカー、君は僕が殺す……。」

垣間見た力を求めて（前書き）

四日ぶりの投稿ですm（）（）m

勉強の合間に頑張って仕上げました（）・（）・（）おそすぎだろ！

もう暫くはこのペースになってしまいましたが、ご了承くださいませ^^；

垣間見た力を求めて

特別軍部要人護衛艦、

ここでは、この戦いをしかけた軍部の要人たちが集まっていた。

その中には、勿論あの男アレハンドロ？コーナーの姿もある。

「素晴らしいな、あの機体は……。」

作戦本部からの連絡が随時モニターに映されている前で、次々と敵を薙ぎ倒して行く白銀の機体を眺めながら、一人の老人が呟いた。

モニターの中では、自分たちの直属の軍ではなく、端くれの部隊や連邦政府からの偵察を兼ねた部隊ばかりが戦っていた。

「ふむ、流石にあれが敵だと考えたら冷や汗が止まらんな。」

他の男がそれに合わせる様に口を開く。

アレハンドロの参入から既に既にそれなり日が経ったが、彼が真実

を語った時は流石に驚いたものだ。

なんせいきなり、『私がペインチェンジャーのリーダーです。』などと抜かしたのだから。

しかし、それもすでに過ぎ去った事。

彼らにとってその真実はデメリットどころか、大いに役立つ事実であった。

「いやはや、あれ程の戦力。一体何処で揃えたのか聞きたいものだなあ。」

先程までワイングラスを片手に他のメンバーたちの目も気にせずにくつろいでいた男が急に口を開いた。

その言葉に全員の視線が一瞬アレハンドロに集まる。

「ふむ、それにはノーコメントで。と言いたいところですが……」

アレハンドロはそういつて右手に持っていたリモコンを操作すると、席を立ってスクリーンの前まで来た。

「まあ、少しだけ話は外れますが。これにまつわる話をしましょう。」

「

あの時……

確かに私は死んだと思った…

自らの天使とまで称したりボンズに裏切られ、最強の機体の筈だったアルヴァトーレは敗北。

最後に映し出された裏切り者の顔を叩きつける…

そして爆発と共に体か何処かへ吹き飛ばされて、意識が離れて行くのを私は感じた。

そして、目が覚めた先にあったのはあの世ではなく…

「ここは…何処だ。」

飛ばされた先は自分の全く知らない場所だった。

かなり広い空間で、周りを見渡すと、沢山の電子モニターが宙に浮いていた。

地面には芝のようなものが敷き詰められており、ところどころに木々が立ちならんでいる。

モニターに映っていたのは、

「ガンダム？だと……。」

先程まで激戦を繰り広げ、最後には自分の予想を裏切って自分を倒したあの忌まわしい機体。

自分の知っている機体とは全く違うタイプ。だが、確かにガンダムであった。

あの特有のアンテナの形、

モノアイではない頭部のメインカメラ…

間違いなくガンダムであった。

〇ガンダムの色をトリコロールカラーにした様なもの、

キュリオスのように可変機能を備えつつ大型の火力を持ったもの、

大量の敵を同時にロックし、正確な射撃で一人も殺さずに撃ち落とすガンダム、

そして中には我々の世界では実現するのにまだまだ時間がかかると言われたスペースコロニーが映っているものもあり、また、それを大量のガンダムが一瞬にして撃ち落としているものもあった。

「こ、こんなものが……。」

アレハンドロはその映像を見ながら、少しだけ後ずさった。

ガチ、

その時だった。

アレハンドロの足に妙な感覚が伝わり、何かを踏み込んだような音がしたのは…

「っ？」

慌てて振り返るアレハンドロ。

しかし、その場にはとくに何か変化があるわけでもなく石板のようなものに乗せた台座があるだけだった。

ひっそりと目立たぬように立てられたのか、それは少しでもその存在を意識しなければ消えてしまいそうなくらい存在感が無い。

上に乗っている石板らしきものには何処のものか分からないが、文字らしきものが様々な言語でほってある。

「一体これは……。」

ゆっくりとアレハンドロがちがづいていくと、その大量の文字の中に彼自身の世界の文字もある事がわかった。

かすれて読みにくくなっていくそれを読み取ろうとアレハンドロが

それに手を触れる。

「月光蝶、破壊と再生を司る」

「月光蝶……一体これは。」

そして、アレハンドロがその言葉を口にした瞬間、彼は突然からだか吹き飛ばされるかのような感覚に襲われた。

様々な光景が目に映る。

それは先程までの様々なガンダムや他の機体が、白いヒゲの生えたような新たなガンダムに撃墜されて行くものばかりだった。

抵抗する機体にたいして、一方的と言っても良いぐらいの力で全て薙ぎ払って行く白いヒゲの機体。

？くそつたれ！こんなのに俺らの歴史は……？

その数多くの映像の一つの中に、ガンダムを落とされて地に叩きつけられた一人の少年が映っていた。

彼の背にはもう助からないであろう大きな傷があり、ドクドクと鮮血が溢れ出て砕かれたコンクリートの上に赤い水たまりを作っている。

？俺らの……俺らの歴史は……俺らの痛みは……？

少しずつ小さくなって行く声は、彼の命が消えて行く事を表していた。

その声には、悲しみと憎しみの感情が込められているようだった…

？これで…忘れ去られて……？

必死で立ち上がろうとするが、既に体に力が入らないのか全く腕がうごいていない。

そしてその背後に、白いヒゲのガンダムが舞い降り、虹色の巨大な羽を広げた。

OガンダムなどのGNフェザーなどは比べ物にならないくらい巨大で、触れたものが次々と石のようになって砕けて行く。

?…………クソ…………が…………?

そしてその言葉を最後に彼の姿は見えなくなった。

全てを滅ぼした白いヒゲの機体は、空を仰ぐように上方を見ると、その巨大な羽を羽ばたかせながら一瞬にして飛びたった。

行き着いた先は…………

木星。

そこで、アレハンドロのその場での意識は途絶えた。

そこで、アレハンドロは話を止めた。
話を聞いていた他のメンバーに沈黙が流れる。

「私が話すのはここまでです……。」

そう言いながら静かに自分の席に戻り、横におかれたワインをグラスに注いだ。

「今のは…逸話などではないな。」

「勿論です……でなければ私があんな組織を作る筈がないでしょう……。」

「なら……決めねばならぬな。」

そう言った1人の老人が右手を上にも上げると同時に、銃を構えた兵が部屋に押し入ってきた。

一斉にアレハンドロに銃口が向けられる。

「面白いものだな……。」

向けられた銃口を睨みつけながらアレハンドロが呟く。

先程の話には続きがある。

致命傷を負ったまま宇宙を漂っていたところを救出のためにきていた自らの部下に救われ、アレハンドロは残された裏社会での自らの地位を使いペインチェンジャーを作り上げた。

全てはあのかき垣間見た圧倒的な力を手に入れるため……

コーナー家に隠されていた極秘の情報をすべて使い、実現できないと思われた白銀のドライブも完成させた。

その後だった、

余りにも異端な数値を示す子供が複数人見つかったのだ。

それぞれには何故か遺伝子情報に不明な部分があり、さらには必ず親がいないと言っ…

イノベーターへの関心が高かった研究者を連れて研究を始めさせたのが数年前…

つまり、何が言いたいのかというところ…

「彼らの同類はまだいると言っ事だよ……。」

アレハンドロの声と共に、部屋の中に鮮血が飛び散った…

飛び交う閃光、

その中を二機のガンダムが駆け抜ける。

オレンジを基調としたカラーリングの機体は、次々と高速移動を繰り返して進路をふさぐ敵を一つ一つ落として行く。

目指すはペインチエンジャーが戦闘を行っている宙域…

そこで、アーシャンの身柄の引き渡しと戦闘の停止を要求するのが目的である。

正直なところ、子供を戦いの中で交渉の手として使うのは心が痛かった。

しかし、今はこれしか方法がないのである…

「ちっ、ここまで多いとは思わなかったねえ…。」

サバーニヤのライフルで敵を撃ち落として行くロックオンは、一向に減る気配の無いシンクスを見ながら呟いた。

既に三十分近く同じような作業を繰り返している。

敵の攻撃を避けながらそこに目掛けてライフルを撃つ。

大抵の敵はそれで片付く、

連邦にしては不思議な事だった。

軍備収縮路線を進め、融和政策を推し進めている連邦の軍にいるの
パイロットは、大抵自分たちの行ってきた武力介入で生き残った者、
そうでなくても激戦を生き残ってきたものが多い筈なのだ。

ましてや正体不明で強力なペインチェンジャーの機体と戦う作戦に、
こんなレベルの低い兵を投入する筈が無い。

乱雑な射撃補正やら軌道修正、さらには座標処理までもがロクな形
に成っていないかった。

嫌な予感がする…

戦争などで新兵やあまり使えない兵を出す作戦というのは、大概、
捨て身の作戦や本隊が退却するときの時間稼ぎとするときがほとん
どである。

しかし、今の状況でこの二つは考えられなかった。

となると残るのはただ一つ。

最も想像のしたく無いもの…

「大量破壊兵器を隠し持つてるところか……。」

ロックオンは此方に向けて絶える事なくビームを放ち続けてくる敵を見ながら、深いため息をついた。

今のところ、連邦の使うもので、自分たちの知っている戦略級の大量破壊兵器は二つ。

以前使われ刹那たちが捕まる原因となった謎の兵器、さらには既に破壊済みのメメントモリ。

考えるなら前者だが…

「どちらにせよ良い事はない、か……。」

イアンが新しく追加をしてくれたペインチェンジャー対策を施した通信回線を手動で切り替えるため、ロックオンは操縦を八口に任せ、手元のパネルの前にキーボードのようなものを取り出した。

「まったく、こつちの方はあんまし得意じゃ無いんだが…。」

いつも様々な作業をやらせている八口に任せることができない分、こつちで手動の作業が必要なものは苦手だった。

カタカタと高速で打ち込まれて行く音がコクピット内に響く。

頭に叩き込んだマニュアルの内容通りに操作し、パネルに複数の相手への通信回線が表示される。

「っし、こいつだな。」

ハルートの表示されているものを押して、アレルヤとの通信をひらいた。

「おい、アレルヤ！聞こえてるか？」

通信越しにいる筈の相手に呼びかける。

「……、ロックオン！ようやく繋がった……こっちからいくらかけても繋がらなかったから焦ったよ……。」

回線越しのアレルヤがホッと息をはいたように聞こえた。

通信をひらこうとしていたところを見るに、向こうも何かに気づいたらしい。

「アレルヤ……こいつらおかしくないか……。」

「ああ、僕もそう思っていたとこだよ……敵に誰一人として実戦経験が多いパイロットがいない。」

どうやら考えていた事は同じだったようだ……

「んで、どうするよ？俺の予想じゃ、とんでもねえ兵器隠してる気がするぜ。」

掠りそうになった敵のビームに若干驚きながら、ロックオンはいつ

もの調子で答える。

その間にも、無茶苦茶な攻撃を繰り返して迫ってくる敵を何の躊躇もなく撃ち抜いて行く。

正直言って、相手にするのも面倒な相手だ…

「恐らくその予想は当たってると思うよ……………今トレミーから敵の戦略級兵器の情報がきたから…」

アレルヤが苦虫を噛み潰したような表情をしながら、ロックオンにデータを送りつけた。

「?…こいつは…ぶっ飛んでるだろ…………。」

送りつけられたそのデータに移された内容を見たロックオンが、冷や汗を浮かべながら声を漏らした。

そこに映されていたのは…

大型MSの姿だった…

垣間見た力を求めて（後書き）

こんなんで良いのだろうか受験生…などと考えてしまうこの頃です
（^- - ^-）

もう少しくらい刹フェルが書きたい？などと言つ願望が溢れ出てし
ようがない…

セカンドブレイクの火種

一つの世界が壊れ、月光蝶が去って行く

誰もいない星……

存在するのはただ石と砂ばかりの地面……

灰色一色の世界に光がさす事は無い、ただ同じ日々が永遠に存在するだけ……

一体どれだけこんな時を過ごし続けたのだろうか……

かつて自分が1人の人として生きていた時はこんな事はなかったのに……

果てしなく長い命の輪廻の中で限りなく短い時間の記憶……

もう断片的にしか思い出せないけど、確かにその時間があった事を実感できる記憶が一つだけあった……

【もう一度、……もう一度先の世界でチャンスがほしい……】
懐かしい声が流れ続ける。

今ではもう手に入れる事のできない掛け替えのないこの記憶……

ーチャンスが、欲しいのか？

声が響いた……

どこか強い意思を秘めた声、
全てをまもってくれような声だ

どこかで聞いた事があるだろうか？

いや、そんな事はわからないだろうな……

どのみち、これでは意思が伝えれない……

ーそうか、思いが伝えれないのか……

その気持ちに気が付いたのか、突然、灰色一色の地面に光の扉が現

れた。

「大丈夫だ、この先に行けば伝わる。

中から現れたのは1人の青年の姿…

黄金に輝く瞳、くせの強いはねた髪の毛、青いパイロットスーツ…

もう一度…挑みたい、

自分達の幸せな時間を、この世界の全てを奪い取ったあいつに…

「対価は、記憶だ…

失う覚悟はある、それでも、

奴に曲げられた自分の世界をもう一度元に戻すためにも…

光が、広がった…

「おはよう、どうだったかね。世界を飛ぶ気分は。」

誰かの声が頭に響く、

「これから君は、ゼフィアスでも呼ぶことにしよう。」

「おい、この機体は一体なんなんだ？こんな大きさの機体、俺扱ったことねえぞ。」

「こつちもだ、どうやったらこんな大きさをこんな破壊兵器が作れるんだよ！」

「こいつやべえぞ、ファングとかそんなレベルの装備じゃないって！」

「俺に聞くなよ、てかなんなんだよこれ。」

「そんな俺にもわかるわけないだろ！いいからさっさとやれ。」

此処はオペレーションTRYジェネシス独立部隊の補給基地兼本部。作戦前のMS整備にせいを出していた独立部隊専属の整備班は、急遽追加されることとなった数体のMSと三機の大型MAを目のあたりにして騒がしくなっていた。

これが、

セカンドブレイクを引き起こす直接の原因になるとも知らずに…

血なまぐさい匂いが部屋に充滿する。

床一面に広がった赤い湖…

まわりつくようにベタベタとしたそれが足の裏に何とも例えがた

い嫌な感触を与えていた。

「まったく…もう少し綺麗にできないのか…。」

それは先ほどまで銃を向けられていた者の血ではなく、その周りを囲っていた兵たちのもの…

足に伝わるを気にする事なく、アレハンドロは乱れた自分のスーツを直しながら呟いた。

その服には所々赤いシミがこびりついている。

彼にとっては他の誰かが死ぬ事よりもスーツが汚れる事の方が不快に感じたらしい…

「仕方ねえじゃん、確実にやらなきゃこっちがやられちゃうんだからよ…。」

部屋の入り口にもたれ銃を弄びながら答える少年が1人…

身長はそれ程高くなく、深緑よりもさらに黒に近いような微妙な色の髪。

そして空いた方の手にはMSの操縦桿らしき物が握られている。

「それは君の世界での経験からかな？」

「は？何の事だそれ？」

突然アレハンドロが口に出した言葉に、少年は意味がわからずに返した。

「…なるほど、連れてこられた時に消えているのか……。」

1人納得したように呟くアレハンドロを不思議に思いながらも、少年は自分の手元にある操縦桿らしき物をポケットに入れた。

その時…

「ひっ！ひいひい！」

恐れをなして逃げ出そうとし、パシャパシャと音を立てながら部屋の入り口にめがけて走ってくる老人が1人…

どうやら先ほどの攻撃では上手く銃弾が当たっていなかったようで

ある…

重要人は全員痛みで気絶する場所に打ち込むようにしたはずなのだが、

「ちえつ、しくつたな…」

少年がしたうちをしながらその老人に銃口を向けた。

「や、やめてくれえ…私、わたしはこんなところで…」

必死に懇願する老人に対して冷めた視線を送る少年。

しかし、少年は引き金を引かなかった…

いや、引けなかったのだ…

頭の中に急に響き出した声に遮られたために…

「…あんだ、こいつが使えるんだな…」

少しだけいやそうな顔をしながらも笑顔を浮かべて部屋の奥の方を見る少年。

その視線の先には瞳を黄金に輝かせたアレハンドロがいた。

(まあ、少しだけだが……それよりも此方のご老体、私が片付けておく……君はあの機体の準備をしてきたまえ……)

アレハンドロが口元に小さな笑みを浮かべながら脳量子波によって答える。

(ん、あれ使うのか？マイクロウェーブなんてないぜ……)

少年が少し心外だとも言うように返した。

(いいんだ、事が済めば私もあれで出るからな……)

その言葉を聞いた少年は納得したように軽く笑みを浮かべると、そのまま走って廊下をかけていった。

「どー！どう言っつもりだアレハンドロ！」

錯乱しながら醜く血の中をのたまわっていた老人がアレハンドロに向けて怒鳴りつける……

しかし、アレハンドロはそんな事は全く聞かずに1人で胸ポケットから取り出した薬を飲んでいた。

……どうもこの能力は上手く使えんな……やはり、刹那？F？セイエィのような純粋な力が必要か……

「さて、いつまでも旧世代の名残を残されては困るのでね…他の方々は気絶で済ませたが、あなたには死んでもらおうか。」

銃口が老人の額に向けられる。

「まで！金ならある、助けてくれ。」

ありがちなセリフがアレハンドロの耳に聞こえてくる…

「知っていますかね…私最近、日本と呼ばれる東洋の端の国にある小説サイトに興味がありまして、その中の作品の中のある場面で、銃で撃たれて死ぬ悪役のセリフがあるんですよ…。」

アレハンドロが銃口を向けたまま静かにしゃべる。

老人にまるで興味がなにかの様にその場を見つめる瞳は、先ほどの黄金とは違いもとの色にもどっていた。

「そのセリフ、今あなたが言ったのと同じなんです。」

そして、

老人の額に風穴が空いた…

全面戦争への火種（前書き）

やっとA日程がおわりました（ - ; ; ）

え、出来はどうだった？

燃え尽きたよ、真っ白に…

全面戦争への火種

血なまぐさかった部屋はすでに遠くなり、今アレハンドロはパイロットスーツに身を包んでいた。

向かう先はMS格納庫、自らも一から設計に携わったあの機体のもとへ…

自信がみた映像の限りでは、あの白いヒゲのガンダムが現れていたのは世界規模で科学技術の水準が驚異的な高さまで登った時。

即ち、この世界の中でそれを起こすにはまだまだ時間がかかるのだ…

オリジナルGNドライブは世界規模の物ではなく、白銀のドライブはそもそも核に関する技術があればそこからは簡単な物。

この世界ではまだオールレンジでの攻撃をする為には脳量子波の使用が限定とされる物がほとんどであり、少しの差とはいえ他の世界よりも完成度が劣っている。

更には圧倒的な物量を作り出すだけの資源もなく、スペースコロニーの開発にかんしては圧倒的に遅れており、おそらくあと二百年、いや、二百五十年以上近く年月をかけなければ、到底あの白いヒゲ

のガンダムが現れることはないのだ。

ならばなにをすればいいのだろうか？

そのためのこの戦い…

そのためのペインチェンジャー…

戦いは科学技術の驚異的な発展を促し、それは力の差が大きく開いた強大な力が加われれば加わるほど急速に進む。

イオリアが実現したソレスタルビーイングによる世界変革を見れば分かり切ったことだ。

当初の予定ではこの計画で全ては進むはずだった。

だが、その予定に良い意味で狂いが生じたのだ。

技術の革新と白ヒゲのガンダムとの戦いの為に研究を重ねていたツインドライヴシステムが開いた、新たな可能性。その中で特に私が興味を持ったもので、量子ゲートによる空間移動があった。

無論、あのオリジナルの太陽炉で一度に出せる粒子量でゲートを開くには刹那・F・セイエイのような先駆者の力が必要だ。

しかし私には白銀のドライヴがあったのだ。

安定感をはるかに劣るが、単純に粒子生成量ならオリジナルを凌ぐあのドライヴなら、後付けで人工的な不完全体のイノベーターでも量子ゲートを開けるはず。

そう確信して実験を続けた私は、遂に白銀のツインドライヴによって量子ゲートを開いた…

その先に待っていたものの、

それは…

と、そんなことを考えていた間にMS格納庫に到着した。

ガチャンガチャンと響き渡る機械の音、目の前には普通は見ないようなガンダムタイプのMSが四機ならんでいる。

青い翼のようなものを持つ機体、腹部に大型ビーム砲、腰には連結式のビームサーベルがついており全体的に細身である。

その横には背面に細長いビーム砲を取り付けてある機体、更に機体の各部位には放熱板のようなものが大量についており先ほどの機体よりは大型である。

残りの二機はまだ黒い布が被されており見ることができない。

アレハンドロはその機体を素通りしていくと、奥に一際大きい入り口がある金網の通路を進んで行った。

「コーナーさん、出撃準備終わりました。」

アレハンドロが通路の上でヘルメットをかぶろうとしていたところに、後ろから青年が声をかけてきた。

青と白のパイロットスーツを身に纏った茶髪の青年。

「そうか、では順次出撃してくれ……。」

アレハンドロは振り返ることなくそう返事をする、入り口の扉を開けて奥へと進んで行った。

青年はその態度に特に不満を感じることもなく、一度肩をすくめるとそのまま先程の青い翼の機体の元へと引き返して行った。

暗い通路を奥に進むに連れて身体が軽くなっていく。

そして一番奥にはもともとせまかった通路がさらに人が一人はいれるかどうかと言つぐらい小さなものになってぼっかりと床に穴をあ

けて続いていた。

いつものことながらなぜこんなに狭くしたがるのかわからないのだが、まあいいだろう。

狭い通路をゆっくり落ちていくと、そのままMSのコクピットにでた。

普通の機体の三倍近い広さがあるコクピット。

アレハンドロが操縦席に座ると同時にその機体のモニターが輝き出した。

表示された文字は…

アルヴァデストロイ。

どうやらもとはデストロイというらしいのだが、一応アルヴァトーレなどと同型扱いなのでアルヴァとつけることになったのだ。

この機体を表に晒すのがこんなに早いとは思わなかった。

しかし、意外にも善戦を続けているオペレーションTRYジェネシ

スの作戦本部。ペインチェンジャーが負けるとは思えないが、TR Yジェネシスの方にはもう少し痛手を負ってもらわないと困るのだ。ペインチェンジャーに関して言えばもう用済みと言っても問題ないのだが、今あのメンバーと白銀のドライブを失う訳にはいかない。

独立部隊に配備されていた部隊は全て出撃させて戦いに出してある。ならば、存在を知られていないこの機体は自由につくことができ

る。今の内にソレスタルビーイングに対して牽制をかけることも考えろと、このタイミングでこの機体を出すのは間違いではないだろう。

恐らくこの戦いが四勢力による全面戦争の火種となるだろう。

そうすれば私の勝ちだ、

科学技術の水準は一気に高まり、こちらの情報は適度に流していけばいい。

恐らく一年もしない内にかんりの確率であれが現れるのに必要な水準になる。

そして、あの白いヒゲのガンダムを手に行うことができる。

一度は諦めていた世界統一の夢を叶えることができる最後のチャンス。

もう誰にも邪魔をさせる訳にはいかない…

「アルヴァデストロイ、起動…。」

全面戦争への火種（後書き）

さて、パワーバランスの設定も考えたし、
A日程のことは忘れて続きを書くとしてよう…

ん、まだB日程残ってるって？

ははは、そんな事は知らないね^^

ハルバートクアンタ（前書き）

入試が終わり、

やっと投稿できるようになりました（＾　＾　；）

また日に一回位のペースに戻して行きます。

ハルバートクアンタ

MSの大きさ…

それはその機体にどれだけの武装や装備を積むのかによって左右される。

より強力なものを多く積もうとすればそれだけ機体のスケールはそれに伴って大きくなっていく。

もちろん、一定の大きさを超えてしまえば攻撃を回避することが困難になるのでその大きさにあった強力な防御力が必要となってくるし、大気圏内での運用が想定されるのなら自重や移動について様々な問題がつきまとうこととなる。

かのソレスタルビーイング創設者であるイオリアは、MSの巨大化につきまとう問題の多さから別の道へと進む方向で開発を進めた。

それによって出来た機体が今のガンダムたち…

では、もし仮に巨大化への道を進んでいたらどうなったのだろうか？

または他の道から巨大化への道へと進んだ時は…

その答えがこの、アルヴァデストロイである。

圧倒的な大きさ、

各部に取り付けられた巨大バーニア、十二機の擬似ドライブと3つの白銀のドライブによる超粒子生成量、一発で通常のライフルの八倍近い威力の全方位対応型拡散ビーム砲。

そして、超大型MSにつく防御力の問題を完全にクリアした特殊フールドの完全展開。

恐らく、このアルヴァデストロイ一機で連邦軍の半数近い勢力を壊滅に追いやる事が出来だろう。

「さて、まずはあの使えない部隊の処理にかかるとしようか……。」

ステルスフィールドを使用している為、相手方はまだこちらの存在には気づいてはいない。

ここから長距離望遠でかろつじて見ることでできるのは三機の偵察用ジंकクスIIIIのみ、しかし、この距離なら狙えるはずだ…

「私の攻撃が終わり次第、君達にも行ってもらつとしようか。」

「了解です……。」

「分かったぜ…。」

二機のガンダムが左右に展開して行った。

今回削るのはオペレーションTRYジェネシスの方で総戦力の3分の1程度、連邦軍は今作戦に参加している分はすべて壊滅させる。

そして必ずくるであろうソレスタルビーイングは…

「まだ生かしておいてもいいだろうな…。」

あの白いヒゲが現れた時に先鋒として闘ってもらわねばならないのだから。

スーツ越しに伝わる振動が、今から放たれるこの一撃の重さを伝えているようだった。

目の前のパネルにうつるエネルギーのチャージ率を表すメーターがもうすぐ98%を越えようかというところまできている。

「さあ、私の世界の始まりだ。」

右手に握られたトリガーが引かれ、それと同時に目の前が光に包まれた。

――
――

同時刻、

ロックオン、アレルヤサイド…

「コウネツゲンタイセツキン！コウネツゲンタイセツキン！」

戦闘を続けていたロックオンに、八口が突然敵を知らせてきた。

チカチカと目を光らせながら耳のような部分をパカパカと開くその様子は、一見とても可愛く見えるのだが…

「な！まさか本隊が動いたのか？」

「テキホウゲキ！テキホウゲキ！」

今はそれがとても危険な状況であることを知らせる警報であった。

ロックオンは慌てて手元のタッチパネルに表示された熱源センサー

に目をやると、そこには確かにものすごい巨大な熱源が接近していることがわかった。

しかも、たった今そこから此方とは少し離れた敵本隊の方へものすごい強力な砲撃が行われたのだ。

「オイオイ…こりゃないぜ。」

「ロックオン！こ、これって…。」

かなり離れている地点にもかかわらず、その一筋の閃光ははっきりと見えた。

まるで宇宙に切れ込みをいれたかのような長く明るい白銀の線。

全身に鳥肌が立ち、背筋に冷や汗が流れ、手が震える。

ロックオンはそれに確かな恐怖を感じた。

アニューを失いかけた時と同じ位の恐怖…いや、それとはまた別のものだ。

今まで何百もの命を奪い、戦ってきたはずの自分が恐れたのだ…

「ロックオン、おいロックオン！聞こえてんのか？」

トレミーからの緊急通信が入る。

この声は、恐らくラッセ…

「…ああ、聞こえてるぞ。」

自分の声が震えているのがわかる…

多分あれと戦って勝てる保証はない、だが、止めなければ此方が攻められて終わりだろう。

どうやら、ここからが本番のようだ。

「兄さん……。」

「システム良好、ドライブの同調率が80%を超えました。」

同時に四機の修復が行われているコンテナに、フェルトの声が響く。

今行われているのは隠されたシステムを組み込み、イオリアたちの託した最後の切り札、ツインドライブを搭載した新たなクアータの始動準備。

イアンたちが他の機体の修復で手が離せない中、フェルトが同調のための最終チェックをしていたのだ。

「了解：ハルバートクアンタ起動。」

静かにハルバートクアンタのメインカメラが光る。

託されたこの機体…

時間さえも超える可能性を持つ最強のガンダム…

敵が超大型MSを出してきたことがわかった、さらにペインチェンジャーが追い詰められつつあることも…

ドライブから粒子が少しずつ溢れ、ゆっくりとそれがハルバートクアンタの頭上で輪になっていく。

刹那はそれを確認すると、モニターのはしに映る最愛の人の姿をみた。

いってらっしゃい、

その頭の中に声が響いた…

「ああ、いってくる。」

頭上の輪の中へ、蒼い機体が飛び込んで行った。

二つの持つ力

ハルバートクアンタ…

時間軸さえも超越することのできる可能性を持つ最強のガンダムであり、イオリアが残した先駆者である刹那？F？セイエイのための最後の劔。

それが今世界に放たれた…

「さて、純粹種はどこまで世界を変えていけるのか…。」

データに包まれた世界で黄緑色の髪をした青年がつぶやいた。

肉体を変える時に何度か経験はしていたが、やはりあまり楽しいものではない。

ヴェーダにアクセスが出来ないことからスピアの肉体は作れずこんな狭い空間で生きなければならなくなった。

仕方がなくデータに自分の人としての形を作り出して暮らしてはいるのだが、データだけで存在することがこんなにつまらないとは思わなかった。

「システムに翻弄されなければいいのだがな……。」

後ろの方から声が響いた。

振り返るとそこには茶色い髪が少しだけ残った老人の姿……

この青年をここに閉じ込めている張本人であり、彼の存在をこの世にとどめた人物でもあるこの老人。

世間では天才とよばれた人物、

「もしかするとそうなるかもしれないね……ただ、彼のことだからまた乗り越えるさ。」

青年は目の前に大きく映されたハルバートクアンタの姿をみながら答えた。

かつて後ろにいる老人が作った計画を奪って世界を動かそうとした自分、しかしそれは彼によって妨げられ世界は統一を果たした。

そしてイオリアが最後に予測した外宇宙への進出と強大な力を持つ敵との相対。

それがどこまでのものなのか、今のところ自分には予想出来ない……

ハルバートクアンタ

いや、正確には私が理論を立てて置いたのは ツインドライブシステム。

ドライブの無限の可能性が切り開く新たな力、とでも言い表せばいいだろう、タイムマシンは存在しない、なんていう言葉がもしかすると間違えになるかもしれないのだから……

私が理論を立てたツインドライブの力は二種類。

ソレスタルビーイングに与えたドライブによるツインドライブシステムには空間を飛び越える力、そしてクジャノ？コーナーが預かってくれたドライブによるツインドライブシステムには世界の壁を超える力がある。

前者の方はご存知のクアンタによるワープ。

そして後者の世界の壁を超える力だが…パラレルワールド、といえはわかりやすいだろう。

まだ太陽光発電タワーも完成していなかった当時、私はドライブの

研究を進めると同時に外宇宙への進出のための研究もしていた。そして、太陽系の惑星を調べている中で木星の付近に謎のエネルギー波の残留があるのを発見したのだ。いまの人類では到底作ることの出来ないほどのエネルギーが発せられていたと思われるそのポイントには、僅かながら正体不明の亀裂が存在した。

私はその当時完成しかけていた擬似太陽炉を搭載した無人探査用をその地点へと打ち上げ、二年後に、その亀裂が別世界へとつながっていることを突き止めたのだ。

それによって分かったことが一つ、強大な力を使えば別世界への道を強引に開くことができる、それが白銀のドライブの開発目的だったのだ。

残留していたエネルギー波には不純物が多すぎた、ゆえにあり得ないようなエネルギーが必要とされていたのだ、ならば純粋なエネルギーであればより少ない力で道が開けるはずだ。

そうして完成したのが

白銀のドライブによるツインドライブシステム…

私はこの力をソレスタルビーイングに与えることをやめた。理由は簡単、世界統一とその先の世界にこの力はまだ必要ではないからである。

この力は最後に出されるべきものだったのだ。

しかし、アレハンドロ？コーナーによって現在に出ってしまった歪から、別世界の人物情報をこの世界に引きずり込んでしまった。

おそらく連れてこられたのは十人程度、彼らに戻して歪みを消すためにはもうあの白いヒゲの機体を目覚めさせるしかない。

これが、おそらく私にできる最後の予測だろう…

あとは見守るだけだ…

もう私はこの世界では肉体をもって現実に現れるべきではないだろうから…

二つの持つ力（後書き）

いよいよ明日が合格発表（^ ^ ;）
ああ、どうしたらいいんだろお

三人、同じ記憶（前書き）

高校、第一志望受かりました〇（＾　＾）〇
これで心置きなく小説かけます√

三人、同じ記憶

飛び交う閃光、

色は二つ、白銀と橙…

数が圧倒的に多いのは橙の方だが、それが当たって爆発をすることは滅多になく、数の少ない白銀が見える度に大抵爆発が起きている。

それでも、戦力差というものはなかなか覆せないものであって、次第に白銀のほうにもきれがなくなってきた。

「くっ、そろそろ限界か……。」

ゼフィアスは目の前に迫り続ける敵のジnkスの群れを見ながら呟やいた。

戦闘開始から六時間が経過、連戦が続いていた彼等にとって既にこの時間は限度を越えていた…

次第に被弾も見られるようになってきたのだが、ギリギリの防衛線を張っているペインチェンジャーの一同はリサイアに戻って補給を

することも出来ない状況である。

ベルディオの機体はミサイルがつきかけていることもあり近接戦闘を余儀なくされ特に被弾が激しい。

タークスは極度に負荷のかかる近接戦闘の長時間継続と、度重なる高速移動によって機体にガタが来始めている。

ミルティアとシルビアは予想よりも早く防戦一方の展開となつてしまったためSトランザムの持続時間が少なくなつてしまい、お互いが身を犠牲に時間を稼いでSトランザムを利用するところまで来ている。

ギャレスはなんとか敵の艦隊まで辿り着いて撃墜したのだが、そこから敵の待ち伏せを食らつて身動きが取れない状況のようだ。

そしてそう言っている自分もファンクが半数以下となつてしまい内蔵していた予備の実弾武装も全て使い切つてしまつている。

だいたいこれまでで相手の総戦力の四分の一程度を削りかけている位だろうか…
とにかく何処かで戦闘の来れ目を見つけてタークスたちを休ませなければならぬ。

…) (一時休戦を申し込むか？いや、そんなのは気の迷いにすぎんな…

残してある脱出時用のライターはあと二基。
せめて半分は削らなければ追撃を許してしまうだろう…

「ぐっ、しまった！」

限界が来ていた右足付近の追加バーニアがついに爆発し、機体が大
きくバランスを崩した。
そこに追い討ちをかけるように迫り来る三機のジンクス…

頭に一瞬よぎった死の予感…

「ちい、こんなことで！」

咄嗟にはなつたファングには粒子がほとんど溜まっておらず、ジン
クスのコクピットにぶつかって共に爆散する。

まだだ、まだ死ぬ訳にはいかない。

自分にはタークスたちに言っていない事がある。いや、正確には自
分達には、だ。

この秘密を知っているのは自分とベルディオとミルティアの三人。

自分たち三人には、ある共通する記憶がある。

それは、この世界の出来事ではなくましてや前世の記憶でもない。

それは、自分達の本当の世界の記憶だ……

アレハンドロ？コーナーに出会ったのは、まだ自分が実験体として研究施設にとらわれていた時のことだ。

そこに連れてこられたのは自分がまだ五歳の時、道端でただ一人倒れていたところを拾われた。

不思議なことに、それ以前の記憶は無かった。

家族のことや親戚や友達、更には住んでいた場所や名前など、一切の記憶や経歴が無かったのである。

施設に入れられた自分はたまたま似たような境遇のベルディオに出会い、そこで始めて自分にある力について気づき始めた。

はじめは下らないばやきからだった。

不真面目で五月蠅く厄介な看守が来たところで、またか、などとぼやいていた時のこと、何故か脳に同じようにぼやいている声が聞こえたのだ…

しかもその声は聞いたことのある声、隣に部屋にいるベルディオの声だった。

それから少しずつ自分の力を発揮するようになっていった自分とベルディオは、いつしかその施設ではトップの力を持つようになっていた。

そしてその施設の創設者と名乗るアレハンドロ？コーナーと面会を命令されたのが自分達が十九になるうとしていた時のことである。

面会の内容は至って普通だった、えらい人がいいそうな言葉をただ淡々と並べて行くだけ…

しかし、その場にいたアレハンドロを含む自分達には全く別の会話が脳量子波（この頃には既にこの力の名前を知っていた）による会話が行われていたのだ。

そして、半信半疑で脱走を図った自分とベルディオはアレハンドロの指示ど通りに動いたところ、うますぎる位面白くことが運び、無事脱走することができたのだった。

そしてペインチェンジャーのメンバーを集め、しっかりとした武装組織へと成り立った頃であった…

アレハンドロ？コーナーから、一つの依頼が入った。

その内容は新たに発見された仲間の救出…

アーシャンとの出会いだった。

ドゥローレン、覚醒…

「ゼフィアス？あれは…」

ベルディオは各部に被弾して煙をあげる機体で必死に戦いながらも、
一番気にかけていた存在の異変に気付いた…

おかしい、ゼフィアスの機体の動きが明らかにおかしい。

動きはひたすら正確な機械のような無駄の無い動きに加えて身体への影響は少ないとはいえかなり負荷のかかる移動。

通信をいれた時の受け答えもどこか冷めたようなものだった。

「ゼフィアス…一体何が。」

ゼフィアスは誰よりも色々な事を一人で抱え込んでいる。本人は気付いていないと思っているが、アレハンドロとの取り引きや自分以外に回って来た、敵の暗殺なども彼がこっそりと先に行っている。

そろそろ戦闘時間も限界を超える、最悪の場合も考えると今のうちに何か手を打たなければ…

ベルディオは静かに通信のパネルを操作してミルティアに通信を開いた。

電子音がなりミルティアの顔が電子パネルに映される。どうやら他の方でもかなり疲弊しているようだ…

「何かしらベルディオ？」

ミルティアは普段通りに答えていたがその声には全く余裕が無いのが聞いていてわかる。

「ミルティア、五分だけ此処のラインを守ってくださいませんか…。」

一瞬ミルティアが固まる。

だが、それは本当に一瞬の事で次の瞬間には軽く苦笑いをしながら「五分なら…。」と言ってくれた。

そしてその三十秒後にはミルティアの機体がベルディオと入れ替わるように敵軍と向かい合った。

「すみません、必ず五分いないで済みます。」

ベルディオはそう言って回り込んで来た三機のジンクスを切り捨てると、急いでゼフィアスの方へと向かって行くのであった。

アーシャンと出会ったのは全て仕組まれたものであったのは始めから分かっていた。だが、誰が予想できるだろうか、もしその時自分が当時のタークス程度の年頃であればもしかすると変わっていたかもしれない。

その存在を感じ取り、目を合わせた瞬間から自分は一度死んだ。

その時まではこの世界で自分はゼフィアス？ヴァンガードとして存在し続けていた。

だが、あの時自分は気づいてしまったのだ。

本当の名前に、本当の世界に……

そして全て思い出した。

記憶もその時の言葉も、そしてあの屈辱的な敗北からあの瞬間までを…

何を考えているのだろうか。

目の前で交差する橙の閃光が目眩しいと感じた…
レバーが軽い、いつもよりも早く動いていける気がする、視界が普段よりクリアだ。

「私は何をやっているんだろうか……。」

自分がこんなに疲弊しても戦い続けている理由はなんだ？
誰よりもこの手を血に染めて救おうとしているものはなんなんだ？
タークス、ギャレス、ベルディオ、ミルティア、シルビア、アーシヤン…なぜ守ろうとしている？

この世界に来た本当の理由を自分は思い出したはずだ。
守れなかった世界をもう一度元に戻す…それは、自分という存在がその再生した世界から消え去った状態になってしまおうとも望んだ道では無いのか？

まだミルティアとベルディオ
以外の奴らは気付いていない、この憎しみの気持ちに…

(あいつらにはこんな感情や記憶に気付いては欲しくないな)

過去にベルディオとミルティアと話し合った時に自分が言った言葉
が繰り返して聴こえる。

考える、彼らも世界のために来た存在として自覚しなくていいのか
？違う、そんなことは無い…

だが、もしそう自覚させずに通すしかなくなってしまったら？

「くっ、何を考えているのだ！」

少しずつだが喋り方が元に戻って来てしまった。

何も考えなくていい…今は生き残る…

「過去に囚われるなど…。」

「ゼフィアス！何をやっているんですか？」

突然かけられた声に驚き戦闘に意識を戻すと、何時の間にか敵に囲まれており、それをベルディオが横からボロボロの機体で倒していた。

「何があつたんですか？あなたは此処で死ぬつもりか！」

ベルディオの言葉がなぜか遠く聴こえる…

死ぬ？

敵？

「あつ、ぐあが……がああああああああ？」

突然の叫び…

「ゼファイアス？…ゼファイアース？」

その叫びを聞いたベルディオが周りの機体を切り倒し、自分の機体が撃たれるのも気にせずゼファイアスの機体の方へと向かう。

しかし、次の瞬間。

バキ！

「な？これは……。」

ゼフィアスの機体であるドゥローレンの白銀の装甲が剥がれ落ちた…

そして中から姿を表したのはドゥローレンの内部装甲カラーと同じ
深紅の機体。

ガンダムタイプのMSであった…

「さて、ついに三機目だ……。」

静かにコクピットの中でつぶやくのはクジャノ、刹那たちとの戦闘から少したちからだも落ち着いて来たところである。

「過去性の圧倒とそれぞれに埋められた禁止領域に行き着いた機体から元の機体へと戻る……。」

全く不便なリミッターだな、とクジャノは心の中で呟くと、今というタイミングで前線に身を投じようとする愚かな権力者と、全てを止めようとする先駆者の事を思いながらゆっくりとアルヴィアスで戦いの渦の中へ舞い戻って行くのであった…

ドウローレン、覚醒…（後書き）

機体名隠したけど、まあぶっちゃけ分かりますよね？

紅いガンダムで、後半のゼフィアスの

喋り方がヒントです…

あ、今更ですがゼフィアスは

薄いベージュっぽい色した長髪の男です。

止められない現実

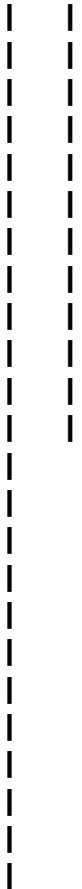
いつかこうなるかもしれないと思っていた…

今目の前に写っているのはボロボロに成りながら自分の機体を止めるベルディオとミルティア。

周りには既にジンクスが残骸となって散らかっているだけで、他の部隊は何故か一瞬だけ確認できた高熱源反応のあと撤退して行ってしまった。

今自分にできるのは周りを見る事と、自分という存在を認識し続ける事。

自分は……なにを守りたかったのだろうか…



「やめて下さい、なにをしているんですか？」

激しい火花を散らしながら、二機の機体がぶつかり合うが数秒も保たずに白銀の機体が押し飛ばされる。

しかし、紅いガンダムの方は止めを刺す気が無いのかどんなに隙を見せても絶対に追撃を食らわす事は無かった。

どんなに攻撃をしてもそれを受け止めて突き放してどこかへ向かうとするその機体を、ミルティアとベルディオは必死に足止めする事しかできていなかったのだ。

一瞬だけ脳量子波でゼフィアスから二人が感じ取ったのは、プロレマイオスに向かってアーシャンを殺そうとするゼフィアスの紅いガンダムの姿…

仮にそれがゼフィアスの考える目的なのだとしたら今二人がやるべき事は刺し違えてでもゼフィアスを止める事。

「クッ………もう機体が。」

ベルディオはパネルに映される機体各部の損傷を見ながら目の前でどこかへ向かおうとする紅いガンダムの前へ回り込んだ。

鏑迫り合いまで持ち込めたとしても機体が戦闘レベルで動くのはあと数回と言ったところだろう…

ミルティアの機体は比較的守備が硬いが、度重なる被弾や先ほどまでの無理な防衛ラインの維持でかなりガタがきている。

当然戦闘レベルでの可動は無理な状態であり、此処は敵本艦の方への原因不明の攻撃により敵が一時撤退してくれた事に感謝する限りであった。

「たかがパージでこんなに変わるとは……。」

確かにドウローレンの性能は強めのリミッターが掛かっていたとはいえ、此処まで飛躍的に性能が上昇する事など通常では考えられない。

明らかに全く別の機体と言ってもいいくらいだ…

隠しているのかはわからないが少なくとも今の所目の前にいる機体に射撃系統の武装は一切無い。かと言ってこちらにも既に射撃系統の武装がほとんど使い物にならなくなっているためあまり意味は無かった。

「すみません、これで最後みたいです……。」

どうやら何時の間にかドライブの近くにも損傷があった様だ、ドライブの安定率が極端に落ちている……

ベルディオは脳量子波で連絡をとっていたミルティアにさういって、ビームサーベルの出力を抑えていたパーツを全て壊した。

ピーーーーー？

エネルギーの飽和による各部への警告音が鳴り響く。

そしてその音とともにベルディオは一気に紅いガンダムへと切りかかった。

ぶつかり合ったサーベルと大剣の接点が今までに無いくらいの明るさになり、互いの機体に火花を飛び散らして行く。

しかし、

「敵わないか……。」

出力が圧倒的に負けているベルディオの機体が徐々に押され始めた。

こちらは手負いとはいえ世界の最新鋭機をはるかに凌駕していたこの差は驚くべきものである…

「あと十秒……。」

ベルディオは異常なまでに粒子残量を食い尽くして行くビームサーベルを見ながら静かに呟いた。

ぶつかり合うサーベルと大剣…

「何？」

異変を感じ取った紅いガンダムのパイロットは声を上げた。

目の前でぶつけ合っていた敵のビームサーベルがいきなり暴走を始めたかのように乱れ始めたのだ。

そして刀身の形が少しずつ崩れながら、エネルギーが拡散するかの様に飛び散った。

辺りが一瞬にして爆炎に包まれて見えなくなる…

(ベルディオ…ベルディオ、大丈夫なの?)

ミルティアが脳量子波を使って呼びかけると、それに合わせる様に軽い脳量子波の共鳴が起こった。

どうやら意識はあるらしい…

しかし、決死の作戦の結果は無残に終わった様だ。

(逃げられましたか………)

ベルディオが少しだけ悔しそうに呟く。

普段あまり感情を出さない彼にとってこれはかなり悔しい結果だろ
う…

ミルティアの見た先に残っていたのは完全に機体がダウンしたベル
ディオの機体と、敵が脱出のために使ったと思われるシールドだけ
であった…

届かない壁（前書き）

長期に渡る連載停止失礼いたしました。

理由に関しては親族諸事情に関わる事なので申し上げられませんが、連載については今後とも変わらずに行こうと思えます。

届かない壁

「くそつたれ！いい加減当たってくれつての……。」

時を同じくして此方はロックオンとアレルヤ。

二人は強大な熱源が確認されたポイントへ向かう途中で、二機の正体不明の敵と遭遇してしまい、状況の整理ができないまま交戦状態へと突入していた。

ファングとライフルビットを合わせたかのような武器を持つ青い翼の機体と巨大なビーム砲二基を背部につけた白と黒の機体。

二機ともハルードやサバーニヤの性能よりも数段高く、ロックオンたちは次第に劣勢となっておりサポートで出撃した刹那が救援にくるまでの三分間さえ危うい状況である。

「遅い！」

激しく飛び交うライフルビットの合間を縫う様にすり抜けてきた青い翼の機体がサバーニヤの目の前にせまった。

常人では考えられない様な動きで迫ったその機体に、ロックオンの反応が遅れる…

サバーニヤが近接戦闘用の武装を構えるのよりも早く青い翼の機体はライフルを手放し、そして一瞬にしてビームサーベルを引き抜いた。

「チツ……………」

その剣が振り抜かれるのと同時に、サバーニヤは赤い閃光となっちはるか上方へと飛び立った。

トランザム…

「な、これは一体？」

その姿を見失った青い翼の機体にのる青年、キラ、はその直後に聞こえた攻撃を知らせるアラームで相手が上方にいと気付きその場から一気に離れた。

続いて降り注ぐ大量なビームの嵐、しかもどのビームも先ほどの自

分がいた位置を寸分たがわず貫いている。

躲すのがあと少しでも遅れたら宇宙の藻屑となる所であった。

だが、

「なんで最後までこないんだ……。」

キラは戦いの中であることを感じていた。

今まで戦ってきた多くの敵は、必ず敵に攻撃を当てて倒すという気持ちがあった…

プレッシャーと言い換えればわかりやすいだろうか。

人によってバラバラではあったが、それは戦場では溢れているくらいに感じられていた…

しかし、サバーニャは違う。

何故か攻撃はただ的に当てるだけのようであり、全くプレッシャーが感じられなかったのだ。

初めから敵う訳が無いと諦めている訳でもなく、挑んでいるという

緊張感すら感じられない…

ただ中途半端に引つかかった何かが残るのみだった…

危機的状況を回避できたロックオンの顔には、焦りの色が浮かんでいた。

額には汗が滲み、鋭く相手を見据えたその視線には動揺の色が隠せず、そして引き金を引くそのては少しばかり震えている。

今出したのが戦闘中における自分の全力であった。

それがあの様に簡単に避けられた…

というよりも、先ほどから自分の攻撃は一回も当たっていない。

敵うはずの無い敵との対峙…

自分が今まで幾度となく経験してきたあの感覚…

それは彼がまだカタロンに所属していた時、兄という圧倒的な存在を意識し始めた時から、ガンダムという対等な力を手に入れるまでの十年以上の月日に幾度も自分を苦しめたものであった。

小さい頃は兄であるニールと比べられ続け、なに一つ勝つことのできない自分に苛立ち家を離れた。

そしてカタロンに入ってからアロウズという世界と同等の力になす術もなく仲間が奪われて行った。

そんな時決まって自分は震えていた

なぜだろうか…

自分が此処まで生き残れたは覚悟を決めたことが無いからだろうか…

アンフェアな所に立つことを自分から避けていたからなのか…

最終決戦の時もアリアル？サーシエスがヴェーダによるバックアップを失うまでは動くことができず、イノベイドたちに挑んで勝つことができたのもヴェーダによるバックアップがなかったから…

今までの自分は決まって力が及ばなくなると、強くなりたいという願望を持ちながら逃げていた。

そして今この状況でも例外では無い。

ガンダムという圧倒的な力が及ばず、また力を求めながら逃げる様になるのか…

「ロックオン？」

トランザムで敵から離れていた自分に対して、緑色のビームが数本放たれた…

回避が間に合わずに数発が直撃する。

「がああああああああ…。」

ものすごい振動とともにコクピットの一部が爆発し、その勢いで身体に飛び散った破片が突き刺さった…

トランザムが強制終了され、サバーニヤは近くの小惑星群へと煙を上げて墜落していく。

しかし、ロックオンは中でも静かに目を瞑っていた。

「ちくしょう……。なんでこんな時にこれるんだか…。」

悔しいことだが、命は救われた…

そう思いながらロックオンは目を開け、此方に迫る青い翼の機体の前に舞い降りたハルバートクアンタの姿を見るのであった…

先駆者と狂戦士

二度と変えることのできない過去を背負う覚悟…

今の自分には確かにそれがある。閉ざされていたはずの扉は開いて、未来を作るための新たな一步を踏み出せと囁く。

絶対に全てを守り切る。

今こうして武器を向けあっている相手さえも…

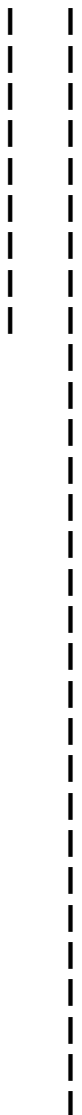
それは今までのように立ちはだかる敵を斬り伏せて作り上げてきた世界の統一でもなく、ましてやそれによって出来た世界の汚点を洗い流すための贖罪でも無い。

対話させる力を養うのは自分の役目ではない…

今俺に必要なのは守ること。

もう自分で自分の存在がわからなくなってしまうくらい変わってしまった自分に唯一できる道であり最高の道を…

俺はただ走り続ける。



何度もぶつかり合う二つの閃光が、小惑星帯のなかを縫う様に進んで行く。

コクピットの中に走る衝撃は、すでに常人が耐えうる限度をはるかに超えていく。

「なぜ貴様は戦う……。」

「そんなあなたこそ？なぜ引き金を引くんだ！」

同じ境遇とも言えなくも無い二人の青年が、互いの剣を交える度に言葉を交わす。

再び距離が離れて互いの姿が大きめの小惑星によって見えなくなつた。

「なんなんだ、なんなんだあの人は……。」

キラは戸惑っていた。

自分の今行っている行動になんの迷いもなければ不可解な点を感じることも無い。

人の感情が複雑なものも知っている。そしてそれですれ違いが起きてしまうのも知っている。

吹き飛ばされた花をもう一度咲かせるために再び握つたこの剣は、自分の信じる力そのものが宿っていた。

？

「なんでこんなことを……………」

この世界に現れるあの白いヒゲの機体を倒さなければ、自分たちの世界と同じ道を辿り滅びる。

なのになぜ彼らは戦い続ける…

小惑星を通り過ぎて互いの機影が目の前に映し出された。

急接近して相手にサーベルを向ける、そしてそれに対応する様に相手もソードで受け止めた。

「今この行いは、世界を破壊へと導くだけだぞ！」

「そんなこと！」

「分かっているはずだ、此处で俺とお前が戦っても無駄な血が流れるだけだ？」

「そんなことは無い？僕らにはまだ戦わなければならない理由があるんだ？」

鏑迫り合いとなっていた状態から、青い翼の機体がサーベルを一気に押し込んだ。

しかし、それはうまい具合にハルバートクアンタのソードにさばかれて再び剣がぶつかり合う。

「それが未来を壊すことになるぞ…。」

刹那がしずかに呟いた。

どこか強い意思を秘めたかのような口調に一瞬だけキラは驚いたが…

「覚悟はある…僕は、戦う?」

そう言うのと同時にキラの中で何かが弾け飛ぶ。

S E E D

そして同じ様に刹那も…

「仕方が無い…。」

先駆者、イノベーター…

二つの力が、ぶつかり合った…

オーバーランザム

互いに撃ち合うライフルが虚空の宇宙へ消えていく。

何度も繰り返される過ちの連鎖を止めるために剣をとった二人は、互いに生じたすれ違いによって戦いへと引きずりこまれて行った。

「なぜだ！何故あなたのような存在が？」

「お前は今やっていることを信じることができるのか？そしてそれが引き起こす結果が分かっているのか？」

クアンタのGNソードが小型のデブリ越しに青い翼の機体を切りつける。

「そんなこと分からない！でも、明日があれば変わるだろう？どんなに辛くても、どんなに苦しくても！」

両腕のビームシールドでそれを受け止めて後退するキラが叫んだ。

彼が戦いの果てに手に入れた平和は本当に少しの間だけであった。

全ての戦いが終わり、ラクスとともに平和で分かり合える世界を作るためにプラントに上り、五年半という月日が流れた時。

世界が変わった。

突然プラントを襲ったのはたった一機のMS。丁度次世代型の惑星外探査用MSやジョージの残した羽クジラの調査が最終段階に入った時のことである。

907

正体不明機に対して警備MS隊は警告後戦闘を始めた。

しかし誰もその機体を止めることはできず、なんとその機体はNジヤマーをNジヤマーキャンセラーもなしに打ち破り核を使ったのだ。

突然の事に対応の遅れたプラントは市民を全員避難させる事ができないまま攻撃対象とされたプラントを放棄せざるを得なくなり、世界規模でMSや戦闘兵器を集結させて残りのプラントへの防衛に入った。

それと同時に自分も防衛に参戦。アスランやシンなどもこの時に同じ部隊に編入された。

でも…

結果は無残に終わった。

MS隊は全滅して戦闘兵器もほぼ全てが破壊されてしまい、アスラ
ンやシンも行方不明となり生き残りは自分含む数十名、さらに自分
の剣を…フリーダムを失うこととなった。

世界は絶望に沈む中でも立ち向かい続けたのに…

そして誰もが恐れた悪夢は起きた。

正体不明の機体は解析不能のナノマシンらしきものを散布し始めた
のだ。

そしてそれに飲まれた人々や物はすべて石化した様になり消えてい
く。

その中で自分は無謀に立ち向かい続ける人々や逃げ惑う人々が死ん
でいくのを見る事しかできなかつた。

消えていく世界、ただ一人でも戦い続けたかったのに…

そして世界は終わったのだ。

「ここで流れを止めないと、もう一度あの悪夢が蘇るんだぞ？分らないのか！」

キラは全方位から迫るソードビットをライフルで弾きながらビームサーベルを引き抜いた。

コクピットギリギリの場所に向けてビームサーベルが突き出される…

「くっ……………よけない……………」

刹那は回避ができないと悟ると同時に、手元にあるパネルを叩いた。

オーバートランザム発動

紅を越してそれは七色に…

「ハルバートクアンタアアアア！」

過去のおもさ

『ハルバートクアンタアアア！』

先駆者となった青年の声が響きわたる。

そして開放される力…

「ン…この感じ……そっか、そろそろなんだね…。」

一人の少年はつぶやく…

長い時を共に過ごしてきた友に語りかけるかのように…

その声は少しだけうれしそうで、何故か悲しそうな声でもあった。

「お前が過去を背負って戦っているというのなら、その過去をもう一度見る？そして向き合え！」

刹那が言葉という壁を超えてキラに語りかける。

突然ゆがむ空間…

そして虹色の翼とともにハルバートクアンタは青い翼の機体、フリ―ダムの目の前で風に流れていくかのようにフワリと消え去った。

ハルバートクアンタが消え去った場所から波紋のような粒子が広がる…

「い、いつたいこれは……グアアアア！」

そして消え去ったハルバートクアンタを探そうとしたキラはその波紋に触れた瞬間、急に頭に衝撃を受けた様な頭痛に襲われ、コクピットの中で頭を抑えてうつむいた。

激しい痛みと共に頭のなかへと声が響く…

キラ！このままではいずれ地球にも？

キラさん、ここは俺が止めますから！残り部隊の回収を…早く？

この声は…

まさかアスランとシン。間違いない。だけど一体なんで…

機体を動かし周りを見渡すが、アスランやシンの機体どころかデブリ以外の物は何一つ存在しなかった。

どのみち一般兵の機体では太刀打ち出来ない！ならここで俺たちが止めている間にでも強力な機体に乗るための人間を一人でも残すしか無いだろ？

これは、あの時の会話がそのまま流れて…

確かにあの時の会話。しかも鮮明に一字一句間違える事なく頭に響いて来る。

まるで本当に過去を訪れたかのように…

「だけど！だけど僕は？」

知らないうちにその言葉に答えていた。

早く行つて下さい！

そうだ、それでこの後アスラン達は行方不明になつて…

「まつてくれ！二人だけで行つて勝てるわけ無いだろう？」

だから足止めだと言っている！危なくなつたら俺たちも退避せざるを得ない…

もう誰もこれ以上争いを望んでなんかいないんです！だから俺が戦うんです！

自分の抑止を振り切つて遠ざかつていく二人の声…

二人の声は消え、頭痛がやむと共に周りのおかしくなっていた様子も元へ戻つた。

「こんな事が……。」

二度と忘れる事のない過去であり、自分を動かしている原点。

だが、その重さは再び向き合うためには重すぎた。

自分が今戦場にいる事さえ忘れてしまうほどの重く暗い過去がキラのなかへと流れ込んでいく……

「もう分かっただろう……向き合えない過去を背負ったところで何も変わらない……。」

何時の間にか先ほど消えたはずのハルバートクアンタがGNソードVの剣先を向けながら目の前にいた。

その姿は虹色ではなく元の青と白を基調とした色へと戻っており、周りの歪みも其面影を残す事なく消えていた。

「僕は……何故……止めれなかったんだ。」

自分の選んだ道が間違えにしか見えなくなったキラは、しずかに呟いた。

「過去と向き合う時は必ず来る。だがそれはまだ先のことだ……」

…今はまだいい」



「System正常……。」

少年は暗闇の中にいた。

他からみればただ何かを考えているだけにも見えなくも無いが、その頭の中ではそんなレベルでは説明もつかないくらいの規模ですべてが動いている。

「稼働までおよそ一週間：基礎データ完全起動完了。ナノスキン装
甲正常：パワーバランス正常、データ内のムーンスレイス生体データ
確認。」

次々とつぶやかれる言葉は、この世界では決して知られる事のないシステムやデータの名前である。

そして数分後、少年はゆっくりと立ち上がると、部屋のドアを開けながら小さく囁いた。

「月光蝶……。ごめんね、みんな……」

死神の真実と…

オペレーションTRYジェネシスとペインチェンジャーとの戦闘が、アレハンドロの攻撃により一時的に中断されている頃と同時刻。

資源衛星からかなり離れた小惑星帯ではハルバートクアンターがただ一機でその場に待機していた…

既にアレルヤ達が戦っていたパイロットの方でもハルバートクアンタによって過去と向き合わせ戦意を失わせ戦闘を止めた。

幸い二機の行動目的の到達点が自分たちと一致していた事から、一時的とはいえ協力する事となり事態は少しだけ上を向き始めている…

だが、

「グッ……………キツイか…………。」

ハルバートクアンタのコクピットの中、刹那は誰にも知られる事なく激しい痛みと戦っていた。

今走った痛みは間違いなく肩…

しかも過去にアリアル？サーシエスに撃たれ細胞障害を引き起こした場所である。

「過去を体現すると同時に過去の痛みをランダムに味わう訳が…辛いな…。」

やはりかなり強力な力を使うせいか、体にかかる負担は尋常ではなかった。

「…二人だけでこれとなると、戦場では使いづらいところだな。」

不特定多数の人々が量子空間に入ってしまった場合、どれ程の反動が体にかかるのか？考えただけでもあまり想像したくない結果に鳥肌が立つ…

「ならやめたらどうだい？今なら逃げ出しても問題無いと思うよ…。」

突然通信越しに声がかかった。

それはよく知る人物の声…

「来ると思っていたが本当にくるとはな……クジャノ？ミストレネ。

」

顔をあげた刹那が画面に映されたクジャノの顔を見ながら答える。

「誰にも邪魔されないタイミングで話をしておきたかったからね…
…で、ソラン君は彼の過去から何を得たのかな？」

「その言い方を直せ……昔のように、ソランでいい。」

刹那は今までのクジャノに対する態度とは一変したかのような口調でクジャノに言った。

周りにはただデブリが浮かんでいるだけで先ほどまでの戦闘が嘘かのように静まり返っている。

「そうかい、じゃあソラン。手短に済まそうか……」

そうやって少し大型のデブリのターミナルへ入って行ったクジャノに続く様に、刹那は中へと入っていくのだった。

「さて、どこまで知ってるかだけは教えてもらおうよ……。ソラン、君の見た過去はどんな物だった？」

ターミナルにそれぞれの機体を置いた二人は、その中にあるかつて使われていたであろう休憩室らしき場所にいた。

「少々現実味のない話だが、たった一機のMSによって地球全体の戦力が壊滅させられた拳句、跡形もなく滅ぼされていた……。」

「やっぱりそうなるね、で他には何を。」

「蝶のような羽や核エネルギーを凌ぐ力を見せていたりした。余りにも異質な記憶すぎて信用は出来ないな。」

「僕の、僕の過去は見たのかい？」

クジャノが少しだけ躊躇しながら刹那に問いかけた。

「ああ、出なければこんなに簡単にお前と話したりするものか……。」

刹那はそついいながら右手に握っていたデータを投げ渡す。

「これは……。」

クジャノはそれを受け取ると、腰につけていた端末を取り出し起動した。

小さい電子音が響き、画面に大量の文字や画像が表示されていく。

「……………いいのかい。これでもし僕が裏切ったら君たちはお終いだよ?」

クジャノがそういいながら刹那の方へ視線を向ける。

その情報は、エクシアの最深部に眠っていたツインドライブに関する情報の全てであった。

そして更には組織に関する個人情報以外のLevel 15以上のデータなども含まれている…

「そんな事をすればお前も目的が達成出来ないだろう?」

そう答えながら刹那は部屋の外にある廊下の方に視線を向けた。

「そうか、ならここらで一変話を切ろう?」お客さんだ。

「やはり誰かいるのか…。だが一体この感じは…。」

刹那が銃を片手に持ちながら廊下の方へと向かおうとするのを止めながらクジャノが前に出る。

「とびつきりのお客さんだ…もてなしは盛大に行こう。」

クジャノはそういつてゆっくりと立ち上がると、腰の銃を抜き出し

た。

向けた先は部屋から向かって北側のドア…

そしてその奥にいたのは…

「リボンス？アルマーク？」

そう、刹那達と激闘を繰り広げ表での活動が出来なくなっただけのリボンス？アルマークであった。

クジャノとして

初めて気づいた時はまだ世界がそんなところまで進化するとは思わなかった。

なぜならどんな世界であろうと出現されると言われる究極の天才がこの世界ではたまたま早くに生まれすぎたからだ…

イオリアにとってその当時の世界は遅れすぎていた、だから絶対に予想していた水準に技術レベルが届くのは自分が死んだ後だと思っていた。

だが、現実はず違った…

イオリアはその天才達の中でも特に頭ひとつでた能力の持ち主だったのだから。

そして通常ならあと数世紀はかかると思っていた空間移動の基礎理論を完成させ、さらにはそこからまた数世紀はかかるとされる時や世界を超える移動方を仮定ではあったが完成させていた。

だからこそ自分が動いた

先駆者として世界を守る為に…

自分の生きたこの世界と自分を救った存在たち全てを生かす為に…

そのために闇の上を走り続けた、光として人類を照らす彼が、迷い、
変わっていく中をただひたすら見届けながらすすみ続けた。

926

だが、どうやらそれはもう終わりのようだ。

ここからは闇に堕ちた死神ではなく、人として、クジャノ？ミス
トレネとして戦う。

最後まで……………

「リボンス？アルマーク？」

しかし、姿を表したリボンスはどこか様子がおかしかった。

リボンスは声をあげた刹那に反応する事なく、ただフラフラと歩いているだけで話すどころかまるで何も目で見えていないかのような瞳をしている。

「ソラン…こいつはリボンスじゃ無いよ。もっと厄介なのだ？」

クジャノがそういいながら銃を放った。

ドスッ

鈍い音と共に分厚い宇宙服を突き抜けた銃弾がリボンスの腹部を撃ち抜いた。

だが、

「なっ！何故血が出ない……。」

腹部を撃ち抜かれたリボンスは痛がるそぶりも見せず、出血すらない状態でクジャノに迫っていく。

「やっぱりこんなじゃ効かないか……それなら。」

突然加速したクジャノは、そのままリボンスのすぐ脇へ潜り込み腰の部分を蹴り飛ばした。

それと同時に粘着式の小型爆弾を投げつける。

「バイバイ……見知らぬ金属生物さん。」

ガラクタの山になっている場所に倒されたりボンズの爆弾が爆発した。

あたりが爆炎に包まれる。

あまりにも周りの煙が厚いため、周りの様子を伺う事は難しかった。更に爆炎は部屋を分断する様に広がっており、クジャノのいる方へは迎えそつもない。

(ソラン…聞こえてるかい?)

脳にクジャノの声が響く。
どうやらここからは脳量子波での会話になる様だ。

(ああ、だが一体これは何だ？人ではない事はわかるが…)

(話してる時間は無い、さっさとここを退散するよ)

脳量子波によって脱出経路が教えられると、クジャノは数回発砲音

を響かせた後そのまま反対にあるの出口へと進んで行った。

（そいつらには組みつかれたらダメだ！蹴りで距離を取るか爆弾で粉々にするしか攻撃手段が無いからとりあえず逃げるしか無い！）

（わかった、急いでコンテナに向かう）

刹那は拳銃をしまつと、手元に残っている爆弾類の数を調べた。

「残っているは粘着式が三つに強力なタイプが二つか…距離にすれば200Mも無いが……。」

通路を塞いでいる敵の数を見ない限りはわからないが、厳しい状況である事には変わりはない。

「どつやらきつそうだな…。外はあれが大量にいる…。」

突然部屋の出口から声がかかった。

その声の主は、

「ティエリア！何故ここに…。」

刹那が驚きの声を上げる。

それもそのはず、かなり警戒していたはずなのに、脳量子波を使える人間が脳量子波による警戒をすり抜けていたのだ。

「悪いが先程の話は聞かせてもらった。脳量子波遮断処置のこの服のお陰で全く気づかれる事なくだ…。」

「そうか…だが落ち着いて話し合う機会は後だ、まずは脱出を。」

「その心配ならいらない。そろそろ彼も保護された頃だろう…。」

ティエリアがそういうと共に、突然地響きが起きて周りの壁が砕け散った。

『刹那！大丈夫かい？』

そこから現れたのはアレルヤの駆るハルフト、そして奥のほうではロックオンの駆るサバーニヤが待機していた。

「何故…何故ここにいるんだ。」

「話は後なのだろう、早くいけど。」

そうして、ティエリアと刹那はそれぞれの機体に取り込み、小型小惑星を脱出するのであった。

刹那奮闘記（前書き）

更新遅れて申し訳ないです。

たまには温かみのある？話をしてみようかと番外編を三話くらいに渡ってやります。

そんなことしてないで本編をやれって方がいればなんなりとお申し付けくださいまし。

リボンス？アルマークと瓜二つの謎の敵と遭遇した刹那とクジャノは、ティエリア達とともに小惑星からの脱出を果たし、無事トレミーへと帰還する事が出来た。

クジャノに関しては、ティエリアが盗み聞きをしていたのが幸いし、他のトレミーのメンバーとの目立った問題はなく受け入れられた。

934

一方、激戦状態であったペインチェンジャーとジェネシス軍は、謎の巨大MAによる攻撃によりジェネシス軍の本隊が大打撃を受けたため、一時休戦となっている。

そして今、刹那はクジャノや他のメンバーと共に、新たに協力者となった二人の人物と会談を行っていた。

「キラ？ヤマト…それがお前の名前か。」

「うん、だけどこの世界に飛ばされた時はリシュアって名前だったらしい……」

ブリーフィングルームの中、いつもより三人ほど新しい面子が増えたトレミーのメンバーは、青い翼の機体であるストライクフリーダムを駆るキラと大型の破壊兵器をもつDXを駆るガロードの話を聞いていた。

「俺はガロード？ラン、俺がここにきた時は何かよくわかんねえけど、ハーネンスって名前で過ごす事になった。」

「しかし不思議なもんだなあ、まさか現実で平行世界みたいなもんがあつてそれを行き来できるなんて。ワシには想像もつかん……」

イアンが顎に手を当てながらキラとガロードを見ながらつぶやいた。

「まっ、この2人の機体と知ってる技術や世界観を聞く限りじゃ信用出来ないわけでも無いがな。」

「そうね、確かにあの特殊すぎる機体は私たちでは作れないし、2人が嘘をついているようにも思えないわ。」

ラッセとスメラギがそういうと、若干だがキラとガロードは安心してような顔を見せた。

無理も無いだろう、そもそも本人達でさえ信じきれないような話を今の今まで敵であった俺たちに信じると言っているのだから。

「で、これからどうすんだ？いまいち俺は話の整理が出来てないから何をすればいいのかがさっぱりなんだが…。」

「ライル…それはあなたが渡された報告書を読んで無いからでしょ。」

「…っ！それは言ったらまずい…て、アニユー？」

ロックオンが墓穴を掘ったのに追い討ちをかけるようにアニユーが言葉を添えた事によって、ロックオンの死亡フラグが立つ。

「そうなの？またサボってたのね……フフ、フフフフフフ……
……フフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフ
フフフフ……。」

どす黒い声がブリーフィングルームにゆったりと響く……

「「「「「？」」「」」」」」

それと同時に常人ではないロックオンの周辺にいた四人が何かを感じ取った。

キラ、刹那、クジャノ、アニューが一齐にその場を離れる……

(因みにティエリアはトラウマから何かを感じ取っても動けない。)

「トランザム？」

一瞬だけ目で捉える事が出来た刹那が驚きの声を漏らす。

赤く輝いた閃光がロックオンの腹部に当たり、その姿を消した……

「……………、何だよ、これ。」

ガロードの聲がしずかに部屋に響く。

そして暫くの間、静寂が部屋を包み誰もが畦んとしていると、何時の間にかスメラギが何食わぬ顔でブリーフィングルームの中へと戻っていた。

「さて、続きを始めましょう…。」

「……………。」

しかし誰も反応をしない、いや、出来ない。

「やるわよ、いい？。」

スメラギの言葉が1オクターブ下がったことを皮切りに、一斉に全員が定位置に戻り会談の続きを促したのだった。

途中ロックオンが消えるというアクシデントもあったが、無事に会議は終わり、激戦の合間とはいえそれぞれが各々の過ごしたい時間を過ごすだけの余裕が出来た。

ここからの話は、そんな中で起きた実に不思議な話である……

「フェルト、世界情勢の方はどうなってる。これだけいろいろな勢力が動いたんだ、かなり問題になっているだろう。」

束の間の休息を得た刹那とフェルトは、2人だけの時間を過ごすために珍しく誰もいない時間帯を狙ってランチルームへと足を運んでいた。

だが、

「……………」。

「どうしたんだ、フェルト？具合でも悪いのか…。」

いくら話しかけてもフェルトは黙ったまま食事を口に運び続けるだけで、拗ねたように刹那の言葉を無視しつづけるだけであった。

それもそのはず、せつかくの時間だというのに刹那が話すのは世界情勢やら戦闘状況やらの話ばかり、何と言われると答えることは出来ないが、もっと特別な会話がしたかったのだから…

「刹那…、その…ちょっと疲れたから部屋にいくね…。」

食べ終わったトレーを片手にフェルトは席を立ち上がった。

本当ならもっと此処にいたかったのだがあまり気乗りがしない…

「大丈夫か…辛いならメディカルルームにいったほうがいい。」

刹那の心配そうな声を背に、フェルトは大丈夫、と一言だけいってトレーをカウンターに乗せる。

そして今はしばらく一人になったほうが自分にとっての最良の手だと部屋に残ることを惜しむ自分に言い聞かせて、フェルトはランチルームを離れていった。

「体調不良か…大丈夫だろうか。」

「鈍いネエ…ソラン、それでも君は男かい？」

「ク、クジャノ？何時の間にそこにいた？」

フェルトを見送りながら呟いた刹那の真後ろには、相変わらずの仮面を被った笑みを浮かべるクジャノの姿があった。

すんなりとトレミーのクルーに混じれたからなのか、既にクルー用バイオ制服レットカラーまでできている。

制服の色に関しては本人曰く「色がなんで選べないの？嫌がらせかなこの色は。」だそうだが中々似合っている。

「さつきからずっとランチルームにいたけど気付かなかった？」

そういいながらクジャノが指をさした方向を見ると、そこはカウンターの奥にある調理場であった。

なぜ全て機械で料理を作るトレミーにそんな物が有るかというところ、まあソレスタルビーイングに入ったクルーの趣味を考えてのことだろう。

「なぜそんな趣味の悪いことをする、それにお前はわざわざ此処へ食べにくる必要も無いだろう……。」

ものすごく嫌そうな目でクジャノを見る刹那。

「まあまあ、落ち着いて。盗み聞きしたのは悪かったけどさ、あの態度は無いと思うよあ〜。」

へらへらとしながらクジャノは刹那のトレーに乗っていたおかずを口に放り込むと、こっそり刹那に耳打ちした。

「そんなソランにアドバイス…それは…。」

刹那の鬨が始まる…

刹那奮闘記2（前書き）

約一か月ぶりの更新となります。

悪夢ともいえるテスト週間と宿題地獄、そして悪魔の解答用紙返却を終え、

やっと時間が取れるようになりました。

皆さま、大変お待たせしました。

刹那奮闘記2

作戦のことに集中してしまうあまりフェルトを怒らせてしまった刹那。

そしてその会話の一部始終を盗み聞きしていたクジャノは、いまいち状況を理解できていない刹那を助けるため行動を開始する…



「クジャノ…これはどういつつもりだ？」

刹那は目の前に広がる大小様々な宝石の数々を見ながら呆れたようにため息を着いた。

此処はクジャノのために用意された個室の一角、本来なら衣類などを入れるはずのクローゼットとなる場所は信じられない状態となっていた。

「なについて、宝石だよ。みればわかるだろう。」

当たり前だともいうようにクジヤノが肩を竦める。

「そうじゃない、この宝石をどうやって手に入れてきたんだと聞いている！」

「どうやって。そりゃあちよつと前に国軍のデータベースをハッキングしたついでに手に入れた金で買った物だけど…うわアっ？」

刹那は自慢げに答えるクジヤノにたいして思いつきり手に持っていたファイルを投げ付けた。

イノベーターとして発揮できる力を惜しむ事なく投げたそれがクジヤノの眼前に迫る。

「危ないなあ……。」

しかし、それは当たることなくファイルは壁に激突し、ぐしゃりと音を立てて虚しく壊れた。

バラバラとなったファイルの欠片があたりに飛び散っていく…

「貴様はなんて事を？これだけの大金を奪えば少なからず人々に被害が出るだろう？」

「ははは、大丈夫だよ。とってきたのは賄賂とかに使われそうなのにしたし。」

「…っ？」

クジャノが自慢げに言いながらその場にあつた宝石の一つを摘み上げた。

時価数百万もすると言われる美しい宝石が、これと比べるとなんとも寂れた部屋のライトに照らされる。

「偉い政治家やら軍上層部の連中からみればたいした損害でも無いだろうしね。」

確かにそうなのだろう…

今や連邦政府無しには争いを消す事ができない道へと進んでしまったこの世界では、残念な事ではあるがそこで高い役職につけた者達が圧倒的な力をもつ。

そしてそこにつくためにどれだけの資金が動いていることが…

それだけの資金全てを揺れる世界情勢のために使えばどれほど役に

立つだろう。

「お前の言い分はわかったが、俺は盗みに近い方法でとった物を彼女に渡す気は無い。さらに言えば物で解決しようとも思わない。」

刹那はきっぱりとそう言うと、クジャノの持っていた宝石を取り上げ元の場所に戻して部屋をでていった。

どうやらクジャノの想像していた道とはまた違った道を刹那は選ぶようである。

と言うよりおそらくはフェルトの方がそんな事をされても嬉しく思わないからであろう…

「これがライル辺りのカップルのケンカなら早いのになあ。」

きっぱりと自分の用意したものを切り捨てられたクジャノはつまらなそうにつぶやくと、先に出て行ってしまった刹那を眺めながら静かに部屋へと戻って行った。

後に、この宝石の存在がスメラギの耳に入り、それら全てを我がものにしてしようとした彼女を止めるのに一騒動起きたのは言うまでもな

い…

「さて、クジャノの案を断ったのはいいがここからどうしたものか…。」

クジャノの部屋を後にした刹那は、フェルトとの仲を戻す具体的な方法を見つけられずにいた。

そんな彼を見つけた青年が一人。

最近さらにその空気が薄くなりつつあるハルートのパイロット、アレルヤであった。

「刹那があんなに深刻そうな顔をしているって事はきつとすごい重大な事があつたんだろう、てことは今ここで僕が的確な助言をすれば一気にこの空気が変わるはず…よし？」

「やあ刹那。何かあったのかい？」

「アレルヤ……いや特に困った問題と言っわけではないのだが……。」

「もしかして、あれかい。あの関係がうまくいってないのかい？」

「？なぜそれを……。」

「いやいや、見てればわかるよ。で、一体何があったんだい？」

「いや、少しばかり俺の方が失態を犯したらしくてな。」

「刹那が？君がそんな所で失敗するなんて珍しいね。」

「そうでもないだろう。実際、俺は何度も相手側を困らせているしな。」

「相手側？…ああ、整備側の方が…。で、具体的にどうすれば迷っていたと。」

「まあそうなるな。」

「なら、イアンに頼み込んでみるのはどうかな」

そういいながらアレルヤは手に持っていたファイルを刹那に渡した。

「なんだこれは、今の話と関係あるようにはとても見えないんだが

…」

「え？どうしてかな、これハルバートクアンタのツインドライブに関するデータのコピーなんだけど」

「なぜそれと俺がフェルトと少しばかり争いをおこしたと関係あるんだ」

え？

刹那の一言とともにその場の空気が硬直した

刹那奮闘記2（後書き）

作者「どうもみなさん、エクストリーム使用でございます」

刹那「久しぶりの投稿だな」

作者「そりゃもうこの約一か月、人殺しといってもいいぐらいのすさまじさだったすから（泣）」

フェル「そうだね、五月中はほとんど止まってたし…」

刹那「正直な話、連載が二週間近く止まったあたりで、もう終わってたなこの作者、とおもったものも少なくないだろうな」

作者「そんなことはない！．．．とも言い切れんよなあ」

フェル「ま、まあ何とか再開できたしいんじゃないかな？」

刹那「ふむ、そうだな、そう言う事で良しとしておこう」

作者「えー、そんな感じで、頑張っていきたいと思うので。応援よろしくお願いします」

刹那奮闘記3

薄暗い部屋の中、一人の少女はベッドの上につずくまりながら黙って小さな画面を眺めていた。

そこに映るのはかつての仲間達と撮った最後の写真。

まだ自分も刹那もずっと小さくて一人だった。

それでも刹那は戦っていて、自分とは違う道をどんどん進んでしまった。

自分にできたのはただ前線で戦う彼らを見守ることだけ…

そんな自分を変えたのが写真にうつる栗色の髪の少女、クリスティナ・シエラ、自分にとっては実の姉の様な存在だった。

家族のぬくもりと言うものを知らなく、ブリッジでは誰よりも孤独だった自分に本当の家族のように接してくれた。

そして戦いの中で私だけでも守るために彼女は自らを犠牲に私を安全な場所へと非難させ、そして、死んだ。

「こんな時、どうすればいいのかな？ クリスならどうする？」

画面の中で明るく笑う彼女は何も答えてくれない…

955

いま生きている自分のために自らの幸せを犠牲にして死んだ人に助けを求めるのは間違っている。

頭ではそう理解しながらも、どうしても彼女に助けを求めたかった。

そんな自分の耳に、ふと懐かしい声が響く…

『どうしたのフェルト？そんな顔してちゃ刹那が困ると思うよ。』

「クリス？…」

フェルトが驚いた様に顔を上げるが、そこには誰の人影も無かった。

『ダメだよ、そんなふうに一人でいじけてちゃ。フェルトは笑ってなくちゃ。』

誰もいないはずなのに、何も見えないはずなのに、何故か懐かしい声だけが鮮明に耳に聞こえる。

「クリス…私、どうしたらいいのかな。」

フェルトは見えない相手に話しかける。

これはきっと夢なんだろう…

でもそれでもいい、幻だとしてもせつかくクリスに会えたのだから。

『大丈夫、フェルトは自分の思ったことを素直に言って、好きにやっつていいんだよ…』

クリスの温かく明るい声が聞こえる。

「でも…それがもし刹那の負担になったら！…そしたら…私は…。」
フェルトの消え入りそうな声が部屋の中に響く…

『はあ…まったく全然わかってないんだから…いい？そんな風にお互いが遠慮してたらどんなにお互い好きでも辛いんだよ。もっと相手を頼っていいの、刹那はフェルトの大切なパートナーなんですよ？』

ため息を着いたクリスが優しい声で語りかけた。

自分がこの世では手に入れられなかった幸せ、それを全て託したフェルトと同時に自分も慰める様に…

「クリス…私、もっと素直で良いのかな。」

小さく脅える声でフェルトが問いかける。

『だから大丈夫って言うてるでしょ。刹那ならちゃんと分かってくれるし、それが重荷になることなんてないんだから…』

そんな彼女にビシツと言いつ切るクリス、その言葉には彼女の優しさの全てがこめられていた。

「うん……………ありがとう、クリス。」

フェルトが静かに頷くと、目の前が少しだけ明るくなった。

懐かしいぬくもりがフェルトを優しく包み込んでいく。

クリスとともにいろんなことを語り合った時、いつも感じていたあの感触が急に帰ってきたのだ…

『もう！当然でしょ、困った妹を助けるのは姉である私だけなんだから！』

「えっ？…クリス今…」

予想もしなかったクリスの言葉に驚き聞き返すフェルト、

「だから世界でたった一人の可愛い妹を助けるのは姉である私だけ！いつも見守ってるんだから。」

その声だけ、その声だけは確かに今日の前の光から直接聞こえた声だった…

それと同時にフェルトの額が軽く指で弾かれた。

いや、正確にはそんな感触があっただけだったのだが…

今にもあの光の中からクリスが笑顔とともに出てくる気がした。

そっとすぎるようにフェルトはその光に向けて手を差し出す。

しかし、

「ごめんね、もう時間だから…またね…、フェルト…。」

そう言って光は消えてしまった。

「クリス？」

光に伸ばした手はそれを捕まえることなく虚無を握った。

「……………、クリス…。」

残されたのはただ自分一人、

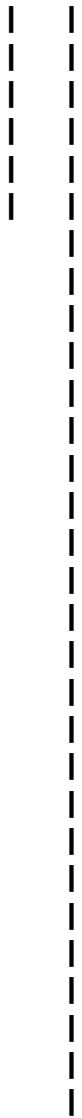
フェルトはギュッと毛布を手繰り寄せて抱きしめた。

再び部屋には静寂が訪れる。

でも自分の心はついさっきまでとは比べられないくらい温かい。

フェルトはそっと先ほどの感触が確かに残る額に触れると、小さく
呟いた。

「ありがとう…お姉ちゃん。」



次の日、

フェルトはいつもの様に朝食を食べにランチルームへと足を運ぶと、そこには見慣れた癖毛の男が一人頭を抱えてうずくまっていた。

自分の全部を預けることを決めた最愛のパートナー…

今日は刹那に散々文句を言ってやろう、そしてその分散々甘えて、いつもは刹那が先を進む道を今日は私が先に進んでやる。

だって今日は、私が始めて生まれ変わったフェルト・グレイスを見せる日だから…

きつとこれからも様々なことがあるしケンカもする、でもそんな時も絶対に乗り越えて見せる。

そばで見守ってくれている、大好きな姉を心配させないためにも、

そして、

未来を託す次の世代のためにも…

フェルトはうすぐまる刹那の元へと走り出した。

きつと刹那は驚いて慌てふためくだろう…

そんなことを考えると笑わずにはいられなかった。

珍しく小さくしぼんで見える彼の背中がすぐ目の前に迫る。

少しだけ彼女は手を握りしめた。

よし、大丈夫。

フェルトはその手で思いつきりその背中を叩いた。

「おはよう、刹那！」

ランチルームの台所、そこには二人の人影があった。

「どうやら僕が助け舟を入れる必要は無かったみたいですね。」

クジヤノは珍しく丁寧な口調で静かに呟いた。

その視線の先には楽しそうに会話をする刹那とフェルトの姿。

「いいですね、ああいうの……なんて言うか羨ましいって思ったりします。」

「と、言うことは君はあの少年達のような思い人はいないと言うことかね。ならば今宵は失恋に心痛めているこの私とともに熱い夜を

…。」

「冗談でもやめときます。それに僕にだって思い人くらいはいますよ。」

暑苦しく迫ってくるグラハムに苦笑いを浮かべながらもクジャノは少しだけさみしそうに答える。

「戦いが終われば会いにいけるのではないのかね？」

グラハムが素朴な疑問を投げかける。

会いたい人がいるなら連絡だって取れるだろうに、とグラハムは付け足す。

「そうですね、確かに全部終われば会いにいけます。でも今会いたって気持ちもあつたりするんです…。」

クジャノはそう言って首にかけているペンダントを眺めた。

あまりにも離れすぎて連絡さえ取れないくらいの距離、それがクジ

ヤノとその人の間にある壁だった。

だが、そんな事を表に出すことなくクジヤノは笑顔でグラハムの方を向いた。

「夜は遠慮しますが一杯くらいなら付き合いますよ、ちよつど酒好きの女性からいいものを分けてもらったんでね。」

「それは本当かね！では早速行こうか、哀れな盟友やその同類もつれて朝まで飲み明かそうではないか！」

グラハムが嬉しそうにクジヤノの背中を叩いてはしゃぎ出す。

こうして、

刹那の奮闘記は幕を下ろすこととなった。

少女はまた新たな一步を踏み出すことに成功し、青年や大人達は仲を深めていく。

大きな戦いの中にあつた確かな記憶の1ページ、それがいつか本当の平穩が訪れた時に大切な思い出として残ることを願いながら…

刹那奮闘記3（後書き）

感想お待ちしてます（＾－＾）／

覚醒、宇宙の深淵

木星中心部、

そこにはただ人々がある一定の域に達するまで延々と待ち続ける機体が存在する。

絶対的な力を持ちあらゆる世界を滅ぼしてきた機体。

ターンエーガンダム

その機体がいつ作られたのか知る者はいないが、それを調べていく過程で一つだけその機体について分かったことがあった。

『この機体は全ての人類に与えられし壁、試練。もし誰も超えることができないのならそこで全ての人類は終わる…』

世の中には知らないほうが良いことばかりだ。

私はこれを知ってしまった為に生きている間に得られるはずだった地位や名声などを全て捨てて肉体が死んでもなお意識をこの世にとどめていなくてはならない。

「まったく、本当に迷惑なことだ…。」

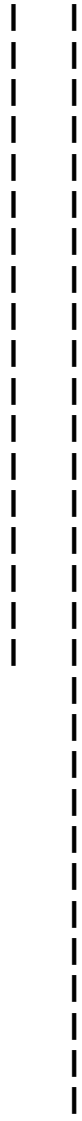
データの中で老人はつぶやく…

かつて人類史上最高の天才としてこの世を生きた彼。彼もまた、待ち続ける存在となったのだ…。

「それにしてはかなり楽しそうな顔をしているようだけどね…。」

後ろから突然かかった声に老人は振り向くことなく静かに答えた。

「O O i s m y d r e a m . もし夢が叶うとしたら誰だっ
て嬉しくなるだろう。」



「チイ、好い加減に！」

漆黒の闇の中、たった一機の真紅のガンダムは戦っていた。

眼前に広がるのは得体のしれない銀色の敵。

次々と自機に接近してきては接触を図ろうとしてくるこの敵に、ゼ
フィアス・ヴァンガード、もといミリアルドには見覚えがあった。

かつて自分のいた世界が壊される際に悪魔とともに現れた無数の敵。それは接触してはそこからコクピットまで侵食し人に取り付いていた恐ろしい敵であった。

「やはりもう目覚めは近いか…だが、だからこそここは通らねばならぬのだ？」

真紅のガンダムがムチを回し、近くにいた銀色の敵を切り裂いた。

この世界で強大な敵の存在に気付いている人々はごく少数。

そしてその中で唯一自由に動くことができるのは恐らく自分だけである。

四日前、プトレマイオスの中に感じる事ができたある人物の存在が消え、一瞬にして木星の方へと移った。

戦闘宙域から抜け出しプトレマイオスまで向かっていた彼がその異変を察知し、同時に進路を変更したのが三日前のことである。

だが、補給のできる小惑星へと向かう途中でこの銀色の敵と遭遇してしまいさらなる進路の変更を余儀なくされてしまった。

幸いなことにその時は距離があったことと相手が少なかった為逃げることができたのだが、今回はそうもいかなかった？

真紅のガンダムが次々と周りによってくる敵をバラバラに切り裂いていく。

「っ?」

突然機体が激しくゆれ、コクピットに衝撃が走る。

見ればシールドに先ほどの銀色の敵がまるで張り付くかのように付着して侵食し始めていた。

すかさずサーベルで切り落とそうとするが意外にも侵食が進むスピ

ードが早く、既に手遅れであった。

「止むを得んか……。」

ミリアルドがパネルを操作すると同時に装備されていたシールド
が取り外され爆散した。

爆炎の中から新たな敵が迫る……

「流石に一人ではキツイな……だがどうしたものか……。」

圧倒的な物量差に焦りを感じ始めたミリアルドは、目の前に迫る敵
を切り落としながら辺りを見渡し突破可能な道を探し出した。

その時、

「ゼフィアス、なぜ僕を殺そうとするの？」

突然頭に声が響いた。

それはよく知っている声、そして今自分が探している張本人のもの…

「ようやく答えたか、しかし残念だが私はゼフィアスなどではない
」！

ミリアルドはそれに答える様に怒鳴りながらレバーを引いた。

「まずは貴様達を消させてもらおうとしよう……。」

ガンダムの背中に取り付けられた白銀のGNドライブが取り外され、
そのまま大型のバスターソードに取り付けられた。

「何をする気？まさか彼らを滅ぼすつもりなの、それは間違いだよ。
そんなことでターンエーは止まらない…。」

引き金のようにになっているバスターソードの柄の部分がかかると
同時にドライブが急激に輝き出す。

「少し黙っている。貴様の言葉など聞く意味も無い？…滅びるがい

「い、この世にあつてはならないもの達よ？」

一瞬、そう、まさに一瞬の出来事であった。

ミリアルドの声が響き終わるよりも早く白銀の巨大な剣は周りにいた銀色の敵全てを飲み込んで虚空の彼方へ消え去った。

あとに残ったのはあまりの衝撃に完全に使い物にならなくなったガンダムの両腕と焦げて原型をとどめていないバスターソード…

「なんでそんな無駄なことをしたの？これはこの世界全ての人にかける試練…ゼフィアス一人の存在が変えられるほど簡単なものじゃないんだ。」

「黙れ！どの道私の勝ちだ。もう貴様が目覚める前に私がそこに着く方がどう考えても早い！」

ミリアルドは勝ちを確信したかのように返した。

目覚めにはあと一年はかかる、だが木星までには修復を入れても九ヶ月…

どちらが早いかなど明白である…

「……残念だけどそれは無いよ……。」

「何だと！」

「ゼファイアスはアレハンドロを甘く見すぎたみたいだね。彼が今何をやっているか教えてあげようか？」

その言葉が聞こえると同時に、木星中心部にあった存在が何時の間にか火星付近にまで移動していた。

「どう言うことだ？何が起きたのだ！」

事態が飲み込めないミリアルドが叫んだ。

「彼が世界に別世界の情報を与えたんだよ……これによって世界はターミネーターが起動する為の技術水準まで一気に跳ね上がった。」

「そ、そんな馬鹿な！…待てっ？待ってくれ？」

ミリアルドは必死に機体を動かそうとするが、ドライヴのエネルギーが足りないこの状況では全く動くことができなかった…

「ごめんねファイアス、でもこれが運命なんだよ。」

そして彼からの脳量子波が途絶える…

「くっ、こんな馬鹿な事が？……………くそっ……………」

また止める事はできなかった…

「おおおおおおおおおおお？」

ミリアルドの声が虚空に響いた…

覚醒、宇宙の深淵（後書き）

いよいよ最終決戦突入です。

感想お待ちしてます（＾－＾）／

表舞台の裏側で…

謎の生命体の大群と巨大なエネルギーを持つ謎の機影が火星付近にある人工衛星から捉えられてから五日の時が立ち、オペレーションTRYジエネシス軍が地球圏防衛とペインチェンジャー掃討作戦の為の配置は完全に整っていた。

それぞれの思惑が複雑に絡み合った戦いは、ついに最終局面へと突入する。

「準備はいいですね…。」

一人の男の声がそれぞれの機体のコクピットへと届いた。

コロニーのハッチの先に虚空の空が広がっている…

そしてその先には必ず自分が本当に進むべき道を自由に選ぶ事のできる世界が待っている…

一時休戦が解かれるのはあと二時間後…

リーダーであり仲間であったあの男の姿はここには無い、だが、今は目の前の戦いの為に最善の策を取るしかないのだ…

「しかしなんでこうも早く世界は動くんだろうな……。」

「違うよ、動かしたんだよ…僕らが……きっと、世界を……」

二人の少年はモニター越しに互いに目を合わせた。

そこから先は言わなくても分かる、それぐらいお互い長いことともに生きてきたのだから…

「彼女の為には…生き残らなきゃね……。」

片方の少年がふざけた様に言うと、もう片方の少年は眉をヒクつかせながら静かに答えた。

「戦闘になる前にウォーミングアップでもしたいのか？ギャレス…。」

「

「冗談だから大丈夫……ほら、もう出撃だよ……。」

そう言って慌てて通信を切った少年は、少しだけ悲しそうな声で呟いた。

「これが…最後かもしれないんだ、よね…。」

一方、通信を切られた方の少年は暗くなって何も映さなくなったモニターを眺めながら深いため息を着いていた。

「……やっぱりあいつにメールでも送つとくべきだったか……。」

一方で通信を切られた方の少年は素晴らしいながら首にかかったペンダントを握り締めるようにスーツの上から掴んだ。

戦いは常に死ぬ事を覚悟しなければならぬ……だが彼らにとってはどうだろうか。

戦いの為に育てられ、当たり前のように数世代も先の機体を与えら

れ戦ってきた彼らにとって死ぬと言う事をはっきりと掴むのは難しいのかもしれない。

けれど少しずつそれは彼らの中に生まれつつあった。

死ぬ事、それは生きているものたちとの間に絶対に超える事のできない壁を作る。

そして互いに悲しみを呼んでしまう。

今はまだこれ以上の事はわからない、だがそれすら知らない俗世間にまみれた者たちよりは死と言う事を知っているのだ…

「生きてやる…ぜつてえ全員で生き残ってやるよ……。」

無意識に出した言葉は彼らを少しずつ変えていく…

――――
「作戦開始まであと一時間……やはり彼はこないか。」

ここは元連邦政府軍宇宙航行用母艦……

そこでは二人の男がある一人の人物を待っていた。

片方はかつてロシアの荒熊の上司であり彼の生き方を最もよく知る男。

そしてもう一人はその男が最も信頼している部下でありロシアの荒熊の生き方に賛同した者。

「彼はまだ若いんです……未来を自由に選べるのだから仕方がないのかもしれない。」

そして二人が待っているのはそのロシアの荒熊の血を継いだ青年。

次第に腐敗が広まっている連邦政府軍にはロシアの荒熊に心を動かされた者たちにとっては居心地の悪い場所でしか無かった。

だからこそ今此処にいるのだが、かつては荒熊の生き方を理解しながらもそれに付き添わず己の保身の為のみ生きていた彼ら、それがなぜそんな事をしたのだろうか。

それは彼らが既に老いた存在となり始めていたからなのかもしれない。

若い時にはその選択が自分の先に広がる果てしなく長い時全てを左右してしまう…

故に自分自身の選びたい答えを理不尽にも曲げさせられてしまう事の方が多い。

逆に彼らのように先がもう見えてしまっている者のようになればなる程、若かった時に行った間違いを見つめ直すようになればなるほど、自分の正しいと思っただ方向に突き進みやすくなる。

少なくともこの二人はそうだった…

「時間だ……………」

少しだけ残念そうに呟いた男はそのまま後ろを振り向くと、その場に待機していたたった十数名程の乗員に向けて話し始めた。

「諸君、私の勝手な行動についてきてもらってくれてありがとうございます……
こう言つとベタになるかもしれんが、この場を借りて私は感謝と謝罪の言葉を送らせてもらおう。」

深々と頭を下げた男に戸惑う乗員たちだったが、直ぐに全員がその覚悟はできているとでも言つかのように笑顔を見せながら敬礼する。

「それでは、これより連邦政府宥和政策部の守備を始める……いいな、絶対に国軍の手から政府を守り切るんだぞ！」

「了解？」

「時間には間に合わなかったが、やはり此処にきて正解だったな。」

小惑星に隠されるように隠されたハッチの前にジnkクス小隊が集まっていた。

彼らはアンドレイを含む彼にに任されていた部隊の中でも特に信頼できるメンバーのみを集めた者たち。

「隊長、こんなところにまで来て一体何を…。」

「黙ってついて来てくれ、見せたいものがある。」

アンドレイが岩で硬く閉ざされたハッチをこじ開けると、中には十機程のMSが並んでいた。

「これは……ティエレン……ですか？」

一人の隊員が奥に進んでいくアンドレイの機体につきながら問い掛ける。

中には何と青色に塗装され、様々な武装を持ったティエレンが並んでいたのだ。

「ああ、だがただのティエレンじゃない。この機体たちは全部ジंकスよりも強い。」

「まさか…ティエレンはもう旧世代の機体ですよ。」

あり得ないとも言つかのように言う隊員を無視して、アンドレイはジंकスからティエレンに乗り換える。

「スペックを見れば分かる…。」

手元にあるパネルを操作しながらアンドレイはそこにいた全てのジंकスにティエレンのスペックデータを送りつけた。

「…マジですか。」

誰かが声を漏らしたあと、次々とジnkスのコクピットから出た隊員たちは、三分程で全員がティエレンに乗り換えていた。

「先に言っておくが、これはロシアの荒熊の忘れ形見だ。壊すなよ。」

アンドレイの言葉に隊員たちは静かに笑った。もう少し素直に言えば良いのに、と…

そして間もなく、全てのティエレンが虚空の空へ飛び立って行ったのだった。

決戦（前書き）

夏風邪という忌々しいものにやられてました（
今回はバトルだけ…（;

決戦

「このおおお？」

少年の声とともに振り下ろされたサーベルが銀色の敵、ELSを切り裂く。

此処は地球圏防衛ラインの最前線、ここでは既に私欲にまみれたオペレーションTRYジェネシス軍本部の実態をホンジョウ達に見せつけられた人々が離反し、ソレスタルビーイングと共に地球圏に迫るELSの大群と戦闘を行っていた。

「当たれえええ！」

大量の敵を捉えたドラグーンが一斉にビームを放ち敵を一掃していく。

しかし、それは一時のことですぐさまその後ろからそれよりも大量のELSが押し寄せてくる。

既にその数は万単位を超え億単位へと登ろうとしていた。

戦闘が始まってから三十分、今だ数が減ることのないELSとは逆に地球圏防衛ラインについている味方は次々と戦闘不能へと追い込まれていた。

「くっ、ライルさん！早くあの巨大なタイプの群れを崩さないとかこれじゃあ此方が挟み撃ちになる……。」

キラがゆっくりと迫ってくる大型ELSの群れを砲撃しながら声をあげた。

砲撃は確かに命中はしているのだが相手が大きすぎる為にほとんど意味をなさないのだ。

そしてたった今入った通信でオペレーションTRYジェネシス本部直属の部隊が此処の部隊が独断行動をしているのを察知して向かってきているのがわかった。

状況は刻一刻と考えられる最悪の場合へと向かいつつある…

「無理言うな！こつちだつて手一杯だ？」

周りに群がり始めたELSを撃ち落としながらロックオンが答える。既に大型のタイプも数体倒してはいたのだが、それでもこの防衛戦を維持するには足りなかった。

「ヤルシカナイ？ヤルシカナイ？」

「おいおい嘘だろ…無茶言っなって……。」

前方から迫ってくる数体のELSに狙いを定めて確実に撃ち落とす。放たれたビームは狂いなく先頭にいたELSを撃ち抜きさらに後ろの方の個体も巻き込んで消えた。

そんなことを確認することもなくロックオンは左右から迫る新しいELSに目標を絞って狙い撃つ、が、これは少しタイミングが遅かった為に撃ち抜かれずに迫っていたうちの幾つかがそのまま突っ込んできた。

急速にサバーニヤをその場で停止させてELSが此方に触れる瞬間を狙って残りを撃ち抜く。

しかし停止したところに再び敵の大群…

すかさず上昇してそれをかわすサバーニヤの機体を逃すまいとさらに二方向からELSの大群が迫り来る。

「まったく、キリがねえ！」

ロックオンはライフルビットを展開してそれらを殲滅すると、さらなる追撃を振り切る為にその場から一気に離れた。

今だけで結構な数を倒したと言うのに敵は一行に怯む気配が無い…

「高熱原体発見、ガンバレ！ガンバレ！」

「マジかよ…。」

ハロからかけられた声援に冷や汗を垂らしながらロックオンら目の前に迫るELSの中にガンダムらしき機体があるのを見つけていた。

その姿はキラ達が言っていた白いヒゲの機体…

そしてその機体はライフルの発射体制に入っていた。

「Eフィールドライフル起動、座標位置確定……発射？」

何が起きたのか分からなかった、ただロックオンは幾多もの戦場で味わってきた直感から咄嗟にその場から離れていた。

シールドビットを展開して守ると言う手段もあつたかもしれないが、今の彼にはそれさえも危険でそれが死に直結する事だと思わせた…

それ程に強力で凶悪……

放たれた閃光がまるで宇宙に線を引くかのように通り過ぎて行き、そこにかぶってしまったELSや味方たちはまるで元から何も無かったかのように消えていた。

数秒の沈黙、そして……

虚空の宇宙に裂け目が現れた。

「ぐおっ！機体の制御が……くっそ戻んねえ？」

ガクン、と、裂け目が現れ直後にいきなり揺れたサバーニヤのコクピットではまるでパワーダウンしたかのように推進力が通常の半分以下になっていることを知らせるアラートが鳴り響いていた。

まるで強力な重力により引きずりこまれていくかのように周りにいた物体が次々とその裂け目へと集まっていく。

「くっ、まさかライフルだけで一時的な空間崩壊を引き起こすなんて……ぐ、うあああああ！」

射線上から一番離れた地点で防衛を続けていたキラがライルたちに気を取られた瞬間、近くにいたELSにシールドを侵食され激しい頭痛が襲う。

その間にも基本性能が圧倒的に高い筈のガロードとロックオンの機体でさえ引き込まれかける強力な空間の力に逆らえない機体やELSが次々と裂け目に飲み込まれ消えていた。

その間にもガンダムは次のライフルを放とうとエネルギーをチャージし始める。

動ける機体は残されていない…

「ちっ、呼びたく無かったが仕方がねえ！刹那あ？」

ロックオンが手元のパネルを叩いて叫んだ。

その瞬間、

「うおおおおおおお！」

突然緑色の光とともに円の形をつくったビットが現れ、その円の中
央から青いガンダムが飛び出した。

白いガンダムがそちらを振り向く時間も与えずにハルバートクアン
タはその機体のライフルを蹴り飛ばす。

同時に新たに右肩に増やされた八つのビットによって裂け目に飲み
込まれそうになっていたほとんどの機体をワープさせた。

「刹那・F・セイエイ、ハルバートクアンタ。目標を駆逐する？」

先駆者…求める答え

飛び交うELSの中、二機のガンダムは向かい合っていた。

片方は全ての世界で最強のガンダム…ターンエー。

そしてもう片方はガンダムを超えた機体…ハルバートクアンタ

二機はこの宇宙に出来た裂け目を前に、決着をつけようとしている。

近くにいたELS達はそれを見守るかの様に戦闘行動をやめてただ
飛び交っていた。

勿論同じ宙域にいたロックオンやキラ達も同じく戦うことをやめて
それをみている。

「貴様……いや、お前はアーシャンなのか？」

刹那は脳量子波で問いかけた。

それは先駆者としての問いではなく一人の個人としての問い…

刹那がただ一人その可能性に気づきながらも誰にも言わずに隠していた疑問。

初めに気づいたのはクジャノと分かりあい、そのままELSと戦った後にトレミーに帰ってきた時だった。

アーシヤンの脳量子波が何故か強くなっており、そして誰かに語りかけていたのを聞いてしまったのだ…

「ターンエー…僕はもうすぐ帰るよ…」

確かに彼はそう言っていた…

だからこそ此処でその可能性を消したかった。

だが…

「そつだよ……僕はアーシヤン、アーシヤン・ヴァンガードだ。」

帰ってきたのはあまりにも残酷な現実。

やはりアーシャンはターンエーのパイロット、そして世界を滅ぼすための来訪者。

「なぜだ…なぜアーシャン、お前はそんなことを…。」

「仕方が無いんだ…僕は、いや僕とターンエーは世界をふるい落とす為に生み出された存在…だからこそ許されないんだよ、刹那兄ちゃん達と戦わずに消える事なんてできないんだ？」

アーシャンの悲痛な叫びが刹那の脳に響く…

そう、避けては通れなかった。

絶対に避けては通れなかった道、それをただ進もうとしているだけ…

「わかりあう気は無いのか…：ELSも、アーシャンも？」

「うるさい？もう話すのも許されないんだ？…：ELS…：こい

…。」

アーシャンがそう叫ぶのと同時に飛び交っていたELSの大群が一斉にターンエーの周りを取り囲う様に渦を巻き出した。

「くっ、アーシャーン！待てっ……………」

刹那のハルバートクアンタが手を伸ばすがそれが届くはずもなくELSによってターンエーは完全に包まれた。

そして他のELS達がクアンタに向かって再び攻撃を始める。

「っ？……………邪魔をするな。」

すぐさまビットを展開しそのELS達を迎撃するが、その間にもターンエーのいたはずの場所には巨大な銀の塊が出来ていた。

「チィ、このままでは……………」

「刹那！」

次第に群がる数が増え始めていた敵を大量のビームが消し飛ばした。

そこに現れたのはリジエネやティエリアなど別の宙域にいた筈の間たち

「ティエリア…何故？」

「反政府部隊が既にELSと交戦を始めた、無論政府軍も。」

「そしてペインチェンジャーも全員地球を守る方を優先し始めてる……………」

そう、広範囲から迫っていたELSは他のところからも既に地球圏防衛ラインに差し掛かっていた。

ソレスタルビーイングの意思に賛同したマネキンやグラハム達も戦闘を開始、しかしそちらでは超大型のELSが地球圏に迫っていると言っただ。

「くっ、だがどうするよ刹那……………これだどっちも救えねえ。」

ロックオンが周りにいる敵をひたすら消しながら言う。
会話をしている間にもELSは次々と増え続けていた。

シールドビットとライフルビットをフルで回し続けても対処が追いついていないのが見てわかる…

「このお！……………刹那、早く指示を？」

アレルヤのハルードが大型タイプの足止めをしながら声を上げた。
その声には焦りの色が強く見られた

絶対的な火力が上がったはずのハルード達でさえELSの数の多さは以上だったのだ。
防戦を続ければ必ず負けるのは目に見えている。

「俺はアーシャンを……いや、ターンエーと対話する……。」

刹那が静かに答えた。

「なっ、正気か刹那？そんなことをすれば数多の戦場の記憶が」だからこそやるんだ！これが俺の、先駆者としての使命だ！」……………」

テイエリアの言葉をかき消しながら刹那は強く答える。

その言葉に全員が黙り込んだ。
ターンエーとの対話、それはハルバートクアンタのオーバートランザムを使う必要が出てくる。

だがそれは同時にターンエーが滅ぼしてきた過去と向き合い、さら

に自らが傷を負わなければ成し遂げられないものなのだ。

もし失敗すれば……刹那は……

「……………け……」

「なに……。」

かけられた声が小さく聞き返す刹那……

「なら早く行け！此処で止まってんな？」

ロックオンが怒鳴ると同時に他のメンバーも頷く。

止める方法はそれしか無い、だからこそ彼を全力でサポートする。それがメンバーの出した結論だった。

「全機、展開して刹那を援護する。いくぞ？」

「……………了解？」「……………」

その言葉と同時に散開していく仲間たち。

その姿を見ながら刹那のハルバートクアンタが周りにソードビットを展開した。

「アーシャン……お前はなにを望んでいるんだ……。」

その言葉は誰にも聞き取られることなく戦場へと消えていった。

西暦2314年、一人の天才に与えられた真実から始まった全ての物語は、終局へのカウントダウンを始めた。

「ELSと謎の機体による木星圏からの襲撃から三時間……さて、戦況はどうなっているのか……」

小惑星に用意されたドッグの中、金色のパイロットスーツに身を包んだ男は静かに一人で呟くとゆっくりと目を閉じた。

脳裏に浮かんでくるのは多くの人々が謎の敵と戦い続ける様子、その中には手駒として扱っていたペインチェンジャーやかつて自分を打ち倒したソレスタルビーイング、そして自分を裏切り敵となった者達在必死でELSと戦っているのがわかる。

「ん……。これは。」

男は少しだけ声を漏らすのと同時に脳裏に浮かぶ戦場にアーシャンがいることに気づく。

世界で唯一先駆者として完全に覚醒した男、刹那・F・セイエイ。

そして脳量子波レベルが人類で最も高い数値を示した少年、アーシヤン・ヴァンガード。

「そうか、彼がジョーカーか…まあいい、もう少しで全てが上手くいく…もう少しで…」

「戦場に出ずに傍観するだけとは…皆が必死に戦っていると言うのに、気に入らないなあ…国連大使さん…」

「何！貴様は…。」

突然かかった声にアレハンドロが顔をあげると、そこには腕を組みながらアレハンドロを見つめる男が一人。

「クジャノか、どうやって此処にきた…脳量子波の警戒をかいくぐるなど。」

「そんなことはどうでもいいさ…けどあなたをここまで生かしちゃったのは僕だ、だからこそ僕が始末する。」

ナイフ持ったクジャノが言葉と共にアレハンドロに切りかかった。

その加速はここが重力ブロックであり彼がイノベーターだからこそ出来る一撃。

が、その一撃はアレハンドロが大きく後ろへ飛んだ事でかわされた。

「おかしい、常人には考えられないスピードで迫ったはず…」

クジャノはそう思いながらも振り下ろしたナイフを再びそちらに向けた。

「ふん、所詮は先駆者のなり損ね。裏切り者の分際でいい気になるな…」

そう言ってアレハンドロはクジャノがナイフを投げつけるよりも早くアルヴァデストロイのコクピットへと逃げて行った。

先ほどまで彼がいた場所に虚しい金属音を立てながらナイフがぶつかる…

「…先駆者のなり損ね？そんなこと無いさ、僕は先駆者だ。」

クジャノもそれに答えるように素早く止めてあったアルヴィアスの中に入り込んだ。

システムを立ち上げてながらも二人の会話は続いている……

「そうだ、私が欲するのは君の力では無いのだよ……そう、本物は刹那・F・セイエイのもつあの力だ……。」

「ハハハハ！………そんなわけ無いじゃん、ソランがもつのは先駆者の力の一部……彼の力が先駆者の全てじゃ無いよ。」

クジャノがバカにしたように笑いながら答えると、アルヴィアスのツインアイが赤く輝いた。

「フン、くだらん………ならばここで消えてもらおうか！私の世界に部外者はいらないのでね？」

巨大な振動と共に小惑星を崩壊させながらデストロイが姿を表した。MSの三倍以上あるその巨大な機体からは溢れんばかりの白銀の粒子が溢れている。

そしてそれに向き合うようにクジヤノのアルヴィアスが崩れた岩の破片に降り立った。

「部外者はあなたなんじゃ無いかなあ、アレハンドロ！……脳量子波の力欲しさに身体まで手を加えるなんて、バカだよねえ？」

「もういい、これ以上の話し合いは無駄だ……アルヴァデストロイも起動を終えた。」

「なら……。」

「これが最後だ！」

闇に生きた二人……

彼らの衝突が、もう一つの物語に決着をつける……

先駆者…求める答え(後書き)

感想お待ちしてます。 (^ ^)
o

挑戦、選択

「くっ、あの大型を切らなければ中には入れないか…。」

激戦の中、刹那の駆るハルバートクアンタはターンエーを守るように集まったELSの塊へと向かっていた。

既にその大きさは先ほどまでとは比べ物にならない位の大型となって刹那達のはるか前方に浮かんでいる。

頭上から迫る大型ELSを迎撃しながら刹那はそれになんとか近づけないか模索していた。

左右から迫る小型をソードビットで撃ち落とし量子によるワープでMSに擬態したELS達のビームをそのまま相手側に飛ばす。

高速旋回を続けてのソードビットの操作はELS側の脳量子波妨害によってかなりの負担となっていたが、それでも刹那は攻撃と守備の両方の手を一切緩めることなく戦っていた。

「ちっ、フルセイバーを考えるなんて……」

刹那の脳内によぎるのはフルセイバーでの戦闘による七日間以内での敵勢力の完全制圧を伝えたシュミレーション結果。

恐らく今のハルバートクアンタならその倍以上のスピードでかたをつけることが出来る。

しかし刹那が望むのは対話、

現段階で全面戦争へと突入してしまった人類とターンエーとの戦い、それを止めるにはターンエーとの対話を試みるしかない。

1014

だが、

「ぐっ、何故邪魔をする？……答える？」

何故か刹那が脳量子波でターンエーに接触を試みようとする度にE.L.S達の叫びによって全て弾かれてしまう。

「刹那！こつちもお客さんが来やがった！」

ロックオンから入った通信で外へと意識を向けた刹那の目に入ったのはジェネシス軍の部隊……

「っ？」

刹那はそれを見ると舌打ちし乍ら通信を開いた。

「ロックオン、今から俺はジェネシス側の部隊を止める。その間に一度周りにいる味方を集めてペインチェンジャーのところへ行け？」

「ハア？なにいつてんだ！そんな事すりゃ大混乱だ……っておい刹那！」

ロックオンの返事を待たずに刹那は通信を切っていた。

ペインチェンジャー、自分の読みが外れていなければ彼らは脳量子波が使えるはず。そしてテイエリアがうまく話さえ合わせてくれればおそらく協力は出来る。

ならばここでやることはただ一つ、ジェネシス側とELS側の両方

を俺一人で止める。

もう一つの不安要素であるアレハンドロはきつとクジャノが何かしらの手を打って止めているはずだ。

「戦いか……俺の力は正しく使えているのだろうか。」

そうつぶやいた刹那は、前方に

隊列を組んだジェネシス軍を睨むと再びその剣を抜くのだった…

「ターナー、システムオールグリーン……月光蝶完全作動…エフ
フィールドジェネレーター完全修復完了……ナノマシン正常作動……
…エフィールドライフル異常なし…」

その頃、ELSによって完全に外と隔離されたターンエーのコクピットには一人の青年がいた。

電子音だけが絶えず響くコクピットでその青年の手は常人では考えられない位のスピードで投影型キーボードをタイプしていく。

「流石イノベーターってところかな。こんなに脳量子波が乱れた中で僕を見分けたのだから……。」

次第に復旧が終わっていくターンエーのシステムを見ながら青年は銀色に染まった自らの右腕を眺めた。

「こんなになつてまで、僕はなにがしたいんだろう……。」「

静かなコクピットに溶けて行った声の行方は誰も知らない……

答えを探し求める者

虚空の宇宙……

アルヴィアス、そしてアルヴァデストロイ。

かつて世界を我がものにしようとした男とかつて世界を滅びで満たそうとした青年。

「はああああああ！」

アルヴィアスが両手に持った専用対艦刀であるウィングエッジとバスターソードを振り下ろす。

その大きさにもかかわらず高速で振り下ろされたそれらは容赦なくアルヴァデストロイの装甲を斬りつけた。

「驚いたものだな……、貴様のような……人間が……この世界に……ぐつ、……未練を持つとは。」

だが、アルヴァデストロイの強固な装甲を切り裂くことは出来ず少しだけ傷を付けたところでアルヴィアスは後方から迫ったビームをよけるためにその場を離れた。

その直後に放たれたビームがアルヴァデストロイに直撃する…

しかし、

「くっ、めんどくさい武装だ！」

そのビームは全てアルヴァデストロイに当たった瞬間にバラバラの方向へと反射されたのだ。

アルヴィアスが新たに追加したシールドビットを使いながらそれがかわす所へアルヴァデストロイが間髪入れずに大型ビームを連続で撃ち込んでいく。

「だが残念だな…この世界はもう私のものとなる。止める術は無い。」

「

「だから？まさかまだこの世界が自分のものになるとかってんの？

全く、バカだよねえ？」

アルヴィアスの腕からワイヤーが放たれ、それがウイングエッジに固定されると同時にまるで鎖鎌のようにそれをビームに投げつけた。

「っ、ビームコーティング…いや、ビームリフレクターかっ！」

アレハンドロはビームを弾きながらこちらへ迫るウイングエッジを見ながら、アルヴィアスの武装に対抗する手段が無いことに苛立ちを覚えていた。

アルヴァデストロイの前身であるデストロイはもともと戦争中に離れた箇所を移動することができることを生かした拠点防衛用の機体であり、強力な移動砲台などとしての運用を目的として設計されていた。

アルヴァデストロイはそれを大出力の白銀のGNドライブ複数個と擬似太陽炉による驚異的な出力と膨大なエネルギーによって防御と機動性を無理やり底上げし前線での戦闘を可能にしたものであって、武装には防衛のために必要な遠距離ビーム兵器などが主体である。

唯一の実弾兵器である大型ミサイルも離れた箇所への爆撃を目的としたものであって弾幕を張るためのものでは無い。

拠点にいる味方機やミサイル、トーチカなどがあることを前提とし

ているだけあって、ビームリフレクターをしっかりと実装した機体にはかなり苦戦をしいられるのだ。

しかし本来ならこの世界の技術水準ではビームリフレクターの前身であるビームコーティングが完成している程度の機体しか作られていないためそんな予想外のことが起きるはずもなかった、だが、その先の技術を持っていたクジヤノはそのビームリフレクターを持っていた。

「あなたは先を見る力が無い…だから僕のこの機体にもやられる…。」

「黙れ…コーナー一族の悲願、そして私の人生の全てをかけたこの計画を…邪魔はさせん？」

先ほどまでとは比べ物にならないほどのビームがアルヴィアスに降り注ぐ…

アルヴィアスはそれを急降下しながら避けるとそのまま一気にアルヴァデストロイへ近づこうとする。

「もらった…？…なっ？」

しかしそれよりも早くデストロイから大量のミサイルがばら撒かれていた。

そしてその先には拡散ビームをチャージするアルヴァデストロイの姿…

「ふっ、ミサイルもこう使えばよけれまい……やはり私の勝ちだったな。」

アルヴィアスがGNフィールドを張るよりも早くビームは放たれ、同時に全てのミサイルが爆散した。

暗い意識の中を彷徨う

最後までこの世界の裏で生きること運命づけられる。

それが名も無き一人の少年に課せられた生きるための対価

誰よりも重く、

誰よりも暗く、

誰よりも儚く、

誰よりも残酷、

そんな世界でも良かった、生きること執着のなかった自分が始め

て生きること執着することの出来たその世界は、その少年にとつての全てだった。

必死になって生きた、何のために頑張っているのかさえわからないまま必死に生き続けた。

それが全てだったから…

だが、ソランに出会い、そして彼女に出会った事でそれは変わった。

たった二人の人間と出会っただけでその少年の世界は変わったのだ…

サーシエスとともに裏の世界で生きる事を決めた日から変わらなかった一つの決意が、その二人によって新たなものへと生まれ変わった。

「俺は俺のために生きて、俺のために欲をみたして、俺のために戦争をする。」

サーシエスはよくこう言っていた。

その少年は

「生きるために殺して、いつか死ぬために生き続ける。」

けどそんな強い意思はいつも簡単にソランに崩された。

「皆が誰かのために頑張ればきつとみんな幸せだよ。」

あの日、その少年がソランたちを暗闇の中へといざなってしまった
あの日、ソランはそう思った。

そしてその後ソラン以外の人々は死に、彼の心は壊れてしまった。

その時にその少年は誓った、
「贖罪のために生きて、ソランのために動こう。」

そうしてその少年は我が身を殺して狂ったように殺し続けた、そして少年は青年に成長した。

だが、その覚悟はまた崩された…

「あなたは自分のために生きていい人だから、優しさに包まれていい人だから。」

その青年は彼女と関わる事を避けていた…

仕事だから仕方が無い、そう割り切りながらも護衛と言う仕事をしている時には彼女の事をなるべく考えないようにしていた。

心に直接語りかけてくる声、それが恐怖によるものではなく優しさや暖かさによるものだったから、闇に堕ちた自分が関わる事で彼女が消えてしまいそうに思えた…

逃げていた。

ただひたすら優しさから逃げていつしかその覚悟からも向き合えなくなっていた…

だからこそその青年は受け入れてもらう道を選べなかった。

なのに彼女はそれすらも優しさで包んでくれた。

自分の未来がそう遠く無いうちに消えてしまおうとわかっているながら…

青年は初めて泣いた、心も体ももうズタズタに引き裂かれていた…

そして裏の世界と表の世界の狭間でその青年は彼女と生きる事を決めた。

「誰も届かないこの世界で静かに世界をみていたい……。」

そんなささやかな願いはもしかしたらかなっていったのかもしれない……その青年が気づいていないだけであって。

でも今ここに彼女はいない。

なぜ？

分からない、でも今の僕では彼女を感じる事が出来ない……

まだ終わって無い…

ならいまここで死にかけている自分は何だ。

幻か？夢か？

違う、現実だ…

なら、

「こんなところで死んでる場合じゃ無いだろ！クジャノ・ミストレ
ネ？」

爆散したことで広がる熱煙…

その中でツインアイが一際輝きを増して光った。

「何？まだ生きている……なぜだ、脳量子波は消えていたはずだ！」

「まだ死ね無い、僕はまだ答えを見つけてない！この世界から答えを貰っていない？」

その中から飛び出したのはほとんど外装を取り払った状態のアルヴィアス…

その両腕には所々壊れかけたウィングエッジとバスターソードが握られていた。

「死に損ないが！消えろ。」

拡散ビームを一斉に放つアルヴァデストロイ、その光の筋を縫うように進みながらアルヴィアスは紅く輝いた。

「トランザム！」

ビームリフレクターのついたウイングエッジとバスターソードがそのビームの嵐による弾幕をかいくくりながら両腕にワイヤーで両剣を縛り付けた。

信じられないほどのスピードで飛び回るアルヴィアスはアルヴァデストロイへと弾幕の嵐の中残像を残しながら進んでいく。

尋常じゃ無い数に数回被弾し、脚部のスラスタに紫電が走り、コクピット内でもショートが起こるがそれでもアルヴィアスは進み続ける。

そして、

「ぐっ、貴様あああああ？」

完全に懐にはいられた所でアレハンドロは憎しみを込めた目でアル

ヴィアスのツインアイを睨み付けた。

「この機体さえいなければ…クジヤノ・ミストレネと言う存在さえなければ…」

「そう言うものいいだから、器量が狭いんだよ…ははっ。」

それはかつて同じように自分を裏切った男が言った言葉。

モニターに映し出されるその顔はあの時のリボンスと同じ表情をしていた。

だが少しだけ違うことといえば、彼はリボンスとは違い計画を奪うつもりは無いと言うところか。そして彼の目は優しさをもった強い瞳であること。

だがアレハンドロがそんなことに気づくわけもなく、仮にそれに気

づいたところで何かが変わるわけでも無い…

「チェックメイトだ？」

二本の剣が、アルヴァデストロイの胴体を切り裂いた。

先駆者の役目

「これで、最後だ？」

GNソードが最後のジnkクスを貫きコクピットを外したほとんどの駆動部分が爆散する。

同時にソードビットがいくつも集まり粒子ゲートを作り出した。

そしてその機体が光の輪をくぐり抜け姿を消すと、刹那のハルバートクアンタへと全てのソードビットが戻っていく。

二十三機、それだけのジnkクスを相手に刹那は不殺で全ての敵を無効化し粒子ゲートのワープによって安全圏へと飛ばしていた。

迫り来るELSの大群も次々と斬り伏せていき大型のELSから飛ばされる無数の砲撃を粒子ゲートによってそのまま無に返していく。

その姿はまさに圧倒的強者…

クアンタの時には不可能であった戦闘時における粒子ゲートによるワープを実現したハルバートクアンタは、現存する兵器の中では最も最高のスペックを持っていると言っても過言では無い。

だが、それは搭乗者が先駆者である事と強い脳量子波干渉に耐えられる力が必要であった。

だからこそイオリアはその力に耐えられる人間が現れるまでの準備期間を作るため、GNドライブ、ツインドライブ、そしてこの新たなツインドライブシステムと言う手順で事を進めたのだ。

結果、刹那は最高の状態でハルバートクアンタを扱えている。いや、予想以上と言っても過言では無いのかもしれない。

異常なまでの数となったソードビットは全て合わせて二十五個。それら全てが刹那によって直接動かされている。

同時に作り出せる粒子ゲートは四つ、さらにはそれぞれを最長距離までワープさせれば外宇宙や出力によっては時間移動と世界間移

動さえ可能にしている。

それがハルバートクアンタ…

「やっぱり、やっぱり見過ごせない……。」「

突然刹那の脳内に声がひびいた。

「アーシャンか、アーシャンなんだな？」

その人物は刹那の問いかけに言葉では答えず、攻撃と言う形で刹那に返した。

ELSの塊の中から突如として放たれる光、それはまるで卵の殻を突き破り新たに生まれる存在を表すようであった。

「ぐっ、やめる。俺は戦うつつもりは無い！」

刹那の言葉が届くよりも早くターンエーは姿を表した。

その姿は先ほど見た時とは違いツインアイは赤く輝き、装甲の周りには紫色の薄い粒子のようなものが飛んでいる。

ターンエーの本来の姿、

世界をたった一機で滅ぼす事のできる最凶の状態。

「ここは人の意思が多すぎる……少し減らそう。」

ターンエーのパイロットがそう言うや否やターンエーはエフィール
ドライブルを取り出し引き金を引いた。

「消える……」

チャージがなかった分空間を引き裂くほどの威力はなかったにしろ、それでもトランザムライザーを凌駕する程強力なビームは躊躇なく近くにいたELSたちを消し飛ばしロックオンたちが向かった方へと伸びていく。

「させるかあ！」

刹那はすぐさまソードビットを展開し、四重の粒子ゲートを作り出してその莫大なエネルギーを全て関係の無い無害な方向へと転送する。

が、

膨大なエネルギーをもつエフィールドライフルを簡単に転送できる筈もなく、粒子ゲートに当たったビームはまるで粒子ゲートを砕かんとする力で粒子ゲートを押し始めた。

「っ、抑え切れないか……。」

刹那は頭にかかる強い負担を歯を食い縛り耐えながらそのビームの射線上に入る。

そして間もなく少しずつガタの来たソードビットをエフィールドライフルのビームはものすごい勢いで弾き飛ばした。

ビームは少しだけ力を弱めたが以前止まる事なく、射線上にいる刹那のハルバートクアンタに迫る。

「耐えてくれ、クアンタ。」

刹那のその言葉とともにハルバートクアンタの胸部ユニットと肩部ユニットが開き、二機のGNドライブが姿を表した。

粒子放出制御を失ったドライブが暴走を始め異常なまでの粒子がハルバートクアンタの目の前に広がった。

その粒子圧縮率は実にGNフィールドの数十倍の数値を示し、ツインドライヴの力が無ければ人体に当たった瞬間まず間違いなく死亡する量である。

それがフィールドライフルとぶつかると、まるで核が爆発したかのような光にあたりが包まれた。

その光に全ての宙域にいた人間が、いや人間だけでなくELSまでもが戦闘をやめその光に意識を向ける。

沈黙……

だが、その沈黙は光が消えるとともに破られ戦闘は再開された。

その光の中心部にいた全てのELSが消滅し、刹那の駆るハルバートクアンタとターンエーの存在がこの場から消えている事に気付かず……

「つつ……、無理しすぎたなあ。」

先ほどの光に気付かなかった唯一の男、クジャノ・ミストレネは一人コクピットの中で傷の手当をしていた。

メインカメラの類は全滅、生身の有視界領域における味方機が存在なし、救難シグナルを送るための装置も壊れもちろんスラスターや駆動関係に関する部位もほぼ壊滅状態。

八方塞がりである。

決死の覚悟でアルヴァデストロイを倒す事が出来たのはよかったものの、自分がこれではほぼ引き分けのようなものであった。

最後にアルヴァデストロイを切り裂いたまではよかった。だが、その後制御を失った大量のGNドライヴが暴走し、莫大な粒子量をアルヴァデストロイは放出し切れずにエネルギーの飽和状態を引き起こしてしまい大爆発。

もともとひどい状態だったアルヴィアスに乗っていたクジヤノは咄嗟の判断で残りのGN粒子を全て使い切りGNフィールドを形成、そしてウィングエッジとバスターソードを前面にだして防御姿勢をとった。

そしてこの結果。

もし判断が遅れていたらなどと考えると流石のクジャノでも冷や汗が背を伝った。

この時ばかりは先駆者の異常なまでに高い能力に感謝するしかないだろう。

「ま、生きてるからアレハンドロには勝ったって事でいいよね…。」

そついいながらクジャノはコクピットで起きたショートや爆発によって出来た傷や火傷を手馴れた様子で治療していく。

不幸中の幸いかコクピット内にあった携帯食料や水や酸素、そして医療セットが揃っていたので暫くはこの宙域で漂っている事もできるが、クジャノにはまだやらなければならない事があった。

ターンエーという圧倒的な存在と対峙するソランには今のELSを抑える程の余裕は無い、だからこそもう一人の先駆者である自分はこの戦いでやる事がある。

最後の先駆者であるグラハム・エーカーも恐らくそれに気付いている。
そしてこの混沌と化した戦場で三人の先駆者は己の指名を果たさなければならぬ。

早い話がここで大人しく寝ているわけにはいかないのだ。

人類

E L S

ターンエー

この三者が自分の事を理解し、そしてさらには互いの事を理解しなければこの戦いは終わらない。

人やE L Sなど他のものたちにとってはこれが最後の戦い。

だが自分たちにとってはここまでの戦闘は全て前座、

先駆者にとってのラストミッションは、ここから始まる……

先駆者の役目（後書き）

感想お待ちしてます）、、（ノ

戦いの理由、そして武の境地

「……」

目を開けるとそこに広がっていたのは白…

なぜが乗っていた筈のハルバートクアンタのコクピットではなくパイロットスーツを身につけた状態でこの場にいた。

なぜ浮いているのかさえ解らない異様な浮遊感、

白に終わりはなく自分という存在がここにある事の方が異常に思えた

「そう、異常だよ。君という存在がここにいるのは…」

振り向いた先にいたのは一人の青年。

肩までかかった赤い髪に透き通った青い瞳、そして首からしたの全身を包む白を基調とした見た事も無いようなパイロットスーツ。

それは確かにアーシャンの脳量子波を纏った人間。

だが、刹那の知るアーシャンとは身長も声の高さも違った。

あきらかに別人…

ただ脳量子波は全く同じ…

「不思議に思うだろ？なんせ全く同じ脳量子波パターンで明らかにな別人が目の前にいるんだから……。」

まるで思考を読み取ったように青年は答えた。

「本当はこの目で見るまで信じられなかったけど、本当に先駆者って脳量子波パターンとかの見分けが完璧につくんだね。」

少だけ小馬鹿にしたような態度を取りながら目の前にいる青年は
刹那の方へと近づいて来る。

「貴様は何者だ。」

すぐ目の前、殺してしまおうと思えばすぐにも手が出せるような
目と鼻の先まで迫られても刹那は特に身構える事なく静かに問いか
けた。

「アーシャン・ヴァンガード。」

青年は迷うそぶりもなく当たり前のように答えた。

だが、

「違う、貴様はアーシャンでは無い……」

刹那の瞳が黄金に輝くと共にその背後にハルバートクアンタが姿を現す。

そしてハルバートクアンタはまるで刹那の感情の変化を表すかのよう
にGNフェザーを一瞬にして広げた。

その様子は圧景、

先が見えない筈の白はすでに虹色を交えた緑の粒子に埋め尽くされている。

「…正解だよ……。」

それを見た青年は何かを諦めたかの様に先ほどまで張っていた警戒の糸を緩め、静かに話し始めた。

「僕はアーシャン・ヴァンガードと同じ存在であり、君の知るアー
シャン・ヴァンガードでは無い。」

そう言った青年が右手を何も無い場所にかざすと、何もなかった筈の場所に光が現れそして一つの星の形となった。

青く光るその星はまさに、

「地球……並行世界か……」

何かを理解したかのように刹那が呟いた。

「そう、僕は並行世界におけるアーシャン・ヴァンガード……そしてターンエーのパイロットだ。」

青年は手のひらに浮かぶ地球を見ながら話し続ける

「僕は別の並行世界から世界間を超えて来た。本来なら世界間を越えて行くのはターンエーのみで、それぞれの並行世界におけるターンエーのパイロットはその世界にいる僕と同じ立ち位置の人間になる。けど僕は完全なるイレギュラーだった。機体だけ越える筈だった並行世界の壁を僕は越えてしまったんだ。」

手のひらにのる地球に映されるのは月光蝶を発動させ地球を滅ぼすターンエー……

それはかつて刹那がキラやガロードの記憶を覗いた時と同じ様子だった。

「そして僕らが自由に生きる事さえ許されない存在である事に気づいた。僕は気に入らなかった……ターンエーを誰が作り上げたかはわからない、けどそいつらは並行世界の僕をただのコマとしか見ていない。わかるかい？」

ぐしゃり、とでも音を立てるかの様に青年は手のひらの地球を握りつぶした。

「名も知られない誰かの計画のために、僕は戦う宿命を押し付けられた……僕は認めない……この計画を作った人間を……この運命を定めた自分勝手な奴を……」

「だから僕は存在し続ける！この世界の自分だって巻き込んだって構わない、僕は抗い続けてやる？」

青年の声が壁さえ見当たらないこの空間に響き渡った……

「そうだったのか…。」

全てを知った刹那は静かに青年を見つめた。

完全なるイレギュラーの青年、

そして、並行世界における自分の扱いの酷さ…

使い捨てられる運命に抗うために戦い続ける。

多分この世界のほとんどの人間がこの話を聞いたら同情する…

そしてそれに助力しようとするだろう…

だが、

「俺はお前の話を聞いてなんの抵抗もせずに世界を渡すほど甘い人間じゃない……。」「

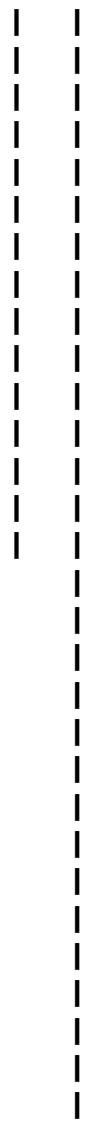
その瞬間、先ほどまでの空間とはまた違った場所に刹那と青年は飛

んだ。

互いに戦う理由は知った…

ならば後は互いの目的を果たすだけである。

二機のMSがぶつかった…



「全く、これほど多くの兵器がありながら、誰一人として覚悟を持った人間がいないとは……。」

グラハムは嘆いていた。

ここは戦場、己の命をかけて戦う場所だというのに自分の目の前に立ちただかる敵はまるでゲームの延長線上のような考え方で戦っている者ばかりだった。

「先駆者の力が、手に入れたはいいがこれはこれで不便なものだな。」

やまない集中砲火をくぐり抜けグイグイと大量にいる敵の中から一個小隊に狙いをつけて近づいていく。

「あ、当たらん？」

目前まで近づかれたジnkスのパイロットが慌ててビームサーベルを引き抜く。

しかしそれは遅すぎた。

グラハムは眼前に迫ったビームサーベルをまるで何事もなかったかの様にかわしてそのあいた懐にGNソードJを突き刺した…

ドライブを貫かれ爆散する機体を見ることがもなく左側にいた三機の敵を撃ち抜く。

そしてすぐさま反転してGNインナーブレード、もといクナイを投げつけた。

「は、速すぎるっ?」

圧倒的な速さと絶対的な攻撃力を前に次々と戦力を削がれて行くジエネシス軍。

グラハムのブレイヴの動きは、極限まで人間の動きに近づけられている。故に武の道を進んだグラハムにとって今ブレイヴはまるで手足の様に動かすことができた。

グラハムの眼前に映るのはひたすら切り伏せられた多くの敵…

その光景に敵の攻撃の手が少しだけ止まる…

今までグラハムがここで撃墜した機体は三十五機のジンクス。

それだけの敵を倒したにもかかわらず未だブレイヴの周辺には五十機近い敵がいるだけで味方は一人もいない。

言うなれば絶体絶命…

だがそれは見方を変えればグラハムは一騎当千の力を出せることを革新しての行動であることがわかる。

「まだ来ると言うのか……。」

E.L.S.がここに進行してくるまでにはまだ時間がある、ならここで一度試して見るのもいいかも知れない…

ブレイヴの両腰のドライブが動き、二つ別々だったものが一つになった。

二つが直列になったドライブは少しずつ粒子放出量が上がって行き、やがてグラハムのブレイヴを中心に球体のように纏まった。

「さて、人類を守るために戦う人間と私欲のために動く人間…どちらが上かためさせてもらおう?」

グラハムに目覚めた先駆者としての力、それは量子空間における戦闘において最も効果を発揮するものだった。

先駆者として目覚める能力として、量子空間における意思疎通の八ブとなれることや身体能力の驚異的な向上がある。

刹那は人と人との分かり合いを望む気持ちが生層意識にあつたため、分かり合うために必要な力が開花しイオリアの計画を体現する存在となった。

クジャノもまた同じ、別の意味でわかりあつたための力を手に入れ世界を見るものとして世界を渡り歩いてきた。

二人の力とその意識の関係からもわかる様に、先駆者には生層意識が深く関わってくる。

そしてグラハムの生層意識に眠っているのは…

戦

これだけみればただの戦闘狂にしか思えないかも知れないが、それとはまた違う。

純粋な戦いを求めその先へと進む為にその場に必要人間を選びだす為の力……

人類を革新させていく者としては最も辛いであろう人を選別する者としての力をグラハムは手に入れていた。

「GNドライブ……良好……。」

球体のようになった粒子が少しずつ広がり、半径30m程度になったところでその拡張を止めた。

周りにいた敵は何が起きたのかわからない様子だったが、誰かが引き金を引くと同時に再び砲撃が開始される。

だが、それは全て高濃度の粒子によって弾かれていた。

「今こそ見せよう、我が盟友と戦友の作りし武の境地を？」

「トランザムバースト？」

GNJ-001 プレイヴ(前書き)

作品の誤字脱字等があったら
報告もらえるとありがたいです。

なんか新しく短編を書き出しているなんて馬鹿な夢があったりする。
まだもう一個の作品の方もちゃんとした形になってないのに(T

^ T)

「トランザムバースト？」

グラハムの声と共に球体だった粒子は一斉に広がった。

その爆発的な粒子の拡散に五十機以上のジンクスはよける間もなく包まれていく。

他のどの赤よりも濃く、限りなく黒に近いそれが全ての敵を巻き込みながら広がっていた。

「何だこれは？ええい、全機聞こえるか？」

隊長機に乗っていた指揮官が通信を開こうとするが、それは全て高濃度の粒子に妨害されザーザーと壊れたような電子音がなるばかり、通信をするどころか粒子のせいで光通信さえままならない状況である。

そして全ての機体を包み込んでもなおとどまることを知らない粒子が洪水のように広がり奥に構えていた敵艦隊までも飲み込む。

まさにGN粒子の大氾濫…

宇宙の一点に赤黒く輝いたその中心にはまるで鬼の様な覇気を纏ったかのようなブレイヴ…

この姿こそがグラハムの追い求めた武の境地。

「これが……私の求める理想……」

グラハムはその境地に至ったことに深い感動を覚えていた…

GNJ-001 ブレイヴ

グラハムの友であるビリー・カタギリによって擬似太陽炉をオリジナルに限りなく近づけ理論上はツインドライブシステムまで可能にした試作品のドライブと、クジャノがグラハムを先駆者である可能性を示唆したことから刹那が必要になるであろうともたらした第三のドライブとそれによる先駆者の為のツインドライブシステムを合わせることによって完成した新たなブレイヴ。本来ならジェネシス軍の最新鋭機であり今後の為に重要なデータを取るためのテスト機であったこの機体がこの様な改造を施すことなどできる筈もなかったが、グラハムが軍を抜けたことによりテスト機としての役目が事実上消滅、さらに本来の性能では先駆者となったグラハムの高速操作に耐えることができなかったため最終決戦に間に合わない可能性を持ちながらもビリーが改造に乗り切った。

爆発的な加速力と敵対する可能性のあったペインチェンジャー側の機体を相手にすることが想定されており、GNフィールドを突破するための実体剣による武装を数多く保有しつつも、そのほとんどを隠し武装として内装してあるためかなり細身なスタイルであるのが特徴。

グラハムの高度な操縦技術を120%発揮させることを目標としており、完全な完成には至っていないが現在数百パターンにもなる武術の動きをトレース済みで全距離における単機での活躍が期待でき

るビリーの最高傑作となった。
因みにグラハム専用機として作ってあるためコストや対G性能の低下を度外視した機体で標準装備のライフルなども左手で扱うことをメインに設計されている。

「作戦本部に詳細が無いだど？おのれグラハム・エーカーめ……
しかも別働隊まで狙おうとは。」

一方、そのわけの分からない粒子拡散に巻き込まれた敵艦隊は、連絡すらすることができない状況に絶望していた。

先ほどまでの圧倒的な戦闘力に加え今までみたことも無い力に自分たちは完全に掌握されている。

それだけで絶対的な気持ちになるのは彼らの意思がゆるぎやすく脆いものだったからなのかもしれない…

さらに粒子が拡散していく中で大量の粒子によりバグがおきた迷彩皮膜が破られ、伏兵と共にここを突破しようとしていた敵が全て見つかっていた。

これは全くの偶然ではあったのだが、どのみち目の前の状況が分からない彼らにとっては不安を増加させる情報にしかならない。

だがそれはグラハムの求める戦場では不要なもの…

グラハムはそれらの情報を全て脳量子波で感知すると、ゆっくりと黄金に輝いた瞳を見開いた。

「覚悟の無い人間に、この場で戦う資格は無い？」

グラハムの中に眠る戦の全てが量子空間を通じてこの場にいた全ての人間に届く。

刹那、

全ての人間は絶句した…

全ての人間が自分の背に冷や汗が垂れていくのを感じながら急にその喉もとに手を当てた…

自分の喉元に刃物が押し当てられているような感覚。

そう、刃物がここにあつて自分に向けられている筈が無いのを理解していながらも確認せずにはいられない……

そして喉元には何も当てられていないのをようやく理解した者たちから次は背から銃口を押し当てられている感覚に襲われる。

次は刀、その次はワイヤー、その次はサーベル…

止まることなく続く死を押し当てられる感覚…

しばらく続いた沈黙の後

「う、うああああああ？」

「やめろ！やめてくれえ？」

「何だ…ま、待てよ……嫌だ……あ、あああ！」

「し、死ぬのか…おれ…は、死ぬのか？」

量子空間を通じて粒子に包まれた全ての範囲に多くの人々の誰のものかも分からぬ絶叫や震え声が響き渡った。

次の瞬間には自分が殺されるのではないかという恐怖と緊張感が次々とパイロットや敵艦の乗員たちの心を折っていく。

自身の周りにまわりつくのはただ純粹に殺そうとする殺気、殺気、
殺気、殺気、殺気、殺気、殺気、殺気、殺気、殺気、殺気、殺気、
殺気、殺気、殺気、殺気、殺気、殺気、殺気、殺気、殺気、殺気、
殺気、殺気…

そしてそれによって呼び起こされる果てしない恐怖とストレスの連続…

それらがまるで出口の無い迷路でひたすら暴れまわり中をぐるぐると周り続ける様に彼らからMSを動かすと言う思考どころかまともに動くと言う思考さえ砕いていく。

「やめてくれ…俺はまだ…イヤだああ？」

「うがああああ？」

大絶叫が響き渡るなか、これを引き起こしたグラムはその全ての人間の感情から表情までを一つも取りこぼすことなく感じ取っていた。

その様子はまさに地獄絵図、

彼の中に眠る戦が体現させるのは死と隣り合わせであり、また互いに本気で殺そうとする為に起きる強く冷たい殺気に襲われ続ける戦場。

その中に放り込まれた生半可な覚悟で戦いの続けたジェネシス軍の兵たちにそれを耐えることなどできない。

そしてそれら全ての感情と殺気がグラハムのたった一つの脳へと圧縮して詰め込まれていく。

常人にはけして耐えることのできないそれをグラハムは正面から逃げることなく受け入れていた…

「これが革新へといざなう者の覚悟……これが武の境地の力…」

グラハムは静かにつぶやいた…

もうここには彼の求める存在も彼の敵も残っていない、

数分後、何時の間にか量子空間は解かれ、その場には未だ何かに怯えるようにMSを動かすことすら忘れているジェネシス軍の人間たちとそれを横目に仲間の元へ飛び去っていくブレイヴのドライヴから放たれる粒子の光だけが残っていた。

GNJ-001 プレイヴ（後書き）

GNJのJはジャパニーズのJだじえい（^O^）

相変わらず無茶苦茶なMSを作る事に懲りない

作者の愚行によって生み出されてしまったプレイヴ。

さて、どうでしょうか…

感想お待ちしてますo(^ ^)o

三人の挑戦、対峙する二人

「「ヴアアアアアアアアアアアア？」」

無数のELSとジェネシス側の敵を容赦なく殺していく二機のMS。

その白銀の機体を駆る二人のパイロットの声にもならない怒声が宇宙に響き渡る。

ミルティアとベルディオ、普段の二人からは考えられないくらいのですさまじい殺気。

その声は憎しみに近かった…

近づかれた敵には容赦なくビームガトリングで蜂の巣にしサーベルで切り裂き、離れた敵には互いの武装で互いを撃つことになるかも知れないと言うのに構わず最大出力でけし飛ばしていく。

のこりの残弾数や粒子量を考えることなく確実に消していく。

上へ下へ右へ左へ、縦横無尽に高速移動を繰り返しながらカメラでは追いつくことの出来ないほどの機動で敵を攪乱し、動くことに躊躇したMSや迂闊に近づこうとしたELSからどんと落ちていく。

戦いではなく虐殺、

いつもならメインカメラを潰したりなどと細かいことをして殺すことなるべく避けていたが今はそんなものとはまるで別人の様な闘い方。

例えるなら血に飢えて飢えて仕方が無い獣が抵抗することさえ出来ない小型動物たちを見境なく殺していく…そんな様子だった。

リーダーであり自分たちを救うために戦ってくれた一人の男はもう目の前にはいない。

共に肩を並べて戦うことも出来ない。

そう、今の彼らにとっての家族であり自分たちの制御役であったゼフィアス・ヴァンガードはもうここにはいないのだ。

それは即ち二人から理性を奪うことに等しかった。

戦いを始まるまでは自分の理性が勝っていた、だから落ち着いていられたし作戦などもしっかりと頭に入れていた。

だが、いざ戦場に出て敵を見た瞬間からその最後の制御は碎け、目の前に映る敵を容赦なく倒す事でもうまともに戦っている意味を考えられなくなっていた。

絶対にアーシヤンを含めた残りの四人には見せることは無いと思っていたこの姿を彼らに見せてしまった…

それだけでゼフィアスがここまで一人で背負ってきたものや積み上げてきたもの全てを無に返してしまうとわかりながらももう止めることは出来ない。

ベルディオは持っているミサイル全てを迫り来る敵にぶつけていく。ELSに吸収させるなんてことは許さず目標に触れる直前に爆発するように予め設定し、敵のパイロットへの殺傷能力を高めるためにミサイルには限界まで粒子が詰められており自身さえ危険な状況に晒している。

ミルティアもほぼ全ての攻撃用武装を展開し普段なら絶対に使わな
いフアングまで展開して全てコクピット狙いで照準を合わせ貫いて
いく。

時折敵に開けた風穴から赤色血が見えるが飛び散っているが彼女は
何も思わなかった。

それでも構わなかったのだ、ただ目の前にいる奴らを潰せるなら…



もはや止まることを知らない二人を見ながら三人の少年たちはこちらに迫る敵を迎撃リサイアの自爆シークエンスを聞いていた。

とは言っても前衛の二人が殆どの敵を誘き寄せて潰しているのはそれほど多く無い。

だが、彼らは最終手段であるリサイアの自爆装置を発動させた。

なぜか、

それは今目の前で起きていることが原因である。

二人が戦場であんなに暴れたことがあっただろうか…

差し向けられる感情はひたすら憎悪憎悪憎悪。
脳量子波での会話を試みるもそれはELSの叫びと彼らの荒れ狂った感情で妨害されてろくに言葉を届けられない。

それだけで今が異常事態であることはわかっていた。

過去にこんなことはなかったしそもそもゼフィアスがいない時点でペインチェンジャーがいつも通りのペインチェンジャーでいらなくなるなどわかり切っていたのだ。

だからこそこれは三人の決断である。

敵部隊の中へとリサイアを送りその自爆と共にベルディオとミルティアを回収、残ったライターを全て使い切り自爆までさせ現宙域の離脱をする。

これが彼らのとった策だった。

自分たちから喧嘩を売った世界に勝てなくて仲間を失いかけた拳句敗走する。

恐らく戦いとしてはこの上ない位に屈辱的な敗北だろう。

もうここまで混沌と化した戦場をたかが三人で切り抜けられると思っただけは愚か者でもないし、今まさに目の前で戦っている二人

を見捨てて逃げれるほど死んだ人間でも無い。

ゼフィアスの貫き通したかった意思が三人に伝わってしまったことはどうやら彼らにとっていい意味で強い刺激だった様だった。

「さて、いつちよデカイのかましてやるか……」

「……うん、ここが正念場だ……」

「そうね、まだアーシャンもゼフィアスも探さなきゃいけないんだし。」

三人が最初のライターを起動させてリサイアを脱出する。

「……ミッションスタート（だ）？」

「ちっ、ここまで数が増えてるとは……さすがに予想外かな……」

迫るELSの追つてを振り切りながらクジャノは静かにしたうちした。

この機体では戦闘を行えない……

それだけのハンデが今のクジャノにはある。

すでにボロボロの機体はただひたすら速くするために機動力へ殆どの粒子を割っていた。

ゆえに敵への対抗手段といえば頭部のGNバルカンと左手に奇跡的に残っていた内蔵しきビームサーベル……

全く持って心とも無いものである。

ここは戦闘宙域からそれなりに離れた場所、そこでクジャノはある一人の人物を探していた…

「ペインチェンジャーリーダー、量子ワープの世界間移動によって確保されたサンプルNo.13、コードネーム、ゼフィアス・ヴァンガード…世界間移動前の生体データから第八並行世界におけるミリアルド・ピースクラフトと断定…数日前の戦闘データの解析からこの辺りで漂流する可能性の最もあるポイントを算出………やつぱりこの辺か…」

クジャノは常人には考えられない様なスピードで計算とタイプをこなして目的の人物がいるであろう場所を必至で探していた。

なぜなら戦闘データから得られたデータなどから考えてもそろそろ漂流先にある救難ポッドにたどり着いている可能性が高かったからである。

救難ポッドは通常、事故の事を考えて数ヶ月に渡って生活できる様になっている。

しかし、さすがにバラバラの宙域に数千個と広がる救難ポッドを毎日一分一秒逃さず監視を続けるのは無謀である、さらにいえばGN粒子が世界で使われる様になった今では通信さえ難しくなっている。

ならばどうするか、

誰でもいいから発見さえしてもらえれば生存の確率は一気に上がる。そんな人々が考えたのは遭難者利用時における超遠距離用ライトを照らし続ける事だった。

だがそれは今の状況ではえらく不便なものだった。

いくら人類存亡をかけた戦いとはいえ国軍直下の企業では無い海賊のような存在は活動を止めない。

と言う事は国軍が動いていない分そう言う輩が活発に動いているため居場所を探知されやすいと言う事だ…

「仕方ないな… ちょっと頭に響くけど使うか…」

ELSのせいでもくろくに探索が進まないクジャノは取り敢えず周りにいた全てのELSから逃げ、ゆっくりと瞳を閉じると静かに脳量子波を張り巡らせた。

対象はこの宙域に広がる四十三個の救難ポッド…

ELSたちは脳量子波に反応はするが、今は多分戦闘宙域のほうが激しく脳量子波が飛んでる分発見される確率は極めて低い。

クジャノは一つ一つの救難ポッドに脳量子波の干渉が無いかを調べていく…

そして、

「見つけた…」

ピクリとクジャノは眉を動かすと、そのまま脳量子波の使用をやめて目を開く。

視線の先は様々な衛星の残骸がデブリとなったエリア…

「案外近くにあっただ…。」

ゆっくりとそれに近づいていく。

そこには超遠距離用ライトが壊れかけの機体によって隠された救難ポッドがあった。

どうやらまだほかの人間には見つかっていなかった様だ…

向こうに気づかれない様にクジャノはアルヴィアスを停止させると、そのままその救難ポッドの入り口へと降り立つ。

静かに腰の銃を構えて入り口のロックを外す…

「だれだ？」

ピーツと言う電子音がなるのと同時にその入り口が開かれ、中からは拳銃を構えたクジャノの探していた男、ゼフィアス、が現れた。

「やあ、探したよ…ゼフィアス・ヴァンガード…」

三人の挑戦、対峙する二人（後書き）

いや救難ポッドってダブルオーの世界に存在するんかな…
大丈夫なのかなあ…

コメントいただけると助かります。

あと感想もお待ちしてますm（）（）m

結 束

異常なほど粒子が圧縮されたりライターのビームが放たれミルティアたちより後方に居たジェネシスの部隊と大量のELSをなぎ払った。

「「……？」」

続いて起きたのはそれによって消え去った敵たちの爆発が重なって起きた閃光。

それに気付いたミルティアとベルディオは一瞬何が起きたのかとリサイアの方へと視線を向ける。

そこには我を見失う前にせめて巻き込むまいと待機を指示して置いた筈の三機の仲間…

「なぜここに？待機を指示した筈」「うるさい？」「…だ…」

いつもなら絶対に見せない様な表情で怒鳴ったベルディオの言葉を遮る様にタークスが叫んだ。

そして何かを言い返す前にベルディオの機体の前にギャレスがその機体の手を引く。

「…ここは離脱するから…だから、早く？」

しかしベルディオはそれを振りほどき二人から距離をとった。

「何をバカなことを言っている…そんな事をして死ぬつもりですか？…それではゼフィアスの努力は…」「今二人がやるうとしてることもの方がよっぽどバカじゃねえか？」「っ？」

「考えてみるよ！ゼファイアスはこんな事を俺らにさせるために戦ったんじゃないだろ……俺らが今やらなきゃいけないのは生きてゼファイアスとアーシヤンを助ける事だろっが？」

「そんな事……くっ、それは……。」

ベルディオはようやく落ち着き始め、壊れていた理性を取り戻し始めていた。

確かに今自分たちがやっているのはペインチェンジャーの目的を完全に無視したただの虐殺にすぎない……

では自分たちは何を掲げて戦えばいい？

自分たちが何よりも求めたのは居場所、世界から受けた痛みを世界に返して自分たちのような存在が認められていく世界を作ること……

だがそれは結局あのアレハンドロ・コーナーの策略の上で踊っていたにすぎない。

それなのに自分たちの中で一番それに悩まされ苦しめられたゼファイアスはそれでもなおそのプライドとペインチェンジャーの本質を通し続けていた。

自分たちは何をやっていったのか……

「私たちはまだ生きてる、だから何がなんでもあがいてここを生き延びる？」

シルビアの言葉が頭に響く、

「僕らは……絶対に……ゼフィアスとアーシャンを助ける？」

ギャレスの言葉が頭に響く、

「そして俺らは全員で帰るんだ！俺らの場所へ？」

タークスという言葉が頭に響く、

「帰る……場所？」

すっかりと弱りきってしまったミルティアのほそぼそとした声が聞き返した。

「ああ…家族がいる場所、それが俺らの帰る場所になるんなら俺らは誰一人かけちゃいけない？」

「僕らは…大切な家族だ？」

そうか…

ようやく理解した気がする、なぜこんなにも成長していた彼らをおいたまま自分たち三人だけでいるいろんな事やってきたか…

この答えを聞いた時、彼らが何処かへ飛び立って行ってしまっ気がして怖かったのか…

馬鹿だった…

彼らは、家族と言っているのはいつもつながっていると言っている…

対峙する力、コワスモノマモルモノ（前書き）

かつてにお休みしてしまいましたm（| |）m

ちよつと新学期にテストがありましたそのせいです。
またいつものペースに戻します。

対峙する力、コワスモノマモルモノ

「やあ、探したよ、ゼファイアス・ヴァンガード」

入り口にたったクジャノは静かに呼びかけた。

その先にいるのはゼファイアス・ヴァンガード、ペインチエンジャーのリーダーにしてヴァンガードの名を持つ者たちの長兄…

「貴様はなにものだ…それに私はゼファイアスという名などではない。私は「ミリアルド・ピースクラフトだとも言うのかい？」
…
…
…そうだ。」

クジャノが言葉を被せながら自分が言おうとした名前を言い当ててきたことに少しだけ驚いたミリアルドであったが、すぐさま気持ちを切り替えて敵意のある視線でクジャノを睨みつけた。

この男は自分が知らない何かを知っている。

タダでさえ切れるカードがほとんどない上に目の前の人間以外の敵から逃げるための手段さえも無いこの状況…

(さすがにここで争うのは…)

かつて世界を相手にしながら世界情勢を動かしたことのあるミリアルドだからこそ、今この場で目の前にいる唯一の外部情報源であるクジャノを撃つことを躊躇っていた。

仮にこの目の前の男が何も知らなかった場合は迷うことなく撃ち殺す。
だがもし何かを知っているのなら手を組むことになるかもしれないのだ。

「何が目的でこの場所に来たか、答えてもらおうか」

ミリアルドは少しだけクジャノに向けた拳銃に力を込める。

それはクジャノが少しでも変な気を起こしたりすればそれより早く撃つということを示していた。

「言ったじゃ無いか…僕は君を探していた。それよりも速くその銃おろしてくれないかなあ…」

少しだけ殺気のコもった声がミリアルドの脳に響く、間違いない、今日の前にいる男は脳量子波を使えるだけの力をもっていて尚且つ自分よりも手数が多い…

クジャノに向けていた銃口をおろしたミリアルドは静かにその場を一步ほど後ずさりした。

…これで変な気を起こしても確実にやれる。

だまっているミリアルドにたいしてクジャノは少しだけ動いたミリアルドの足元を見ながら呟いた。

「瞬殺する気満々だね、ひどい…なあ！」

そう言ってクジャノはいきなりかがむと左腰のホルスターから拳銃を抜き出した。

ミリアルドが間髪いれずにそこへ銃弾を放つが、それは当たることなく近くの床を削るだけに終わった。

(やられる?)

だが、つぎにクジャノがとった行動はミリアルドの考えの中にあつたすべたの予想を裏切つたものだった。

「!?!」

ミリアルドが驚きの声を上げるよりも早くクジャノは救難ポッドの入口から飛び退いていた。

「しまった?」

慌てて発砲するがそれはすでに入り口から消えたクジャノに当たることなく虚空へと消える。

しばらくそこで入り口に銃口を向けていたミリアルドであったが、

クジャノの気配が完全に消えていることを確認すると銃を下ろす。

カラン…

その時、酸素のある救難ポッドのなかに乾いた音が響いた。

ミリアルドの足元で響いたそれは小さな缶…それは

その存在に気づいたと同時に強烈な閃光を放った。

「ぐっ！よくも……。」

スタングレネード、

殺傷能力が低いが強烈的な閃光によって相手の視覚を奪う対人兵器。
地上ではさらにそれに加えて強烈的な音によって三半規管を狂わす目的もあるのだがここでは宇宙用なのでその機能は無い。

とっさに腕で顔を隠したことにより前が見えなくなったその瞬間をクジャノは見逃さなかった。

再び部屋に侵入し閃光が未だ光続けるなかを一気に進む。

そしてクジャノはミリアルドが腕を上げたことで空いた懐に入りこむと、そのまま首筋に銃の様な形をした注射器を押し当てながら引き金を引いた。

パシユツ、

乾いた音が少しだけ響く。

「チャンスは一回、記憶が抑えられているその間にミリアルド・ピースクラフトと決着をつけなよ…。」

クジャノの脳量子波による言葉を聞き終えたあと、崩れる様にミリアルドは崩れ落ちた。

そして眠ったままゆっくりと宙を漂うミリアルドを見ながらクジャノは静かにその場を見ながら外へ出て行った…

「さて、これであとやることは一つ………なんとか持ってよ……アルヴイアス……。」

ぶつかり合う二機のMSが激しい火花を散らす。

ハルバートクアンタのソードビットがターンエーを囲む様に迫れば、
Eフィールドの拡散による衝撃波で全て弾き飛ばし、ターンエーの
ライフルが放たれれば量子ワープとGNフィールドでそれを全て消
し去る。

「いいかげん諦める！もうすぐ君たちの世界はELSに破れ殆どの
戦力を失う。そして僕の力でこの世界も完全に滅ぶんだよ？」

ターンエーはこれまで一度もしかけなかった接近戦に持ち込みなが
らサーベルを抜いた。

振り下ろされるサーベルをGNソード？で受け止めるハルバートク
アンタ。

先ほどまであった出力の差はこの世界でめざめたハルバートクアン
タによってほとんどなくなっている。

「貴様はなぜ世界を壊す？憎しみにとらわれたままなぜ戦い続ける
？」

ハルバートクアンタの回し蹴りがターンエーの腹部を蹴り飛ばし数
十mほど吹き飛ばす。

だがそれを決めると同時にターンエーからエフィールドの衝撃波によるカウンターを肩に受けていた。

「ぐっ…お前にはわからないさ？世界を壊す？違うね…僕は探しているんだよ…奴らを、僕の運命を勝手に決めつけた自分勝手な奴らを？」

サーベルをしまいライフルを構えたターンエーがためらうことなく高出力でエフィールドライフルを連射する。

「世界を壊し続けてその人間たちに会える保証があるのか！貴様は！」

クアンタがソードビットと本体の量子化でビームの嵐のなかターンエーに迫った。

「ターンエーは世界を壊すことで次の世界に行くことができる。そして必ず世界を巡って行けば最後に一つだけ世界が残る…それが…その世界が答えだ…。」

ターンエーが量子化から次に現れるポイントにあわせてサーベルを

振り下ろし、ハルバートクアンタの右肩を切り裂いた。

「そんな勝手な理由で……世界を壊させるかあ？」

一瞬バランスを崩したクアンタだったが、すぐに切られた肩の装甲をパージしてフィールドで覆われたターンエーの左腕を貫く。

再び距離をとった二機が何度も何度も高速で移動しぶつかり合い、その度に互いに何処かを破損させていた。

ソードビットが数機破壊されフィールドライフルは切り裂かれクアンタの片脚が拡散ビームで半壊しターンエーの胸部ユニットが弾け飛ぶ……

「アアアアアア？」

ハルバートクアンタとターンエーが互いの蹴りで吹き飛ばし合いその状態からハルバートクアンタはランザムを、ターンエーは月光蝶を発動させた。

「これで終わらせるよ、このシステムは必ず全てを殺す……僕の勝

ちだ…。」

月光蝶にふれた周囲の金属片が一瞬にして粉々になり砂となった。

ナノマシンによる侵食と破壊、これこそが世界を一つの文明すら残すことなく無に返すナノマシンハザードを可能にした月光蝶の真の姿。

そしてもう片方にはまるで信じられない位の大きさの虹色の羽を広げたハルバートクアンタ…

「貴様は必ず止める……、たとえ俺が俺でなくなつたとしても？」

刹那は黄金に輝いた瞳が目の前の敵を見据えた。

「…壊す…そんな考えさえできない位に壊してやるっ？」

頂上決戦は終局へと向かう…

対峙する力、コワスモノマモルモノ（後書き）

感想お待ちしてます（ 、 、 ）ノ

作「そろそろ新作に手を出そうかなうばくあ！」

刹「馬鹿なのかお前は、そういう時はまずアンケートをとれ。さも
なくば消える」

と、いうわけで新作二時創作のアンケートとります。
今のところ

ハガレン

IS

迷い猫

エストポリス

あたりで考えてます。

突入…（前書き）

アンケート募集中です。

突入…

バーストトランザム…

ガンダムアルヴィアスはパイロットであるクジヤノ・ミストレネがペインチェンジャーから抜ける際に強奪した機体であるPNC1007ネームゼロをもとに再設計された機体である。実験機であるネームゼロにとつてMS単体における武装数の限界は様々な地での戦闘における大きな壁となっていた。

そのアルヴィアスに用意されたのが通常より明らかに過剰な粒子放出量を可能とするGNドライブのリミッター解除と粒子放出方向の固定化によりあらゆる形を粒子によって形成するバーストトランザムシステム。

エネルギー効率の観点からビームサーベルの形以外でのGN粒子によるビーム刃やそのたGNフェザーなどの形成は敬遠されていたが、白銀のドライブの粒子生成量を制御するための第三のドライブの登場によりそれが解決、実践稼働にまで至ることに成功した。

基本的には無数のダガーナイフのような形にして飛ばしたり球状のエネルギーボールにしてぶつけるなどから、全方位へのエネルギー拡散など全距離における戦闘を想定した使用方法になる。

また、本体胸部以外で機体が破損した場合はその部位の装甲を全てパージすることによりシステムの発動中のみその部位の装甲のような形を形成することもできる。

虚空をかけるのはアルヴィアス：

バランスを取るだけでも精一杯なその機体はまっすぐにある方向を
目指して飛んでいた。

超大型ELS

その周りには無数の小型から大型までの群がようやくジエネシス側
の停戦により戦力の安定した国連軍の猛攻を退けていた。

どこから伝わったかは分からないがその中にはガンダムタイプをコ
ピーしたELSもかなりの数となって戦っている。

この激戦の中をこんな状態のアルヴィアス一機で超大型ELSに向かうなど到底不可能な話だ。

だが、不可能なのとやらなければいけないのは違う。

クジャノはこの世界を救えるかもしれない大役を任されたのだ。

何度も何度も世界を欺き、友を騙し、人を殺してここまで来た……
そんな彼に与えられた罰は自分が最も今やりたいことをできる権利。
これをやらすには無理だ……

「……………バーストランザム？」

クジャノがそう言った途端、アルヴィアスの機体色が一瞬にして黄金に変わり辺りに金色のGN粒子が放出される。

それに異変を感じたELSが群単位で迫ってくるがアルヴィアスは一行に動こうとしない。

……

さらに敵は迫りついにあと数メートルで接触すると思われたその時だった。

一番近くにいた小型のELSが何時の間にか粒子で構成された何かに消し飛ばされた。

そしてその場には粒子が圧縮された球体上の何かが浮遊している……

アルヴィアスの全身に黄金の粒子が機体のあらゆるところから舞い続け、破損した腕や脚部の装甲は全てパージされ代わりに粒子の膜が内部を覆う様になっていた。

ガンダムアルヴィアスの最後の切り札であり最強の技、

バーストトランザム

アルヴィアスは周りに浮いた無数の球体を次々と敵にぶつけて消し飛ばしながら入り乱れる戦場をかけていく行く。

接近してくるて気を容赦なく切り裂く。

身体中の傷から血が溢れ出すだがそれに構うことなくクジャノはアルヴィアスを動かし続けた。

コクピットには彼の血や壊れたコクピットのパーツなどが散乱しもはや動いていること自体が不思議な位である。

すでに機体は度重なる連戦によりボロボロ、このトランザムが切れればまず間違いない死ぬことは誰が見てもわかる状態だった。

それでもクジャノは止まらずに進み続ける…

―なんでこんなに嬉しいんだろうか…

敵が無数に迫る中、クジヤノは考える。

―僕はどうしてこんなに死にそうなのに、苦しいのに…

―なのになぜこんなに安心しているのだろうか…

ひたすら敵の群を崩してスペースを作っては移動していくアルヴィアスは戦場を駆ける不死鳥の姿にも見えた。

そしてようやく超大型への道が開ける…

―なぜ今なら全てに受け入れてもらえた気がするんだろうか…

しかし、同時に限界時間まであと三十秒を知らせるアラームがコク

ピットに鳴り響いた。

「っ、限界時間か……。」

「僕が死ぬのがなんで僕自身に許されないんだろうか。」

覚悟を決めたクジャノが操縦桿を一気に前に倒し、身体にかかる不可も考えずに最大加速でその道を突き進んだ。

目指すのはただ一つ……

超大型ELSの内部のみ。

「答えは……ここだ……。」

クジヤノの機影が超大型ELSの中へと消えた。

突入…(後書き)

うーん、ELSとの戦いを書くのはやっぱり難しい(^|^-)

感想、アンケート募集中です)、)、(ノ

終局の痛み…

「伝えたいことがあって来たんだ………本当はこんな形で伝えるつもりなかったのに…」

土砂降りの雨の中、一人の青年は小さな石碑の前に立っていた…

そこには小さく名前が書かれている。

レアン・シエーン

雨に濡れることもお構いなしに青年は静かにそこへ花をおくと、そのまま両膝をついて力なく石碑に両手をかけた。

しかし、雨に濡れた石碑にかけた手はズルズルと滑り地面に落ちてしまう。

青年はその腕を上げることなく俯いた。

水たまりに映る自分があまりにも醜くてしょうがない…
背中を突き刺す様に降り続ける雨粒が心の暖か様でも奪っているよ
うだった。

「世界がさ…変わったんだ…ソランがね、変えたんだよ。」

そこにいる誰かへ語りかける様に青年は呟く。
その声には涙が混じっていた。

争いの果てに得たのは何者でもない愚者の滅びと新しい世界、

青年が手に入れたのは戦友の最後の願いを叶えられたことにたいする喜びだけ…

それ以外は全て失った

「僕はさ、ソランと戦ったよ……………」

誰も答えることの無い返事を待つあいだも雨は降り続ける。

「ねえ、どうしてなんだろう……僕が君に出会ったからなのかな……なんで君は……。」

地面についた拳に力が込められ、何度も何度も地面に打ち付けられる。

泥と血と雨水が混じりドロドロになった手を気にすることなく地面に怒りをぶつけ続けた。

決して晴れることの無い怒りを乗せて…

雨が涙か分からないくらいに濡れた彼の顔は悲しみにゆがんでいた。

「レアン……君は……。」

それは青年が道化師として生き続けた中で唯一流した涙…

道化師に光を与えてくれた少女とその青年が出会ってからの数ヶ月間、それが彼にとっての大切な宝。

彼女と出会ったのはただの任務からだっただけ…

初めはほんの少し、本当に少しだけ興味を示しただけの存在。

そもそも世界の裏を知る自分にとってその少女と関わることはあまり良くない。

「少しばかりだがうちの娘の話し相手になってくれないか？」

だがそれだけの理由で仕事の依頼人である彼女の親の些細な願いを無下にすることもできず、仕方なく彼女についていろいろと知ることになった。

「……レン・ハーネルです。この度はしばらくの間執事として使えさせていただくこととなりました。」

一人がけのチェアに座る彼女は一日中外を眺めていた。

「執事？……ねえ執事さん、なんで偽名なんて使ってるの？」

「？……いえ、私はレン・ハーネルです。」

青年は少しだけ反応したが、すぐに気持ちを切り替えて答えた。

彼女は静かにその席を立ち上がると青年の前までやって来た。

エメラルドグリーン瞳の瞳に透き通った金髪、そして外に出たことの無い様な傷一つ無い白い肌……

感情をほとんど出さない青年でさえ少しだけ彼女をみて見惚れるほどのものだった。

「あなたの目をみてればわかる……嘘で本音を隠し続けて来たでし

よ？だってあなた辛そうですもの…」

青年は驚いた…

自分の全てが一瞬で見透かされたのだから…

もちろんそんなことが始めてだった青年は彼女を警戒しながら接することにした。

だが、心を見られてしまったあとの青年にとって彼女がかけがえの無い存在となるのに時間はかからなかった。

「あなたは誰かのためだけに動く人形では無いでしょ…だからあなたはあなたのために生きて…。」

「レアン…。」

何度嘆いても帰ってこない…

人の死なんて簡単なものだ。
流行り病の一つで簡単にいってしまふ。

残酷だ、と叫んだところで結局は悲しみが増えるだけ…

だから答えを探す。

誰も知らない、絶対に自分しか見つけれない答え

それが今の自分の全て

だからこそ僕は…

超大型ELSへの侵入に成功したクジャノはその中心で静かにアルヴィアスを停止させた。

アルヴィアスがすでに限界を迎えている、おそらくもうドライブを二度としよう不能にすることと引き換えにしてもあと一度だけバーストランザムを発動させれるかと言ったところだろう…

アルヴィアスのバーストランザムは限定的ではあるが触れた相手と量子による相互理解が行える。

バーストランザムは攻撃的な力と相互理解が行える力の間立つ力。

相手と接触する必要があるがゆえに刹那の使う量子空間による対話よりも範囲は異常なほど狭いが、そのかわり相手の思考から記憶の奥に眠る全てまでを読み取ることができる。

「……………なんとかもったか、あとは時がくるのを待つだけ……」

パイロットシートに背を預けてクジャノは静かに目を瞑った。

この超大型の中は外とは違いほとんど脳量子波による干渉がない、そして驚くことに外のELSの脳量子波さえも綺麗に並べられているかのように流れている。

これなら外の様子がわかるはず……

クジャノはゆっくりと外へ意識を向け始める。

本当なら今すぐにも対話を行いたいが生憎粒子生成量が心ともない。
そしてなによりハルバートクアンタとターンエーがこの戦場にいるのだ……

刹那の力が無ければおそらくELSは止めることが出来ても人類側は止まらない。
だからこそクジャノは待っていた。

「あと三十分、ソラン……急いでくれ……。」

終局の痛み…（後書き）

感想とアンケート募集中です）、）、（）

決着 **そして痛みを変える者たちの決戦（前書き）**

戦いの決着まで下書きを一気に書き進めたかったんで間を開けさせてもらいましたm(´`´´) m

あと十話以内には少なくともこの決戦はおわらせます。

決着 そして痛みを変える者たちの決戦

「終わりだ…」

ターンエーの背後に月光蝶が広がっていく。

かつていくつもの平行世界を滅ぼしたその絶対的な力は歴史の最後を紡ぎ続ける永遠の存在といっても過言ではない。

全てを破壊する最強の力…

その光は今まさにハルバートクアンタのGNフェザーにぶつかろうとしている。

当たった瞬間に全ての物質を塵へと変える史上最強の兵器である月光蝶のナノマシン。

人類は有史以来ありとあらゆるものを壊して来た反面にありとあらゆるものを創り出してきた。

だがいつの時代もどんな場所であろうと創ることよりも壊すだけの方がはるかに簡単である。

それはいくつもの世界を超えて来たターンエーにとっては常識どこ

るか普遍のものに近かった…

全てにおいて最も破壊を追求した兵器である月光蝶のナノマシンに勝てる兵器はない。

ターナーがまるで勝ち誇ったかの様にエフィールドライフルをおろしてハルバートクアンタに顔を向けた。

だが、

そんな彼の普遍は簡単に碎かれる…

「俺は…多くの意思を託されてここにいる…俺は、分かりあうためにここに来た？」

ナノマシンはハルバートクアンタのGNフェザーを砕くことはなかった。

GNフェザーを構成する数多のGN粒子がナノマシンに砕かれることなくそれと見事に混ざり合い、まったく新しい虹色の粒子となってこの空間に拡がった。

それはハルバートクアンタとターンエーの争いを止めるかの様に優しい光を放ちながら世界を変えていく…

「そんな…こんなことが…。」

あり得ないものを見るように目を見開くが、それは紛れもない真実。

ターンエーの月光蝶にハルバートクアータのトランザムが打ち勝った。

その真実は滅ぼされる運命にあったこの世界を変えたことと同義…

「貴様が何を望もうがそれは自由だ……だが、俺はお前と分かりあう為にここにいるんだ。もう戦う必要はない。」

刹那が顔をあげ目を見開くと、その瞳の色は脳量子波を使う時に現れると共にイノベーターの証でもある黄金ではなく、彼の本来の瞳の色である紅に戻っていた。

それは先駆者の帰還…

人としての領域を超えた者が再びその力を持ちながらも人へと帰るその瞬間である。

誰よりもこの力を望んだからこそなし得た本当の人類の革新。

「ふざけるなっ？何がわかり合っただ？僕はまだ負けてない…。」

受け入れられない現実を目の前に荒々しく叫ぶと、ターンエーがハルバートクアンタの目の前で拳を振りかざした。

しかしその拳は届くより早くハルバートクアンタのGNソードに切り裂かれる。

フィールドもまるでなかったかの様に簡単に裂かれ、エネルギーのみが機体の表面から飛び散るのがわかった。

「っ？く、こんなことが…あるものか？」

叫び声と共に蹴り上げたターンエーの脚はソードビットによって貫かれて動かなくなる。

エフィールドジェネレーターで駆動するターンエーには内部での駆動パーツが存在しない。

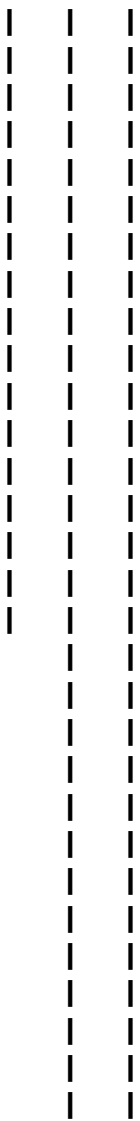
故にエフィールドを切り裂かれたターンエーにハルバートクアンタを倒す手段はもう残されていなかった。

「……………ウソだ…こんなことが……………」

「もうやめろ……………憎しみで解決することなど何もない……………」

刹那の言葉がターンエーのコクピットに響くのと同時に、その空間は砕けた。

「お前はわかっていたんだろっ？もう世界を選別するのはその力ではなく人類そのものだと言っことが……。」



「ギャレス？リライター後何発残ってる？」

迫り来る大量の敵MSとELSを背に、ペインチェンジャーは必死の逃走を行っていた。

彼らに残された武器は既にビームライフルとサーベル一本のみ。

どう考えても絶体絶命である。

「もうないよ？…残ってるのはリサイヤの自爆プログラムだけ……
もうこのままじゃ。」

ギャレスが目の前に立ちふさがったジンクスに擬態したELSを撃ち抜きながら答えた。

不幸中の幸いなのかELSたちは彼らの白銀のドライヴであるGNドライヴSの粒子を避けていた為、とりつかれることは一度もなかったのだが、ELSが擬態して攻撃をしかけてくることには変わらず、ちょうど二つの敵に挟み撃ちを食らう様な状況になっている。

それでも圧倒的な性能差で進み続けるタークスたち…

彼らの目指す先をしめすリーダーには紅い色合いのMSの姿を捉えていた。

それは先の戦闘の後行方が分からなかったゼフィアスの機体。

その場所とゼフィアスの安全の確保をしてくれたのが反逆したクジヤノ・ミストレネであったことは彼等にとつて非常に本意ではあったが、この際そんなことを気にするようなメンバーはいなかった。

彼らに必要なのはただゼフィアスがいると言う真実。

「邪魔すんな！俺らは戦う気なんざねえ？」

タークスが叫びながらシールドで敵を殴りつけた。

「ごぎゃん……」とでも音がしそうなくらいに金属同士がぶつかり擬態し

たELSが横方向へと吹き飛ばされていった。

本当ならライフルが使いたい…

が、なぜか目の前にいるELSたちを撃とうとすると違和感を感じる…

タクスたちはその研ぎ澄まされた脳量子波の力によって感じ取っていた。

ELSの意思を…

その真意を…

「目標まであと20秒…あれだ？」

ギャレスのセンサーが遠くに映るゼフィアスの機体を見つけるのと同時に一斉に全機がフルパワーでそこへと突き進んでいく。

ELSに構うことなくそれを押しつけて紅く染まったその機影の元へと駆け抜ける。

「ゼファイアアアアアアアアアアアス？」

いち早く飛び出したタークスがビームサーベルをその機体へと振りかざした。

ガギャギャヤ

それに答えるように振り上げられたゼファイアスの機体の大型サーベルが強烈なスパークを響かせながらタークスのビームサーベルを受け止めた。

「待っていた？今度こそ世界の真実を見極めさせてもらおう……
このHピオンで？」

決着　　そして痛みを変える者たちの決戦（後書き）

感想とアンケート募集中です）、）、（）

対話の始まり

何度も何度も切り結ぶ紅いMSと五機の白銀のMS。

ELSとジェネシス軍が激しい戦闘を広げることによって生まれる幾つもの戦いの光を背景に彼らは戦っていた。

白銀の機体がひたすら何度もぶつかっていつてはそれを退ける紅いMS…

三機の機体がエピオンの周りを囲うように展開して次々と威力の低い細々としたビームを撃ち込んで残りの二機が接近戦をしかけている。

そしてそれを振り払うかのようにエピオンがヒートロッドを振り回した。

紫電を走らせながら直撃を受けた二機の機体が後ろに弾かれ、それを完全によけた一機が接近戦続ける二機のところへ混ざり込んでいく。

そして弾かれた二機が体制を立て直し再び砲撃を開始して状況を立て直そうとするが、ボロボロの機体ではうまく照準が合わずそれが当たることは一発もない…

「やめてください？ゼファイアス……これがあなたの望んだ結果じゃ無いはずだ？」

「もう戻ろう……みんな待ってるんだ？」

ギャレスとベルディオが必死の説得をしながら目の前で斬撃をはなってくるゼファイアスの機体に向けてライフルを撃つ。

だがその言葉は全てかき消されるかのようにビームとともに裂かれた。

そして間髪いれずに急接近したエピオンがヒートロッドと大型サーベルで既に満身創痍の二機を容赦なく切りつける。

「ガッ?.....くっ.....」

「ウアアアアア?」

弾き飛ばされた二機の先には受け止めようと回り込んだミルティアとシルビアの機体があったが、推力が足りずにそのまま吹き飛ばされてしまった。

ゴガアアアアア...

宇宙空間なら直接聞こえることの無い轟音がコクピットの通信機器を通して他の機体のコクピットに響き渡る。

そんな音を出せるのは全く容赦をしていない一撃であり、確実に殺すつもりがなければ出来ないほどのもの...

つまり、

ゼフィアスは本当に仲間であるはずのペインチェンジャーのメンバ
ーを殺すつもりで戦っていた。

「この馬鹿野郎がああああ？」

唯一攻撃を避けたタークスは、先ほどまでの戦いで右腕の肘から先
を紅く染めながらもその痛みを押し切る様にレバーを一気に押し倒
しエピオンの腹部を目掛けて殴りつけた。

だがそれがエピオンの腹部に届くよりも早く殴りつけた腕が回し蹴
りによって弾き飛ばされる。

その衝撃を殺すことが出来なかったタークスの機体がデブリに何度
もぶつかりながらようやく体制を立て直したところには既にエピオン
は次の攻撃に移っていた。

「ぐっ………ちい。」

コクピットに大量の衝撃が伝わったことにより目の前に敵がいるこ

とが分かっているながらもタークスの顔が苦痛にゆがむ。

普通なら操縦どころか私生活のほんの些細な衝撃でさえ激痛が走るような傷を負いながらも、タークスは戦うことをやめずに再びエピオンに対峙した。

「甘い……そんなものでは私の求める勝者ではない？」

ゼファイアスがそう言うのと同時にエピオンがタークスの機体の弾き上げられた腕をヒートロッドで絡めとりそのまま投げ飛ばした。

ヒートロッドにより強烈なダメージが操縦者を襲うとわかっているながらもその攻撃には容赦がない…

投げ飛ばされたその先には未だ動けずにいる仲間たち…

そしてそれら全てを串刺しにしようとエピオンが迫ってくる。

そしてそのシルエットがどんどんと近づいてくることにタークスの頭の中にくつつもの言葉が浮かび上がってくる。

―仲間だからな…助けたい

―俺たちは利用されてるだけの道具じゃねえんだよな？

―確かめたいことはまだあるんだ…答えを知る為にも

―俺たちは家族なんだろ？

―これが…最後の戦いになるだろうっから…

「絶対にみんな帰るんだ…」

「まだ私たちはやることがあるよね…」

「アーシャン戻ってきた時に誰か一人でもいなかったら彼のお守りはどうするんですか？」

「ゼファイアス…」

「ふざっけんなああああ？」

「タクスの中で何かが弾けた…」

「途端に彼の瞳からハイライトが消えてボロボロだった白銀の装甲が全て吹き飛ばされる。」

「なっ?…これは?」

パージされた外装に進路を阻まれたエピオンが脚を止めた先には、まるで見たことない新たな機体の姿…

二枚の大型ウイングから放たれる紫色の閃光が広がり、赤と黒と青を基調としたガンダム

ツインアイの下に走るラインとその頭部やシルエットが力を象徴する墮天使の様な印象を与える

その機体はかつて運命の名を背負った機体

全距離対応型近接戦闘主体MS

デステイニー…

その力の扉が、新たな覚醒とともに開かれた…



同時刻…

超大型ELS内部

「…か」

崩壊寸前のアルヴィアスの中でクジャノは戦場へと帰還した刹那を感じ取り、閉じていた瞼を開け静かにつぶやいた。

ところどころが壊れ煙をあげるコクピットのモニターから目の前を見ればそこには対話を受け入れようとするELSの心臓部…

全てを終わらせる為に動き続けたその最後

それを達成するに相応しい舞台は今揃えられた…

「さあ、最後だ！人類存亡をかけた……………対話の始まり！」

クジャノがバーストを始めるとアルヴィアスのGNドライブを覆っ

ていた全てのパーツが吹き飛び黄金に輝き出した。

「おおおおおおおおおおおおおおおおお？」

そしてそれに答えるかのようにELSの心臓部のさらにその中心が現れアルヴィアスの伸ばした腕とつながっていく。

その瞬間、接触した部分から爆発する様に何かが流れ出た。

それは抑えられていた情報の結晶

爆発するように広がったその結晶が再びアルヴィアスの中へと吸い込まれていく

クジャノの脳に考えられない程の情報が流れ込み次々と溢れ出ていった。

「……………ぐっ……………まだまだこれより先の真意に……………その全てを見せる……………ELS？」

情報の嵐が防がれることなく入ってくる中をクジャノは強引に進み続けた。

身体中に余すことなく戦場の痛みが襲う

だが進む

理解の出来ない情報として根本的に矛盾を抱えた記憶が精神を削る

だが進む

ひたすらその真意へと…

そして

クジャノの精神を襲い続けた全ての情報の嵐がただ一つの情報を除いてピタリと止まった。

「見つけた……これが……」

リターン(前書き)

テスト期間で連載止めてました…

あと五日ぐらいは止まると思われませぬ(´ー´) ぬ

リターン

滅びゆく星…

無数のELS達が逃げ惑う様に飛び交い灼熱の星から遠ざかっていく。

が、それをはるかに超える速さで飲み込んで進む炎。

彼らの母星は死を迎えようとしていた

だからこそ自分たちの未来を託す為に幾つもの超大型ELSを無限に広がる宇宙へと放ち、その一つが地球へと辿り着いた…

そしてそこで運命が変わった

空間移動の出口であった場所にいたのは一機のMS。

く…
勿論コンタクトを図りたかった　ELSはその機体へと近づいてい

だが、

近づいた個体はなぜかそのMSに触れることが出来ずに弾き飛ばされる。

そしてそれを敵対行動とみなした他の個体も臨戦体制を取るがそれより早くそのMSは動いていた。

MSから巨大な羽根のようなものが広がって行きそこにいたELSの群勢全てを飲み込まんとするくらいになると、そこでその羽根を止めた。

そして近くにいた一体のELSに手を近づけ…

そこで流れ込んできたものは途切れた…

「君たちの目的は……そうか……なら僕は伝えにいかねばならない……。」

クジャノが喋るその先にはELS…

だが相互理解を終えた彼らには互いの目的が分からないわけがない。故に崩壊したアルヴィアスのコクピットにいるクジャノが取り付かれることもなかった。

「さて、これは本当ならソランがやるべき事だったんだろうけど…
…もう彼には別の道がある……。」

目の前で止まっていたELSにクジャノが手を差し出した。

「悪いけど力を貸してくれるかな？この状態じゃ彼らの処へ行けそうに無いんだ……。」

クジャノの言葉に答えるかのように周りにいたELSがアルヴィアスに取り付き新たな機体の形へと変わっていく。

次々と数が増えていくELSはコクピットに備えられた予備のMSデータを読み取りさらに正確な形へとアルヴィアスを作り変えていた。

それは死神として戦場を駆け続けたアルヴィアスのシルエットではなく、クジャノ本人が最も求めたMSの形…

墮天使

そう呼ぶに相応しい形へとアルヴィアスは姿を変え、再びこの宇宙を駆けることを許された。

これまでの尖った羽根のようなウィングパーツは銀の翼となり、バスターソードは六機のソードビットとなった。

「……………飛べる…行こうか……………」

クジャノは身体中にかかる痛みを抑えながら静かに体を起こすと、そのまま修復されたコクピットの操縦桿を握りしめる。

「ソードビット起動、空間跳躍サポート問題なし…システムオールグリーン……………」

バックパックから射出されたソードビットが目の前に二つの円を作りそこに空間のひずみを作り出した。

「ガンダムアルヴィアスR出る？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1705o/>

ワードオブペイン 00

2011年10月13日01時56分発行